

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏 名	関本 紀子
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 184 号
学位授与の日付	2014 年 6 月 25 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	植民地期ベトナムの度量衡制度にみる地域的多様性と植民地統治

Name	Sekimoto, Noriko
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 184
Date	June 25, 2014
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	Weights and measures system in Vietnam during the Colonial period —Its regional diversification and the situation of French rule—

植民地期ベトナムの度量衡制度にみる
地域的多様性と植民地統治

春日（関本）紀子

凡例

1. メートル法の度量衡単位の表記について

- ・基本的に文章中では「キログラム」「リットル」「グラム」「センチメートル」とカタカナ表記とする（ただし、図表中、脚注の中での表記は記号表記の場合もある）。
- ・キログラムは、本論の中で出てくる頻度が非常に高く、全てカタカナ表記とすると読みにくくなるため、数字の後では文章中であっても **kg** と記号表示を用いる。

2. ベトナム語、フランス語などの原語表記について

- ・ベトナム語の声調・発音記号は、フランス語の表記にないものも多く、アルファベットの表記の場合、特にフランス語による文献史料中の表記は不十分であることが多々見られる。また、1例を挙げると、**Thúng**、**Thung** と **Thùng** はそれぞれ別々の単位であるが、フランス語表記では全て **Thung** に、カタカナでは「トゥン」になってしまう。そのため、同一単位を示す場合も敢えて参照する文献、史料の表記のまま示すこととする。さらなる混乱を避けるため、本論ではベトナム語、フランス語、漢籍史料間で同一の単位名を示していると考えられる場合でも、漢籍史料中の単位名はそのまま漢字表記、ベトナム語、フランス語文献においては、その音をカタカナ表記し、初出の際、または誤解の生じる可能性のある語には常に（ ）で原語を付す。

3. ベトナムの省名のカタカナ表記について

- ・序、表序—1「トンキンの省編成」、表序—2「アンナンの省編成」、表序—3「コーチシナの省編成」で示したカタカナ表記に準ずる。

4. 図、表、写真の作成者・撮影者について

- ・本論で掲載されている図、表、写真の作成者、撮影者については、特に注記のない限り筆者作成、筆者撮影のものである。

目次

序	1
第1節 本論の目的	1
(1) ベトナム史、ベトナム度量衡研究史とそこの中での本論の可能性	1
(2) 問題の端緒	3
第2節 研究史	7
(1) 度量衡の専論	7
(2) 社会経済史研究の中の一部として言及したもの	13
(3) ベトナム度量衡史研究の諸問題と本論の位置づけ	14
(4) 度量衡研究の方法論	16
第3節 本論の構成	19
第4節 対象地域の概要	21
(1) 成立と構成	21
(2) 統治体系	22
(3) トンキン、アンナン、コーチシナの省編成	24
(4) トンキン、アンナン、コーチシナの自然環境	29
補論 植民地期におけるベトナム度量衡制度の認識と研究史の現状	33
第1節 インドシナにおける官製年報の中の度量衡制度	34
(1) インドシナにおける官製年報の概要	34
(2) 官製年報における度量衡制度	35
(3) 官製年報における度量衡関連法	39
(4) 長さの単位	39
(5) 面積単位	43
(6) 体積単位	46
(7) 容積単位	47
(8) 重量単位	50
第2節 研究史の中の度量衡	51
(1) 長さの単位	53
(2) 面積単位	60
(3) 体積単位	63
(4) 容積単位	63
(5) 重量単位	67
第3節 植民地期ベトナム度量衡制度の認識と問題点	68
第1章 度量衡関連法の整備	71
第1節 前史	71
(1) 黎朝による度量衡制度	71
(2) 阮氏支配地域の度量衡制度	73
第2節 阮朝（1802－1945年）による度量衡関連法	75
第3節 フランス植民地政権による度量衡関連法	79
(1) 世界のメートル法とその受容	79
(2) インドシナにおける度量衡関連法とメートル法の導入	82
第4節 度量衡統一をめぐる地域差	98
第5節 阮朝における植民地期ピクルの導入	99
(1) 17、18世紀における重量単位とタ	99
(2) 阮朝のタとピクル導入に対する仮説	101

第2章	商業統計における度量衡とその地域的多様性	
	—米穀計量単位を中心に—	105
第1節	物価関連史料の概要	105
(1)	史料の所在	105
(2)	対象とする史料	107
(3)	商業統計の概要	108
(4)	商業統計における度量衡の記入事例と本論での扱い	109
第2節	対象地域の歴史的背景—各地域の勢力圏の変遷	110
(1)	ダン・チョン(Đàng Trong)とダン・ゴアイ(Đàng Ngoài) —南北分裂時代	110
(2)	コーチシナの対象範囲の変遷	111
(3)	南進に伴う版図拡大の過程	111
第3節	トンキン	114
(1)	ピクルに関して	116
(2)	ピクル以外の単位とその分布	119
第4節	アンナン	121
(1)	ピクルに関して	122
(2)	ピクル以外の単位とその分布	124
第5節	コーチシナ	126
(1)	米の計量法に影響を与える可能性のある諸要因	129
(2)	二重計量制度について	131
(3)	時期によって多様な単位が使われている省	136
(4)	ピクル以外の単位について	137
(5)	二重計量制度が一度もみられなかった省	138
第6節	行政区画を超えた地域性、共通文化圏の検討	140
(1)	行政区分による地域性の検討	141
(2)	行政区画を超えた地域性、共通文化圏の検討	143
第3章	度量衡統一に向けた模索—トンキンの事例—	145
第1節	トンキン理事長官が発信した度量衡統一に関する通達	145
第2節	1898年の通達およびその回答	147
(1)	1898年の通達	147
(2)	各省の回答—回答を求められている点に関して—	150
(3)	各省の回答—その他独自の論点に関して—	155
第3節	1910年の通達およびその回答	157
(1)	1910年の通達	157
(2)	各省の回答—回答を求められている点に関して—	158
(3)	各省の回答—その他独自の論点に関して—	160
第4節	1921年の通達およびその回答	161
(1)	1921年の通達	161
(2)	各省の回答—回答を求められている点に関して—	162
(3)	各省の回答—その他独自の論点に関して—	165
第5節	1927年の通達およびその回答	167
(1)	1927年の通達	167
(2)	各省の回答—回答を求められている点に関して—	169
(3)	各省の回答—その他独自の論点に関して—	170
第6節	度量衡統一に対する姿勢・変化とその背景—各省の回答から—	174

第4章	トンキン各省における度量衡運用の実態	177
第1節	1901年の通達および現地調査報告	177
(1)	1901年の通達	177
(2)	各省からの現地調査報告	178
(3)	メートル法適用への具体的方策・意見	189
第2節	1911年の通達および現地調査報告	195
(1)	1911年の通達	195
(2)	各省からの現地調査報告	196
(3)	省内における地域差—ハーザン省の事例—	208
第3節	1936年の通達および現地調査報告	209
(1)	1936年の通達	209
(2)	各省からの現地調査報告	210
(3)	省内における地域差—バックニン省の事例—	216
(4)	都市内における地域差—ハノイ市の事例—	218
第4節	実際に用いられていた度量衡制度とその時系列変化	221
結論	225
参考文献	235
付録	261

序

第1節 本論の目的

(1) ベトナム史、ベトナム度量衡研究史とその中での本論の可能性

本論の目的は、植民地統治によって変容し、画一化される社会がある一方で、根強く地域の多様な固有性、個性が残っていく事例を、仏領インドシナ政権の度量衡統一政策とベトナム各省における実態を通して検討し、①対象地域の地域性（地域差）、②その多様な地域性、個性の存続の背景、を明らかにすることである。

対象時期は、阮朝（1802-1945 年）及び仏領期（1887-1945 年）とする。これは全国統一を果たした初の長期安定政権阮朝によって、全国的規模での新制度導入が開始されたのがこの時期であること。また、フランスという外部からの権力が入ることにより、国民国家的枠組みを超えた（様々な意図が錯綜する）複雑な政策・制度が、各地域異なる政治体制（直轄領、保護領）のもと展開されていた時期でもあること、による。ベトナムの度量衡制度は、1945 年時点でも地域差が見られ、メートル法のみならず旧来のベトナム独自の度量衡制度もその後長く用いられた。こうしたベトナム度量衡の理解のためには、その背景となり、後の時代にも大きく影響したと思われる阮朝、植民地期の度量衡制度の分析が必要不可欠となる。

対象地域は、阮朝勢力範囲全域と、仏領インドシナ連邦内の現ベトナム領（トンキン、アンナン、コーチシナ）とする。

度量衡は社会経済史研究の基本分野である。また、その研究の意義や重要性が認識されているにもかかわらず、本格的に研究が進められていない。度量衡研究が難しいとされてきた理由は、各時期各地域において用いられていた度量衡制度があまりに多様であることと、その地域的分布や実際の状況を比較検討できる史料および方法論の欠如である¹。歴史研究においても実際の度量衡の運用の実態（政府発表の公式度量衡制度ではなく、地方、民間で用いられている度量衡）に関しては、異なる種類の史料（小説、旅行記、行政文書など）のなかの断片的な記述が見られるのみで、体系的な検討が難しい。さらには、これらの断片的な記述も、どの時代においても度量衡に関して統一の見解がないため、相対的な把握やメートル法に換算した際の相当量の判断が難しい状況にある。また、こうした研究史上で度量衡に関する見解が様々に異なっている要因についても、十分な比較検討が行われていない。

¹2008 年 2 月 21 日フエ科学大学史学部学部長グエン・クアン・チュン・ティエン(Nguyễn Quang Trung Tiển)教授、2012 年 7 月 25 日ハノイ国家大学ベトナム学研究科学発展院院長グエン・クアン・ゴック(Nguyễn Quang Ngọc)教授などの示教による。

仏領インドシナ連邦では、植民地政府の強大な政治権力のもと、メートル法という統一的な度量衡制度の導入が早期から目指されていた。一方で、その土地ごとに独自に用いられてきた度量衡制度が、根強く残っていた地域も少なくない。また政府発行の官製年報と同時代史料および研究の中で見られる度量衡制度の紹介や記述には大きな齟齬が存在する。これらの史料、紹介、記述を丹念に収集し、適切な地域・時代区分によって総合的に比較、検討した研究も見られない。

度量衡における地域性についても、王朝や行政区分に依拠した地域差について言及したものはあっても、その根拠はあいまいである。多様な度量衡制度が存在したことは知られているが、その実態や地理的分布（地域性）を各省²レベルで、相互間に比較検討が可能な史料により分析したものは管見の及ぶところみられず、多様な形式が継続していった背景についても具体的に明らかにされていない。

筆者は、度量衡統一に関して同時期、同目的のために一斉に作成された各省における行政文書（公設市場価格表と度量衡統一に関する通達）という、同質性の高い史料群をいくつか発見できた。これらの史料に依拠することで、植民地政権から地方行政、民間までマクロ・ミクロ両視点において合理的な相互比較・検討が可能となると考える。

本論は単なる度量衡制度史にとどまらず、①インドシナ総督府、②コーチシナ副総督府、アンナン理事長官府、トンキン理事長官府、③各省という 3 つの行政レベルで、度量衡政策の進展と各省における運用の実態、度量衡の統一が実現できなかった背景を、植民地期前・中・末期という時系列変化通じて総合的に検討する。度量衡政策、法整備の過程すら研究のない現段階では、全体把握（阮朝および仏領インドシナ連邦による政策、法律の立案とその実行）から各地域（地方行政の対応・運用の実態）まで通じて検討することは意義があると考ええる。

一国全体の分析は対象地域が広く難しいが、客観的に比較検討できる同質性の高く体系的な史料に依拠することで、各省レベルから国家までを通じて検討することが可能となる。また、こうした分析手法により、トンキン、アンナン、コーチシナの間の地域的特徴、地域差が浮き彫りになるだけでなく、それぞれの地域内（例えばトンキン内）での地域性やその背景も明らかにできる。広範囲に検討することで、文献資料上の個々の事例及び調査による特定地域の事例が特殊なものか、一般的なものか、判断する指標ともなる。さらに、これまで言われてきた歴史上の通説、一般論は実証が難しい部分でもある。そうした一般論を、度量衡の事例を通じて再検討することができる。つまり、度量衡を研究することで、ベトナムの地域の独自性、多様性が見られるだけでなく、その背景として交易、農業経済、交通など当時の地域社会、地域経済構造を検討・理解する突破口の一つになると考える。

² ここで言う「省」とは地方行政区画のことであり、日本の都道府県にあたる。詳しくは本章第4節参照。

また、これまでの植民地研究は、国、地域を問わず植民地政権が行った各政策が被植民社会に与えた影響や達成度に関して、客観的・実証的に検討したものは少ないが、本論はそうした問題関心に対してもひとつの事例として提示できる可能性がある。

最後に、本論が最終的に目指している方向性について述べる。それは、本論を通じて、インドシナ各地で展開されていた被植民社会の立体的な、そして生き生きとした実態を描くこと、ひいては末端から国家までを通じて植民地時代の社会の個性（変容する社会と根強い地域性の共存）の理解を深める一つの事例となること、である。

さらに、植民地研究の統治する側、される側という二分法を超え、様々なアクターによって存在していた多様な空間と、その相互作用のダイナミズムを本論によって描き出すことが出来ればと考えている。本論が使用する史料群は、総督府から各省フランス人知事、ベトナム人高級官吏および地方ローカルといった多様な階級、階層、背景を持つアクターの思惑、意見、動向、実情を読み取ることが出来る。つまり、度量衡の側面から、こうした立体的なベトナム植民地社会の位相とそれぞれの動き、関係に対しての理解を深めること、を目指したい。

(2) 問題の端緒

筆者の中長期的研究課題は「植民地期ベトナムにおける「地域」の形成・展開とその相互関係・重層的構造」であり、本論はその一部となる。本論の位置づけについて明確にするため、まず中長期的研究課題の目的と内容について簡単にまとめた（以下本論は博士論文を、本研究は中長期的研究課題を指す）。

① 目的と内容

「植民地期ベトナムにおける「地域」の形成・展開とその相互関係・重層的構造」は、フランス植民地期ベトナムにおいて、いかなる「地域（空間）」が多様に形成され、それらがどのような相互関係を持ち、ベトナム版図上に展開していたのかを明らかにすることである。例えば、同一の度量衡制度が用いられていたハノイ西北の紅河とダー川流域[関本 2010: 28]を、共通文化圏としてひとつの「地域」とみなす、ということである。

仏領インドシナ研究（現ベトナム領内）では、各学問領域、分野ともに対象地域が統治上任意に区分された行政区画（北部：トンキン、中部：アンナン、南部：コーチシナ）に依拠するにとどまり、それらの枠を超え、人々の社会・経済活動から自然発生的に生じる（人間の共同的生活空間）「地域」の形成と展開、および各「地域」の相互関係、重層的構成に着目した研究は管見の及ぶところまだない。また、一次資料も行政区画別に保管されている。

一方、ベトナムの地域的多様性に関する研究は、特に農村構造に関して異なる研究者による個別の研究が、定点観察を中心に数多く見られる。しかし、単独の研究によ

って体系的な史料を通じて、省市町村よりも広い地域を対象とし、全体的、総合的に地域性を論じたものも管見の及ぶところ見られない。

行政区画の境界を一度はずし、生産、分業、流通、消費など、実際の社会経済活動上ひとつのまとまりとして存在していた「地域」に着目した経緯は、鉄道建設と経済的統合に焦点を当てた柿崎一郎『タイ経済と鉄道 1885-1935 年』[柿崎 2000]や、村山祐司『交通流動の空間構造』[村山 1991]をはじめ、地域構造分析を目的とした経済地理学、地域経済学の方法論によるところが大きい。しかし、生産量や取引量を含め、社会経済の基本的なデータが時系列で十分に存在しない時代では、現在の経済地理学、地域経済学の方法論をそのまま適用することは難しい。

本研究では、「地域」の把握と相互間関係を明らかにする際課題となる上記の問題に対して、以下のように対応したい。一国全体の分析は対象地域が広く難しいが、交通、流通、度量衡、通貨、物価など、社会経済活動上重要な分野を選定し、考察の座標を明確にし、それらを総合的に検討することで可能となると考える。そのためには、各分野において、全国的に各省レベルで、長期にわたってその動向を客観的に比較、検討できる同質性が高く体系的な数量データと、その背景を補足する多種多様な文献資料が必要となるが、現時点でほぼ、これら史料の収集は達成しており、こうした史料を複合的な視野で分析することで、本研究の課題を明らかにできると考えている。

②分析手法

具体的な方法は、以下3つのアプローチを考えている。1)自然的条件：地理・地形上の区分。2)歴史的条件：王朝の勢力圏、行政上の区分。3)社会・経済的条件。最終的にこれら3つを複合的、総合的に検討することで、本研究の課題を解明する。本研究では、3)社会経済的条件を最も重要な要素として検討する。分析手法・主に使用する史料と収集状況について、要素別に説明する。

a)交通網の広がりによる移動・流通可能範囲の特定

インフラ建設進展状況を中心に、植民地期ベトナム上に形成、展開されていった交通網の拡大過程と、それに伴う時間距離の変遷から、空間の遠近の変化を検証する。時間距離の考察は、インフラ基盤の状況を把握し、実際の所要時間の記述を集め、その情報をもとに主要中心地、交通・物流の結節点からの時間距離の広がりを検証する。

b)ヒト・モノの移動による流通圏の特定

仏領インドシナ国内の物流は、各地域、各省における移出入統計、行先別発着貨物量などが現在までのところ見つかっていないか、閲覧が許可されていない。そのため、i)各地の主要産品に着目し、どの地域にまでその産品がどれほどの量到着しているか（物流アプローチ）、ii)ヒト・モノの移動量・輸送量の実態、を合わせて流通の範囲を推定し、他の文献資料の記述で裏付ける方法をとる。

c)度量衡・通貨制度による共通文化圏の特定

商業統計（公設市場価格表）によって収集した各省月別の使用度量衡・通貨の事例を集め、その分布と変化を検証する。度量衡では、場所、年代、産品などによって多種多様な単位が用いられているが、まずもっとも主要な産品で、主食でもある米に関わる計量単位を中心に、種類とその一単位当たりの相当量について検証する。通貨は、種類と1ピアストルあたりの現地通貨換算率の2点に着目して、その分布と変化を追う。

d)物価変動から見る共通商業（市場）圏の特定

c)でも使用する商業統計によって、これまで明らかにされてこなかった様々な品目の物価研究が、各省月別単位で可能となった。本研究ではまず米価に注目し、その変動から共通商業圏の存在を確認する。ここで市場圏としない理由は、植民地であった関係上、国内市場において生産物、労働、資本の地域間移動が完全に自由ではなく、需給関係の価格形成ではない可能性も否定できないためである。また、得られる数量データも欠損値が多く、文書作成の基準についても疑問が残る。そのため、本研究での物価研究は、「一物一価の法則」に縛られず、数量データ処理に関しても出来るだけ原データから語られる事実に重きをおく。そのままでは見えにくい「傾向」を析出する必要がある場合に限って、通常よく使われている手法を用いて、どのような処理を行ったのかわかりやすくし、導入する。

e)法制度による移動の制限範囲の特定

植民地統治という背景から、防衛や必要産業の発展だけでなく、高等教育や情報網の確立による民族意識の高まりを阻止するという、相矛盾する目的を実現させるため、特に移動手段の障害を関税や手続きの煩雑さなどでコントロールしていたことが考えられる。事実、仏領インドシナでは地域内移動にも、高い関税がかけられていた。今後、官製年報や行政文書、関税収入報告書などでこの問題にも取り組み、「地域」の形成を考えていく必要がある。また、水運に関しては、特に輸送品目、量ともに不明であるが、こうした移動に関わる税を丹念に検証することで、この課題も克服できる可能性がある。

③ 期待される成果

本研究は、これまでの行政区画による研究の枠を超えた「地域（空間）」の存在と構造を、様々な分野とアクターの具体的な事例をもとに検討することで、新しいインドシナ全体像を構築できる。またこれまで実証的な分析のもとに検討されてこなかった宗主国の統治政策およびベトナム社会・経済の変容について、新たな視点を提供できる。

ベトナムの地域研究は、各分野、各時代ともに優れた研究の蓄積がある。しかし一方で、一部地域を対象とした定点観察やフィールド調査が多く、地域研究の基盤となる社会・経済の主要な分野に関しても、十分な文献・資料発掘がすすめられていない現状がある。

本研究は、こうした優れたミクロ的視点の研究・調査の蓄積に、マクロ的視点を導入することができ、今後もこれら両視点での研究を連携していくことで、全体的・総合的なベトナム地域の理解につなげることができると考えている。

本研究では、一国の動態を研究することを目的としているが、社会・経済の基本指標を使用し、その分析手法も全国でも行政区画による地域でもなく、各省レベルでの詳細な検討を通しての把握を目指している。そのため、最末端から国家までを通じて、社会、経済、植民地統治の問題（つまり植民地社会の表層で展開される政治・経済関係に限定された歴史ではなく、その下層にある社会組織や文化なども包摂した、包括的で内生的な歴史）を解明する筋道となる。また、度量衡、通貨、物価といった社会経済史の基本分野に対して、初めて実証的な分析を実現させることができ、その資料提示においても幅広い各分野の研究に貢献できる。また、これら考察の座標として取り上げた分野は、互いに比較・検討することを通じて本研究の課題がより鮮明かつ明確になるだけでなく、既存研究においてのそれぞれの地域や分野を相対化する視点にもつながる。

歴史的流れの中でも、「地域」がいかに形成され、統合、あるいは分離されてきたのか、国民国家の在り方を含め、ベトナムという国を理解する一助となる。また、近年ベトナム周辺では中国西南部と東南アジア諸国間の相互関係を強化する中で新しい経済圏形成の動きがみられ、各国各地域を結ぶための交通整備、複合回廊が模索されている。これら地域について歴史的背景を含め、国際的関心が急速に高まっており、本研究はこうした時局の要請に応えるという現代的意義も有している。

④ 本論の位置づけ

以上①-③が中長期的研究課題の概要である。本論の目的は、度量衡を通じて、末端から国家まで植民地時代の社会の個性、つまり、政権側の政策とそれに伴って変容する社会、あるいは政策如何に関わらず根強く地域性が残っていく社会の共存の理解を深めること、一枚岩でない、様々なアクターによってそれぞれ異なる空間をとらえなおすこと、ベトナム版図上に繰り広げられていた個性あふれる多様な地域性を明らかにすることである。だが、それだけにとどまらず、先に述べた中長期的研究課題の考察の一座標となる側面ももつこととなる。

本論の地域的多様性の考察が、トンキン、アンナン、コーチシナの3区分、あるいはそれぞれの地域内の特徴にとどまらず、行政区画を超えての共通文化圏の検討（第2章第6節）が行われるのも、そのためである。

また、本論で検討されるトンキン各省知事の度量衡統一に対する意見、陳情の書簡は、当時各地方、各省で抱えていた社会、経済状況や実態、あるいはフランス人知事およびベトナム人高級官吏の意識を探る上で非常に有益な史料である。これらは、度量衡の地域的多様性を検討するのみならず、度量衡が密接に関わる物価や交易、交通流動の地域性の背景を理解する上でも多くの示唆を与えてくれる。史料の制約上北部

のみの考察となるが、トンキン内各省別（第3章および第4章）、あるいは特定の省内における府、県別（第4章第2節(3)「省内における地域差—ハーザン省の事例—」、第3節(3)「省内における地域差—バックニン省の事例—」および(4)「都市内における地域差—ハノイ市の事例—」）というレベルで考察を行うのも、ここで得られる研究成果が中長期的研究課題へと還元されることを想定していることによる。また、こうしたトンキンの事例の丹念な整理を通じて、アンナン、コーチシナの「地域」理解を深めることにもつなげたい。

第2節 研究史

(1) 度量衡の専論

度量衡に関する独立した研究は、ベトナムに関しては多くないが、最近では極東学院と東南アジア研究所（フランス国立科学研究センター・プロヴァンス大学）から『東南アジアの度量衡』全2巻が刊行された[Le Roux, Sellato et Ivanoff 2004; 2008]。これは東南アジア地域における度量衡の研究が進んでいないことを受けて進められたプロジェクトで、第1巻が「オーストロネシア語族地域とその辺境」、第2巻が「大陸部とその辺境」地域を扱っている。全体で40の論文が掲載されており、その執筆者の専門領域も歴史学、民族学、地理学、農学など多岐にわたっている。その内容は、対象とする度量衡も重量、体積、長さ、面積だけでなく時間、数え方、空間、通貨と広範囲であり、各論文が対象とする時代、地域、民族や方法論も様々である。このことは、逆に東南アジア研究の中で度量衡が特定分野、地域、時代に限定して議論できるだけの蓄積がないことも示している。

第2巻の中で、ベトナムの度量衡に関して4本の論文が発表された。これらの中でも、「ひとつの植民地化から他の植民地化へ：ベトナムにおける度量衡の2つの基準」[Nguyễn Tùng 2008]は、近年でもっともまとまった度量衡に関する論考であろう。中国式度量衡が11世紀にベトナムへ入り、以降ベトナム独自に発展してきた制度があった。それはフランス植民地期においても、フランス植民地政権が強いた度量衡制度と並んで、日常生活で広く使われていたことを指摘している。この論文は、こうしたベトナム独自の公式および日常の度量衡に着目し、分析したものである。

具体的な内容は、長さ、面積、容積、体積、重量それぞれの主要単位の略史や、中国の度量衡制度との比較がまとめられており、ベトナム固有の度量衡の全般的な理解には最適である。しかしながら、この論考には再検討すべき多くの問題点が残っている。研究史については全く触れられておらず、学術論文としての位置づけが不明瞭である。植民地下阮朝の度量衡法にも影響を与えたフランス側の度量衡に関する法整備については断片的な記述しか見られない。阮朝に関して依拠しているのはベトナム語訳された漢文史料であり、原文にあたっていない。さらに、それぞれの単語について

は概ね現代に発行された国語辞典の解説によっており、定義が曖昧である。植民地期、日常において使われているとされる度量衡単位に関しても、代表的な社会経済史研究のごく一部の文献中の事例を挙げるに留まっており、研究史および一次史料での事例発掘が十分とはいえない。

「地方におけるベトナムの度量衡」[Nguyễn Huy et Dorais 2008]は、メートル法が導入された後も、ベトナム固有の旧式制度は部分的にどの地方でも用いられていたことを指摘し、ベトナムの地方で知られている主要な度量衡単位を集め、提示している。この中で、度量衡単位名が文学の中で、抽象的意味合いを持たされ使われている事例も挙げられ、興味深い。しかし、この論文も研究史について言及が見られず、注や典拠が一切無い。それぞれの項目で説明されている制度や歴史も非常に限られており、概要を把握するにも不十分といわざるを得ない。

上記以外の2本の論文は、ベトナムの少数民族の度量衡に着目した研究である。まず、「ひとまばたき（一瞬）からひとにぎりの米まで：中部高原の人々における度量衡」[Maurice 2008]では、オーストロアジア（モン・クメール）諸語、あるいはオーストロネシア諸語に属するバナー族、ジャライ族、ラド族、スレ族とムノン族の各語のなかで見られる時間、空間、容積と通貨を表現する用語を集め、これらを民族的・言語学的に比較検討したものである。

次に、「ひとわたり、尋、負籠と「労働単位」：ベトナムのブルー族における度量衡単位の民族的覚え書き」[Vargyas 2008]は、中部高原の少数民族ブルー族の度量衡に関しての文化人類学的研究である。

ベトナムには主に山間部に50以上の少数民族がおり、それぞれに独自の文化をもっている。植民地期は、こうした地域にまで交通網が拡張されておらず、その支配がほとんど及んでいなかったこともあり、本論ではマジョリティーのキン族の社会を主要対象とする。上記少数民族社会における度量衡問題については稿を改めて論じたい。

以上が、近年『東南アジアの度量衡』[Le Roux, Sellato et Ivanoff 2004; 2008]の中で発表されたベトナムの度量衡に関する論文である。

その他、ベトナム語で発表されている度量衡に関する独立した研究として、グエン・ディン・ダウの「往昔のベトナム度量衡問題への貢献」がある[Nguyễn Đình Đầu 1978a, 1978b]。ダウも税制、物価、物資の生産や供給など、様々な分野の研究においても度量衡は重要な要素であるにもかかわらず、系統的な研究はまだ見られないこと、度量衡に関する記述の多くは、史料によって矛盾し合っていること、を指摘している。その上でダウは、フランス人研究者による歴史、社会経済史等に関する文献やインドシナ年報、『大南典例撮要』や『撫辺雜録』など漢籍資料のベトナム語訳の中の度量衡に関する記述を収集し、それらを比較・検討しながら標準化することで、長さ、重量、容積単位それぞれにひとつの基準を設けることを目的とした。しかし、年代（王朝）別、

地域（勢力範囲）別に検討する必要のある 17 世紀から植民地期までの史料を単純に比較し、全国で一つの基準にまとめていることには疑問を感じる。

フランス植民地期に関して、一次史料を用いた研究として、ヴー・ティ・ミン・フウォンの「1919 年から 1939 年におけるトンキンの度量衡」[Vũ Thị Minh Hương 2002b]がある。これは、第一次世界大戦後のフランス本国経済の早期立て直しのため、植民地開発はトンキンにおいても経済、政治、文化、社会の多方向に渡り、それに伴ってフランスの度量衡も徐々にベトナムの市場に持ち込まれていった過程を、明らかにしようとするものである。本論でも扱うベトナム国家第一文書館に所蔵されている史料番号 71315³を主に用いて整理し、ヨーロッパや外国と取引があるところはメートル法を使い始めているが、日々の生活では慣習が残っていたこと、主要都市以外の、特に山間部ではメートル法の適用は困難であったこと、こうした状況は 20 世紀半ばまで続き、さらにマウ(mẫu)やダウ(đau)といった単位は今日でも使われて続けていることを指摘している。一次史料を用いて各省の度量衡を取り巻く状況を提示したこの論文は、これまでの度量衡研究とは一線を画するものといえることができる。一方で、この論文は 1936 年の各省における度量衡現地調査についても考察を行っているが、調査結果を基に作成された表をそのまま提示するにとどまり⁴、各省からの報告書には目を通されていない。また、一次史料以外の文献に一切依拠しておらず、研究史や 1919 年以前の内容にも全く言及が見られないため、前後関係や度量衡に影響を与える社会・経済・文化的背景を含め十分な論証ができていない。

次に、長さに関する制度を扱ったものとして、ファン・タイン・ハイの「阮朝の尺度制度」がある[Phan Thanh Hải 2003: 319-327]。ハイは、ベトナム語辞典、中越辞典、地簿、フランス語による歴史書計 6 冊の中の長さに関する単位の説明、記述を比較し、それぞれ理解が異なっていることを指摘している。さらに、ベトナム歴史博物館、フエ宮廷古物博物館に所蔵されている尺を実際に調査し、用途別の尺を中心に、度量衡制度史に関しても考察を加えている。しかし、取り上げた事例も、それらを比較、列挙するのみで、分析が十分になされていない。

フィン・ティ・ビク・ニャンの「フエ宮廷古物博物館における銅製度量衡用具」では、同博物館に収蔵されている阮朝の容積計量器、斛、方、斗、鉢の計 4 種 12 個の形状が写真付きで紹介されており、当時実際に用いられていた計量器の理解の一助となるものである[Huỳnh Thị Bích Nhân 2007: 112-117]。その中で主に『大南会典事例』（以

³ ベトナム国家第一文書館（以下、TTLTQGI）、トンキン理事長官府コレクション(Fond de la Résidence Supérieure au Tonkin、以下 RST)、No. 71315, Arrêtés et circulaires du Gouverneur général.1886-1937.

⁴ この調査結果をまとめた表は、TTQGI, RST, No.71312, Extention au Tonkin de la réglementation des poids et mesures en application en Cochinchin et au Cambodge 1899-1937.の中に保管されている。

下、『会典』)に依拠して阮朝の度量衡制度の概略がまとめられているが、使用しているのはベトナム語訳である⁵。

またグエン・ヒュウ・ティエンは1934年、「度量衡統一の必要性」の中で、過去、そして当時における度量衡の未統一について様々な事例を挙げ、その不都合、不便さを指摘し、早急な統一の必要性を説いている[Nguyễn Hữu Tiên 1934: 333-336]。ティエンが挙げる同時代資料となる事例は、実際民間でどのような混乱が生じていたかを知る上で、非常に興味深い。しかし典拠もなく、度量衡の混乱をやや誇張して書いている傾向もある。

日本においては、中川武氏が研究代表者となって進められている「ヴィエトナム/フエ・阮朝王宮の復原的研究」⁶のなかで、ものさしや尺度制度についていくつかの報告が見られる。これら一連の研究で言及されている個々の尺度と、これまでの研究との詳しい比較検討は補論に譲るが、ものさしに関しての報告の概要を以下に整理する。

第1に、阮朝王宮の実測調査で得られた数値と史料(『大南一統志』『大南会典事例』)に記された宮廷建築の規模表記を比較し、一尺が実際何メートルの値を示すのか分析したものが2本ある[土屋ほか 1995][富樫ほか 1997]。フエ王宮の紫禁城、闕台、皇城、興廟、肇廟を実測調査し、一尺おおよそ4メートルという結果が得られた。しかし、皇城では東西囲繞壁では一尺3.76メートル、南北囲繞壁では4.11メートル、4.13メートルとなり、南北と東西方向で大きく異なる値を示すこと、範したといわれる同時代の中国清朝の尺度3.2メートルとも差が見られることを指摘している[土屋ほか 1995: 531]。

第2に、現地で使用されているものさしの分類整理が行われている論文が3本ある[中沢ほか 1996][小樽ほか 1999][清末ほか 2002]。中沢ほか[1996]では、フエ宮廷

⁵ フィン・テイ・ビック・ニャンは、レ・ティ・バオ・ヴァンと共著で「明命帝期におけるふたつの計量器について」[Huỳnh Thị Bích Nhân và Lê Thị Bảo Vân 2003]という論文も発表しているが、これはフエ宮廷古物博物館における銅製度量衡用具[Huỳnh Thị Bích Nhân 2007]で取り上げられた中の明命帝期2つの計量器について概要を紹介したものである。

⁶ この研究は、ヴィエトナム・フエ・グエン朝王宮の変遷の過程を建築歴史学の観点から捉えること、およびフエ遺跡群の復原研究、修復・保存方法の確立と再建計画事業に必要な学術資料の収集を継続的に進めることを目的としており、その主要な研究成果は「ヴィエトナム/フエ・阮朝王宮の復原的研究」その1から153として公開されている。これら一連の研究は、以下の文部科学省科学研究費補助金を基盤として進められている。・文部省科学研究費・国際学術研究 平成5～7年度「アジアの歴史的建造物の修復・保存方法に関する基礎的研究。ー南アジアと東南アジアの比較を通してー」研究代表者・中川武(早稲田大学教授)・文部省科学研究費・国際学術研究 平成8～10年度「ヴィエトナム・フエ・グエン朝王宮の復原及び修復・保存方法に関する基礎的研究」研究代表者・中川武(早稲田大学教授)・文部省科学研究費・基盤研究(A) 平成11～13年度「勤政殿の復原的研究(ヴィエトナム・フエ・グエン朝王宮の修復・保存方法に関する基礎的研究)」研究代表者・中川武(早稲田大学教授)・文部省科学研究費・基盤研究(A) 平成14年度「乾政宮の復原的研究ーユネスコ世界遺産・フエの歴史的建造物群の保全計画ー」研究代表者・中川武(早稲田大学教授)・文部省科学研究費・基盤研究(S) 平成15～19年度「乾政宮の復原的研究ーユネスコ世界遺産・フエの歴史的建造物群の保全計画ー」研究代表者・中川武(早稲田大学教授)。

古物博物館⁷所蔵の尺 3 種、ハノイ歴史博物館所蔵尺 1 種および 6 名の個人が所蔵する尺それぞれ 1 種を、小樽ほか[1999]と清末ほか[2002]では、フエ宮廷古物博物館所蔵尺 1 種、ハノイ歴史博物館所蔵尺 3 種、ホーチミン歴史博物館所蔵尺 1 種を対象とし、その形状、寸法、目盛や記載されている文字などを詳しく観察している。

第 3 に、阮朝・フランス植民地期の度量衡制度の概略を示しながら、フエ宮廷古物博物館、ハノイ歴史博物館、ホーチミン歴史博物館所蔵の尺と比較した論文が「ものさしについて III」[清末ほか 2003]である。

第 4 に、建築に必要な大工道具を調査した中で、ものさしについても言及が見られるものがある。「大工道具の分類」[川嶋ほか 1999]では、現在の文化財建築物修復技術者が用いる各工具の形状、機能、用法などを整理し、分類しているなかで、ものさしとしてはトゥオック・ナック(thước nách、腋尺、屋根勾配の決定に用いる)、トゥオック・ヴォン(thước vuông、L 字型尺、短い垂直を出す)、トゥオック・ター(thước ta、T 字型尺、柱などの曲面に垂線を引く)を挙げている。「ものさしについて II」[中沢ほか 2000]では、大工が柱に仕口、継手などの接合部を刻む際に必要な間竿(トゥオック・タム/thước tâm、 トゥオック・ムック/thước mực、 コン・カーン/con cán)について調査している。伝統建築において主要な寸法を決定する際、その吉凶判断の手段として使われる魯盤尺と十二直については、清末ほか[2004]が詳しい(既出の中沢ほか[1996]でもこの魯盤尺と十二直の用い方について検討されている)。腋尺についての詳しい報告は、林ほか[2005]、レほか[2006][2007b]、林・中川[2010]がある。北部において用いられるトゥオック・サーム(thước sàm、L 字型の尺で仕口の製作や架溝調整に使う)についての報告も見られる[レほか 2007a]。

「ヴィエトナム/フエ・阮朝王宮の復原的研究」の一連の研究の中で、ものさしは道具という表面的要素の背後に、この道具を通じて土地や建築、製作物の標準・規制、つまり社会の在り方を制御する行政的意味合いをうかがうことができることを指摘している[清末ほか 2003: 585]。また、中部の腋尺、北部のトゥオック・サームに代表されるような大工道具の相違が、中部と北部の地方差を決定づけることも明確に示している[レほか 2007a]。

以上が、「ヴィエトナム/フエ・阮朝王宮の復原的研究」の中で見られる度量衡に係る論文である。これらに加えて、ベトナム中部に位置するホイアンの大工道具に

⁷ 「ヴィエトナム/フエ・阮朝王宮の復原的研究」の中では、論文によってこの博物館は「フエ故物博物館[中沢ほか 1996]」、「フエ王宮博物館」[小樽ほか 1999]、「フエ宮殿博物館」[清末ほか 2002]、「フエ宮廷美術博物館」[清末ほか 2003]と様々な訳語が用いられている。これは、この博物館の名称が「フエ宮廷美術博物館(Bảo tàng Mỹ thuật cung đình Huế)」から 2007 年に「フエ古物博物館(Bảo tàng cổ vật cung đình Huế)」に変更された(博物館ホームページ：<http://www.hueworldheritage.org.vn/baotang/> より) ことにもよるであろうが、本論では現在の名称をより原語に近い「フエ宮廷古物博物館」と訳し、用いる。

については、松波[1994]の研究があり、その中で建築に関わる数種の尺が実地調査を元に紹介されている。

このように、日本におけるベトナム度量衡に関する研究は、伝統的建築に用いられる尺の現地調査による詳細な検討が主であり、これらは非常に貴重な情報、報告である。

また、欧米語、ベトナム語による研究では、度・量・衡全てを対象とし、度量衡研究の問題点を明確にしつつ、多くの事例を収集し、歴史的経緯を通じて検討したグエン・ディン・ダウの研究[Nguyễn Đình Đầu 1978a: 1978b]が、これまでに於いて最も代表的な研究といえる。次に 1919 年以降のトンキンでの度量衡に関する状況を一次史料を用いて分析したヴー・ティ・ミン・フウオン[Vũ Thị Minh Hương 2002b]と、長さに関してのファン・タン・ハイの研究[Phan Thanh Hải 2003a]が最も詳細なものであろう。

上記 3 つの研究を除くと、①文化人類学的手法による少数民族の度量衡研究[Maurice 2008] [Vargyas 2008]、②博物館収蔵の特定の計量器の観察・報告[Huỳnh Thị Bích Nhân 2007]、③度量衡全体の概要・略史紹介[Nguyễn Tùng 2008] [Nguyễn Huy et Dorais 2008] [Nguyễn Hữu Tiền 1934] の 3 つの種類に分けることができる。それぞれの内容については既述の通りであるが、これら研究史に共通する最も大きな問題は、度量衡の時代別、地域別の実態や法整備の過程について実証的に明らかにし、全体像を把握できるだけの研究がないため、個別の事例研究を比較、還元する基盤がないことである（度量衡研究の具体的な問題点は、本節(3)「ベトナム度量衡史研究の諸問題と本論の位置づけ」で提示する）。

この背景には、先に述べたように各時期、各地域において用いられていた度量衡制度があまりに多様であるため、本格的に手が付けられていない現状がある。社会経済史研究の基本分野である度量衡研究の意義や重要性は認識されているにもかかわらず、である。

こうした現状を踏まえて、本論では体系的に度量衡研究を可能とする方法論と史料に依拠して検討していくことになるが（本節(4)「度量衡研究の方法論」で詳述）、その成果の一部として、すでに以下の研究を發表している。まず『はかりとものさしのベトナム史—植民統治と伝統文化の共存』[関本 2010]では、第一に、植民地期北部ベトナムにおける度量衡の地域的多様性を北部各省の月別商業統計という同時期、同目的のために作成された同質性の高い行政文書上の事例（約 1280 事例）を使用し、明らかにした（本論では、補論、第 1 章、第 2 章第 3 節として発展させる）。第二に、1927 年に度量衡統一に向け意見を求めたトンキン理事官長と、それに対する各省知事の回答、および 1936 年に同じく度量衡統一に向け、各省で行われた度量衡の現地調査の報告書をもとに、北部ベトナムにおいて多様であった度量衡の実態と、その背景、地域性について明らかにした。この部分は、ベトナムにおいても「植民地期北部ベトナムの

度量衡統一とその実態」[Sekimoto 2010]として発表した（本論では、第3章第5節、第4章第3節として発展させる）。

また、「植民地期北部ベトナムの度量衡統一議論とその背景」[関本 2013]では、度量衡統一に対して各省知事の意見および当時の現状について、1910年から1927年までの変遷をまとめている。その過程で、メートル法は外国との大口取引に関係する部分でしか浸透していなかったこと、度量衡統一についてはインドシナ総督府、トンキン理事長官府共に強制的施行ではなく、現地の実状にあわせた形での導入を模索していたことが具体的に明らかとなった。さらに、金のかからない、官僚主義的植民地経営の一端を度量衡統一政策の側面から検討している。度量衡が不統一であったベトナムの社会的・文化的背景についても、現地調査の結果を踏まえて考察を行っている（本論では、第4章第3—5節で発展させる）。

これら植民地期に關係する史料に基づいた研究に加えて、現在のベトナムにおける度量衡についての現地調査も筆者は平行して行っており、その成果は「個人アーカイブズの価値の発揮—度量衡研究を通じて」[Sekimoto 2013]でまとめている。この中では、歴史研究においても現地調査から得られる示唆は非常に重要であり、こうした調査による歴史研究への還元の可能性について指摘している（近年の現地調査から分かっていたベトナム（東南アジア）特有の文化的背景も含め、本論では結論部分で植民地以降の状況も取り上げながらまとめたい）。

本論では、これらの研究を基に、さらに地域、時代の枠を拡大し、法整備の過程も含めて発展させていく。

(2) 社会経済史研究の中の一部として言及したもの

本項では、度量衡の専論ではないが、社会経済史研究の中で度量衡についてまとめた既述の見られる文献について取り上げる。これは度量衡の専論が少ないこともあるが、度量衡研究の問題点をより明確に捉えるため、また研究史上で度量衡に関する見解が様々に異なっている要因についても検討するためである。各研究に見られる度量衡の見解の詳細な比較は補論に譲るが、本論の位置づけ、方法論と使用する史料の有効性を以下第3項、第4項で検討するのに先立ち、本項では簡単に概要を整理する。

17、18世紀の度量衡については、ドゥルスタルによって長さと容積単位についての研究がある[Deloustal 1910: 42-43]。グエン・タイン・ニャーやダン・フォン・ギーもそれぞれ17、18世紀の度量衡制度を考察、紹介しているが[Nguyen Thanh Nha 1970: 155-157] [Đặng Phương Nghi 1969: 104-105]、両者とも典拠が示されておらず、また漢籍史料の原文にもあたっていない。内容についても、植民地期の制度と混同して書かれている可能性が高い[関本 2010: 16]。

阮朝に関してドォ・バンが『阮朝におけるベトナム経済商業』[Đỗ Bang 1997: 16-21]で、植民地期については、トンキンが『トンキンの多様性』[Souvignnet 1903: 443-455]、アンナンはパスキエ[Pasquier 1930: 264-269]が、コーチシナはシュライナー[Schreiner 1901: 240-255]が、それぞれ度量衡制度に関して考察を行なっている。また、『ベトナム古伝文化事典』には、阮朝と年代不明の2種類の度量衡制度が紹介されている[Hữu Ngọc(chủ biên) 1995: 240, 251-254]。アンリはトンキン、アンナン、コーチシナ、カンボジアについての度量衡制度をそれぞれ一覧表にしてまとめて掲載しているが[Henry 1932: 13-18]、アンナンについてはパスキエの研究によっている。レー・タイン・コイは地域区分せずに、インドシナ一般の度量衡制度として巻末で一覧表を掲載しているが[Lê Thánh Khôi 1955: 531-533, 1981: 403-404]、この表は容積、重量単位に限っては、『トンキンの多様性』あるいはインドシナ官製総年報から引用していると考えられる⁸。

以上、第1項、第2項で提示した度量衡研究の問題点について、次項でまとめる。

(3) ベトナム度量衡史研究の諸問題と本論の位置づけ

度量衡の制度や実態についての整理は、特に阮朝・植民地期において困難を極めた。なぜなら、阮朝は1802年以降、仏領インドシナ連邦は1887年以降から共に1945年まで存続した関係上、両者は重複する時期が長いにもかかわらず、度量衡の記述が見られる各文献のほとんどは、その制度の策定者（朝廷側か、植民政権側か）、施行された時期、範囲、出所を明記していないためである。文献間で齟齬も多く、研究というよりは当時の度量衡制度の概要紹介にとどまっている。

ここで、上記にあげた先行研究や度量衡に関する記述の比較・検討（補論「植民地期におけるベトナム度量衡制度の認識と研究史の現状」参照）を通じて明らかとなった、ベトナム度量衡史研究をめぐる問題を数点指摘したい。

第1に、同時代史料および近年の研究においても、フランス植民地政府によって施行された具体的な公式度量衡制度の紹介が、ほとんどないことである。これは、植民地政府によって度量衡制度が施行されたが、それは国家に関係する事柄と、西洋人とインドシナ人との間の交易でのみ用いられているに過ぎなかった[Nguyễn Hữu Tiên 1934: 335]。また、度量衡制度の選択をめぐる、民間では旧式度量衡制度を用いるか、新制度を用いるかについて、国家は選択の自由を与えており強制はしていなかった[Nguyễn Hữu Tiên 1934: 335]。それゆえに、植民地政府による度量衡制度が一般的に普及していなかったためだと考えられる。また、度量衡法などを明らかにするため、政府刊行物、官報などが、研究史上参照されてこなかったこともうかがえる。

⁸ 『トンキンの多様性』とインドシナ官製総年報のなかで、同一の度量衡制度の紹介がみられる（補論第1節「(2) 官製年報中の度量衡制度の項目」）参照。

第2に、現代の歴史研究においても、黎朝、阮朝期の度量衡制度に対するベトナム語訳に一貫性が見られないこと、である。例えば、同じ「合」でも、ホップ、カップ、ヒエップと3種類の訳語がみられ、また升は文献によってトゥンとタンに訳されている[関本 2010: 12 (表3)]。この升については、北部のア(a)音は南部ではウ(u)音になることから、地域の差とも考えられるが、「トゥン(南部ではタン)」[Đặng Phương Nghi 1969: 105]と書かれたものもあり、この場合上記の発音の原則から考えた場合とは反対になる。

嘉隆帝による度量衡制度に出てくる盃をめぐっても、訳語が一貫していない。盃のベトナム語音はウィエン(uyên)であるが、『会典』の翻訳書ではダウ(đầu、斗)と訳されている⁹。1 ウィエン=1 ダウ(đầu)=約 1L[Henry 1932: 14][Souvigniet 1903: 454]であるため、相当量では同一であるが、盃と斗は別の単位名であるため、訳し分ける必要がある。また、盃の俗字は碗であるためか、盃をバット(bát、鉢)と訳しているものもあるが、バットはウィエンの半分の量であり[関本 2010: 8]、異なる単位である。

このように、不適切なベトナム語訳の事例は枚挙にいとまがない。多くのベトナム人研究者は漢籍などの原文を見ず、そのベトナム語訳をもとにした研究を行なっているが、このことも混乱の要因のひとつだと考えられる。同時に、ベトナム社会経済史研究において度量衡に関する統一的理解がまだないことも示唆している。

第3は、各単位に相当する量の換算が、研究者の見解や調査によって異なっていた点である。ひとつ例を挙げると、ロードの見聞録をめぐっても翻訳の違いが見られる。ロードは市場での魚の売買で、「最も大きい魚は 10-12 リーブル」と記しているが、このリーブルをベトナム語翻訳書ではリウ(liu)と訳しており、1 リウは 0.5 キロであり 0.5 カン(cân)と注をつけている[Rhodes 1651/1994: 34/214]。一方でグエン・トゥア・ヒーは著書『17、18、19 世紀におけるハノイ経済史』の中で同部分を引用しており、リーブルを直接カンと訳した上で、1 カン=約 0.6kg としている[Nguyen Thua Hy 2002: 82]。つまり、翻訳書では 1 リーブル=0.5 カンとなるが、ヒーでは 1 リーブル=1 カンとなるのである。

また、同時代においても、1 メートルはトゥオック(尺)の 2.5 倍の長さにあたるにもかかわらず、多く文筆家や新聞などの記者は、トゥオック・タイ(西洋尺)つまりメートルと、トゥオック・クウ(旧尺)の違いを判別せず、ただトゥオックと書くにとどまっていることから、読者は実際の長さを判断できない[Nguyễn Hữu Tiên 1934: 335]。トゥオック・クウ(旧尺)も文献によってトゥオック・タ(thước ta、我々の尺)[Dương Kinh Quốc 2002: 236]、トゥオック・アンナン(thước An Nam、アンナン尺)[Hồ Tuấn Dung 2003: 48]など、様々な呼び名が用いられている。

⁹ Khâm định đại nam hội điển sự lệ[大南会典事例], Trần Huy Hân và những người khác dịch, tập 5, Huế: Thuận hóa, 1992, p.74.

重量単位においても、商業統計の中で記入されている単位名[関本 2010: 24-25(表 4)]のなかでピクルもフランスピクル(picul français)とアンナンピクル(picul Annamite)と書き分けられている箇所があり、キロでもアンナンキロ(Kilo annamite)と書かれたものもある。フランスピクルは植民地政府が定めたピクルで、アンナンピクル、アンナンキロはそれぞれタ、カンを示すものと推測できるが、1単位あたりの相当量の記載がないため検討は困難である。

これらの事例は、単にトゥオック、ピクル、キロと文献資料に書かれていても、執筆者、記入者が具体的にどの単位を想定して書いたものか、常に注意を払う必要を喚起しており、度量衡研究をより複雑にしている。

このように、植民地期に生きていた人々の認識の違い、後世の研究者による解釈の違い、これら2つの要因が複雑に絡み合っている。これは、当時の度量衡制度はもちろん、その後の研究史料の表記にも一貫性が見られない根拠のひとつと考えられる。

以上のように、社会経済史研究の基礎ともなる度量衡史の研究は、ベトナムに関しては年代、地域を問わず本格的には行なわれていない。また、度量衡に関する見解や認識も、まだ一貫性が見られないのが現状である。

そこで本論では、同一単位を示す場合も敢えて参照する文献、史料の表記のまま示すこととする。度量衡に関する研究・記述においては、訳語が統一されていない、出所が明らかでない、という状況があるためである。例えば、盃はベトナム語でウィエン(uyên)、ダウ(đầu)、バット(bát)などと訳されているが、一般的にはダウは斗、バットは鉢を示す。またフランス語、日本語のカタカナ表記では、ベトナム語の発音、声調記号が反映されない場合もある。例えば、Thúng、Thưng と Thùng はそれぞれ別々の単位であるが、フランス語表記では全て Thung に、カタカナではトゥンになってしまう。

さらなる混乱を避けるため、本論ではベトナム語、フランス語、漢籍史料間で同一の単位名を示していると考えられる場合でも、漢籍史料中の単位名はそのまま漢字表記、ベトナム語、フランス語文献においては、その音をカタカナ表記し、初出の際、または誤解の生じる可能性のある語には常に（ ）で原語を付す。

(4) 度量衡研究の方法論

上記「第2節 研究史(1)―(3)」で指摘した問題点を踏まえて、度量衡研究を進めるにあたり必要となる有効な方法論、および研究の方向性について提示したい。

まず、政府刊行物、一次史料を通じた度量衡法整備の整理と研究史上の事例の比較検討、その齟齬がなぜ生じたのか、その振れ幅はどの程度か、について検討することが基礎研究として必要となろう（本論では補論として取り上げる）。

それらと合わせて、現段階で植民地期ベトナムの度量衡を理解する上でもっとも有効な方法は、断片的、局地的事例ではなく、客観的・合理的比較が可能となる体系的史料を用いて広範囲に検討することであると考ええる。

そこで、本論において使用する主要な史料群と、それらを分析することによって得られる結果について、ここで整理したい。

本論が依拠する史料の中で、もっとも重要な史料群は「商業統計」と「度量衡統一に関わる通達(circulaire)とその回答」の2史料群である。以下、史料ごとにその概要と研究の方向性について述べる。

① 商業統計(Statistique commerciale)

この商業統計は、別名公設市場価格表(Mercure)とも示され、各省の物価を月別で把握できる統計である¹⁰。それぞれの品目ごとに、単位名、一単位の相当量（メートル法換算値）、単位あたり最高価格と最低価格、100kg ないし 1 リットルあたりの最高価格と最低価格を記入する欄が設けられている。つまり、この商業統計を使えば、品目別に計量に使用されている単位名、その一単位あたりのメートル法換算値を省別、月別に集めることができる。

商業統計の事例を用いては、米に関わる単位（2150 事例）を対象とし、その時系列変化および地域性をベトナム全土を対象とし、省別に検討する。米に関わる単位に着目する理由は、第一に、どの地域でも主食として消費されていた米の計量単位を分析対象にすることで、より客観的にベトナム全域の地域間比較が可能となること、第二に、いまだ本格的に研究が進められていない植民地期の度量衡を考察する際、植民地政権にとってもっとも重要な輸出産品であった米の計量単位の実態を明らかにすることは、度量衡研究の第一段階として効果的である、と考えるからである。この分析によって、トンキン、アンナン、コーチシナにおいて米の計量に使用されていた多種多様な度量衡単位の特長とその分布および時系列変化、同一単位における一単位当たりのメートル法換算値の地域差とその変化、を省レベルで検討することができる。

② 度量衡統一に関わる通達とその回答

ベトナム国家第一文書館に保管されているトンキン理事長官府コレクション(RST)には、トンキン理事長官府とトンキン各省の間に交わされた度量衡統一に関する書簡、報告書など、約 1000 枚の史料群が残されている。これらは、トンキン理事長官府がトンキン各省の知事に対して度量衡に関して意見や調査を求めた通達と、それに対する各省からの回答文書からなる史料群である。こうした通達は 1898 年から 1936 年の間に合計 7 回発信されている。この史料群の特徴としては、脈絡なく作成された目的・時期が多様に異なる文書ではなく、特定の事柄について同一時期に各省が一斉に作成し

¹⁰ これらの商業統計は、TTLTQGI、インドシナ総督府コレクション(Fonds du gouvernement général de l'Indochine、以下 GGI)、RST、トンキン農業省コレクション(Fonds de la direction de l'Agriculture du Tonkin、以下 DAT)の3つのコレクションの中に所蔵されている。現在までに収集した商業統計は 263 タイトルであるが、ここではタイトル番号の列挙は割愛する。巻末参考文献リスト参照。

た文書であることである。つまり、より客観的、より合理的に各省レベルで比較検討を行うことができ、その検討を通じて各時期における度量衡制度およびその運用の実態についての全体把握が可能となる史料群といえる。

その通達の内訳は、度量衡統一の賛否や意見を問うものが4回¹¹、度量衡統一に向けた現地調査依頼が3回¹²となっている。このことから、植民地期を通じて度量衡統一の模索が続いており、1936年の時点でも統一が実現できていなかったことがわかる。これらの通達は、インドシナ総督府からの依頼を受けて、トンキン理事長官がトンキンの各省知事に発信したもの、あるいは総督府が出した法律に従って行われたものがほとんどである。ただ、1927年の通達だけは、総督府からの依頼文書が史料群の中に見当たらず、理事長官が出した通達本文中にも総督からの依頼に関しては触れられていない。つまり、この1927年の通達だけは、トンキン理事長官の独断で行われた可能性が高いといえる。

次に、これら史料群に含まれる文書の内容であるが、理事長官から出された通達とそれに対する各省知事からの回答が中心になる。それ以外にも、理事長官府内史料、例えば各省からの回答をまとめた第一官房の報告、度量衡関連法案立案過程での理事長官府内でのやり取りなどが残されている。また、フランス人知事が意見をまとめる際参考にしたベトナム人地方高級官僚の調査報告書（漢文、ベトナム語、フランス語）、計量器の図解史料、地方委員会の議事録なども含まれている。そのため、通達とそれに対する回答だけでなく、その文書が作成された背景、各省行政における官僚の役割や活動なども垣間見ることができる。

この史料群に依拠した研究の方向性としては、その通達の内容に沿って2つの目的に分けて省ごとに分析・検討する。まず、現地調査を求めた通達では、各省、各地域で用いられていた制度の実態、その時系列変化や地域差について検討する。

意見を求めた通達では、度量衡統一が進まなかった実態と背景について各省レベルで検討する。本論では、この部分を取り上げる。

以上をまとめると、これら①商業統計と②度量衡統一に関わる通達とその回答、という史料群のもっとも特徴的な性質は、同時期、同目的のために一斉に作成された体系的な行政文書であるといえる。こうした史料を用いることで、客観的な相対比較が可能となる。それも各省から理事長官府、そしてインドシナ総督府という3つの行政レベルで、植民地期前期から後期までの時系列変化を追うことができる。行政文書上

¹¹ TTLTQGI, RST, No.71312, Extention au Tonkin de la réglementation des poids et mesures en application en Cochinchin et au Cambodge 1899-1937. No. 71315, Arrêtés et circulaires du Gouverneur général.1886-1937. No.71315-02, Application au Tonkin et en Indochine du système métrique français 1901. No.71315-03, Application du système métrique française en Indochine 1914-1934.

¹² TTLTQGI, RST, No.71315-01, Arrêtés et circulaires du Gouverneur général, Rapport des chefs des province 1886-1937. No.71315-02, Application au Tonkin et en Indochine du système métrique français 1901. No.71315-04, Application au Tonkin du système métrique française 1936-1938.

での詳細な分析は、ひいては民間レベルでの多様な度量衡を理解するヒントにもなるのではないかと考えている。

第3節 本論の構成

最初に、本章第2節「(4)度量衡研究の方法論」で政府刊行物、一次史料を通じた度量衡法整備の整理と研究史上の事例の比較検討、その齟齬がなぜ生じたのか、その振れ幅はどの程度か、について検討することが基礎研究として必要であることを指摘した。これを実現するため、本論では補論「植民地期におけるベトナム度量衡制度の認識と研究史の現状」を設け、以下のように検討する。まず、第1節では政府側の発行資料としてインドシナの官製年報を取り上げる。第2節においては、社会経済史研究から代表的な研究者の文献（本論第2節「研究史(2)社会経済史研究の一部として言及したもの」で取り上げた文献、例えばパスキエ、ローブカン、アンリなどや1940年代以降出版の仏印関係日本語文献など）の中で見られる紹介、記述、事例をできるだけ集め、それらの整理を行う。そしてそれら文献・史料間の不一致の度合いと、その齟齬がなぜ起こるのか、についても検討する。また現在における植民地期度量衡研究の状況を把握する。

第1章「度量衡関連法の整備」では、度量衡統一に関する法整備の過程を、時代背景と併せて検討する。第1節では17、18世紀を対象とする。前史を整理するというだけでなく、本論第1章第5節で検討するタとピクルについて、その発祥をこの時代に求める論考があるが、その根拠は明らかにされておらず、再検討する必要があるためである。その際、北部に展開されていた黎朝の制度を考察するだけでなく、阮氏支配下の中部についても概観する。これは、植民地期において中部が中心となる阮朝も同時に成立していたため、その背景となる中部の前史も合わせて検討する必要があるためである。第2節と第3節では、阮朝、フランス植民地政権それぞれで見られる法整備過程を明らかにする。世界のメートル法受容の動きの中で、インドシナにおけるメートル法適用の時期や内容がいかなるものであったか明確にするため、第3節ではメートル法の発祥と内容、世界各国のメートル法受容についても整理する。さらに世界情勢とフランス植民地情勢全体の中で、インドシナ総督とトンキン理事長官がいつ、何を目的として度量衡に関する7つの通達を発信したのか、及びその背景を詳細に検討する。度量衡統一政策から見えてくる総督府とトンキン理事長官府の意図・目的とそれを取り巻く環境・情勢を明確にすることで、第3章、第4章で検討する各省の通達への回答文書のより深い理解と意味づけにつなげるためである。

第4節は「度量衡制度統一をめぐる地域差」とし、第1―3節で行った検討をもとに、現在一般的に想定されているトンキン、アンナン、コーチシナの度量衡に見える地域性と度量衡統一の地域間時差についてまとめる。実際度量衡の統一が実現された時期

の地域差を、北部トンキンだけでなくアンナン、コーチシナを含めて検討することで、第3章、第4章で焦点を当てるトンキンの、仏領インドシナ内での特徴を明確にする目的もある。

植民地期、米の計量に主に用いられていたタ(榼、ta)、またはピクル(picul)と呼ばれる単位は、その一単位当たりの相当量が地域、時期によって様々に異なっていた。第2章でこれらの計量単位を対象としてその地域的多様性を分析するためには、ベトナム固有の単位でなく、植民地政府が導入した外来の単位であるピクルですら、なぜこのように地域ごとに不統一な用いられ方をしていたのか検討し、その定義づけを明確にすることが必要となる。そのため、タ、およびピクルの背景と導入過程を明らかにすることも本章の重要な課題の一つとし、第5節で論じる。

第2章「商業統計における度量衡とその地域的多様性-米穀計量単位を中心に-」では、現在までに収集した各省月別商業統計 263 タイトル、その中で集めた米穀計量単位の事例約 2150 事例を対象として、それらの分布や時系列変化を見ることでトンキン、アンナン、コーチシナそれぞれの地域性と、各地域内での地域性の両方を検討する。この章は拙稿「植民地期北部ベトナムの米穀計量単位に見える地域的多様性の考察」[関本 2014a]、「植民地期北部ベトナムの度量衡統一とその実態」[Sekimoto 2013]をもとに、発展させたものである。商業統計の事例を対象とした検討に先立ち、その地域性の背景を明らかにするため、第2節では植民地期以前のベトナムにおける勢力圏や地域区分、特性について整理する。最後に、第6節で行政区画を超えた共通文化圏の存在とその背景についても取り組む。

第3章、第4章では、トンキン内で出された度量衡に関する通達を丁寧に読み込んでいくことで、北部ベトナム上で展開されていた各省レベルでの度量衡の実態と、統一できなかった背景について1898年から1936年の時系列変化を通じて具体的に提示する。この期間、度量衡に関する通達は確認できる範囲で7回出されている。その内容は①度量衡統一に関する賛否とその理由を求めるもの、②現状把握のための現地調査依頼、の2つに分けることができる。前者に該当する通達4つは第3章で、後者に該当する通達3つは第4章で論じる。中南部に関しては、こうした分析が史料の欠如によって難しいが、トンキンの事例を詳細に分析・検討することで中南部の理解にもつなげたい。

第3章「度量衡統一に向けた模索—トンキンの事例—」では、度量衡統一に関する各省の賛否と理由を、トンキン理事長官が発信した度量衡統一に関する通達(1898、1910、1921、1927年)¹³に着目し、第2節—第5節で整理する。その結果を受け、第6節ではこれら度量衡統一に関する各省の賛否とその理由の検討を通じて、1898年から1927年の約30年間のトンキンにおける度量衡の状況と、統一が困難であった背景を具体的に明らかにする。また、度量衡に関してのみならず、度量衡の側面から垣間見えるベトナムの社会、文化、植民地統治についての考察も行う。

¹³ TTLTQGI, RST, No.71312, No. 71315, No.71315-02, No.71315-03.

第4章では各省別現地調査¹⁴を用いて、トンキン内、省別、府県都市別にどのような度量衡制度が用いられていたか、およびその時系列変化、度・量・衡、それぞれの統一の地域差や時差について明らかにしていく。

この中で、1911年の史料¹⁵にあるハーザン省の報告の中に、また1936年の史料¹⁶は、Bac Ninh 省からの報告に省内の府、県、ハノイ市からの報告に市内の各市場それぞれで用いられている度量衡の報告書が添付されており、省レベル以下の県レベル、そして市内レベルでの分析が可能となるため、特定の省内、市内での状況という事例も提示できる。

第4節 対象地域の概要

本節では、仏領インドシナ連邦の概要について示す。本論第1章で度量衡法整備について、第3章、第4章で総督府、トンキン理事長官、各省知事の間でやり取りされた通達、書簡を通じ、度量衡の現状、度量衡統一政策の模索を検討する。その検討に先立ち、仏領インドシナ連邦における統治体系の概要、特に各行政機構の長の権限について(2)「統治体系」で整理する。また、仏領インドシナ連邦の行政機関について、その日本語訳が統一されておらず、文献によって様々な訳語があてられている。そのため、本論で用いる用語とその意味を明確にするという役割も、(2)は担っている。

次に、第2章以下トンキン、アンナン、コーチシナにおいて省別に分析を行うため、その省編成について(3)「トンキン、アンナン、コーチシナの省編成」でまとめ、そのカタカナ表記も同時に提示する。最後に、第2章、第3章、第4章の地域性の分析が必要となる各地域の地形、自然条件について(4)「トンキン、アンナン、コーチシナの自然条件」で提示する。

(1) 成立と構成

1887年10月、法政上フランスの植民地、保護国および広州湾租借地によって成る仏領インドシナ連邦が成立した。フランスの植民地とはすなわち直轄領である南部のコーチシナであり、保護国はアンナン、トンキン、カンボジア、ラオスで構成されている¹⁷。

¹⁴ TTLTQGI, RST, No.71315-01, No.71315-02, No.71315-04.

¹⁵ TTLTQGI, RST, No.71315-02.

¹⁶ TTLTQGI, RST, No.71315-04.

¹⁷ ラオスの保護国化、仏領インドシナ連邦への加入は1893年になる[太平洋協会 1942: 22]。

(2) 統治体系

政治および行政機構については、その日本語の訳語が文献資料によって異なっているが、本論では『仏領印度支那の統治機構』中巻[ジャン(Jean) 1942: 1-3]により、以下のように分類し、使用する。①一般行政（インドシナ総督府）、②地方行政（コーチシナ、カンボジア、ラオス、アンナンおよびトンキンの地方行政並びに広州湾の地方行政）、③省行政（省および管区）、④市行政。

インドシナ総督府以下、連邦を構成する上記5地域の地方行政には独立の行政長官が置かれ、コーチシナは副総督、その他の保護国では理事長官と呼ばれ行政上の権限は広範囲に認められている[ジャン(Jean) 1942: 54-55]。省行政では、各省の長はフランス行政駐在官、軍区の場合はフランス軍の大佐である[太平洋協会編 1941: 60]。本論では、便宜上このフランス行政駐在官や大佐、さらに市行政の長である市長を「知事」として用いる。

なお、現在のベトナム版図内においては、保護国であるアンナンとトンキンでは阮朝の行政機関も残され、平行して維持されているが、理事長官の監督の下に置かれていた¹⁸。本論では、実質上権限を有しない阮朝の行政機関の概要については割愛する。

以下、①から④について、特にその長が有している権限の範囲を中心に、概要を述べる¹⁹。

①一般行政（インドシナ総督府）

インドシナ総督府の長である総督は、統治の最高機関にして、その権限は行政・立法・司法・外交・軍事・財政など、広汎かつ多岐にわたっており、本国政府に対してインドシナ全般の利益を代表するとともに、本国国権の適法な唯一の受任者として、植民大臣が直接行使する権限を代行する。

総督は行政、財政上に自治権を有する連邦各邦における行政長官の独創的自由を拘束することはできないが、連邦各邦の行政長官に対して、上級官憲である機能を付与されており、本国官権の一般的恒久的委任事項および法律または大統領令による特別委任事項についての諸法令の制定権を与えられている。また、特別令の定めるところにより、総督の責任を持ってその制定権の一部または全部を、総督府総務長官または連邦各邦の行政長官に代理させることもできる。

インドシナ総督府は、総督以下、総督府総務長官²⁰、総督府部局および官衙²¹、高等諮問機関²²で構成される。

¹⁸ 阮朝の現地行政は、皇帝の辞令をもって官吏の位階を与えられた官吏によって構成され、理事長官の監督の下に行われる[ジャン(Jean) 1942: 184-185]。トンキンについては、1897年7月26日の王令によって、副王(Kinh luc)の権限は、トンキン駐在の理事長官に帰属し、副王のベトナム人官吏および使用者は、トンキン各省の行政の高級官吏の配下に移された[ジャン(Jean) 1942: 80]

¹⁹ ここでの内容は主に太平洋協会[1942: 48, 54-56, 60, 61]によるが、金子[1941: 108-110]、ジャン(Jean)[1942: 62-65, 80, 184-190]、エンニス[Ennis 1936: 102-107]も参照した。

②地方行政（コーチシナ、カンボジア、ラオス、アンナンおよびトンキン²⁰の地方行政並びに広州湾の地方行政）

連邦を構成する各邦には、その長として独立の行政長官が置かれている。コーチシナには行政長官として副総督（知事）、アンナン、トンキン、カンボジア、ラオスでは理事長官が置かれている。各邦行政長官は、総督が植民地の全部または一部に対して法律、および大統領令を公布する唯一の権限者である関係上、立法上何等権限を有しないが、行政上の権限は広汎で、領内の一般行政および保安警察に関する全事項に対する責任を負うと共に、管轄内のフランス人、フランス国籍臣および諸外国人に対しては、むしろ総督以上の行政権を掌握している。以下各局課、各諮問機関、保護国現地特殊中央行政（阮朝による統治体制）が存在する。

③省行政（省および管区）

各邦の地方行政の下に、省行政、現地府県および郡村行政がある。

省行政機関には、省長としてフランス人行政駐在官（以下、本節では「知事」）、省専門技術機関、現地代表機関がある。各省知事は地方行政行政官に直属し、その監督下に上級官庁の命じる法規を付与された権限内で省令を発し、部下職員の監督の役割を担う。一般に各省知事は、管内における公権の唯一の代表者であり、法律、大統領令、総督令、その他諸通達の実施、治安秩序の維持、経済、財政、財務などの諸般の行政権を付与されている。

④市行政

植民地期、自治制が実施されていた都市は、サイゴン、ハノイ、ハイフォン、チョロン、プノンペン、ナムディン、ハイズオン、ツーラン、ダラットの9都市である。以上の中でも、サイゴン、ハノイ、ハイフォンは一級都市として大統領令により、その他の6都市は第2級都市として特別総督令により、それぞれ特別市政が施かれていた。一級都市は純フランス領土としての位置づけを有していた[太平洋協会編 1941: 64]。

²⁰総督府総務長官は、総督直属の補佐官であり、行政、財政、経済関係事項および特に総督に保留せられざる一切の政務を処理し、総督の特別代行兼または常任代理権を付与されている。

²¹総督府部局は、総督府内務局、総督府直属の官衙（財務局、工務総監部、関税税務局など16部局）に区別される。厳密な意味では総督府所属機関と称することはできないが、中郷行政機能的な性質を持つ総督府傍系中央監督機関（財務監督局、司法行政部、出納部、陸軍部、海軍部の5部局）を有している。

²²総督の高等諮問機関として、総督府会議および同常設委員会、経済財政最高会議、国防会議などがある。インドシナには代議政体国家のように厳密な意味の立法機関は存在せず、以上の合議機関が総督を補佐しているだけで、立法権はほとんど総督が占有している。

(3) トンキン、アンナン、コーチシナの省編成

フランス植民地期における各地域の省の編成や再編の過程については、資料間で齟齬が見られる。トンキンを例に挙げると、グエン・クアン・アン[Nguễn Quang Ân 2003]によれば、20世紀初頭から1945年の8月革命までの省名リストでは27省2都市が掲載されている。各省についての面積、人口（共に1936年当時のもの）といった基本データや省内に属する府(phủ)、県(huyện)、州(châu)の名称（1927年当時）などが記載されているが、成立年や省の統廃合についての記述は非常に断片的である。1884年時点ではトンキンには13の省があったとされるが²³、その後は細かな省の統廃合や新しい行政区画の成立、また名称変更が連続して行なわれたとの説明があるのみである[Nguễn Quang Ân 2003: 43-48]。

1927年に出版された『トンキン各省地理』によると、23省4都市4軍区(đạo quan binh)²⁴であったとされるが、具体的にいつのものであるか記述はない[Đo Đình Nghiem, Ngo Vi Lien và Phạm Van Thư 1927: 7]。

ディン・スアン・ラム他による研究では25省2都市とされており、1891年に盗賊や抗仏勢力の討伐、弾圧と国境付近の防衛上の観点から4つの軍区を独立した形で成立させたとしており、さらに1916年に5つ目の軍区がライチャウ、ラオス付近に設けられている[Đinh Xuân Lâm chủ biên 1999: 102-103]²⁵。

仏領期以降現在に至るまで、各省の地誌も出版されているが、全く出版されていない省も少なくないのが現状であり、またその地誌にすら、省の成立に関わる歴史的記述に欠け、フランス植民地期にどのように成立、再編されたかを追うことは困難であった。

以上のように、省編成や再編は行政の基本となるにもかかわらず、年代を設定してその時点で存在する省や軍区の数や範囲を正確に把握することすら難しい状況にある。仏領期を扱った他の研究論文においても、対象となる省名を列挙しているものの、具体的な年代や再編成については触れられていない。ベトナム国家第1文書館で筆者が見た商業統計では、～省(la province de～)、～周辺(du cercle de～)、第～軍区省(province de ～ territoire militaire)、～都市(la ville de～)というような区分ごとに物価が

²³ 13省は以下の通りである。バクニン、カオバン、ハノイ、ハイズオン、フンイエン、ランソン、ナムディン、ニンビン、クアンイエン、ソントイ、タイグエン、トゥエンクアン、フンホア。

²⁴ 23省4都市4軍区は以下の通りである。23省：バクザン、バクカン、バクニン、ハードン、ハイズオン、ハーナム、ホアビン、フンイエン、キエンアン、ランソン、ラオカイ、ナムディン、ニンビン、フックイエン、フート、クアンイエン、ソンラー、ソントイ、タイビン、タイグエン、トゥエンクアン、ヴィンイエン、イエンバイ。4都市：ハノイ、ハイフォン、ナムディン、ハイズオン。4軍区：ハイニン、カオバン、ハーザン、ライチャウ。

²⁵ 26省は以下の通りである。26省：バクザン、バクニン、バクカン、ハードン、ハーザン、ハイズオン、ハイニン、ハーナム、ホアビン、フンイエン、キエンアン、ライチャウ、ランソン、ラオカイ、ナムディン、ニンビン、フックイエン、フート、クアンイエン、ソントイ、ソンラー、タイビン、タイグエン、トゥエンクアン、ヴィンイエン、イエンバイ。2都市については具体的な都市名は挙げられていないが、ハノイ、ハイフォンのことだと思われる。

記載されている。これを時系列に並べて変化をみていけば、行政区画の編成過程を概観することもできようが、史料が断片的であるためこれも不可能である。

そのため本論では、インドシナ年報(AGI)の各年版を参照し、トンキン、アナン、コーチシナの省編成についてそれぞれ表にまとめ、提示した。以下、省名をはじめ行政単位名の表記についても、この表序—1、2、3に準ずる。

表序—1 トンキンの省編成

省(province)	カタカナ表記	1899	1900	1901	1902	1903-04	1905	1906	1907	1908	1910-1912	1913	1914	1915-22	1923	1924-31
Bắc Giang	バックザン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Bắc Kạn	バックカン			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Bắc Ninh	バックニン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Cao Bằng	カオバン															
Cầu Đơ	カウドー					○										
Hà Đông	ハードン						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Hà Giang	ハーザン															
Hà Nam	ハーナム	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○
Hà Nội	ハノイ	○	○	○	○											
Hải Dương	ハイズオン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Hải Ninh	ハイニン									○	○					
Hải Phòng	ハイフォン	○	○		○											
Hòa Bình	ホアビン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Hưng Hóa	フンホア	○	○	○	○	○	○	○	○							
Hưng Yên	フンイエン	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Kiên An	キエンアン								○	○	○	○	○	○	○	○
Lai Châu	ライチャウ										○	○	○	○	○	○
Lạng Sơn	ランソン							○	○	○	○	○	○	○	○	○
Lào Cai	ラオカイ									○	○	○	○	○	○	○
Nam Định	ナムディン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Ninh Bình	ニンビン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Phủ Liên	フーリエン			○		○	○	○								
Phủ Lỗ	フーロー				○	○										
Phủ Thọ	フート									○	○	○	○	○	○	○
Phúc Yên	フックイエン						○	○	○	○	○	○				○
Quảng Yên	クアンイエン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Sơn La	ソンラー						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Sơn Tây	ソンタイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Thái Bình	タイビン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Thái Nguyên	タイグエン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Tuyên Quang	トゥエンクアン				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Vạn Bú	ヴァンブー	○	○	○		○										
Vĩnh Yên	ヴィンイエン			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Yên Bái	イエンバイ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
軍区																
Lạng Sơn	ランソン	○	○	○	○	○	○									
Cao Bằng	カオバン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Tuyên Quang	トゥエンクアン	○	○													
Yên Bái	イエンバイ	○	○													
Hà Giang	ハーザン			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Lào Kay	ラオカイ			○	○	○	○	○	○							
Hải Ninh (Móng Cái)	ハイニン(モンカイ)											○	○	○	○	○
Lai Châu	ライチャウ													○	○	○
都市(ville)																
Hà Nội	ハノイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Hải Phòng	ハイフォン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Nam Định	ナムディン														○	○
Hải Dương	ハイズオン															○
計																
省		16	16	19	19	21	21	22	22	24	25	24	22	21	21	23
軍区		4	4	4	4	4	4	3	3	2	2	3	3	4	4	4
都市		2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	4

(出所)Annuaire général de l'Indochine Française 1899: 248-331, 1900: 283, 1901: 852-1077, 1902: 438, 1903: 467, 1904: 472, 1905: 246, 1906: 335, 1907: 330, 1908: 344, 1910: 338, 1911: 348, 1912: 253, 1913: 335, 1914: 369, 1915: 164, 1916: 162, 1917: 158, 1918: 160, 1919: 163, 1920: 172, 1921: 176, 1922: 184, 1923: 191, 1924: 195, 1925: 182, 1926: 184, 1928: 220, 1929: 228, 1930: 244, 1931: 26より筆者作成。

地図 序—1 トンキン行政区分図



(出所) 大塚[2000: 108]に拠る。

表序—2 アンナンの省編成

省名	カタカナ表記	1899	1900	1901	1902-03	1904	1905-06	1907	1908	1910-13	1914	1915-1922	1923	1924-28※
Bình Định	ビンディン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Bình Thuận	ビントゥアン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Đắc Lắc	ダックラック							○	○	○				○
Hà Tĩnh	ハーティン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Haut Donnai	オ・ドンナイ		○	○	○								○	○
Khánh Hòa	カインホア	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Kon Tum	コントゥム						○	○			○	○	○	○
Lang Bian	ランビエン											○		
Lao Bảo	ラオバオ						○							
Nghệ An	ゲアン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Phan Rang	ファンラン				○	○	○	○	○	○			○	○
Phủ Yên	フーイエン	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○
Quảng Bình	クアンビン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Quảng Nam	クアンナム	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Quảng Ngãi	クアンガイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Quảng Trị	クアンチ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Thanh Hóa	タインホア	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Thừa Thiên	トゥアティエン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Tourane	ツアーラン							○						
Vinh	ヴィン													
都市 (ville)														
Tourane	ツアーラン		○	○	○			○(払い下げ)		○	○	○	○	○
Dourane	ドラン	○												
Đà Lạt	ダラット												○	○
Vinh-Bến Thủy	ヴィン-ベントウイ													
Thanh Hoa	タインホア													
Huế	フエ													
Qui Nhon	クイニョン													
計														
省		11	13	13	14	13	16	16	14	14	12	13	15	16
都市		1	1	1	1	0	0	1(払い下げ)	0	1	1	1	2	2

※1927年は欠本のため不明。

(出所) Annuaire général de l'Indochine Française 1899: 343-367, 1900: 389, 1901: 1086-1134, 1902: 515, 1903: 540, 1904: 594, 1905: 288, 1906: 391, 1907: 401, 1908: 491, 1910: 425, 1911: 439, 1912: 442, 1913: 444, 1914: 463, 1915: 236, 1916: 234, 1917: 230, 1918: 233, 1919: 238, 1920: 247, 1921: 250, 1922: 260, 1923: 268, 1924: 274, 1925: 256, 1926: 261, 1928: 308, 1929: 318, 1930: 不明, 1931: 354より筆者作成。

表序—3 コーチシナの省編成

省名	カタカナ表記	1899	1900	1901	1902-06	1907-14※	1915-23	1925-29※	1930-31
Bạc Liêu	バクリエウ	○	○	○	○	○	○	○	○
Bà Rịa	バーリア		○		○	○	○	○	○
Bến Tre	ベンチェー	○	○	○	○	○	○	○	○
Biên Hòa	ビエンホア	○	○	○	○	○	○	○	○
Cần Thơ	カントー	○	○	○	○	○	○	○	○
Châu Đốc	チャウドック	○	○	○	○	○	○	○	○
Chợ Lớn	チョロン	○	○	○	○	○	○	○	○
Gia Định	ザーディン	○	○	○	○	○	○	○	○
Gò Công	ゴーコン		○	○	○	○	区	○	○
Hà Tiên	ハーティエン	○	○	○	○	○	区	○	○
Long Xuyên	ロンスエン	○	○	○	○	○	○	○	○
Mỹ Tho	ミート	○	○	○	○	○	○	○	○
Rạch Giá	ラックザー	○	○	○	○	○	○	○	○
Sa Đéc	サデック	○	○	○	○	○	区	○	○
Sóc Trăng	ソックチャン	○	○	○	○	○	○	○	○
Tân An	タンアン	○	○	○	○	○	○	○	○
Tây Ninh	タイニン	○	○	○	○	○	○	○	○
Thu Dầu Một	トゥーザウモット	○	○	○	○	○	○	○	○
Trà Vinh	チャーヴィン	○	○	○	○	○	○	○	○
Vĩnh Long	ヴィンロン	○	○	○	○	○	○	○	○
Cap Saint Jacques	サンジャック岬	○	○						○
都市(ville)									
Saigon	サイゴン			○	○	○	○	○	○
Chợ Lớn	チョロン			○	○	○	○	○	○
Cap Saint Jacques	サンジャック岬			○	○				
島(île) (Pénitencier)									
Poulo-Condore	プロ・コンドール島			○	○	○	○	○	○
計									
省		19	21	19	20	20	17	20	21
都市				3	3	2	2	2	2
島(île) (Pénitencier)				1	1	1	1	1	1

※1909年および1927年は欠本のため不明。

(出所) Annuaire général de l'Indochine Française 1899: 119-140, 1900: 221, 1901: 685-805, 1902: 333, 1903: 365, 1904: 369, 1905: 184, 1906: 253, 1907: 249, 1908: 259, 1910: 259, 1911: 257, 1912: 159, 1913: 254, 1914: 276, 1915: 99, 1916: 96, 1917: 95, 1918: 99, 1919: 99, 1920: 107, 1921: 111, 1922: 117, 1923: 123, 1924: 125, 1925: 121-122, 1926: 123, 1928: 149, 1929: 155, 1930: 165-166, 1931: 179より筆者作成。

アンナンの行政区分図

出所：Atlas de l'Indochine 1920.

This map shows the administrative divisions of Annam, a region in French Indochina. It is oriented vertically with North at the top. A diagonal line runs from the top left towards the bottom right, separating the northern provinces from the southern ones. The northern provinces, from north to south, are Thanhhoa, Nghean, Hatinh, Quangbinh, Quangtri, Thuanien, Quangnam, and Quangngai. The southern provinces, from south to north, are Binhdin, Kontum, Khanhhoa, Langbin, and Binhthuan. A scale bar at the bottom right indicates 0 to 100km, and a north arrow is located to the right of the map.

0 100km

コーチシナの行政区分図

This map shows the administrative divisions of Cochinchina, a region in French Indochina. It is oriented horizontally with North at the top. A diagonal line runs from the top left towards the bottom right, separating the northern provinces from the southern ones. The northern provinces, from north to south, are Tayninh, Thudumot, Bienhoa, Tanan, Cholon, Baria, Mytha, Gocong, and Gladinh. The southern provinces, from south to north, are Sadeo, Chaudoc, Habien, Longxuyen, Cantho, Vinhlong, Benke, Rachgia, Travinh, Socrang, and Bacieu. A scale bar at the bottom right indicates 0 to 50km, and a north arrow is located to the right of the map.

0 50km

28

(4) トンキン、アンナン、コーチシナの自然環境

① トンキン²⁶

トンキンは面積が約 10 万 5 千平方キロであり、その北端を中国の雲南省、広西省、広東省に、西端をラオスに接している。東側にはトンキン湾が広がり、南は中部ベトナム・アンナンに接するのみである。トンキンは山岳地域と高原・平野地域との二つに大きく分けることができる。山岳地域は西北から東へ広がっており、2000 メートル級の山々が連なる。特にハーザンのタイコンリン山(Tây Công Lĩnh、現在の Tây Côn Lĩnh I、II)、フータカ山(Pou Ta Ka、現在の Phu Tha Ca)、カオバンのピアヤ山(Pia Ya、現在の Phia Đa)、ピアウアック山(Pia Ouac、現在の Pia Oắc、Phia Oắc)、ピアビオック山(Pia Bioc、現在の Phia Bióc)などに代表される。また一つの山脈が西北から東南へ伸びており、その両側を紅河、ダー(Đà)川が流れている。

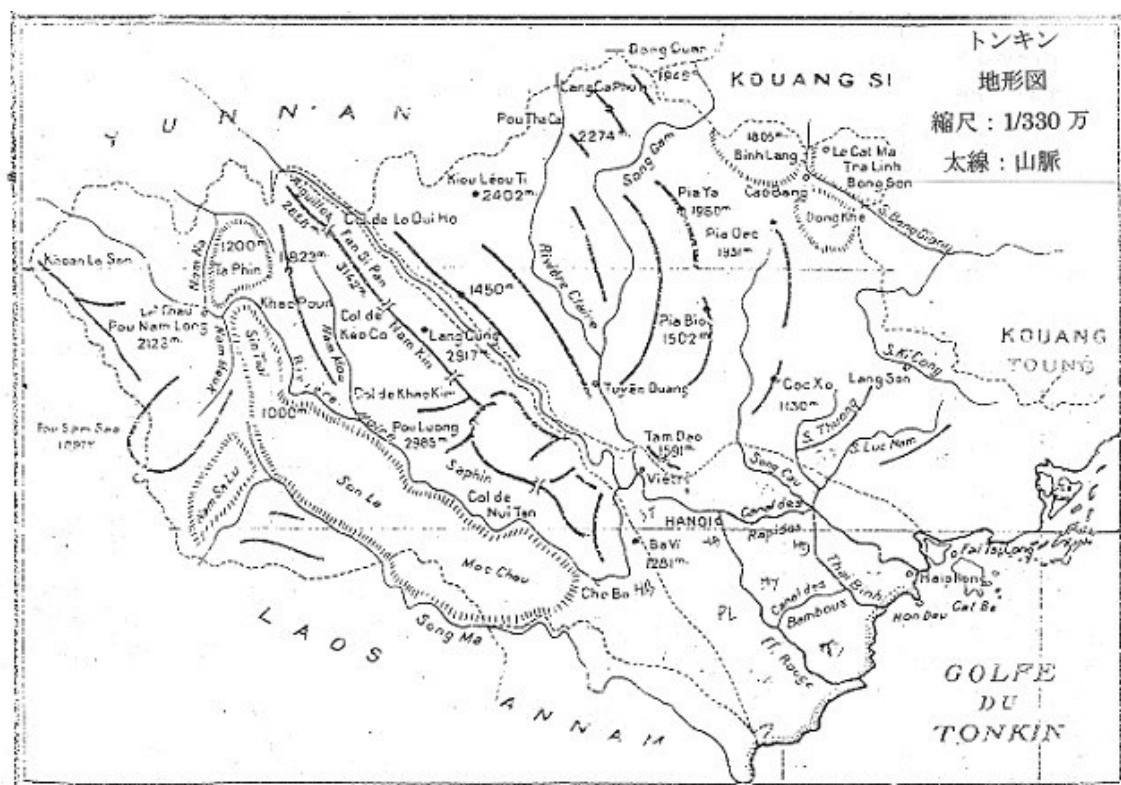
東南地域は徐々に地形が低くなり、ソントイのパビ山(Ba Vi)、ヴィンイエンのタムダオ山(Tham Đảo)、バックザンのイエンテ山(Yên Thế、地図上から判断して現在の Yên Tử山と思われる)といった 1000 メートル級の山が見られる。さらに東南へ進むとヴィンイエン、タイグエン、バックザンの高原地域となり、トンキンデルタへと続く。フートからトンキン湾までの三角形地帯は約 12000 平方キロメートルの肥沃な土地が広がり、耕作に適していた。

トンキンの河川は 2 種類に分類される。1 つは中国側の Tây Giang 川(現在の Chồ Cheng 川)に流れ込む川、つまりキークオン(Kỳ Cùng)川とバンザン(Bằng Giang)川であり、もう 1 つはトンキン湾に流れ込む川、紅河とタイビン(Thá Bình)川とその支流である。タイビン川はファーライ(Phả Lại)から 3 つの細流がひとつになったものである。

紅河は雲南に源流を発し、雲南のマンハオ(Mạn Hảo)からイエンバイまでは川幅も細く、30 もの滝が存在するため、小型船での航行は可能であるが危険がともなう。イエンバイから先は川幅も広がり、船の往来は可能である。紅河の代表的な支流はダーザン(ボー)川(Đà Giang、Bơ、現在のダー(Đà)川)とローザン(タオ)川(Lô Giang、Thảo、現在のロー(Lô)川)であり、ダーザン川はフンホアで、ローザン川はヴェトチーで紅河に合流する。これら 2 つの川も途中多くの滝があり、ダーザン川はチョボー(Chợ Bơ、現在のホアビン湖の入り口付近)までしか船は入れない。その先は丸木舟であれば進めるが、推量の多いときはそれも不可能である。ローザン川はトゥエンクアンへ下れるのみであるが、水かさが少ない時はハーザンまで戻ることができる。ローザン川にはチャイ(Chày)川、ガム(Gâm)川という支流があり、それぞれフードアン(Phủ Đoan、現在の Đoan Hùng)、トゥエンクアンでローザン川に合流する。その他、紅河へ流れ込む川としてダイ(Đay)川、ナムディン川、フーリー(Phủ Lý)川がある。

²⁶ ここでの内容は[Đo Đình Nghiem, Ngo Vi Lien và Pham Van Thu 1927: 4-6]による。

地図 序—3 トンキン地形図



(出所) Bouault[1930 (vol.1): 3]に拠る (凡例日本語訳は筆者)。

②アンナン²⁷

アンナンの全面積は約 15 万平方キロメートルである。

アンナンは極めて山岳の多い土地である。平野は北部の紅河デルタの連なっている辺りに多少広がっているだけである。その他はアンナン山脈に覆われ、シナ海とメコン川との間、上部ラオスよりコーチシナの間に広がっている (地図序—4 参照)。

アンナン山脈は上部ラオスの高原と隣接している。この山脈には 1 千メートルないし 2 千メートルを超える峰もあるが、いくつかの断片が連なって左右の斜面に超すことのできる峠が数カ所ある。その峠の中でアイラオ(Ailao)峠が最も低いもので、それはラオスから海に達する最短道路であり、最も重要な峠である。

その他主に南部に、アンナン山脈が広がり高原となって、一部分ラオスを覆っている。他方において、アンナン山脈は海に隣接しているものもある。その要塞のような地形が、アンナンの全海岸をいくつもの区画に仕切っており、互いの連絡が難しい。

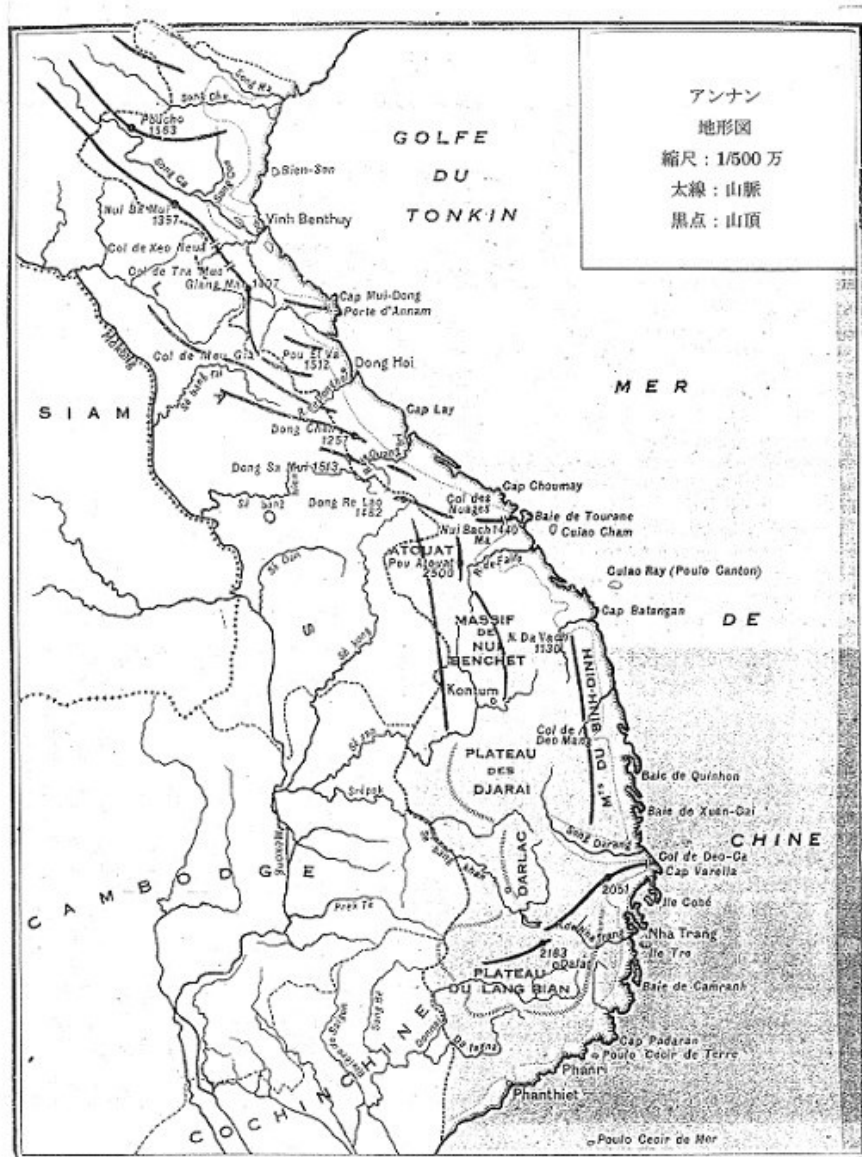
アンナンは多くの河川が流れているが、北方の川を除くとその距離は短い。これはアンナン山脈が分水嶺であるにもかかわらず、非常に海に接近しているからである。

²⁷ ここでの内容はリュッシエ[Russier 1940: 53-57, 68]による。

また、水が極めて浅いため、舟運の便も乏しい。河川は全て山岳地帯の川のように急流に区切られており、河口はまた砂州によって常に途絶されている。これらの水流の主なものは、北より南に向かって列挙するとシュエ(Chu)川、カー(Ca)川、ザン(Giang)川、マー(Ma)川、ドンホイ(Dong Hoi)川、クアンチ(Quang Tri)川、フエ(Hue)川、ツーラン(Tourane)川、カイ(Cai)川、タ・フック(Ta Khuc)川、バー(Ba)川、ニャチャン(Nha Trang)川、ファンラン(Phan Rang)川である。

アンナンの平野は肥沃であるが、全人口を養うにはあまりに矮小である。

地図 序—4 アンナン地形図



(出所) Bouault[1930 (vol.2): 3]に拠る (凡例日本語訳は筆者)。

③コーチシナ²⁸

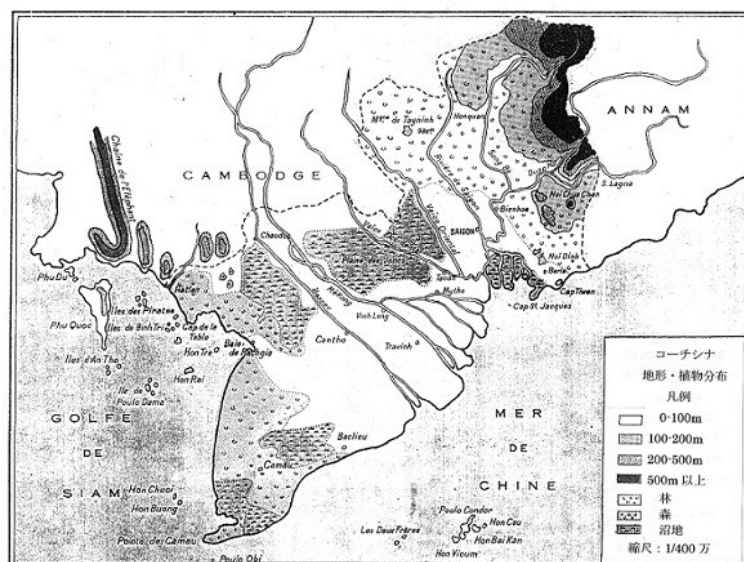
コーチシナの面積は、附属する島を加えて 5 万 6965 平方キロメートルである。

コーチシナはふたつの地域を含んでいる。東部地帯はアンナン山脈最後の支脈が到達しており、タイニンからバーリアに広がっている。西部地帯はデルタ平原によって占められている。

コーチシナの海岸はほとんど V の形になっている。西はカンボジアの山々と接しており、沿岸は非常に屈曲している。この地域には一つも良港というものが無い。島々は海岸からあまりに距離があり、十分に風波を避けることが難しく、海水の深さも大変浅いものである。この地域全体の唯一の港サイゴンは海上から 150 キロメートル以上の距離にある。

コーチシナを貫流する水流は 3 郡を成している。西部および西南部の水路、メコン川およびその支流、ドンナイ川およびその支流である。しかし地勢がこれら 3 郡の間を分割することはなく、相互に容易に交通が行われる。西部の 1 群はバサックの西武南部に若干数の河川があり、ほとんどどれもカーマウの平野から海に注ぐ。中央の 2 郡は全コーチシナを帯のように貫流しているメコン川のふたつの支流（バサック川と前川(Fleuve Anterieur)）とである。第 3 郡となるドンナイ川は水源をアンナンに有している。ドンナイ川からメコン川に、メコン川から西南の河川にまでたくさんの小水路および自然と人工の運河がコーチシナ全体に水路の「大きな網」を広げているようなもので、航行にも灌漑にも非常に貴重である。

地図 序—5 コーチシナ地形図



(出所) Bouault[1930 (vol.3): 3]に拠る（凡例日本語訳は筆者）。

²⁸ ここでの内容はリュッシエ[Russier 1940: 111-115]による。

補論 植民地期におけるベトナム度量衡制度の認識と研究史の現状

補論では、第1に植民地期におけるフランス植民地政権側のベトナム度量衡制度の認識について明らかにするため、インドシナ地域を対象として発行された官製年報（次節参照）における度量衡制度に関する項目の変遷をまとめる。第2に、これまでの研究史の中で扱われていた度量衡制度について、長さ、面積、容積、重量ごとにその事例を比較検討し、ベトナムにおける度量衡制度がどのように認識されているのか、また現状での研究史の問題点を具体的に明らかにする。

ここで補論が必要となるのは、度量衡制度の本格的な研究がいまだ進んでいないこと（序、第2節「研究史」参照）、なかでも度量衡に関する認識が、各文献、資料で異なっている現状とその理由や問題点が体系的に論じられていないことによる。この点について、つまり研究史の中で度量衡の統一的な見解が見られない、文献資料によってその理解が様々に異なっていることはハイ[Phan Thanh Hải 2003: 319]やダウ[Nguyễn Đình Đầu 1978a: 65]によっても指摘されている。しかし、度量衡に関する記述の典拠が示されていない文献資料が多く、こうした違い、齟齬が生じる原因について、体系的に事例を収集し比較検討された研究は、管見の及ぶところまだ見られない。そこで、同時代史料として多くの研究者が参照したであろう官製年報と度量衡の専論、および代表的な社会経済史研究の中で度量衡について言及が見られるものを集め、比較検討することで度量衡研究が抱える現状、問題点を浮き彫りに出来ると考える。

これらを整理することなくして、本論の課題の位置づけや意義を明確に示すことは難しい。また、本論第2部では、トンキン各省における度量衡運用の実態についての膨大な報告書を扱うことになる。その中で一般的なものはもちろん、よく知られていない度量衡の単位名も数多く出てくる。これらの報告書における度量衡に関する記述を、一般的に認識されている制度と相対化し、把握・検討する意味でも補論の役割は大きい。そもそも現状では、度量衡制度史研究において統一の見解が示されていない中、なにが「一般的」か、ということすら不明確である。

もう一点、度量衡に関しての個別具体的な事例や描写は、様々な学問分野の史資料、あるいは小説、新聞雑誌の中で目にすることがある。しかし、現段階ではそこで出会った単位の特徴や属している系統、メートル系での換算量などを把握することが容易ではない。

この補論は、研究史上の混乱を標準化し、提示することが目的ではない。だが、こうした幅広く体系的な資料整理と比較検討は、分野を超えて、あらゆる史資料中の度量衡の理解を深めることに、少なからず貢献できると考えている。

以上から、本論で実際に一次資料中の度量衡の事例を扱うことと平行して、補論において政府刊行物である年報と研究史の中での認識、事例を整理する。

第1節 インドシナにおける官製年報の中の度量衡制度

(1) インドシナにおける官製年報の概要

本論が対象とするのは、基本的にはインドシナ官製年報（*Annuaire de l'Indochine*、以下 AI と併記）およびインドシナ官製総年報（*Annuaire Général de l'Indochine française*、以下 AGI と併記）であるが、前継、後継の年報を含めて、年代によってタイトルと構成が変わっている。まず、その変遷と概要について整理したい。

1865 年から仏領インドシナ連邦が成立した翌年の 1888 年まで、コーチシナ官製年報（*Annuaire de la Cochinchine française*）が発行され、これがインドシナ官製年報の前身である。1889 年から 1897 年までインドシナ官製年報（AI）が地域別の 2 部構成（第 1 部：コーチシナおよびカンボジア、第 2 部：アンナンおよびトンキン）で分冊・発行されている。1899 年以降 1925 年まではインドシナ官製総年報（AGI）となる。このインドシナ官製総年報（AGI）は、基本的に 1905 年から行政部、商業部（あるいは商・工業部）の 2 部構成として分冊されている。1925 年以降は、インドシナ官製行政年報（*Annuaire administratif de l'Indochine*、以下 AAI と併記）となり、行政部分のみの発行となり、1943 年まで続いた²⁹。

本論が対象とする官製年報は、仏領インドシナ連邦が成立してからベトナム民主共和国が独立を宣言した 1945 年まで、つまり年代で区切るとインドシナ官製年報（AI）とインドシナ官製総年報（AGI）およびインドシナ官製行政年報（AAI）となる。しかし、度量衡の項目が掲載されているのはインドシナ官製年報（AI）とインドシナ官製総年報（AGI）のみであるため、分析対象となるのはこの 2 つの官製年報となる³⁰。

官製年報は他にも存在するが³¹、本論が取り上げた一連の官製年報は、発行されていた期間が長く、現在でも閲覧できる冊数がもっとも充実しているものの一つである。対象地域や対象分野（行政組織、商業、工業など）も広く、フランスによるインドシナ度量衡の一般的な理解や位置づけを把握するのに適しており、インドシナの情報源として 当時のみならず、後生の多くの人々にも用いられていたと思われる。具体的な内容としては、インドシナ総督府、地方行政、各省における行政の組織、人事（職名、人名、階級）が詳細に示されている。また、大企業家、商人、実業家の名前と住所のり

²⁹ ここで述べた官報の変遷は、実際に閲覧した資料の状況と、『フランス公文書館および図書館におけるアジア・オセアニア歴史資料 1 公文書館』[Commission française du Guide des sources de l'histoire des nations 1981 : 461]、およびフランス国家図書館 Gallica デジタルライブラリー (<http://gallica.bnf.fr/>) を総合してまとめた。

³⁰ インドシナ官製行政年報（AAI）では、度量衡の項目が割愛されているが、これは度量衡に限ったことではなく、商業、工業に関する内容のほとんどが割愛されている。インドシナ官製総年報（AGI）が行政年報と名を改めるのが 1926 年である。当時の時代背景として、本国の第一次世界大戦による損害、全植民地におけるインドシナの相対的優先度の低さ、インドシナ総督府の財政的困窮といった要因があり、そのため発行される官製年報も必要最低限の行政関係資料に対象を絞ったと考えられる。

³¹ インドシナ経済年報（*Annuaire économique de l'Indochine*）など。

スト、主要都市の通り名リスト、経済・産業、度量衡、通貨、鉄道、水運など商工業やインドシナでの生活に必要な様々な情報が掲載されており、各省ごとの地図付の地誌が見られる年までである。

以上から、官製年報に着目して度量衡の項目を分析することで、同一発行物において度量衡制度の認識がどのように変化していったか、を客観的に、長期間観察することが可能となる。

筆者が閲覧したインドシナ官製年報 (AI) およびインドシナ官製総年報 (AGI) は、1962-1965 年にニューヨーク公共図書館 (NYPL) が作成したマイクロフィルム 1887-1933 年 (京都大学東南アジア研究所図書室所蔵) と、ベトナムにある国家第一文書館、国家図書館、社会科学通信院図書館に所蔵されている原本の一部である。ベトナム国家図書館には 1911 年版が、国家第一文書館には 1878 年から 1925 年版が、社会科学通信院図書館には 1892 年から 1925 年版が所蔵されていた。後続のインドシナ行政年報 (AAI) については、上記のインドシナ官製総年報マイクロフィルム後半部に収録されていた 1926-1933 年版、東京大学東洋文化研究所図書室 1939-1940 年版と近年フランス国立図書館のホームページ上で、こうした官報の一部が閲覧できるようになり、そこから 1934 年-1937 年版を調査した。

官製年報は、上記で述べたように分冊されている年と、1 冊しか発行されていない年がある。分冊されていても、それぞれに第 1 部、第 2 部とタイトルがついていない年もあり、1 冊しか発行されていない年でも内容が行政のみにとどまっている場合もある。そのため、欠本している場合、それが資料の欠損によるものか、第 1 部、あるいは第 2 部にあたるどちらかしか発行されていないのか、判断が難しい。本論で扱うインドシナの各官製年報は、前述した複数機関での調査をあわせて出来るだけ欠本を補うよう努めたが、依然として所在を確認できない年に関しては、発行の有無の確認が取れないものも含めて、便宜上「欠本」として扱う。

(2) 官製年報における度量衡制度

本論が対象とする官製年報では、基本的に 1924 年まで各年度度量衡制度の紹介が見られる。それらは内容により 7 種類に分類でき、年代別にタイトルを挙げると以下のようになる (7 種類の項目の全訳は巻末の付録 1 に掲載した)。

① 現地度量衡覚え書き (Note sur les Poids et mesures indigènes.) (1887-1891 年) ³²

② アンナン度量衡 (Poids et mesures Annamites) (1890-1897 年) ³³

³² インドシナ官製年報 (AI) 1887 年第 2 部 p.242-244、1889 年第 1 部 p.399-401、1890 年第 2 部 p.1235-1236、1891 年第 2 部 p.207-208。1888 年は欠本、1890 年以降はタイトルが「現地度量衡(Poids et mesures indigène)」に変更されたが、内容は同じ。1892 年第 2 部は度量衡に関する記事が見当たらなかった。

- ③ 現地度量衡 (Poids et mesures indgène) (1893-1897 年) ³⁴
- ④ 現地度量衡 (Poids et mesures indgène) (1899-1901 年) ³⁵
- ⑤ 度量衡 (Poids et mesures) (現地の人々の取引の中で用いられていた地方制度)
(1905-1907 年) ³⁶
- ⑥ アンナン法定度量衡制度 (Système legal des poids et mesures Annamites)
(1910-1912 年) ³⁷
- ⑦ 度量衡・アンナンの制度 (Poids et mesures, Systeme Annamites) (1914-1924 年) ³⁸

上記の分類で、①、②、③の年代が重なっているのは、インドシナ年報 (AI) の 1887 年から 1897 年にかけて第 2 部 (アンナン・トンキン) の中に「現地度量衡」 (内容は 1892 年以前と 1893 年以降で異なるため①と③に分類されている) が掲載されているのと平行して、1890 年から 1897 年には第 1 部 (コーチシナ・カンボジア) の中で「アンナンの度量衡」という記事が見られるためである。第 1 部の中でも 1889 年のみ①と同様の項目が見られた。

つまり、①、②、③ではコーチシナとカンボジアを対象とした第 1 部では「アンナン (Annnan)」「現地 (indigènes)」、トンキンとアンナンを対象とした第 2 部では「現地」という用語がタイトルに見られる。④以下では、年報の構成が変更され各年 1 冊の場合と、行政部と商業部に分けて 2 部構成分冊発行されている場合があるが、地域別の構成ではない。その中で、年代によって同じく「アンナン」と「現地」、という 2 種の用語がタイトルにある場合と、「現地の人々 (indigènes) の取引の中で用いられていた」とされている場合がある。

仏領インドシナ連邦の中でも用語上「現地」と「アンナン」という分類があり、前者が仏領インドシナ連邦一般、後者が阮朝の制度を対象として項目を設けているように

³³ インドシナ官製年報 1890 年第 1 部 p.37-38、1891 年第 1 部 p.38-40、1892 年第 1 部欠本、1893 年第 1 部 p.42-43、1894 年第 1 部 p.42、1895 年第 1 部 p.42、1896 年第 1 部 p.42、1897 年第 1 部 p.45。

³⁴ インドシナ官製年報 1893 年第 2 部 p.LXXXIV-LXXXV、1894 年第 2 部 p.405-406、1895 年第 2 部 p.461-462、1896 年第 2 部 p.498-499、1897 年第 2 部 p.634-635。

³⁵ インドシナ官製年報 1899 年商業部 p.516-517、1900 年商業部 p.511、1901 年 p.658-661。

³⁶ 特にタイトルではないが、最初に文章で「現地の人々の取引の中で使われていた地方制度 (現在使われていない)」として紹介されている。インドシナ官製総年報 (AGI) 1905 年 p.434-438、1906 年欠本、1907 年第 2 部 p.87-91。

³⁷ インドシナ官製総年報 (AGI) 1910 年商業・工業部 p.53-57、1911 年商業・工業部 p.29-33、1912 年商業・工業部 p.11-15。

³⁸ インドシナ官製総年報 (AGI) 1914 年商業・工業部 p.9-12、1915 年商業・工業部欠本、1916 年商業・工業部欠本、1917 年商業・工業部 p.8-11、1918 年商業・工業部 p.8-11、1919 年商業・工業部 p.8-11、1920 年商業・工業部 p.8-11、1921 年商業・工業部欠本、1922 年商業・工業部 p.8-11、1923 年商業・工業部 p.8-11、1924 年商業・工業部 p.8-11、1925 年商業・工業部掲載なし、1926 年商業・工業部欠本、1927 年欠本、1928 年欠本、1929-1933 年、分冊無く全て一冊：度量衡制度記事掲載なし

見える。さらにタイトルの変遷だけ見ると、次第に「現地」の紹介が無くなり、植民地期に同時に存在していた阮朝の制度のみを紹介するようになった。それだけ一般にはフランスが導入したメートル法が普及したため、「現地」固有の制度の紹介が省略されたかのようにも見られる。しかし、内容を詳しく比較していくと、これらの官製年報の中で用いられている「現地」「アンナン」の用語の定義、使い分け方自体に疑問を持たざるを得ない。

用語の使い分けについて詳しく述べるのは、この不明瞭な用語の用い方が、研究史上の混乱にも影響している可能性があるからである。ここで、タイトルの中の「現地」「アンナン」という単語について、その対象となる地域を考えてみたい。まず、①、③、④で「現地」と訳した単語、“*indigènes*”は、特に植民地についての現地人（土着民）を指す言葉である。つまりここではカンボジア、ラオスを含む仏領インドシナ連邦全域のインドシナ3国を指すものと考えられるが、地域別にラオス、カンボジアについて触れられているのは④のなかの1900、1901年および⑤のみである。それらは、ラオス語、カンボジア語、ベトナム語それぞれの度量衡単位名と制度の概要を示している。一方で、①、③および④のなかの1899年は、タイトルに「現地」と銘打たれているものの、実際は度量衡単位名がすべてベトナム語であり、つまりベトナムの度量衡制度の紹介にとどまっている³⁹。

次に「アンナン」については、⑥で「アンナンの法定度量衡制度」と書かれていることから考えても阮朝のことを指しているものと考えられるが、内容から判断して、「アンナン」と「現地」との区分けが明確ではない。詳しくは次項以下で検討するが、「現地度量衡」として紹介されているものと、「アンナンの度量衡」として紹介されている制度がほぼ同じである。内容から判断すると、その多くは現在のベトナム領（トンキン、アンナン、コーチシナ）を指しているものと思われ、「アンナン」と「ベトナム

（*Vietnamien*）」が同義で使われている、あるいはその区別が曖昧なまま用いられている可能性が高い。特に「現地」が阮朝の制度を示していることは、誤解が生じやすい原因になるだろう。

例えば、「アンナン」が阮朝を指すと理解する場合がある一方で、トンキン、アンナン、コーチシナの3つの地域の中の「アンナン」、つまり中部と理解してしまう場合も否定できない。タイトルに「現地」と入っている①、③、④では、いずれかの箇所で阮朝の皇帝による度量衡制度の説明を付している部分があるため、全体に目を通すと阮朝を指していると認識できるが、一部しか参照していない場合は誤解が生じる可能性がある。さらに、阮朝の公式の度量衡と、実際に民間で慣習的に用いられていた度量

³⁹ 1900年から1907年にかけて、ラオスとカンボジアの度量衡についても触れられているにもかかわらず、その後は省略され、ベトナムのものだけに限定された理由は不明であるが、おそらく人口比、面積比、良港の有無、経済規模からみても、インドシナ3国の中で優先度が低かったこと、ラオス、カンボジアの制度もベトナムと同様複雑で、把握が難しかったこと、などが要因として考えられる。

衡は異なっていたことが知られている。そうした前提の上にこれらのタイトルをみると、「アンナン」＝公式、「現地」＝慣習と理解してしまうことも考えられる。

官製年報を複数年にわたって参照すれば、これら用語の厳密性について考慮することもできるが、多くの場合参照するのは一冊、あるいは数冊にとどまるであろうから、それも難しい。

こうした年によって異なる「現地」「アンナン」のあいまいな用語の使い方が、研究史における地域区分の不明瞭さ、誤解にもつながっているように感じる（本章第2節で詳述）。

官製年報における仏領インドシナ連邦内での度量衡に関する地域性の認識についても、はっきりしていない。ラオスとカンボジアの紹介が1900年からの7年を除いて省略されていることは先に述べた。その他トンキン、アンナン、コーチシナについても、その地域ごとに、あるいは省ごとに度量衡制度が異なっていたことは、①と⑤でも指摘されている。しかし、こうした地域差が反映された地域別の構成をとっていた度量衡の項目は、⑤のみである。その⑤も、重量単位ピクルに関してはアンナン・トンキンに限った事例を紹介しているが、それ以外はトンキン、アンナン、コーチシナと3つの地域名を列記し、同一の制度を示すにとどまっている。

最後に、⑥と⑦に関して、奇妙な点を数点指摘したい。まず、⑥と⑦は構成が異なるだけで、その内容は一字一句同じである。しかし、その構成は⑥が正しく、⑦はわざわざ間違った配置に変更されている。例えば、⑥では重量単位は項目の最後に配置され、表と説明文が掲載されている。しかし⑦では、重量単位は項目の最初に配置されているが、移動しているのは表のみで、説明文は最後（容積単位の説明部分）に置かれたままになっている。また、⑦では面積単位の表の次に、体積単位の表がひとつ再配置されている。2次元の面積単位と立方の体積単位で、マウ、サオ、ミエン、タン、オーといった共通の単位名が示されていることから、誤って異なる単位系統を同一のものと判断し、表を移動させた可能性がある（補論第1節「(5)体積単位」及び付録1-6、1-7参照）。

また、この⑥と⑦には、面積単位の部分で測量した面積の換算例として、その方法や計算式を示した箇所があるが、その手順が中途半場な箇所が終わっている。さらに「以上の2つの表から」と書かれているところでも、その前部分には1つの表しか存在しない（補論第1節「(4)面積単位」及び付録1-6、1-7参照）。

筆者はこのインドシナ官製総年報（AGI）の⑥、⑦の項目と全く同一の史料を『トンキンの多様性』[Souvignat 1903: 443-458]の中に発見した。この『トンキンの多様性』第18章「アンナンの公式度量衡制度」は、⑥及び⑦で掲載されている箇所と同一の部分があるだけでなく、年報で中途半端に省略された部分も含まれており、換算例や図解史料など内容が大変充実しており、管見の及ぶところもとても詳細なものである。

この『トンキンの多様性』も典拠を明らかにしていないため、現段階では詳細は不明であるが、2つの可能性が考えられる。ひとつは、官製総年報（AGI）と『トンキンの多様性』それぞれが参照した同一の政府資料などがあり、その一部を官製年報が、全体を『トンキンの多様性』が引用した可能性、もうひとつは、官製年報がこの『トンキンの多様性』から一部引用した可能性である。

いずれにしても、こうした誤りは内容を理解していた、あるいはフランス語の読解能力があれば避けられたものであり、度量衡の項目作成を担当したスタッフが、少なくとも度量衡に関して専門家ではなかったことがうかがえる。⑦のように誤りがある項目を、1914-1924年の10年間にわたって掲載を続けたことから、積極的に度量衡に関して情報収集、研究が行われていたとは考えにくい。

以上、1887年から1924年までの官製年報における度量衡の項目について整理した。度・量・衡それぞれに関する比較検討は次節以降で行うが、ここまでの検討では、官製年報上では度量衡全般の理解のみならず、インドシナ3国、またトンキン、アンナン、コーチシナそれぞれの度量衡の地域性についての理解はいっこうに進展していなかった、といえるだろう。

(3) 官製年報における度量衡関連法

ここでは、度量衡関連法に関わる記述についてまとめたい。まず①では、アンナンの度量衡制度は全て嘉隆通宝の直径に基づいて決められているが、登録されている原器はない。さらに、法定の制度が守られていない地方色の強い度量衡制度の使用が、正確な長さ、重量単位の決定を難しくしている、と指摘している。度量衡が省と省の間でも異なっているという地域差に関する指摘は⑤でもみられ、これまで度量衡制度確立のため何度も行政的な試みが繰り返された、とある。こうした地域差に関する記述は、①と⑤の他には見られない。

③、④、⑤では、嗣徳帝による度量衡に関する制度改革が示されている。内容は、嘉隆通宝を基準とする度量衡制度は嗣徳25年（1872年）に廃止され、同時に3つのトゥオック（thước）の原器が造られ、それらはアンナン政府によって保管されている、としている。

フランス側の法令に関しては、④が1897年7月2日の総督による布告について触れており、⑤では1903年7月10日に公布（1904年1月1日より施行）されたインドシナ全域に適用される度量衡の全文を掲載している（上記の法整備については第1章第2節「阮朝（1802-1945年）による度量衡関連法」および第3節「フランス植民地政権による度量衡関連法」参照）。

(4) 長さの単位

長さの単位に関する法制度については、先に述べたように、③、④、⑤が嗣徳25年（1872年）に皇帝の決定により新たに3つのトゥオックの原器がつくられ、阮朝によ

って保管、それらの呼称、値、派生する単位も規定されている、と示されている。実際この改革の有無については疑問があるが、詳しくは第1章第2節「阮朝による度量衡関連法」で総合的に検討しているため、ここでは官製年報上の記述の整理にとどめる。フランス植民地政権による法律として④が1897年の布告について、⑤が1904年1月1日から施行された度量衡法について挙げている。

1897年の布告では、商取引、土地の収用、土地取引についてトンキンにおけるアンナン尺の長さを0.4メートル、マウを3600平方メートルと定め、金属製の0.4メートルの原器は各省の法務局が保持するよう決められた。

1904年1月1日から施行された度量衡法は、各単位の相当量、計測器具、計量検定、違反者への罰則など、植民地期でもっとも体系的に定められた法律であるが(第1部第1章第3節「フランス植民地政権による度量衡関連法」参照)、⑤ではこの法律の全文も掲載している。

次に、基準となる単位トゥオック(thước)について、①と②ではトゥオック・モック(thước mộc)とトゥオック・ヴァイ(thước vải)の2種類、③、④、⑤ではトゥオック・ド・ズオン(thước đo ruộng)が加わり、あわせて3種類のトゥオックが紹介されている。この③以降に追加されたトゥオック・ド・ズオンは、土地の面積を測る尺であり、税の徴収にも関係する重要なものであるにもかかわらず、把握されるのが遅かった点は興味深い。また、③と⑤では、これら3種類のトゥオックの漢越語(官木尺、官縫尺、官田尺)が追加されている。阮朝の公式文書では漢越語が使用されることから、現地語が先、正式名称が後の理解となっていることも指摘しておく。

以下、この3つのトゥオックについて、その種類と官製年報の分類ごとにまとめる。

まず、トゥオック・モックについて整理したものが、表補—1である。

表補—1 官製年報におけるトゥオック・モック (単位: メートル)

	単位名	ベトナム語 表記	相当量	① 1887-1892年	② 1890-1897年	③④⑤ 1893-1907年
対象地域				現地	アンナン	現地
倍量単位	チュオン	Trượng	10 トゥオック	4.204(1)	4.24	4.25
	ゲー、タム	Ngũ, Tầm	5 トゥオック	2.12	2.12	2.125
基本単位	トゥオック	Thước	10 タック	0.424	0.424	0.425
分量単位	タック	Tắc	10 ファン	0.0424	0.0424	0.425
	ファン	Phân	10 リー	0.00424	0.00424	0.00425
	リー	Ly	10 ハオ	0.000424	0.000424	0.000425

注: ①-⑤は本文中で示した度量衡に関する記事の分類番号であり、年代は掲載年である。

(1): 4.24の誤記だと思われる。

(出所) インドシナ官製年報 (Annuaire de l'Indochine Française) 1887年第2部p.243、1890年第1部p.37、1893年第2部p.LXXXIV、インドシナ官製総年報 (Annuaire général de l'Indochine Française) 1899年p.516、1907年p.90より筆者作成

トゥオック・ヴァイが大きい尺なのに対してトゥオック・モックは小さい尺で、嘉隆通宝 18 個分の直径の長さに値する[①、③、④、⑤]。

法定のトゥオック・モックは 0.424 メートルであるが、嘉隆通宝 18 個分の直径を入念に計測すると 0.434 メートルとなる。トゥオック・モックは特に全ての木造、石造、土造などの建築物と船舶の計測に用いられる、とあるが、特に①は「コーチシナでは」と限定している。また、同じく①ではトンキンにおいてはトゥオック・モックは区別なく、不明瞭に用いられていたと述べている。トゥオック・モックの地域性について、①の他には地域性に言及したものは見られない。

表補一 1 を見てみると、基準となるトゥオックが①と②では 0.424m、③、④、⑤が 0.425m で 1cm、チュオンにすると 10cm の誤差が見て取れるが、倍量、分量単位の制度も同一であり、大きな違いは見られない。

表補一 2 官製年報におけるトゥオック・ヴァイ (単位：メートル)

	単位名	ベトナム語 表記	相当量	① 1887-1892年	② 1890-1897年	③ 1893-1897年	④⑤ 1899-1901年
対象地域				現地	アンナン	現地	現地
倍量単位	チュオン チャウ	Trượng Chau	10 トウオック 10 トウオック(ママ)③	6.44 -	6.44 -	6.44(1) -	6.44(2) 3.22
基本単位	トゥオック	Thước	10 タック	0.644	0.644	0.644	0.644
分量単位	タック ファン	Tắc Phân	10 ファン 10 リー	0.0644 0.00644	0.0644 0.00644	0.0644 0.00644	0.0644 0.00644

注：①-⑤は本文中で示した度量衡に関する記事の分類番号であり、年代は掲載年である。

(1): 単位名はズオン(Duong)となっている。

(2): 単位名はズオック(Duoc)となっている。

(3): 相当する長さからみて、5トゥオックの誤記であろう。

(出所) インドシナ官製年報 (Annuaire de l'Indochine) 1887年第2部p.244、1890年第1部p.37、1893年第2部p.LXXXV、
インドシナ官製総年報 (Annuaire général de l'Indochine Française) 1899年p.516-517、1907年p.90より筆者作成

次にトゥオック・ヴァイであるが、織物用の大きい尺であり (ヴァイは「布」の意味)、トゥオック・マイ(thước may)とも呼ばれる[①、②、③、④、⑤]。その長さについては、嘉隆通宝 30 個分の直径にあたるとしているものと[②、③、④、⑤]、1 と 518/1000 トウオック・モックにあたるとしているもの[①]がある。メートル系に換算した長さは、0.644m である。

表補一 2 では、①から⑤を通じてメートル系換算の長さも一貫して同じ数値を示している。⑤に限って、トゥオック・ヴァイの倍量単位としてチャウ(Chau)が追加され、相当量は 5 トウオック⁴⁰でちょうどチュオンの半量となっている。

⁴⁰ 10 トウオックとなっているが換算値から考えて 5 トウオックの誤りであろう

最後に、トゥオック・ド・ズオンであるが、先に述べたように③から項目に追加されている。そのため年代別の比較が出来ないが、その長さはトゥオック・モックより4.5cm 長い0.47m とされている。

表補—3 官製年報におけるトゥオック・ド・ズオン（単位：メートル）

	単位名	ベトナム語 表記	相当量	① 1887-1892年	② 1890-1897年	③④⑤ 1893-1907年
対象地域				現地	アンナン	現地
倍量単位	チュオン ゲー、タム	Trượng Ngũ, Tăm	10 トウオック 5 トウオック	-	-	4.7 2.35
基本単位	トゥオック	Thước	10 タック	-	-	0.47
分量単位	タック	Tắc	10 ファン	-	-	0.047
	ファン	Phân	10 リー	-	-	0.0047
	リー	Ly	10 ハオ	-	-	0.00047

注：①-⑤は本文中で示した度量衡に関する記事の分類番号であり、年代は掲載年である。

(出所) インドシナ官製年報 (Annuaire général de l'Indo-Chine Française) 1893年第2部p.LXXXIV、
1899年p.516、1907年p.90より筆者作成

3種類のトゥオックを比較してみると、相当する長さはそれぞれ異なるものの、トゥオックを基準として展開する倍量、分量単位の制度は、トゥオック・ヴァイがその系統の中にゲーとタムがなく、代わりにチャウという単位が存在することを除けば、共通していることがわかる。

⑥と⑦は、これまでと異なり、1897年および1904年施行された度量衡法に則った制度が紹介されている。長さの単位をまとめると表補—4となる。

表補—4 官製総年報 1910-1924 年における一般的な長さの単位

	単位名	ベトナム語 表記	換算値	
			ベトナム度量衡制度	メートル系(m)
倍量単位	チュウオン ゲー	Trượng Ngũ	10 トウオック 5 トウオック	4 2
基本単位	トゥオック	Thước (xích)	10 タック	0.4
分量単位	タック	Tắc	10 ファン	0.04
	ファン	Phân	10 リー	0.004
	リー	Ly	10 ハオ	0.0004
	ハオ	Hào	10 ティー	0.00004
	ティー	Ti	10 ホット	0.000004
	ホット	Hốt	10 ヴィ(Vi)	0.0000004

(出所) インドシナ官製総年報 (Annuaire général de l'Indo-Chine Française)

1911年商業・工業部p.30より筆者作成

表補—4 で示した分量単位の最小単位、ホット以下にも、ヴィー(vi)、ティエム(tiêm)、サー(sa)、チャン(trân)が十進法で展開する。

次に、長さの単位としてトゥオック以外にも、道程用の単位が①、②、⑥、⑦で、地理・天文学用の単位が⑥、⑦で取り上げられている。共通している道程用の単位はリー (ly) とザムの2種類であり、①、②ではザムは俗称とされている。このザムは、①では dăm、②では dang、⑥と⑦では răm と表記が一貫しない。これらは、ベトナム北部の発音ではそれぞれザム(dăm)、ザン(dang)、ザム(răm)で音が似ている。そのため、聞き間違いによる表記の誤りか、あるいは音はあっても、一般的に用いる単位ではないためその表記法が周知されておらず、記入者の裁量によって異なっているか、どちらかの可能性がある。ただ、ベトナム人であれば最後の音が m か ng かは聞き分けられるはずであり、前者の可能性の方が高いと考えられる。

こうした表記の不一致はタックでも生じている。タックは tác と表記するが、④と⑤では全てタット(tát)となっている。やはりベトナム人にとって語末の c と t の違いは明らかであり、聞き間違いによる誤記と思われる。

道程単位のリー、あるいはザムであり、①と②ではその長さは 444.44m とされていたが、⑥と⑦では 720m とかなり異なっている。また、⑥と⑦ではボ(bộ)、あるいはグー(ngũ)も道程単位とされ、長さは5 トゥオック、つまり 2m としている。

地理・天文学の単位として⑥、⑦に挙げられているのは、道程単位と同じリーとボであり、長さも同様に 720m と 2m である。独自のものとしてド(độ)という単位名も示されており、これは 250 リー、約 120km とかなり長い。

(5) 面積単位

面積測量的ために用いられる尺は、トゥオック・ド・ズオン(長さの単位)であるが、その長さは②では 1.1 トゥオック・モック、③-⑤では 0.47m としている。表補—5 を見ると、①ではトゥオック・ヴァイが長さ測定の基準に用いられ、一単位あたりの相当面積もかなり大きく計算されている。しかし、本節「(4)長さの単位」でも述べたとおり、トゥオック・ヴァイは布、織物の長さを測るためのものであり、①ではまだトゥオック・ド・ズオンが把握されていなかった。そのため理解が不十分であった作成者によって、トゥオック・ヴァイを用いて計算され、メートル系の換算値が実際とは異なる数値となったのだろう。

表補—5 官製年報における面積単位（単位：アール）

単位名	ベトナム語 表記	相当量	① 1887-1892年	② 1890-1897年	③④⑤ 1893-1907年	⑥⑦(1) 1910-1924年
対象地域			現地	アンナン	現地	アンナン
基準尺			トゥオック・ヴァイ	トゥオック・ズオン(2)	トゥオック・ド・ズオン	種別なし
マウ	Mẫu	10サオ	62.25	48.944016	49.7025	36
サオ	Sào	15トゥオック	6.225	4.8944916	4.97025	3.6
トゥオック	Thước	10タック	0.41115	0.3262934	0.33135	0.24
タック	Tắc	10ファン	0.04115	0.03262934	0.03315	0.02
ファン	Phân	6リー	0.00414	0.003262934	0.0033135	0.0024
リー	Ly	1 平方ガン	-	-	-	0.00004

注：①-⑦は本文中で示した度量衡に関する記事の分類番号であり、年代は掲載年である。

(1):公式面積単位とされており、以下の単位に漢越語も併記されている(サオ:カオ(Cao)、トゥオック:スィック(Xich)、タック:トン(Thôn))

(2):②においてはトゥオック・ド・ズオンではなく、トゥオック・ズオンと書かれている。

(出所) インドシナ官製年報(Annuaire de l'Indochine) 1887年第2部p.244、1890年第1部p.37、1893年第2部p.LXXXV、

インドシナ官製総年報(Annuaire général de l'Indo-Chine Française) 1899年p.517、1907年p.91、1911年商業・工業部p.31、

1917年商業部p.9より筆者作成

これら面積を出すときの計算式は以下の通りである[③、④、⑤]。

- ・マウ：150 トゥオック・ド・ズオン平方
- ・サオ：9 グーあるいはタム×10 グー
- ・トゥオック：2 グー×3 グー

上記の計算で使われるタム、グーはトゥオック・ド・ズオン系統のものである（表3参照）。

⑤では、1897年6月2日の布告について触れられている。商取引、土地の収用、土地取引についてトンキンにおけるアンナン尺の長さを0.4メートル、マウを3600平方メートルと定めたとし、インドシナにおける3地域では、この面積を測る精度が同様に存在している、とある。トンキンのみならず、3つの地域も同様の制度があるとしたのは、1904年1月1日以降、インドシナ全域でこの面積単位も含めた全般的な法律が施行されており、そのことを指していると思われる。⑥と⑦では、この法律に沿った面積単位の系統が、公式単位として示されている（表補—5参照）。この中で、公式には中国語（漢越語）による表現が好まれるとし、漢越語の音をアルファベット表記したものも併記されている（漢字の併記はない）（表補—5注(1)参照）。

ここで②のアンナンでは、1マウが48.9アールと記載されていることから、「アンナン」という言葉はベトナムの慣習を指していることになる。一方で⑥⑦においては1マウは36アールと記載しており、これは総督府が1897年にアレテで規定した1トゥオック=0.4メートル（主に北部）を基準として計算されている。つまり、同じ「アンナン」という単語が使われていても、想定している対象が異なっており、使い分けが明瞭ではないことが、ここからも指摘できる。

この他、⑥、⑦で一般の面積単位とされるものが紹介されている（表補—6参照）

表補－6 官製総年報 1910-1924 年における一般の面積単位

	単位名	ベトナム語 表記	換算値	
			ベトナム度量衡制度	メートル系
倍量単位	マウ	Mẫu	10 サオ	36アール(3600m ²)
	サオ	Sào	10 ミエン	3.6アール(360m ²)
	ミエン	Miêng	9 タン	0.36アール(36m ²)
基本単位	タン	Thân	25 ゲー	0.04アール(4m ²)
分量単位	ゲー、オー、カン	Ghê, Ô, Khâu	1 平方トゥオック あるいは4平方ガン	0.16m ²
	ガン	Gang	－	0.04m ²

(出所) インドシナ官製総年報 (Annuaire général de l'Indo-Chine Française) 1911年商業・工業部p.30より筆者作成

表補－6によると、この系統の基本単位はタンであり、そこから倍量、分量単位と展開している。しかし、マウとサオについては、トゥオックを基本とする公式面積単位と共通しており、相当面積も同じである。

これら一般の面積測量のために用いられる計算式は、以下の通りである[⑥⑦]。

マウ：30 グー×30 グー＝900 タン、3600 m²

サオ：30 グー×3 グー(あるいは 10 グー×9 グー)＝90 タン、360 m²

ミエン：3 グー×3 グー＝9 タン、36 m²

タン：1 グー×1 グー＝1 タン、1 m²(ママ)

ゲー：1 トゥオック×1 トゥオック＝1 平方トゥオック、4 平方ガン (0.16 m²)

ガン：5 タック×5 タック＝1 平方ガン

この計算式から、サオは長方形で、マウの幅が同じで、奥行きが 3 グーの面積となる。他の単位は全て正方形を形作っている[⑥⑦]。

実際の測量とこれら単位系統への換算方法も、以下のように具体的に示されている。

*****面積測定と単位換算方法*****

タンが基本となる単位であるため、面積測量の際はまずタンへ換算することが必要となる。その後、マウ、サオ、ミエンなどの各単位へ変換する。

1. グー、タンへの換算

まず、ゲーで縦と横をはかり、平方ゲー、あるいは平方タンを出した後、次の方法でマウ、サオ、ミエンへと変換する。

2. タンの倍量単位（マウ、サオ、ミエン）と分量単位（ガン、ゲー）への換算

マウ、サオ、ミエンはそれぞれ 900、90、9 タンであるので、1 で出したタンの数を 9 で割って、マウ、サオ、ミエンを出し、余ったタンは残しておく。ガンに関しては、4 ガンで 1 ゲーであるので、4 で割る。

<例 1>

縦 87 グー7 ガン、横 83 グー9 ガンの土地の場合

1. タンとガンを掛け合わせる： $87.7 \times 83.9 = 7190.23$ (7190 タン 23 ガン)

以上までが、⑥と⑦に掲載されている部分である。しかし、これでは例 1 で取り上げられた計算が最後まで示されていない。本節「(2)官製年報における度量衡制度」で述べたように、この⑥、⑦と図表、構成、説明文すべて全く同一の史料が『トンキンの多様性』[Souvignet 1903: 443-458]にもみられ、こちらは最後まで計算式がのせられているだけでなく、2 例目の計算式まで示されている。上記例 1 の計算式の続きのみを、『トンキンの多様性』[Souvignet 1903: 447-448]に依拠して以下に表わす。

2. タンをマウ、サオ、ミエンに変換する： $7190.23 \div 9 = 798$ (7 マウ 9 サオ 8 ミエン)

3. ガンをゲーに変換する： $23 \div 4 = 5$ (5 ゲー、余りは 3 ガン)

4. 結果：7 マウ 9 サオ 8 ミエン 5 ゲー 3 ガン

また、⑦では表補—6 と同様の表の後に、「以上 2 つの表から」とは始めている。しかし、その部分の前には表は 1 つしか存在していない。『トンキンの多様性』には、表補—6 の後に、面積単位を図解した表がある[Souvignet 1903: 446]。

(6) 体積単位

体積単位について言及されているのは⑥と⑦のみであり、その単位体系が以下の表補—7 にまとめられている。単位名及びその体系が、面積単位と全く同じであるため（表補—6 参照）、これらの単位名を目にしたときは面積単位か体積単位か、常に注意を払う必要がある。

⑥と⑦では、内容は全く同じだが、その配置が変更されており、⑥の方が正しく、⑦が間違っている点は指摘した（本節「(2)官製年報における度量衡制度」参照）。⑥ではこの表補—7 に示した部分が体積単位の説明部分に収まっているが、⑦では面積単位の部分に挿入されてしまっている。その配置ミスの原因も、こうした面積と体積が同名同制度であったためと考えられる。

表補—7 官製総年報 1910-1924 年における体積単位

単位名	ベトナム語 表記	計算式		換算値
		ベトナム度量衡制度	メートル系	メートル系
マウ	Mẫu	1トウオック×30グー×30グー	$60 \text{ m}^2 \times 0.4$	1400 m^3
サオ	Sào	1トウオック×10グー×9グー	$20 \times 18 \times 0.4$	144 m^3
ミエン	Miêng	1トウオック×3グー×3グー	$6 \times 6 \times 0.4$	14.4 m^3
タン	Than	1トウオック×1グー×1グー	$2 \times 2 \times 0.4$	1.6 m^3
オー	Ô	1トウオックの3乗	$0.4 \times 0.4 \times 0.4$	0.064 m^3

(出所) インドシナ官製総年報 (Annuaire général de l'Indo-Chine Française) 1911年商業・工業部p.32より筆者作成

その他、主に木材や石といった固体物の体積は、通常表補—8で示されているホック、レーやライで表わされる。

表補—8 官製総年報 1910-1924 年における固体物の体積単位

単位名	ベトナム語 表記	計算式	換算値	
			ベトナム度量衡制度	メートル系
ホック	Hộc	縦10グー、幅1グー、高さ1トゥオック =20m×2m×0.4m	10レー	16立方メートル
レー	Lê	縦、幅1グー、高さ1トゥオック =2m×0.4m	25ライ	1.6立方メートル
ライ	Lai	1トゥオック立方=0.4×0.4×0.4m	1トゥオック平方	0.064立方メートル

(出所) インドシナ官製総年報 (Annuaire général de l'Indo-Chine Française) 1911年商業・工業部p.31より筆者作成

(7) 容積単位

①から⑤にかけては、共通の系統を持つ制度が挙げられている。それらをまとめたものが、表補—9である。③から⑤では、これらはアンナンの公式制度であるとしている。

表補—9 官製年報における容積単位

単位名	ベトナム語 表記	①② 1887-1897年		③④⑤(2) 1893-1907年	
対象地域		①現地②アンナン		現地	
		相当量	リットル	相当量	リットル
ホック	Hộc	2ヴオン	76.226	2ヴオン、26タン	76.226
フォン、ヴオン、ザ	Phương, Vương, Già	13タン	38.114	13タン	38.113
タン	Thăng	10ハップ	2.932	10カップ	2.932
バット	Bát	—	1.2704	2オアン	2.5408
オアン	Óan	—	1.2704	—	1.2704
ウィエン	Uyên	—	—	—	1.2704
ハップ、カップ(1)	Hạp, Cáp	10トゥオック	0.2932	10トゥオック	0.2932
トゥオック	Thước	—	0.02935	—	0.02932

注:①-⑤は本文中で示した度量衡に関する記事の分類番号であり、年代は掲載年である。

(1):①②ではハップ、③④⑤ではカップになっている。

(2):公式制度とされている。

(出所) インドシナ官製年報 (Annuaire de l'Indo-Chine) 1887年第2部p.244、1890年第1部p.37、1893年第2部p.LXXXVI、インドシナ官製総年報 (Annuaire général de l'Indochine Française) 1899年p.517、1907年p.90より筆者作成

表補—9を見ると、①-⑤にかけて、ほぼ同じ制度が紹介されているが、バットの相当量だけ③-⑤が①と②の倍量となっている。ウィエンも③以降で追加された単位名である。

米、もみ、穀物の売買には、ダウ(dâu)、オ(ô)、タウ(tau)⁴¹、アン(an)、ザ(gia)もあり⁴²、これらは商業の取引においては区別なく用いられ、規定もない[③④]。

⑤では、コーチシナに関しての法令が紹介されている。それによると、1863年に穀物用のアンナンの容積単位ヴォン(vuông)が40リットルと定められた。1881年には、フランス式の度量衡制度の使用がサイゴンとチョロン地区で義務化され、またその後新しい法令によって商取引において穀物の計量は10、20、40リットルの単位が導入された。

次に、⑥と⑦で紹介されている公式容積単位（穀物納税用）は、表補—10になる。基本単位はタンであり、表補—9と比較すると共通しているのはホック、タン、カップ、トゥオック(Thước)である。これらの単位を用いた相当量（ホック=26タン、タン=10カップ、カップ=10トゥオック）は共通しているが、そのメートル系換算値が表補—9ではホック 76.226リットルが、表補—10では60リットルと大きく異なっている。

表補—10 官製総年報 1910-1924 年における公式容積単位（穀物納税用）

	単位名	ベトナム語 表記	換算値	
			ベトナム度量衡制度	メートル系
倍量単位	ホック(1)	Hộc	26 タン	約60リットル
基本単位	タン	Thăng	10カップ	約2リットル
分量単位	カップ	Cáp	10トゥオック	-
	トゥオック	Thước	10サオ	-
	サオ	Sao	10トアット	-
	トアット	Toát	10クエ	-
	クエ	Quê	6トゥック	-
	トゥック	Túc	-	-

(1):ホックは立方トゥオックであり、約0.064立方メートルである。

(出所) インドシナ官製総年報 (Annuaire général de l'Indo-Chine Française) 1911年
商業・工業部p.32より筆者作成

⑥、⑦では、一般的に使われていた容積単位について、ダウを基本とする系統も示されている（表補—11 参照）。

⁴¹ ③ではタウが挙げられているが、④ではタウは削除されている。

⁴² ここで挙げたダウ、オ、タウ、アン、ザの声調記号は AGI のママ。ダウは *đâu*、アンは *ang*、ザは *gia* のことと思われる。ザについては本章第 2 節[4]容積単位参照のこと。

表補—11 官製総年報 1910-1924 年における一般的な容積単位

	単位名	ベトナム語 表記	換算値	
			ベトナム度量衡制度	メートル系
倍量単位	フォン、ヴォン(1) トゥン	Phuong, Vuông Thùng	約30ダウ 約20ダウ	約30リットル 約20リットル
基本単位	ダウ	Đầu	2バットあるいは10レー	約1リットル
分量単位	バット レー	Bát Lê	5レー 1/10ダウ	約1/2リットル 1デシリットル

(1)これら単位の他にガット(gat)も使われる。

(出所)インドシナ官製総年報(Annuaire général de l'Indo-Chine Française)1911年商業・工業部p.32より筆者作成

さらに、米に関わる容積単位として、表補—12 が挙げられているが、これらの単位はすでに使われていないとされている[⑥⑦]。

表補—12 官製総年報 1910-1924 年における米に関わる容積単位

単位名	ベトナム語 表記	換算値	
		ベトナム度量衡制度	メートル系
フォン ウィエン	Phuong Uyên	30ウィエン 1ダウ	約30リットル 約1リットル

(出所)インドシナ官製総年報(Annuaire général de l'Indo-Chine Française)

1911年商業・工業部p.33より筆者作成

上記で整理したのは、主に固形物を計量する容積単位であったが、⑥、⑦では液体計量に使われる容積単位についての言及も見られる。液体の容積単位は、法的な原器によっているものではなく、それぞれの単位が異なる相当量を示す場合も頻繁であるとして、体系的な制度は提示されていない。その代わり、以下のような13の単位名の列記にとどまっている。a)からc)は、油の計量に用いられる。

- | | |
|-------------------------|------------------|
| a) カウ(câu) : 約 20 リットル | h) ロ(lọ) |
| b) ダイ(đài) : 約 2 リットル | i) ポ(pot)、フー(hũ) |
| c) ガオ(gáo) : 約 1/2 リットル | j) ナム(nằm) |
| d) チュム(chum)、キエウ(kiêu) | k) ナイ(nai) |
| e) コン(cong)、ヴォー(vò) | l) ベ(be) |
| f) ヴァイ(vại) | m) バット(bát) |
| g) チン(chính) | |

(8) 重量単位

重量単位に関しては、3つの種類のピクル(picul)あるいはタ(ta)の存在が指摘されている。共通しているのは45貫銭と50貫銭のピクルである。この45貫銭のピクルは、④では阮朝によって導入されている、つまり公式のものとされるが、①では塩用、⑤ではアンナンとトンキンの公式ピクル(60kg)としている。次に、50貫銭のピクルは、①は薪、鉄用、④と⑤は商取引で使われるとある。

もう一つのピクルは、①では42.5貫銭(米、もみ用)、④で42貫銭(商取引用)、⑤では43貫銭で同じく商取引用とされ、貫銭の数、重さがそれぞれ異なっている⁴³。

⑤には、カンボジアとラオスのピクルについての紹介も見られる。カンボジアでは1ピクル=40貫銭(60kg)、国家管理のピクル(picul de régie)は60.4kg、ラオスのピクル(ハップ：hap)は60kgであった。

⑥、⑦では、主要な単位はタ(ta)で、重量のあるものに用いられ、中程度のものにはカン(cân)が、軽量のものにはラン(lạng)が使われる。ラン、あるいはオンス(once)は、仏中協定のあと37.783125グラムに相当する基本単位とみなされているが、アンナンでは一般的には約39グラム、としている。

表補—13 官製総年報における重量単位

単位名	ベトナム語 表記	相当量	① 1887-1892年	② 1890-1897年	③④⑤ 1893-1907年	⑥⑦ 1910-1924年
タ	Tạ	10 イエン	60.4kg	61.28kg	60.4kg	60.45kg
イエン	Yến	10カン	-	-	6.04kg	6.045kg
カン	Cân	16ラン	0.604kg	0.6128kg	0.604kg(1)	604.5g
ルオン、ラン	Lượng, Lạng	10ドン	37.750g	38.3g	37.750g	37.783125g(2)
ドン、ティエン	Đông, Tiên	10ファン	3.775g	3.83g	3.775g	3.778g
ファン	Phân	10リー	0.3775g	0.383g	0.3775g	0.377g
リー	Ly	10ハオ	-	-	-	0.0377g
ハオ	Hào	10ティ	-	-	-	0.00377g
ティ	Ti	10ホット	-	-	-	0.000377g
ホット	Hốt	10ヴィ	-	-	-	0.0000377g
ヴィ	Vi	10ティエム	-	-	-	0.00000377g

注：①-⑦は本文中で示した度量衡に関する記事の分類番号であり、年代は掲載年である。

(1)④では、カン=17ラン=0.704と記載されているが、これは16ラン、0.604の誤記であると考えられる。

(2)⑥⑦では、ランが重量単位の基準単位となっている。

(出所) インドシナ官製年報 (Annuaire de l'Indo-Chine) 1887年第2部p.244、1890年第1部p.38、
1893年第2部p.LXXXV、インドシナ官製総年報 (Annuaire général de l'Indochine Française) 1899年p.517、
1907年p.89、1911年商業・工業部p.33、1917年商業部p.8より筆者作成

⁴³ この3つのピクル以外にも、①ではコーチシナにおける玄米用のピクルは60.7kg、脱穀米のピクルは68kg(これらはおそらく、精米した際に出るもみがらなどのロスを見積もったもので、精米すれば60.7kgに帰着するものである)があり、一方公式ピクル、あるいはヨーロッパ人によって運営されている企業体では、アンナン人あるいは中国人との取引においてピクルは60.4kg、などの紹介がみられる。

⑥、⑦では、ヴィ以下には十進法によって区分されたティエム(tiêm)、サー(sa)、チャン(trần)、ズィエウ(diêu)、マック(mạc)、アイ(ai)、トゥアン(tuần)、トゥアン(tuần)、トゥ(tu)があるが、トゥは小数点以下にゼロが 14 続く単位であり、中国の分厚いめがねをとおしてさえ目に見えないだろう、と紹介されている。さらに重量単位として次のものが挙げられている。

タ(tạ)、ピクル(picul)

ークァン(quân)、13 リーブル(livre)

ービン(bình)、14 リーブル

ーカン(cân)、リーブル

ーラン(lạng)、オンス(once)

ーズォック(duốc)、1/2 オンス

ーチ(tri)、シシリーク(sicilique)

ートゥー(thù)、スクリュピュル(scrupule)。

第 2 節 研究史の中の度量衡

ここでは、これまでの代表的な度量衡に係する研究上での、それぞれの度量衡単位の理解、認識をまとめる。ここで対象とする研究は、度量衡についての専論（「序研究史」で取り上げた研究）及び、度量衡に関して独立して章、項目を設けて論じているものとする。各単位名やその用いられ方についての断片的な記述は、様々な文献史料中に出てくるが、それを全て集めることは際限のない作業である⁴⁴。さらに、度量衡制度の全体像が明確に把握されていない現状を考えると、現段階では度量衡についてまとまって論じている文献資料をまず対象とすることが必要だと思われる。その他、補足する必要のあるところは、適宜フランス植民地期のベトナム研究において重要な文献資料からも説明を加えていきたい。

この補論第 2 節は補論第 1 節と合わせて、これまでの度量衡研究の抱える問題点を明らかにすることに加えて、第 2 章から第 4 章で使われるベトナム国家文書館で収集した一次史料の中の事例を理解する際の足がかりにもなる。また植民地期ベトナムに関する様々な分野の文献資料中にちりばめられている断片的な記述に対する理解の比較軸やよりどころともなる。

対象とする研究は、以下の通りである。

⁴⁴ こうした同一単位名でも互いに異なる相当量、長さを示す事例は、グエン・ディン・ダウ [Nguyễn Đình Đầu 1978a/1978b]、グエン・トゥン [Nguyễn Tùng 2008]、シュライナー [Schreiner 1901] の中で様々な文献から引用し、紹介されている。しかし、これらの事例は、当時の度量衡単位が統一されていなかった状況を指摘するにとどまり、そこから見える問題点や度量衡研究の方法論についての言及は明確に示されていない。

①度量衡の専論

- ・グエン・ディン・ダウ「往昔のベトナム度量衡問題への貢献」[Nguyễn Đình Đầu 1978a/1978b] (以下、ダウと略記)⁴⁵。
- ・ファン・タン・ハイ「阮朝期の尺度制度」[Phan Thanh Hải 2003a] (以下、ハイ)。
- ・グエン・フイとルイス・ジャック・ドレス「地方におけるベトナムの度量衡」[Nguyễn Huy et Louis Jacques Dorais. 2008] (以下、フイとドレス)。
- ・グエン・トゥン「ひとつの植民地化から他の植民地化へ：ベトナムにおける度量衡の2つの基準」[Nguyễn Tùng 2008] (以下、トゥン)。

※中川武氏が研究代表者を務める「ヴィエトナム/フエ・阮朝王宮の復元的研究」(序「研究史」及び注2参照)、及びフィン・ティ・ビック・ニャンの「フエ宮廷古物博物館における銅製度量衡用具」など、個別の計量器の実測調査についての研究については、該当箇所適宜取り上げる。

②その他

- ・アベル・デ・ミシェル『コーチシナダイアログ』[Des Michels 1871: 201-203] (以下、ミシェル)。
- ・イヴ・アンリ『仏領印度支那の農業経済』[Henry 1932: 13-15、 17]⁴⁶ (以下、アンリ)。
- ・レ・タイン・コイ『ベトナム歴史と文明』[Lê Thánh Khôi 1955: 531-532]⁴⁷ (以下、コイ)。
- ・アルフレッド・シュライナー『フランス侵略前のコーチシナ低地のアンナン制度』[Schreiner 1901: 240-255] (以下、シュライナー)。
- ・E・スヴィネ『トンキンの多様性』[Souvignet 1903: 443-445] (以下、スヴィネ)。
- ・ドー・バン『阮朝におけるベトナムの経済と商業』[Đỗ Bang 1997: 16-21] (以下、バン)。
- ・ピエール・パスキエ『アンナンの昔日』[Pasquier 1930: 264-269] (以下、パスキエ)。
- ・ヒュー・ゴック (編)『ベトナム古伝文化事典』[Hữu Ngọc (chủ biên) 1995: 240、251-253] (以下、ゴック)。

⁴⁵ この論文に掲載されている1単位あたりの換算値は、ダウが標準化して提示した数値も含む(詳しくは序、「第2節 研究史 (1)度量衡の専論」参照)。

⁴⁶ 度量衡制度は3つの地域(トンキン、アンナン、コーチシナ)に分けて紹介されている。ここで紹介されているトンキンの度量衡制度はインドシナ官製総年報1922年版から、アンナンの度量衡制度はパスキエ[Pasquier 1930: 264-269]から引用されているため、本論ではアンリの文献についてはコーチシナの度量衡制度部分のみ取り上げる。

⁴⁷ 1981年出版の『ベトナム史』の中でも、ここで取り上げる同様の度量衡単位表が掲載されている[Lê Thánh Khôi 1981: 403-404]。

(1) 長さの単位

①長さの一般系統

長さの基本となる単位はトゥオックであり、それを基準として表補—14 のように展開していく。

表補—14 長さの一般系統

	単位名	ベトナム語 表記	漢字表記	換算値
				ベトナム度量衡制度
倍量単位	チュウオン	Trượng	丈	10 トゥオック
	グーあるいはタム	Ngũ/Tám	伍/尋	5 トゥオック
基本単位	トゥオック	Thước (xích)	尺	10 タック
分量単位	タック	Tấc	寸	10 ファン
	ファン	Phân	分	10 リー
	リー	Ly	厘	10 ハオ
	ハオ	Hào	毫	10 ティー
	ティー	Ti	忽	10 ホット
	ホット	Hốt	絲	10 ヴィ(Vi/微)

(出所)[Đỗ Bang 1997: 17][Phan Thanh Hải 2003a: 324]より筆者作成。

※ドーバンによると、倍量単位のタムはタン(tân)と表記されているが、タムの誤記だと思われる。

これはいずれの文献でもほぼ同様に扱われている⁴⁸。タム⁴⁹（グー）以外は十進法で展開し、一般的にはトゥオックの次はチュオンを使い、グーはほとんど使われない[Đỗ Bang 1997: 18] [Lê Thánh Khôi 1955: 531]。一方で、タムは阮朝初期に歴史書の中で非常によく使われていたが、明命 13 年（1831 年）以降見られなくなった[Phan Thanh Hải 2003a: 323]⁵⁰。

タムとグーは同一の単位であるが、呼称の違いは地域差からきており、トンキンでタムのことをグーと呼んでいた[Schreiner 1901: 243]。チュオンは、堤防や城壁の周囲の測量に用いられる単位で、日常ではあまり見られない[Nguyễn Tùng 2008: 442]

表補—14 以外の単位では、ド(độ)とリー(lý)、ザム(dặm)がある。これは主に天文学、地理で用いられる単位であり、ハイによるとこれらの単位はトゥオック・ズオン（後述）の中に分類されるため、詳しくは以下「②トゥオック・ズオン」の中で整理する。

⁴⁸ バンとパスキエはチュオンからリー[Đỗ Bang 1997: 17][Pasquier 1930: 265]、ゴックはチュオンからティ[Hữu Ngọc (chủ biên) 1995: 252]、ハイはチュオンからティ[Phan Thanh Hải 2003a: 324]、コイと「ベトナムの地方における度量衡」ではチュオンからファンまで[Nguyễn Huy et Dorais 2008: 459] [Lê Thánh Khôi 1955: 531]、スヴィネはチャウからホットまで[Souvignnet 1903: 443]を紹介している。ダウはヴィ以下、ティエム(tiêm)、サー(sa)、チャン(trần)も 10 進法で展開していくと述べている[Nguyễn Đình Đầu 1978a: 68]。パスキエでは、タック(tắc)がタット(tát)と表記されている。AGI でも④と⑤で tát とされている。しかし、パスキエと AGI では、嘉隆通宝の長さが一致しないことから、パスキエはこの AGI を参照して tát と表記したとは考えにくい。

⁴⁹ パスキエ[Pasquier 1930: 265]とバン[Đỗ Bang 1997: 16]ではタン(tân)と表記されている。

⁵⁰ このタムについては、後述するトゥオック・キンのタムのことだとハイが指摘している。

アンリは、3つの地域（トンキン、アンナン、コーチシナ）に分けてそれぞれの制度として紹介している。トンキンについては、基本的に AGI の 1922 年版を要約して掲載しているが、長さについてはメートル法換算値が AGI とは数値が異なる。挙げられているのは表補—15 の通りである。表補—15 中の「法定」とは、保護領になる際に 0.4 メートルと制定されたとあり（1897 年 6 月 2 日のアレテを指していると思われる）、その数値を基にしている。「慣用」については、嘉隆帝時代の値は約 0.425m と定められたことを基準としているが、これは AGI の 1922 年版の数値とも違い、その根拠は明らかにされていない[Henry 1932: 13、15]。

表補—15 トンキンにおける長さの単位

単位名	ベトナム語 表記	相当量	メートル法換算値(m)	
			法定	慣用
チュオン	Trượng	10 トウオック	4	4.25
ゲー、タン	Ngũ, Tan	5 トウオック	2	2.125
トウオック	Thước	10 タック	0.4	0.425
タック	Tắc	10 ファン	0.04	0.0425
ファン	Phân	10 リー	0.004	0.00425
リー※	Ly	10 ハオ	0.0004	0.000425

※リー以下には十進法で以下の単位が続く。ハオ、ティ、ホット、ヴィ、ティエン、サー、チャン。チャンは一粒の粉塵に相当する。
(出所)[Henry 1932: 13]より筆者作成。

アンナンの度量衡についてはパスキエに依っているため割愛する。コーチシナについてはメートル法が次第に広く採用されつつあるとした上で、従来のアンナン式度量衡はタム=8 ピエ(pieds)=2.25m と紹介している[Henry 1932: 17]。

ここで重要なことは、トウオックは大きく分けて 3 種類あり、それぞれの種類で 1 トウオックの長さが異なってくる。この 3 種類の違いについて十分に言及しているのはコイ、トゥン、バン、ハイ、パスキエ、ダウ、清末ほか[2004: 586]のみである。なかでもハイは、この 3 種の違いを詳細に検討している。

一方で、ゴックはそのうち 1 種類（トウオック・モック）を、シュライナーは 2 種類（トウオック・モックとトウオック・ヴァイ）、コーチシナ農工業委員会では名称は明記せず、2 種類のトウオックがあることのみを紹介している[Comité Agricole et Industriel de la Cochinchine 1878: 199]。

この 3 つのトウオックは以下の通りである[Phan Thanh Hải 2003a: 322-327]。

- 1) トウオック・モック(thước mộc)/ トウオック・ター(thước ta)
- 2) トウオック・ズオン(thước ruộng) /
トウオック・ドー・ズオン・ダット(thước đo ruộng đất)
- 3) トウオック・ド・ヴァイ(thước đo vải) / トウオック・マイ(thước may)

こうした3種類の尺ができた背景には、阮朝が商業関係、納税といった用途別に3つの単位を導入したためであり、その原器は工部が保管している[Pasquier 1930: 265]。阮朝の原器、官尺と思われる螺鈿細工がほどこされた尺は、ハノイ歴史博物館に収蔵されている(写真補—1 参照)⁵¹。

写真補—1 ハノイ歴史博物館 官尺
(2009年12月16日筆者撮影)

以下、種類別に整理する。

② トウオック・モック

トウオック・モックは、トウオック・ターや官木尺(*quan mộc xích*)、木尺(*mộc xích*)とも呼ばれ[Phan Thanh Hải 2003a: 322]、一般的には大工職人(建具職人、家具職人、船大工も含む)が使うため、あるいは地図作成、城壁建設、家の基礎、川の掘削、武器の製作、美術品にも使われる尺と理解されている[松波 1994: 58][Hữu Ngọc (chủ biên)

1995: 252]。パスキエは木、竹の計測のため[Pasquier 1930: 265]、コーチシナ農工業委員会は布以外の全てのものを量る尺(特にトンキン)[*comité Agricole et Industriel de la Cochinchine* 1878: 199]として紹介している。

阮朝では、公式トウオックは嘉隆通宝を18枚並べた長さ⁵²で、これがトウオック・モックであるとしていることから[Schreiner 1901: 242][Vallot 1897: 180]、トウオックのなかでも最も公式的、一般的な尺であるといえる。長さと嘉隆通宝の関係についてはパスキエも触れているが、パスキエは22枚並べた長さだとしており[Pasquier 1930: 265]、矛盾が生じる。インドシナ官製年報でも嘉隆通宝18枚の長さとしており、パスキエは何に依拠して22枚としたのかは不明である。

トウオック・モックは、1898年以降にトウオック・ズオンと一本化され、トウオック・ター(*thước ta*)=0.4メートルに統一された[Phan Thanh Hải 2003a: 322][Hồ Tuấn Dung



⁵¹ 官尺はホーチミン歴史博物館とフエ宮廷古物博物館にも収蔵されており(筆者未見)、ハノイ歴史博物館とあわせて3博物館において所蔵されている5本の官尺については清末[2002]に詳しい。フエ宮廷古物博物館収蔵の尺については、ハイも実地調査の報告がある[Phan Thanh Hải 2003a]。この官尺は4面それぞれに異なる種類のトウオックが示されている。

⁵² この通宝の数は、AGIでも18個分となっているが、シュライナーも史料によって異なっていることを指摘している[Schreiner 1901: 242]。

2003: 48]。トゥオック・モックのメートル法に換算した長さについては、文献によって以下のように違いが見られる⁵³。

- ・ 1 トゥオック・モック=0.425m：バン[Đỗ Bang 1997: 17]、パスキエ[Pasquier 1930: 265]、アンリ[Henry 1932: 15]
- ・ 1 トゥオック・モック=0.424m：ハイ[Phan Thanh Hải 2003a: 322]
- ・ 1 トゥオック・モック=0.4m：ハイ（1898 年以降のトゥオック・モック）[Phan Thanh Hải 2003a: 322]
- ・ 1 トゥオック・モック=0.42m：フィとドレス[Nguyễn Huy et Dorais 2008: 459]、スヴィネ[Souvignet 1903: 444]、コイ[Lê Thánh Khôi 1955: 531]

しかし、このトゥオック・モックは、ハイによるとさらに様々な用途別に種類がさらに細分化されており、複雑な尺であるとも言及している。それは大きく 3 つのタイプに分かれる[Phan Thanh Hải 2003a: 324]。

a) 長さを測る尺

柱、垂木、間（仕切り）、軒、道の長さ、地域間の距離などを測量するトゥオックで、最も普及しているためトゥオック・キン(thước kinh)とも呼ばれる。阮朝のトゥオック・キンは初期では約 42.4cm—42.5cm であった。1898 年 1 月 1 日以降にトゥオック・ズオンと一緒に 40cm に統一されたトゥオック・モックは、このトゥオック・キンのことである。

b) 技術的専門尺

この尺は、大工がその作業の過程で用いる専門の尺であり、腋尺(写真補—2 参照)、釘尺など様々な種類がある。松波や中川らの研究で報告されている建設に関わる尺のほとんどは、この専門尺に分類される⁵⁴。

⁵³ 清末ほか[2002: 529]は、阮朝の官尺を実測調査しているが、それによると、ハノイ歴史博物館所蔵の官尺 a (a、b、c の 3 本) の一側面は 0.421 メートル、他側面は 0.419 メートル、官尺 b (官木尺) は 0.422 メートル、ホーチミン歴史博物館所蔵官尺 (官木尺) は 0.426 メートルであった。

⁵⁴ 腋尺についての詳しい報告は、林ほか[2005]、レほか[2006][2007b]、林・中川[2010]がある。北部において用いられるトゥオック・サーム(thước sàm、L 字型の尺で仕口の製作や架溝調整に使う)についてはレほか[2007a]が詳しい。また、大工が柱に仕口、継手などの接合部を刻む際に必要な間竿(トゥオック・タム/thước tâm, トゥオック・ムック/thước mực, コン・カーン/con cán)については、中沢ほか[2000]が、ホイアンの大工道具の中の尺については松波[1994]がある。

写真補—2 屋根勾配の決定に用いる腋尺
(2008年2月20日フエ、フオン・チャ(Huong Tra)県、
フオン・ホー(Huong Hồ)社、ロン・ホー(Lóng Hồ)
村にて筆者撮影。)

c) 風水信仰に用いられる尺

観念や使い方によっても異なるため、とても複雑な尺である。代表的なのは、伝統建築において主要な寸法を決定する際、その吉凶判断の手段として使われる魯盤尺⁵⁵である。これは上記 b)の技術的専門尺の性格も帯びている。



② トゥオック・ズオン

田尺(*điền xích*)、度田尺(*độ điền xích*)とも呼ばれる。

阮朝のトゥオック・ズオンは黎朝時代に発していると考えられる。1669年からダンチョンでは地簿を作成していたが、その時用いられていたのがトゥオック・ズオンであった可能性がある。1806年嘉隆5年に全国で土地測量単位統一のため、中平尺(*Trung Bình xích*)を定め、1810年まで適用された。1810年以降は阮朝のトゥオック・ズオンは黎朝時代の田尺と同じであり、47cmであった。当時の1マウは正方形で一辺が150トゥオックであったので、4970 m²となる。この田尺は1867年まで全国で用いられた。南部はフランスによりメートル法が適用された。1897年総督ドゥメールの決定により、1898年1月1日より北部では1トゥオック=0.4mになった一方、中部では田尺は阮朝終焉までつかわれ、現在でも中部ではこの田尺が使われることがある[Phan Thanh Hải 2003a: 323]。

このトゥオック・ズオンは、文献によって以下のようにメートル法での長さが紹介されている⁵⁶。

・1トゥオック・ズオン=0.47m：バン[Đỗ Bang 1997: 17]、パスキエ[Pasquier 1930: 265]、[Vallot 1897: 180]。

⁵⁵ 魯盤尺については、清末ほか[2004]と中沢ほか[1996]が、その具体的な使い方について詳しく報告している。

⁵⁶ 清末ほか[2002: 529]の実測調査によると、ハノイ歴史博物館所蔵官尺 b の一側面に度田尺があり、それは0.402メートル、ホーチミン市歴史博物館所蔵官尺の官田尺面は0.32メートルであった。

・1 トウオック・ズオン=0.4m : スヴィネ[Souvignet 1903 :444]、 フィとドレス[Nguyễn Huy et Dorais 2008: 459]

・1 トウオック・ズオン=0.48726m : [Des Michels 1871: 202]

これ以外の単位として、ド(độ)とリー(lý)、ザム(dặm)がある⁵⁷。ドは最も長い単位で、天文学あるいは地理で用いられ、その相当する長さは1 ド=250 リー=約 120km である [Hữu Ngọc (chủ biên) 1995: 252][Nguyễn Tùng 2008: 442-443] [Lê Thánh Khôi 1955: 531] [Souvignet 1903: 444]。リー(lý)はもともと中国から来た単位であり、その俗称(つまりベトナム語名)がザムである [Schreiner 1901: 243]⁵⁸。リーとザムの具体的な長さについては、1 リー=180 チュオン[Nguyễn Tùng 2008: 443]、あるいは1 リー=360 ボ(bộ)=720 メートル、1 ボ=5 トウオック=2 メートル[Souvignet 1903: 444] [Nguyễn Huy et Dorais 2008: 459] [Lê Thánh Khôi 1955: 531]とされている。つまり、これは1897年1 トウオックが 0.4 メートルに規定された数値で換算していることになる。

南部の 1871 年の事例としては、デ・ミッシェルがザムとリーは 1 ザム=888 メートル、5 ザム=4.444 メートル、1 リー=444 メートル、10 リー=4.444 メートル、つまり 5 ザム=10 リーという、リーとザムが同じ単位として扱われてる上記とは異なる対応関係を示している⁵⁹。

ボ、ザム、チュオンは日常的には使わないが、文学表現の中にはよく使われ、ガン(Ngàn)も無限の、あるいは多数の概念を示すためよく使われる[Nguyễn Huy et Dorais 2008: 459]。

③ トウオック・ヴァイ

縫尺(phùng xích)、官縫尺(quan phùng xích)とも呼ばれる。その発祥ははっきりしないが、他の尺とは明らかに異なる長さであったことは明確である。織物職人の話によると、このトウオックは織機の幅に規定されている。手工芸の方法、機械というのはいつの時代もあり変化が見られないため、このトウオックは各王朝によって何度も長さが変更されたトウオック・モック、トウオック・ズオンとは違い、比較的大きな変化がなかった尺といえる。職人によっても異なるが、阮朝期には1 トウオック・ヴァイは 0.6m から 0.65m の間で推移している[Phan Thanh Hải 2003a: 322]。

⁵⁷ スヴィネはザムを rặm[Souvignet 1903: 444]、フィとドレスは đậm[Nguyễn Huy et Dorais 2008: 459]と表記しているが、発音やスペル、メートル法の換算値や計算方法からしてザム(dặm)のことで間違いない。同じ表記のばらつきが AGI のなかでも、dặm, dang, rặm とみられた(本章第1節(4)「長さの単位」参照)。

⁵⁸ シュライナーによると、中国のリー(lý)は 444.4825 メートルとしている [Schreiner 1901: 243]。

⁵⁹ ジャンブレレルはリー=600 メートル、ザム=888 メートル[Génibrel 1898: 155, 398]、クアによるとリーは 1850 トウオック、ザムは 1350 トウオック[Huỳnh Tịnh Paulus Của 1895(vol.1): 218, 563, (vol.2): 336]と、ここでもリーはザムと同義ではないことを示す例も報告されている。

各文献中のトゥオック・ヴァイのメートル法での長さは以下の通りである⁶⁰。

- ・ 1 トゥオック・ヴァイ＝0.625m：バン[Đỗ Bang 1997: 17]。
- ・ 1 トゥオック・ヴァイ＝0.62m：フィとドレス[Nguyễn Huy et Dorais 2008: 459]、スヴィネ[Souvignet 1903 :444]、コイ[Lê Thánh Khôi 1955: 531]。
- ・ 1 トゥオック・ヴァイ＝0.636m：コーチシナ農工業委員会[Comité Agricole et Industriel de la Cochinchine 1878: 199]⁶¹。
- ・ 1 トゥオック・ヴァイ＝0.64968m：[Des Michels 1871: 203]。

シュライナーは各文献で異なる数値を示していることを指摘し、その分布は 0.526—0.64968 メートルであったとしている[Schreiner 1901: 243]。

また、南部の事例を示すデ・ミッシェルとシュライナーは、トゥオック・ヴァイの展開方式として、表補—14「長さの一般系統」と異なる制度を示している。デ・ミッシェルは、トゥオック・ヴァイより上の単位として、10 トゥオック＝1 ドゥオン(đương)＝1 チュオン、30 トゥオック＝1 カイ・ヴァイ(cái vải)＝1 タット(thắt)、30 カイ・ヴァイ＝1 ゴン(gon)という制度を挙げている[Des Michels 1871: 203]。

一方シュライナーは、1 トゥオック＝1 ドゥオン＝1 チャウ(châu)あるいはチャウ・ヴァイ(châu vải)であり、これは 10 トゥオックのこともあれば、20 トゥオックのこともあると述べている[Schreiner 1901: 243]。

このトゥオック・ヴァイは、布地を折りたたみながら長さを測って売られるため[Đỗ Bang 1997: 18]、ほとんど使われない[Pasquier 1930: 265]とされている。この「布地を折りたたみながら」測るというのは、いわゆる尋（両手を広げた間の長さ）、ベトナム語でサイ（以下④参照）のことではないかと思われる。布地は主に服を仕立てるために売買するものであり、それにはその人の丈にあった長さを計算するのにその人物の尋を使うのが最も効率が良い。そのため、トゥオック・ヴァイよりもサイ（尋）がより一般的であったのではないか。

④その他

上記以外の長さの単位として、地方で用いられていた単位が紹介されているのがガン(gang)とサイ(sải) [Nguyễn Tùng 2008: 446]である。まず、ガンあるいはガン・タイ(gang tay)であるが、これは手の親指と小指の間の長さを示しており、3 ガン＝1 トゥオックと考えられていた。ガンをタック(tắc)と並べてガン・タックという言葉も作り出され、これはとても短い距離を示す場合に使われた。サイは両腕を伸ばした長さ、尋

⁶⁰ 清末ほか[2002: 529]の実測調査によると、ハノイ歴史博物館所蔵官尺 b の官縫尺面は 0.636 メートル、ホーチミン市歴史博物館所蔵官尺の官縫尺面は 0.642 メートルであった

⁶¹ 1 トゥオック・ヴァイは嘉隆通宝 28 並列分の長さとしている。

であり、約 1.6m とされた。このサイは水面、水深、水上の距離を推算するのにも用いられた。

こうした体の部位を使つてものを計測する方法は、日本や他国と同じくベトナムでも広く用いられており、現在でも少数民族の中で使われている事例もある⁶²。こうした単位が歴史上長く一般に普及していたことは明らかであるが、ここでは文献史料中に取り上げられた事例を挙げるにとどめる⁶³。

(2) 面積単位

阮朝による最も大きい面積単位はマウ(mẫu)であり、一般的には正方形で、次に代表的な単位サオ(sào)は長方形で計算される。マウ以下の全ての面積単位は、マウの1辺が長さとなり、その幅によってトゥオック、タックなどが決まる。1辺を10に当分に割り、もう1辺と平行に結ぶと10の長方形ができる。その一つの長方形がサオである。サオは高さ15トゥオック、幅150トゥオックとなり、その底辺を15で割ると1トゥオックになる。トゥオックの次は同様にタック(tắc)、ファン(phân)と続く。フランス植民地期以前では、長さのトゥオックと面積のトゥオックを区別する言い方がなかったが、その後平方を表わすヴオン(vuông)、カレ(フランス語、carré)を付けて区別するようになった[Schreiner 1901: 246]。

阮朝による面積単位は表補—16の通りである。マウ、サオの概念は図補—1も参照されたい。

表補—16 阮朝の面積単位

単位名	ベトナム語 表記	相当量※1	メートル法での面積(m ²)		
			バン、パスキエ	トウン※2	コイ
マウ	Mẫu	10サオ	4970.25	4894.4016	3600
サオ	Sào	15トゥオック	497.025	489.44016	360
トゥオック(ヴオン)	Thước (vuông)	10タック	33.135	32.639344	24
タック(ヴオン)	Tắc (vuông)	10ファン	3.3135	3.263944	2
ファン(ヴオン)	Phân (vuông)	6リ	0.33135		

※1:それぞれの単位の計算式は以下の通り。1マウ=150トゥオック×150トゥオック、

1サオ=15トゥオック×150トゥオック、1トゥオック=1トゥオック×150トゥオック、

1タック=1タック×150トゥオック。

※2:1836年のメートル法換算値。Nguyễn Đình Đầu. 1990. Les poids et mesures de l'ancien Vietnam.

in *Etude vietnamiennes* :56(筆者未見)による。

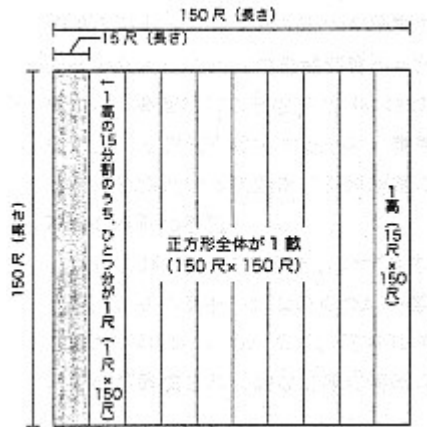
(出所)[Đỗ Bang 1997: 18][Lê Thánh Khôi 1955: 532][Nguyễn Tùng 2008: 446]、

[Pasquier 1930: 267-268]より筆者作成。

⁶² 2012年8月3日、タイグエン大学史学部ダム・ティ・ウィエン(Đàm Thị Uyển)准教授の示教による。

⁶³ 少数民族の度量衡については[Vargyas 2008]と[Maurice 2008]を参照のこと。

図補—1 面積計算の概念図



(出所)清末、中川、中沢、坂本、林[2004: 587]に拠る。

北部では、19 世紀に入り表補—17 のように改訂されたため⁶⁴、中部のマウよりも 1 単位当たりの面積が小さくなった。ここでトンキン独自の単位として注目すべきは、ミエン(miêng)とタン(than)である。公式単位としては、以下の単位がスヴィネによって紹介されている（表補—18 参照）。

表補—17 北部面積の単位

	単位名	ベトナム語 表記	換算値	
			ベトナム度量衡制度	メートル系
倍量単位	マウ	Mẫu	10 サオ	36アール(3600m ²)
	サオ	Sào	10 ミエン	3.6アール(360m ²)
	ミエン	Miêng	9 タン	0.36アール(36m ²)
基本単位	タン	Than	25 オー	0.04アール(4m ²)
分量単位	オー	Ô	あるいは4平方ガン	0.16m ²
	ガン	Gang	—	0.04m ²

(出所)[Đỗ Bang 1997: 18][Souvignat 1903: 445]より筆者作成。

⁶⁴ AGI では、同様の単位を北部地域ではなく一般の単位として紹介しており（表補—6 参照）、地域区分は不明瞭である。

表補—18 公式面積単位

単位名	ベトナム語 表記	フランス語 表記	換算値	
			ベトナム度量衡制度	メートル系
マウ	Mẫu	Arpent	10サオ	3600m ²
カオ(サオ)	Cao (Sào)	Perche	15トゥオック	360m ²
スイック(トゥオック)	Xích (Thước)	Pied agraire	10タック	24m ²
トン(タック)	Thôn (Tắc)	Pouce agraire	10ファン	2m ²
ファン	Phân	Ligne agraire	6リー	0.24m ²
リー	Ly	Point agraire	1 平方ガン	0.04m ²

(出所)[Souvignat 1903: 448]より筆者作成。

表補—19 南部の面積単位

単位名	ベトナム語 表記	相当量	メートル法 での長さ(m ²)
マウ	Mẫu	10サオ、あるいは2コン	5000
コン	Công	2サオ	1000
サオ	Sào	15トゥオック	500
トゥオック	Thước		33

(出所)[Đỗ Bang 1997: 18]より筆者作成。

南部では(表補—19 参照)、フランスの影響で、早くから西洋のマウ(マウ・タイ: mẫu tây)も普及していたが、ベトナム式1マウの土地面積は4000 m²から6000 m²の間を変化する[Henry 1932: 17]。『1878年のコーチシナ』のなかでも、マウは10サオ平方=150トゥオック平方=5000 m²[Comité Agricole et Industriel de la Cochinchine 1878: 199]、シュライナーは6272.64 m²[Schreiner 1901: 244]であるとし、地域によって多様に異なることも指摘されている。南部特有の単位としては、コン(công)がみられ、フィとドレスでもコンはメコンデルタの単位であると明記している[Nguyễn Huy et Louis Jacques Dorais 2008: 460]⁶⁵。また、シュライナーはコンはもともとカンボジアから来ていると説明している[Schreiner 1901: 245]。その相当面積は、1コン=2サオ=30トゥオック=1000 m²であった[Nguyễn Tùng 2008: 449][Henry 1932: 17]。また、収穫者が用いるコンは、平均1250 m²であった。[Henry 1932: 17]

⁶⁵ シュライナーによると、コンという単位名はもともとカンボジア語からきているという[Schreiner 1901: 245]。

(3) 体積単位

体積単位については（表補—20 参照）、ゴック、ダウ、シュライナー、コイ、トゥン（ダウの研究を引用している）が言及するに留まっている。ゴックは、トゥオック・モックによる体積単位として、一般的には長さの単位であるチュオン、グー、トゥオック、タック、ファン、リー(lý)を三乗したもので、単位の後に立方(phương lập)あるいはヴオン・ドゥン(vuông đứng、vuông は四角、đứng は立を意味する) [Hữu Ngọc (chủ biên) 1995: 252]。

表補—20 体積単位

単位名	ベトナム語 表記	相当量	計算式	メートル法での体積 (m ³)		
				ゴック、ダウ	コイ	スヴィネ
ホック	Hộc	10レー	10グー×1グー×1トゥオック	19.056256	16	16
レー	Lê	25ライ	1グー×1グー×1トゥオック	1.9056256	1.36	1.6
ライ	Lai	1立方トゥオック		0.076225024	0.3064	0.064

(出所) [Hữu Ngọc, et al 1995 : 252][Lê Thánh Khôi 1955: 532][Nguyễn Đình Đầu 1978a: 69][Souvigniet 1903: 451]より筆者作成。

石材や木材のための単位はホック(hộc)、レー(lê)、とライ(lai)を用いる。その関係は表補—20 の通りである [Hữu Ngọc (chủ biên) 1995: 252][Nguyễn Đình Đầu 1978: 69] [Lê Thánh Khôi 1955: 532]。

土木事業者はダウ(đầu)で量り、このダウの大きさはレーと同じである。そのために土木事業者はト・ダウ(thợ đầu)、トは職人の意味)と呼ばれる [Nguyễn Đình Đầu 1978: 69]。

湖、池、用水路、運河を掘る時、または道をかさ上げる時には、土木事業者はマウ(mẫu)とサオ(sào)を用いて体積を示す。具体的にはマウ・ホイ(mẫu khối、ホイは立方)はマウ・ズオン(mẫu ruộng)⁶⁶×深さ 1 トゥオックで計算される [Hữu Ngọc (chủ biên) 1995: 252-253]。

(4) 容積単位

ベトナムの伝統の中では、容積単位は穀物、とりわけもみや米の計量に用いられた [Nguyễn Tùng 2008: 452]。容積単位に関しては、使われている単位名はほぼ同じであるが、相当する量が大きく異なっていた（表補—21 参照）。

⁶⁶ マウ・ズオンという言い方はこのゴックでしか出てこないが、これはトゥオック・ズオンを使って計算されたマウのことを指すものと思われる。

表補—21 容積単位

ベトナム語	ホック (Hộc)	ヴオン(Vuông), フオン(Phuong)	タン (Thăng)	カップ(Cáp) ホップ(Hợp) ハップ(Hạp) ヒエップ(Hiệp)	トゥオック (Thước)
相 当 量	スヴィニエ	26 タン=約60L	—	10 カップ=約2L	10 トゥオック
	コイ	26 タン=60L	—	2L	—
	バスキエ	26 タン=76.226L	—	10 カップ=2.932L	—
	ゴック他	26 タン=76.225L	—	10 ホップ=2.932L	10 トゥオック=0.293L
	パン	2ヴオン(フオン) =76.226L	フオン=13 タン = 38.133L	10 カップ=2.932L	0.2932L
	デ・ミシェル	10 ダウ※	10タン	10ハップ	10トゥオック
	シュライナー	26タン=71.905L		10ヒエップ(hiệp) =2.765L	10トゥオック=0.276L
					10サオ

※デ・ミシェルはヴオン、フオンではなくダウ(đầu)を挙げている。

(1)アンリは『インドシナ年報1922年 (l'Annuaire général de l'Indochine 1922)』より引用している。

(出所) [Souvignet 1903: 452-453][Henry 1932: 14][Pasquier 1930: 268][Hữu Ngọc, et al 1995: 240]

[Đỗ Bang 1997: 20][Lê Thánh Khôi 1955: 532][Des Michels 1871: 202][Schreiner 1901: 247]より筆者作成。

表補—21 に示された単位は、徴税用の公式単位として紹介されているもので、1834年の新法によりもみの計量にはホックを、米の計量にはフオンを使うことが定められた[Nguyễn Tùng 2008: 451]。フエの古物博物館所蔵のホック(阮朝公式、明命年造)は、樽の形状をしており、容積は72リットルであった[Huỳnh Thị Bích Nhân 2007: 115-116]。これに最も近い数値を示しているのはシュライナーである。

北部では米の糧食単位としてフウオン(phuong)とウィエン(uyên)があり、それぞれ1フウオン=30ウィエン=約30L、1ウィエン=1ダウ(đầu)=約1Lであった[Henry 1932: 14][Souvignet 1903: 454]。

このフウオンは中部ではもみ、米の公式単位としてヴオンとともに用いられていた[Henry 1932: 16][Pasquier 1930: 268]。バスキエの1フウオン=0.5ホック、1ホック=76.226Lという記述[Pasquier 1930: 268]をもとに、レーは10月米を用いて実際に計量し、米1Lは880グラムであり米1フウオンは33.54kgに相当すると試算している[Phan Huy Le 1968: 61]。北部では1フウオンが約30L(表4参照)であったことから、この結果を応用して計算すると26.4kgとなるが、1930年代に北部を実地調査したグルーは、1フウオン=12.5kgであったとしており[Gourou/ Đạm others 1936/2003: 381/346]、かなりの相違が見られる。

南部の事例を示すデ・ミッシェルでは、フウオン、ヴオンの代わりにダウを挙げている。

民間では、表補—22の容積単位も用いられており、米の単位として先にあげたフウオンと類似している。このことから、このフウオンがひとつの基準となり、以下日常的に用いる小さな単位が民間でも展開されていったのではないかと考えられる。鉢

については、グルーによると、1 バットの米は 350g であったとされる[Gourou/ Đạm others 1936/2003 : 375/340]。

表補一22 民間で用いられていた容積単位

ベトナム語	相当量
ヴオン(Vuông),フオン(Phuong)	約30ダウ=約30L
トゥン(Thùng)	約20ダウ=約20L
ダウ(Đầu)	2 バット=約1L
バット(Bát)	5 レ=約0.5L
レ(Lê)	0.1 ダウ=1デシリットル

※1: 出所に示した4文献ともすべて同項目、同数値が見られるが、パンのみこれらは植民地化によって19世紀末-20世紀初頭にかけて度量衡制度が変更され、その変更後の容積単位として紹介しており、特に民間での単位とは記されていない。

(出所) [Henry 1932 : 14][Đỗ Bang 1997 : 20][Lê Thánh Khôi 1955: 532]

[Souvignat 1903 : 453]より筆者作成。

民間における単位は多種多様であり、この他にも米を量る際、木製、あるいは銅製のトゥン(thùng、桶の意、約 10kg)や、もみの計量には木製の鉢、トゥン・ダウ(thùng đầu、約 1kg)もあった[Hữu Ngọc(chủ biên) 1995 : 240]。北部の米取引にはパニエ(panier)⁶⁷、つまりかごも使われていた[Pasquier 1930 : 269]。地方によってコンデンスミルク缶(ống bơ)⁶⁸や竹筒で量られ売買されており[Uỷ ban nhân dân tỉnh Cao Bằng 2000 : 375]、スオン・マウ(Xương mầu)という商標⁶⁹をもつ中国茶の箱も、広く容積単位として北部で用いられていた[Nguyễn Hữu Tiền 1934 : 334]。売買の際には、売り手、買い手がそれぞれに計量器を持参し、お互いに何度もはかり直しながら交渉を重ね値段を決めていた[Hữu Ngọc(chủ biên) 1995 : 240]。

南部では、米、もみ、魚、魚の塩漬けを量るのに、石油の樽が起源の木製、あるいは金属製のザ(giạ)を使っており、1 ザは20 リットルであった[Nguyễn Huy et Dorais 2008: 460]。一方トゥンは、ザは竹片で編まれた深い籠だとしている[Nguyễn Tùng 2008: 452]。シュライナーは、このザはヴオンの俗称だとしている[Schreiner 1901: 248]。

ザ=10 オー(ô)であり、オーはクアンナム省では少なくとも1960年代までは農民が使用していた。10 オー=アン(ang)=30 ロン(lon)であり、ロンとはネスレのコンデンスミルク缶のことである[Nguyễn Tùng 2008: 452]。

⁶⁷ これはおそらく籠(thúng)のフランス語訳だと思われる。商業統計上でも実際かご(panier)が記載されている(第2章第3節(2)「ピクル以外の単位とその分布」参照)。

⁶⁸ 直訳するとオン(ống)は管、ボー(bơ)はバターを意味するが、現在でもオンボーといえばコンデンスミルク缶を指し、田舎では米を計る計量器として用いられている。植民地期も、コンデンスミルク缶は缶詰貿易の主要な輸入品であり、毎年22-23万缶輸入していた。1937年では缶詰輸入全体に占めるミルク缶の割合は25.9%(金額ベース)、20.8%(重量ベース)を占め、ミルク缶中のコンデンスミルク缶の割合は重量、金額ベースともに95%以上を占めている[大東亜罐詰産業協力会 1943 : 11、仏印罐詰輸入統計]。

⁶⁹ 中国語は「熊猫」パンダの意。

写真補—3 容積計量器であるオー
(2008 年 2 月 25 日ホイアン民間文化博物館にて
筆者撮影)



写真補—4 ホイアン民間文化博物館所蔵のアン
(2008 年 2 月 25 日筆者撮影)



写真補—5 ホイアン歴史博物館所蔵のアン

(2008 年 2 月 25 日筆者撮影)

1885 年の穀物を量る木製の計量器 (説明書きによる)



液体の計量には全ての種類の容器が使われていた[Nguyễn Tùng 2008: 452]。例えばチュ(chum、大壺)、ヴォー(vò、小壺)、ヒュー(hũ、カラフ)、ナム(nâm、米の酒用ビン)、ガオ(gáo、魚醬用、ココナッツの実をくりぬいた容器)、ヴァイ(vai)およびチン(chinh)(円柱状のかめ)、ロ(lò、水差し)、トゥン(thùng、樽)[Nguyễn Huy et Dorais 2008: 459][Nguyễn Tùng 2008: 452]などである。

シュライナーはコーチシナで用いられている液体用計量器として、chén (小さな湯飲み、茶碗)、bát、tộ (椀)、tô (どんぶり)、tiềm (桶) bầu (つぼ)、chinh、vò、hũ、lu、tín、ché、lon (びん各種)、tượng、chậu、ang (順を追って大きさが大きくなるおけ)、chai (瓶)、mái (つぼ、かめ)、などを挙げて、いる。つまり日常用いられていたあらゆる容器がそのまま使われていることがわかる。

(5) 重量単位

重量単位については、タ、イェン、カンと比較的大きい単位名は地域、時代を問わず共通しているが、それ以下の単位名は文献によって様々である(表補—23 参照)。

表補—23 重量単位

ベトナム語		タ(Tạ) kg	ビン (Binh) kg	イエ (Yến) kg	カン (Cân) kg	ネン (Nén) g	ラン(Lạng) ルオン(Lương)
相当量	スヴィニエ コイ	10 イエ =60.45	- -	10 カン 6.045	16 ラン 0.6045	- -	10 ドン =37.783g
	パスキエ	42貫銭(亜鉛銭) 60.4	- -	10 カン 6.04	16 トウオン (Tuống)	- -	トウオン =10ドン=37g
	ゴック	10イエ 61.28	- -	10カン 6.128	16ラン =0.6218	- -	10ドン =38.3g
	バン	10イエ 60.4	- -	10カン 6.04	16ルオン 0.604	- -	10ドンカン (Đồng cân)=37.75g
	デ・ミシェル※	100カン 62.48	50 カン 31.24	10カン 6.248	16ルオン 0.6248	10ルオン 390.5	10 ドン 39.05
	シュライナー	62.48	31.24	6.248	0.6248	390.5	39.05

※ドン以下、十進法でファン(Phân)、リー(Ly)、ハオ(Hào)、ホット(Hốt)、チャウ(Châu)、フィ(Huy)、

チャン(Trần)、アイ(ai)が展開されている。また、タより大きい単位として、

クアン(Quân)=500カン=312.4kgもシュライナーとデ・ミッシェルによって示されている。

(出所)[Souvignat 1903: 454-455][Henry 1932: 15][Pasquier 1930: 269][Hữu Ngọc, et al 1995: 253]

[Đỗ Bang 1997: 21][Lê Thánh Khôi 1955: 531][Des Michels, Abel 1871: 201]

[Schreiner 1901: 252]より筆者作成。

相当する重量は、阮朝、トンキンの事例を示すスヴィネ、コイ、パスキエ、ゴック、バンでは各単位ともにそれほど大きく異なっていない。南部の事例としては、デ・ミッシェルとシュライナーが1タは62.48kgと若干重量の重い相当量を示している。同じく南部の事例としてアンリは1ピクル=1タ=60kgと公式ピクルを紹介しているが、もみの買い付けではザ=20.4kg、ピクル=3.33 ザ=68kgを使うと報告しているのは注目に値する。また1942年の日本南方軍経理部による度量衡比較表でも、仏印は1ピクル60.45kg(地域の区分なし)[明石陽至編集解説 2004: 314]とされており、公式ピクルの60kgでなかったことは、1942年の時点でも全国的に公式ピクルが浸透していなかった事例として着目すべきである。

また、デ・ミッシェルとシュライナーによる南部の事例として、クアン(quân)という独特の単位名も挙げられている。

第3節 植民地期ベトナム度量衡制度の認識と問題点

本章では、第一に政府側の発行資料としてインドシナの官製年報での度量衡制度の扱われ方、第二に、社会経済史研究から代表的な研究者の文献の中で見られる紹介、記述、事例をできるだけ集め、それらの整理を行った。本章は、文献・史料間の不一致の度合いと、その齟齬がなぜ起こるのか、についても検討し、また現在における植

民地期度量衡研究の状況を把握、提示することも目的とした。その課題について、本章の検討を通じて得られた結果をまとめたい。

第一に、研究史上、度量衡の単位系については統一された見解がまだ示されていないことが具体的に明らかになった。AGI の理解は、1924 年までを通じて、地域差、時代区分を考慮に入れず、概要を示すに留まっていた。また、紹介されている度量衡制度は総督府によって定められた制度、あるいはメートル法についてではなく、阮朝や現地の慣習制度がほとんどである。つまり、こうした官製年報の利用者にとって、事実上それらの情報の方が必要とされていた、それだけメートル法が普及していなかったと考えることもできる。

研究史の中では、グエン・ディン・ダウ[Nguyễn Đình Đầu 1978a/1978b]やファン・タイン・ハイ[Phan Thanh Hải 2003a]といった、具体的な事例をもとに比較、検討された研究は 1970 年代、2000 年代に入って以降のもので、植民地期の同時代史料の中では詳細な比較検討による度量衡制度の地域差や全体像はほとんど示されていないかった。

本章では官製年報、各文献、史料によって理解の仕方が異なっていること、その理解（各単位系およびその単位の相当量、展開方式、メートル法換算値）の異なっている範囲、幅がどれほどであるのか、についても整理し示すことができた。

第二に、そうした理解が異なっている背景、要因については、以下のことに起因していることが明らかになった。

- ①それぞれ時代、地域を明らかにしないまま提示するに留まっている。そのため、時代差、地域差が反映されず、同一単位名として扱われるため相当量、メートル法換算値が一貫しない。
- ②ベトナム語、フランス語の表記の問題で、声調・発音が正しく反映されず、似たつづりの単位、計量器名の誤記や誤解が頻繁に生じている可能性がある。
- ③ベトナム語の単位名をフランス語（フランス式の慣習単位名）に訳すときの翻訳に一貫性が見られない。
- ④漢籍史料の漢越語をベトナム語に翻訳するときの訳語が統一されていない。
- ⑤度量衡制度の理解が断片的であるため、種類の差を判別できず異なる種類の単位や計量器を同一の種類として分類している可能性がある。長さではトゥオックでも 3 種類見られるが、すべてトゥオックという単語・表記で始まっているため、これら 3 つを混同している可能性や、面積単位でも行政と民間で異なる単位系を持っているが、それを理解しておらず、共通して用いられている単位名もあるため、混同している可能性が指摘できる。つまり、それぞれが制度の全体像を把握していないため、単位や計量器の分類、区分が不正確、不明瞭になっているといえる。

⑥上記①－⑤の問題を抱えている各文献資料は、互いにそれぞれ典拠を明らかにしないまま列挙しているため、使用される単位名とその定義がさらに混乱している。

度量衡の単位名は、歴史、社会、経済、文化、文学といった様々な学問分野の民間、行政による史料の中にも数多く出てくるが、これまでそのように単独で示された単位がどれほどの長さ、重量、容積に相当するのか理解が難しい状況にあった。本論第2章―第4章の分析で明らかになったように、ベトナム各地で用いられていた度量衡制度は非常に複雑であり、それぞれの単位が明確に相当する量を規定されているわけではない。しかし、「多種多様である」「不正確である」、あるいはいくつかの事例を取り上げ、おおよその換算値を提示するといった漠然とした把握しかできなかった状況に対して、この補論は制度の全容と各単位系の傾向を示すことができ、ある程度の解決策につなげることができたと考えている。

第1章 度量衡関連法の整備

第1節 前史

(1) 黎朝による度量衡制度

①五量法の導入

黎朝による本格的な度量衡統一は、1664年にファム・コン・チュー(Phạm Công Trứ)によって黄鍾管にもみを満たし、それを各単位の基準とした五量法という度量衡制度が定められたことに始まる⁷⁰。五量法については、『国朝詔令善政』⁷¹、『越史通鑑綱目』(以下『綱目』)⁷²、『歴朝憲章類誌』国用誌(以下『国用誌』)⁷³、『大越史記全書』⁷⁴にそれぞれ同様の記事が見られるが、容積単位に関してのみ言及されている。この制度は『漢書』律暦志に記されている度量衡制度と酷似しており、漢代の中国においてもやはり黄鍾管⁷⁵とキビを用い、度・量・権⁷⁶それぞれが5つに細分化され独自の単位となっていた⁷⁷。これらを比較したのが表1—1である。

⁷⁰ これ以前にも度量衡制度は存在したはずである。ティエンによると、王朝が変わるたびに度量衡制度も新しいものとなったが、それは単に現王朝の制度の方が、旧制度よりも新しいことを示すために過ぎなかった[Nguyễn Hữu Tiễn 1934: 333]。コイでは、統一的な度量衡制度は1664年から非常に理にかなった制度が広まる[Lê Thánh Khôi 1955: 256]とあり、ニャーは度量衡制度に関する最も重要な決定を1664年の五量法だとしている[Nguyen Thanh Nha 1970: 155]。またドゥルスタルも、確立された度量衡制度はなかったとした上で、容積に関しては1664年の制度が最初に紹介されている[Deloustal 1910: 42]。以上から、少なくとも黎朝以降では、本格的な度量衡制度の導入は1664年であると考えられる。

⁷¹ 『国朝詔令善政』巻2、戸属、定粟米量法令の条「甲辰景治二年夏五月、定粟米量法令。一奉^{ママ}查経籍、以黄鍾之管、中容粟子一千二百爲龠、十龠爲合、十合爲升、十升爲斗、十斗爲斛、斛即石、是五量法。」※斛は斛の誤記であろう。

⁷² 『越史通鑑綱目』巻33、初定五量法の条「范公著議、按経籍、以黄鍾之管中容粟子、一千二百爲籥、十籥爲合、十合爲升、十升爲斗、十斗爲斛。」

⁷³ 『歴朝憲章類誌』国用誌、玄尊景治二年の条「范公著議、按経籍、以黄鍾之管中容粟子、一千二百爲龠、十龠爲合、十合爲升、十升爲斗、十斗爲斛、斛即是石。」

⁷⁴ 『大越史記全書』本紀、巻19、景治元年5月の条「立粟米五量法、其龠、合、升、斗、斛、倣黄鍾律爲準、頒内外各衙門、一体遵行。」

⁷⁵ 黄鍾とは音律(笛の音で定めた音階を律という)の名で(『漢書』小竹武夫訳 筑摩書房、1977、507頁注)、黄鍾管に1200粒のキビを満たした重量が1籥(龠)となるが、この籥(龠)は短い笛を意味していることから、黄鍾管とは筒型の楽器であったと思われる。

⁷⁶ 漢書では権が重量単位の総称である(『漢書』巻21 律暦志第1上)。

⁷⁷ 班固撰『漢書』巻21 律暦志第1上。

表 1—1 中国とベトナム黎朝の五量法の比較

『漢書』律曆志		『善政』・『綱目』・国用誌		
斛	10 斗	斛	ホック(Hộc)	10 斗
斗	10 升	斗	ダウ(Đầu)	10 升
升	10 合	升	タン(Thăng)	10 合
合	2 龠	合	カップ(Cáp)	10 龠
龠	1200 實	龠(注)	トゥオック(Thược)	1200粒(hạt)

(注)『越史通鑑綱目』では「簞」。

出所: 班固撰『漢書』卷21律曆志第1上, 967-968頁。

『国朝詔令善政』卷2, 戸属, 定粟米量法令の条

Nguyễn Sĩ Giác dịch, *Lê triều chiếu lệnh thiện chính*.

Sàigòn: Nhà in Bình Minh, 1961, tr.129.

『越史通鑑綱目』卷33 初定五量法の条

Ban Nghiên cứu văn sử địa biên dịch và chú giải,

Việt sử thông giám cương mục, Tập 16, Hà Nội: Văn sử địa, tr.12.

『歴朝憲章類誌』国用史, 玄尊景治2年の条

Viện sử học Việt Nam dịch, *Lịch triều hiến chương loại chí*,

Tập 3, Hà nội: Sử học, 1960, tr.55.より筆者作成。

おそらく、1664年の五量法は中国の旧制度の模倣であり、十進法に修正して導入されたものと思われる。容積単位以外の制度も合わせて取り入れたのかについては記されていないが、『国朝詔令善政』と『国用誌』では、1斛（容積単位）が1石（重量単位）であるとの記述が見られる。『漢書』律曆志によると、同制度による重量単位は、黄鍾1龠に1200粒のキビを入れ、この重さを12銖とし、24銖=1両、16両=1斤、30斤=1鈞、4鈞=1石としており、石と斛はともに容積、重量の5番目の単位として対応関係にある。このことから、少なくとも重量単位についても漢代の制度を応用していたことが推測できる。

上記の容積単位については、ドゥルスタルや桜井がグラムへの換算を試みている。ドゥルスタルは、等級の異なる500粒のもみを用いて計量した結果、最終的に1龠1200粒は26.7gと結論付けており[Deloustal 1910: 467]、1升2.67kgとなる。桜井によると、ベトナムのもみ重は19.6 - 33.6mgの間に分布しており、1升2.35 - 4.03kgと試算している[桜井 1986: 75]。

② 銖による容積単位制度

黎朝後期からベトナム北部では、銖も米粟の容積単位として用いられており[桜井 1986: 220]、『国用誌』ではすでに1625年に米が銖で計られていた記述が見られる⁷⁸。しかし、この容積単位はあまり普及していなかったようである。17世紀中頃のベトナム北・中部で語彙を収集し、1651年に編纂されたロードの『安南語=ポルトガル語=ラテン語辞書』では、銖は食器としての紹介のみで、計量器としての説明は付されていない[Rhodes 1651/1991: 29-30/37]。

⁷⁸ 『国用誌』神宗永祚七年「定平治規模令」で「米一百銖」と記載がある。

この鉢を本格的に度量衡制度の中に導入する試みが、陽徳3年(1674年)6月の勅令をもって始められ[Nguyen Thanh Nha 1970: 155]、1鉢(bát)が7手合(thủ cấp)、1升(thang)が7鉢、10升が1斗(đâu ママ)、10斗が1斛(hộc)=1石(thạch)と定められた⁷⁹。これ以降鉢については、『国用誌』、『綱目』の中で1728年、1741年に断片的な記述がみられ⁸⁰、またズンによっても、18世紀の鉢による制度が紹介されている[Nguyễn Tiến Dũng(chủ biên) 2005: 435]。これらを総合すると、1鉢=8万4千粒=7手合(合)、7鉢=1升、10升=1斗(婁)、10斗(婁)=斛(容積単位)・石(重量単位)となり、史料間での齟齬も見られないことから、少なくとも1741年まではこの鉢を用いた上記の制度が、広く用いられていたことが推測される。

しかし、この鉢による制度は、朝廷によってのみ用いられ[Nguyễn Hữu Tiên 1934: 334]、税の徴収をいくらか容易にはしたが、商業活動上の慣習的な度量衡に取って代わるものではなかった[Nguyen Thanh Nha 1970: 155]⁸¹。

度量衡の計量器の製造や、売買に際しての計量の不正に対する罰則規定は『国朝刑律』の中に見ることができる。具体的には商人がハノイの市場で公式の升斗によらず、自らが製造した升斗で売買するものは貶爵と肉体労働が、度量衡の用具製作者が違法な枴などを製造した場合は貶爵とむち打ち50回の重刑が課せられていた⁸²。貶爵とは通資(二四資)制度における資位の降下を意味することである[片倉 1986: 188]。一資から五資まで五段階ある。罰金に置き換える「贖」の規定もあり、品階が問題とならない民丁私奴にも適用された。刑罰体系における重さは五刑(答・杖・徒・流・死)の杖刑よりも重く徒刑よりも軽かった[山本 1975: 780, 784-785]。

(2) 阮氏支配地域の度量衡制度

阮氏支配地域である中部に関しては、『撫辺雑録』に税制に関連して、年次不記ながら度量衡制度の記述が見られる⁸³。これは、『大南寔録』にも己酉21年の条に同様の記

⁷⁹ この勅令に関してはドゥルスタル[Deloustal 1910: 43]に詳しく、ニャーも触れているが、出所については不明であり、『大南寔録』『綱目』『国用誌』『歴朝襍記』『黎朝会典』『黎朝旧典』『大越史記全書』『大越史記全書続編』には記載がみられなかった。

⁸⁰ 『国用誌』保泰9年(1728年)、再定田租法、割注に「七鉢為升、十升為婁」、『綱目』卷39景興2年条の注「官鉢。七合為鉢、每鉢得粟八萬四千字。」婁は婁の俗字。

⁸¹ 度量衡制度の選択は地方分権主義に基づいて自由であり[Đặng Phương Nghi 1969: 104]、民間においても計量に使えるものは何でも、様々なものを用いていたため[Nguyễn Hữu Tiên 1934: 334]法的拘束力は弱かったと考えられる。

⁸² 『国朝刑律』卷2 違制章、通条第91条「諸京城鄉村市肆，不依官秤及升斗而私改作以買賣者，以貶徒論。諸工人，造升斗秤度不如法者，答伍拾貶壹資。」

⁸³ 『撫辺雑録』卷3 順廣二處公田私田田庄花洲數額徵收粟米旧例總數の条「十升爲一斛順化舊法以十撮爲一勺、十勺爲一合、十合爲一升、十升爲一斛、十斛爲一桶、其收稅斛、則每斛五十升、再加附二十五升、一斛共七十五升、以五百升爲一桶、其發水軍糧、則每斛三十三升五合、…」

事があることから⁸⁴、1669年の制度であったと考えられる⁸⁵。この度量衡制度をベトナム語訳と合わせて示したのが表1—2である。

表1—2 17世紀中部における容積単位

単位名	ベトナム語	相当量
桶	トゥン(Thùng), ズン(đùng)	10 斛
斛	ホック(Hộc)	10 升
升	タン(Thăng), トゥン(Thung)	10 合
合	ホップ(Hợp), カップ(Cáp)	10 勺
勺	ヴォック(Vốc), トウオック(Thược) チュオック(chước)	10 撮
撮	ニョントイ(Nhón tay), トアット(Toát), ニュム(Nhùm)	

(注) 斜体は『撫辺雑録』のベトナム語訳①、太字はベトナム語訳②

出所『大南寔録前編卷5 徴其税の条, Viên sử học phiên dịch,

Đại Nam thực lục tiền biên tập 1, Hà Nội: Sử học, 1962, tr.113.

『撫辺雑録』卷3 順廣二處公田私田田庄花洲数額徴収粟米旧例総数の条

① Viện Sử Học biên, Lê Quý Đôn Toàn Tập. Tập 1. Phủ biên tạp lục.

Hà Nội: Khoa học xã hội, 1977, tr.127.

② Lê Quý Đôn, Phủ biên tạp lục. Tập I. Sài Gòn: Tủ sách cổ văn, 1973, tr.230.

より筆者作成。

表1—1と比較すると、斛、升、合は共通して用いられているが、その他、桶、勺、撮とを合わせてひとつの制度となっており、北部と共通する単位もその相当量は異なっている。また、上に示した2史料の同一箇所、徴税の計量の際には、1斛が75升、1桶が500升、水軍への食糧供給では、1斛が33升5合と、表1—2と比較するとそれぞれ7.5倍、5倍、3.35倍と大型の斛、桶が用いられていたことも明記されている。つまり、同じ時代の同じ制度において、同一計量器、同一単位名でも、用途によって相当する量が異なっていたことがわかる。

この『撫辺雑録』による中部の租税法では、一等の公田の税率は40升であり、これは官鉢40鉢(bát)にあたると記されており⁸⁶、鉢という容積単位が17世紀から中部においても使用されていたことがわかる。

⁸⁴ 『大南寔録前編』卷5 己酉21年、徴其税の条「十撮爲一勺、十勺爲一合、十合爲一升、十升爲一斛、十斛爲一桶、其收税斛、則斛五十升、再加二十五升、一斛共七十五升、以五百升爲一桶、其發軍糧、斛則三十三升五合、…」

⁸⁵ 西暦換算は張璜撰『欧亜紀元合表』(影印版、大安、1968)による。

⁸⁶ 「公田一等徴粟四十升、當官鉢四十鉢」(注42と同箇所の記事)。

第2節 阮朝（1802－1945年）による度量衡関連法

度量衡制度統一に向けた動きは、初代皇帝嘉隆帝によって着手されていた。嘉隆帝は度量衡の統一は政治の重要事項であると認識し、1804年、斤(カン、cân)・尺(トゥオック、thước)・斛(ホック、hộc)・方(フウオン、phương)・升(トゥン、thùng)・盃(ダウ、đầu)など、長さ、容積、重量単位のすべてにおいて、各計量器は規定に従って用いるよう命令を出しており、計量器の製造方式についても細かく指定している⁸⁷。しかし、これらの単位がどのように規定されていたのか、どれほどの重量、容積、長さを表すものなのかについては記録がない。

まず、米の計量に関わる単位、計量器についてまとめる。

嘉隆帝政下の1805年には、軍隊への米供給を簡便にする目的で、方を大方、中方の2つに分け、大方は米13升=30盃とすることも定められた⁸⁸。

明命帝政下では、各地によって1斛の基準が異なっていたことを受け、1825年に1斛を26升と定めた⁸⁹。同記事には「度量衡は政治の要」であるとも明記されている⁹⁰。一方で、1834年、実際に2方(容積単位、1斛=2方=26升)の米と粟の重さを量ってみたところ、粟2方は1斛より多く、米2方は1斛に満たなかったと報告されたが、この問題に対して明命帝は議論を先送りしている⁹¹。米と粟は税収にかかわる重要な産品であるにもかかわらず、である。

地方の独自性を容認していた嘉隆帝より、中央集権化を目指し、全国の強力な画一化を進めた明命帝が、度量衡政策に対して慎重であったことは興味深い事実である⁹²。これは長らく統一された計量器が整備されないまま、計量が行なわれており、朝廷も民間もこうした状況を受け入れていた社会が背景にあったと考えられる。

その後、施政末期の1839年に、米は方で、粟は斛で計ることが決められた⁹³。

⁸⁷ 『会典』巻54、戸部、倉諸権量、尺衡の条/「旨、同律量衡乃為政之要務。斤尺斛方升盃等項、宜遵…」以下度量衡計量器の作成者、器具の認定などについての記述が続く。*Khâm định đại nam hội điển sự lệ*, tr. 65-66.

⁸⁸ 『会典』巻54、戸部、倉諸権量、斛盃の条/ *Đại nam hội điển sự lệ* Tập 5: 74「年前用兵之際、糧米務在樽節所製大方中方二項以便給發。茲在京及在外諸鎮凡有預支俸餉、日程糧米者、宜據大方。每方成米十三升。是三十銅盃平口。」

⁸⁹ 『会典』巻54、戸部、権量の条/「以二十六升之斛為準」。

⁹⁰ 『会典』巻54、戸部、権量の条/「同律量衡為政之首務」。

⁹¹ 『大南寔録正編』第2紀巻121、明命15年春3月の条/「阮科明對曰、物之不齊者非一臣部。嘗以粟米試量、粟二方則過一斛、米二方則不足一斛。若以量米者量粟不免差殊。請各分別製造乃可均也。帝曰此事俟後徐議之未晚。」

⁹² 『国史遺編』中集の明命12年(1831)9月の条文に「広治より以北、北城に至る諸鎮は、定めて九省と為し、(中略)是に係わり新たに改めて官職を建設せしむ[原文：自広治以北至北城諸鎮、定為九省、(中略)係是新改、建設官職。]」とあるように、明命帝は北城すなわち北部ベトナムの諸鎮を省とし新たに官職も改めて、自治性を払拭して中央直轄地域としている[大西2012: 568-569]。

⁹³ 『会典』巻54、戸部、権量の条/「斛以収支粟粒、方以収支米粒」。

『大南典例撮要』によると、嗣徳帝時代では、1870年に重量単位に関して、漢書の律曆史に倣い1200粒の黍が7銖、24銖が1両、16両が1斤、30斤が1鈞、4鈞が1石という制度を定めた⁹⁴。しかし、この時期に至って、17世紀黎朝により十進法に修正して導入された五量法（本章第1節（1）「黎朝による度量衡制度」参照）を、漢書に示されているままの複雑な体系で導入することは不自然である。さらに、基準となるのが粟ではなく、黍であることから、ベトナムの現状に即していない。

この『大南典例撮要』は『大南会典事例統編（以下『会典統編』）』の要約であるが、『会典統編』の戸部には上記の記事は見当たらない。一方、『会典統編』巻四〇刑部三「縦放軍人歇役」の条⁹⁵では、嗣徳23年（1870年）に『漢書』律曆志の五量法の記述が見られる。しかし、この条に書かれているのは、中国人による米盗難事件に関わる度量衡についてであり、『漢書』律曆志の五量法を模倣した制度を導入するという文脈ではない。具体的な内容は、米の盗難事件が起こった際、中国側が盗んだ米の量を計量単位「石」を用いて報告してきたことに対し、ベトナムでは当時「斛（容積単位）」を計量単位として用いていたが「石（重量単位）」という単位がなかったため、量が把握できなかった。そのため、この「石」という単位について調べた結果、『漢書』律曆志の中にこの「石」を用いた度量衡制度、すなわち五量法があることを見出し、その概要を報告しているにすぎない。つまり嗣徳23年当時の阮朝では、「石」という単位が使われていなかっただけでなく、五量法についても知られていなかったことになる。また、問題の嗣徳23年に相当する阮朝官撰年代記『大南寔録正編』第四紀卷四二及び卷四三の条文にも、五量法導入に関する記事はない。

以上から、『大南典例撮要』を編纂する際に『会典統編』の上記の記事を何らかの理由で誤解し、五量法がこの年施行されたと読み違えたと思われる。

長さに関しては、『大南寔録正編』第一紀卷四一によると⁹⁶、嘉隆5年（1806年）に中平尺という尺が定められており、この中平尺は黎朝の旧尺よりも長さが少し長かった。しかし、嘉隆9年（1810年）に至っても、黎朝の旧尺の再生品が常用されている状況であり、この長さの差から様々な問題、不都合が生じる結果となった。そこで、嘉隆帝は旧式の経尺を探すよう命じ、嘉林の古霊の民家からその旧尺が発見された。発見された旧尺を基にして、銅（重さ斤二両）で原器を作り、各城營、鎮へ送った。中

⁹⁴ 『大南典例撮要』戸例、権量、衡碼の条/「嗣徳二十三年定権者、銖両斤鈞石也。以一千二百黍為重十二銖、兩之為兩、二十四銖為兩、十六兩為斤、三十斤為鈞、四鈞為石。割注に「查出漢書律曆史以黃鍾之龠為準」とある。

⁹⁵ 『大南会典事例統編』巻四十、刑部三、縦放軍人歇役の条/「嗣徳二十三年、刑部臣片叙、五月日、戸部臣閱拷船戸阮有戦盗売官糧之案、進呈欽奉硃批、律、炤清文多差、臨難期間。此石字及千総・把総之類、本国皆無。（中略）刑部臣遵奉悉心查究、諸書無有見解。惟漢書律曆志（中略）則似乎石亦斛也。或以権而名其両量、係清自古通俗、未可知。」

⁹⁶ 『大南寔録正編』第1紀卷41、嘉隆9年秋7月の条/「八月放度田經尺于中外。經尺、舊黎所製也。行之既久、民間所常用。嘉隆五年始用中平尺。其制稍長、以放度田畝数多差殊者。帝名訪求舊尺得于嘉林古霊[社名]民家。遂如式以銅[重斤二両]為之放送諸城營鎮。其公私田土以前業用中平尺勘度者、修簿存照嗣有争地界訴隱漏及報墾者、以經尺度之。」

平尺を用いて作成された帳簿もすでに「若干（『会典』による）⁹⁷」存在したが、これはその証明をつけることでそのままよしとされた。すでに開墾された土地や、土地に関する争い、隠漏の訴えについては、黎朝の経尺を用いて測ることとした。

これらのことから、第一に、嘉隆帝は自ら定めた尺よりも、慣習的に根強く用いられていた黎朝の旧尺の使用を認める判断を下していたことになる。また、黎朝の旧尺も、常用されている尺のなかでは原器となり得る尺がなく、簡略化されたものが主であったことも読み取れる。それ故に、原器とできるような旧尺を探す必要が生じたのであろう。さらに、中平尺が定められてからも、この新尺を用いて作成された帳簿は若干数にとどまっていたことから、皇帝によって定められた法規も、必ずしも即時に周知徹底されるとは限らなかった実態も浮かび上がってくる。

この中平尺に関して、『会典』ではさらに中部の事例について触れられている。嘉隆9年（1810年）に、クアンドウック、クアンチ、クアンビン、クアンナム、クアンガイ、ビンディン、フーイエン、ビンホア、ビントゥアンそれぞれの鎮へ、一面に「嘉隆九年秋八月」、もう一面に「頒行度田尺工部堂欽造」と刻まれた尺が送られ、以後この尺を用いることが定められた⁹⁸。

一方、ゲアンとタインホアに対しても、それぞれ一つの尺が送られたが、そこには片面には同じく「嘉隆九年秋八月」と刻まれていたが、もう一面には「頒行度田舊経尺工部堂欽造（下線筆者）」とあることに注目しなくてはならない⁹⁹。つまり、阮朝以前、広南阮氏の勢力圏であった中部に対しては、嘉隆帝の定めた尺、阮朝独自の制度を普及させようとする一方で、北部地域ダン・ゴアイ（第2章第2節参照）で実権を握っていた鄭氏の勢力範囲では、『寔録』にもあるように黎朝期の旧尺の使用を引き続き認めていたことが明確に示された。そしてその鄭氏の勢力圏は、ゲアン、タインホアを含めた北部地域一帯とすることができる。こうした勢力圏、文化圏の特定は、第2章で検討する行政区画の枠にとらわれない共通文化圏の検討（第2章第6節）に対しても、示唆を与えてくれる。

明命帝の時代になると、明命6年（1825年）、土地測量用に作られた新しい尺が内務府に渡された際、新旧の尺の長さが異なっていたことが明らかになった。統一的な尺度にするため、各地方に官縫銅尺と官木銅尺のふたつを納めさせることを命じ、そ

⁹⁷ 『会典』巻54、戸部、倉諸権量、尺衡の条/「其自丙寅年来茲、何社村或用中平新尺下度已成簿籍若干。」

⁹⁸ 『会典』巻54、戸部、倉諸権量、尺衡の条/「一面刻嘉隆九年秋八月七字、一面刻頒行度田尺工部堂欽造十字頒給廣徳・廣治・廣平・廣南・廣義・平定・富安・平和・平順每鎮各一。以正度法。」

⁹⁹ 『会典』巻54、戸部、倉諸権量、尺衡の条/「一面刻嘉隆九年秋八月七字、一面刻頒行度田舊経尺工部堂欽造十二字頒給乂安・清化每鎮各一件。」

これらの差を比較検討しようとした¹⁰⁰。一方で中平尺については言及されていない。先にも述べたように、中央集権化を推し進めたことで知られる明命帝であり、その中央集権化を強力に推し進めている一端が、長さに関しては『国史遺編』中集の宮廷での衣服に関する記述の中に見て取れる。明命9年（1829年）に宮廷内の衣服を改めることを決めた。明命12年（1831年）には、繰り返し、そして詳細に内容（女性は四角い頭巾をかぶり、それが腰帯にまで届くことを禁ずる）と違反した場合の厳しい罰則規定（杖うち100回、枷をはめること1か月）まで設けている¹⁰¹。

『会典』にも見られたように、衣服に関する尺である官縫銅尺と、大工が用いる官木銅尺についても統一させようとの意図がみられ、一見すると嘉隆帝の時代とは異なり、画一的な統治体制の基盤作りを推し進めているかのようにみえる。しかし、支配体制の確立、国の統治にもっとも重要な土地の測量に関する尺、官田尺について言及が見られないことは、非常に疑問を感じる。土地測量用の新旧の尺の長さが異なることを認識した後にもかかわらず、官田尺については放任していたようにもみえる。これは、前述した米に関する重要な容積単位についての議論を先送りにしていたことを考えてみても明らかである。

以上のように、阮朝初期には度量衡に関して出された法令を見出すことが出来るが、フランスにより植民地化され、保護国となって以降はそうした法整備の試みは見られない。これは阮朝が主体的に法令の公布を行うことが難しくなったことが要因であろう。植民地期後期では、フランス植民地政府が公布した法令を追認する形で、阮朝が同様の法令を公布し、それがフランス側の官製年報に載っている事例も見られる¹⁰²。

第2節を通じて検討した阮朝の度量衡法制度の整備について、得られた知見を再度整理したい。まず、第一に、度量衡関連法の整備は初代皇帝、嘉隆帝と次期皇帝、明命帝の二人によって進められた。第二に、嘉隆帝は地方自治を認めていた皇帝であり、その姿勢は度量衡の側面からも明確に確認できた。それは阮朝以前に阮氏が支配していた中部に関しては阮朝独自の政策を進め、一方阮朝以前、鄭氏の勢力圏であった北部に対しては、黎朝時代の制度をそのまま用いることを容認していたことも明らかとなった。また、阮朝や植民地期でいう「北部」には入っていないゲアン、タインホアまでが鄭氏の勢力圏であり、以前の制度が根強く残っていた地域であることが確認でき

¹⁰⁰ 『会典』巻54、戸部、倉諸権量、尺衡の条/「勅。邇來新製尺、式交在內務府。遵行量度間、有新舊長短不齊。茲行咨諸地方、將原給之官縫銅尺並木銅尺、由部奉納、覆較確寔、具題候旨準、下成式遵行、以昭畫一。」

¹⁰¹ 『国史遺編』中集、明命9年9月の条/「北城副総鎮潘文璽、請改北城衣裙。從之。」および『国史遺編』中集、明命12年10月の条/「複申北城衣裙禁申。婦人不得被方巾、及腰帶。違者杖一百、枷絞一ヶ月。」

¹⁰² 1943年4月30日、GGIが出したアレテで木材と石炭を測る単位として「デジステール」と「ステール」およびその倍量単位を用いることが強制されたが（本章第3節（2）「1887年10月以降」参照）、このステールの使用義務付けは1943年6月2日38番と39番の硃批論旨(du)によって承認されたことが記載されている[JOIF 1943: 2025]。

た。第三に、中央集権化を強く推し進めたことで知られる明命帝であったが、統治上非常に重要である米穀の計量や土地の測量に関する計量器については、統一されていない事実を知りながらも黙認していたことがうかがえ、困難や大きな混乱が予想される分野に対しては明命帝も積極的には手を出そうとしなかった様子が浮き彫りとなった。

以上から、フランスが植民地化する以前のベトナム社会というのは、相矛盾することが同時並行で進行する、それぞれの伝統、独自性が許容され、成り立っていた空間であったということができ、この特徴は植民地期に至っても引き継がれていくことになったと考えられる。

第3節 フランス植民地政権による度量衡関連法

フランス植民地政権がインドシナにおいて行おうとしていた度量衡政策は、主にフランス式度量衡、つまり十進法によるメートル法の導入であった。ここでは、フランス側によるインドシナでの度量衡法の整備を検討する前に、位置づけを明確にするためにも各国におけるメートル法の受容について(1)で簡単に整理する。

次に、インドシナにおける度量衡関連法とメートル法の受容について(2)で検討する。植民地政権による度量衡関連法の整備過程は、フランスが仏領インドシナ連邦を形成する1887年以前からコーチシナを直轄支配していた関係で、コーチシナ地域が先行して行われた。そのため、(2)では前半①1887年以前と、後半②1887年10月以降（仏領インドシナ連邦成立以降）に分けて整理する。また、第3、4章で検討する度量衡統一に関する通達についても、その発信時期は度量衡法整備過程と密接な関係がある。度量衡法公布の背景としても重要であるため、本節(2)②では、この通達の発信時期と目的についても合わせて整理する。

(1) 世界のメートル法とその受容

①メートル法の発祥と内容

メートル法は、そもそもフランス政府が万国共通の尺度を目指して推進したもので、ルイ16世、フランス革命政府、ナポレオンと体制の異なる政府によって作り上げられた。メートル法は度量衡（長さ、容積、重量）の共通尺度を定めたもので、その基準を大自然、地球と水に求め、それから長さの「メートル原器」（1m＝地球の円周の4千万分の1）と質量の「キログラム原器」を作成し、全世界に普及させた。この制度は十進法によって展開し、面積、体積の単位は長さの2乗、3乗、重さは体積と直接結びついている[松本 2000: 50]。

②フランスにおけるメートル法の導入¹⁰³

フランスでは、1791 年暫定メートル法を採択したが、それまでの単位名であるピエ、トワーズと異なり、なじめないと大衆から反発があった。そのため、1800 年にこの不平緩和のためパリ科学学士院で命名法修正が立案され、古い単位の復活を認め、数え方、位取りにはメートル法の十進法を生かすこととしたが、かえって混乱を助長させる結果に終わった。

1812 年、ナポレオンは古い単位との折衷方式を持ち出し、 $2m=1$ トワーズ、 $500g=1$ リーブルとしたが、十進法をも無視したこの方式は、その後のメートル法普及にも悪影響を及ぼすこととなった。

最終的には、1837 年の法律によって、1840 年 1 月 1 日以降はメートル法以外の単位を使用を禁止する強制に踏み切り、違反した場合は罰金を取る形で実施した。これをもって、フランスではメートル法が全国的に普及していく。

③世界のメートル法の受容

主要各国におけるメートル法の採用状況（メートル法採用の法律公布の年）は、以下の通りである¹⁰⁴。[強]は強制使用、[任]は任意使用。

ヨーロッパ

ドイツ	1871 年[強]	スペイン	1871 年[強]	フランス	1837 年[強]
イギリス	1897 年[任]	イタリア	1861 年[強]	オランダ	1816 年[強]

アジア¹⁰⁵

中華人民共和国	1929 年[任]	台湾	1954 年[強]	大韓民国	1949 年[強]
インドネシア	1923 年[強]	インド	1920 年[任]	フィリピン	1917 年[強]
カンボジア	1914 年[強]	タイ	1923 年[強]	南ベトナム	1911 年[強]
北ベトナム	1912 年[任]				

ここから傾向として読み取れるのは、ヨーロッパの主要国は 19 世紀、アジア各国は 20 世紀に入ってからメートル法を受容していったといえる¹⁰⁶。

¹⁰³ ②は松本[2000: 74]による。

¹⁰⁴ 各国のメートル法採用年については、国際度量衡局が発行した資料によってまとめられている小泉[2006: 164-169]による。資料名は Les Récents Progrès du Système Métrique, Création de Bureau International des Poids et Mesures et son Oeuvre および 1960 年第 11 回国際度量衡総会における報告（両者とも筆者未見）。

¹⁰⁵ 中華人民共和国は商用系という 2 次系統の単位が存在していたが、1959 年全面的にメートル法を採用することを宣言している。また、インドは、1956 年にメートル法単一制を国会で可決している[小泉 2006: 165-166]。

これらのメートル法採用年と、強制か任意かの判断は文献資料によって異なることも多い。それは各国それぞれメートル法の採用にあたっては、複数回にわたる法の施行を行いながら進めていることに起因する。

例えば、日本は1885年（明治18年）にメートル条約に加入、1889年（明治22年）にメートル原器の交付を受け、1891年（明治24年）に施行された度量衡法で尺貫法と併用する形で導入された、とある。しかし、メートル法の使用を義務づけたのは1951年（昭和26年）の計量法、あるいは1959年（昭和34年）に全国一斉に実施されたメートル法であるといえる¹⁰⁷。

また、ベトナムに関しては、省令によって南ベトナムは1911年12月14日に強制、北ベトナムは1912年8月23日に任意でメートル法が採用されたことになっている。しかし、このフランス植民地期の時代にベトナムを北と南に分けることはできない。また、以下(2)で詳述するが、南ベトナムの1911年の法律とは、恐らくコーチシナに対してフランス共和国大統領によって署名されたデクレの公布を指していると思われるが、日付が一致しない。一方ここで北ベトナムと言われているトンキンでは、1912年にメートル法に関する法律の公布は行われていない（本節(2)②「1887年10月以降（仏領インドシナ連邦成立以降）」参照）。「省令」という法律の位置づけも不明瞭であり、強制と任意の判断の根拠も不明である。インドシナの事例から見ても、国際度量衡局が把握しているメートル法採用年は、必ずしも実状を反映していないこともある、と指摘することができる。

また、インドシナの場合は以下(2)、および第3、4章で検討する通り、植民地期後半に至っても統一的度量衡制度の実現は不可能であったことから、法律上強制されたとしても、実際にメートル法が普及した年とは必ずしも一致しないということもできる。

ここでいえることは、メートル法の導入に関してはすでに多くの研究が見られるが、各国でそれぞれ異なる背景をもち、異なる統治体制の下で、異なる集団が自らの利権や国益を主張し合い、試行錯誤を繰り返しながら行われていくため、その採用年を提示することすら難しい分野であるということである。

一方で、統治する側がメートル法の導入を実行するために、「いつ」、「どこで」「どのような」法律や機関を制定、設置するか、それに対して統治される側が「誰が」「どこで」「どのように」啓蒙運動あるいは反対運動を行うのか、行わないのか、メートル法がどこから普及していったのか、その過程を丁寧に捉えたと、その国の背景、国民性、特徴が浮かび上がってくるといえる。

¹⁰⁶ ここで挙げた国の中で、メートル条約に加入している国と加入年は以下の通りである[小泉2006: 164-169]。ドイツ：1875年、スペイン：1875年、フランス：1875年、イギリス：1884年、インド：1958年、イタリア：1885年、タイ：1912年、オランダ：1929年。

¹⁰⁷ 日本におけるメートル法受容の過程はメートル法実行期成委員会[1967]に詳しい。

例えば日本では、根強い反対運動が行われる一方で、1903 年という早い段階から中央度量衡器検定所を設置、1894 年には官民の有識者や度量衡事業関係者によって大日本度量衡会が結成され、機関誌の発行も行われている[メートル法実行期成委員会 1967: 101, 109]。こうした動きは、インドシナでは見られなかったことである。

これらのことを踏まえて、以下インドシナの事例について本論を通して検討していく。

(2) インドシナにおける度量衡関連法とメートル法の導入

①1887 年 10 月以前

フランスのコーチシナにおける影響力、支配の進展であるが、まず 1861 年にビエンホア省、ザーディン省、ミトー省の 3 省をフランス軍が占領し、翌年の第 1 次サイゴン条約でこれらコーチシナ東部 3 省とコンダオ島を阮朝に割譲させた。サイゴンにはコーチシナ総督府が設置された。その後フランスは武力占領によってコーチシナ全域を支配下に置き、1874 年の第 2 次サイゴン条約でコーチシナ 6 省におけるフランスの完全な主権を承認させ、直轄領としてのコーチシナ植民地が成立した。

こうした支配体制の確立とともに、度量衡の関連法も早い時期から制定されている。度量衡に関する最初の法律は、確認できる範囲で 1863 年 12 月 24 日の決定(decision)である。この決定では、フランスの度量衡が唯一公式のものだと植民地の中に知らしめることを規定している一方で、穀物用のベトナム式計量器ヴォン(vuông)は 40 リットルとすることも規定しており、つまりフランス式以外の計量単位も認められている¹⁰⁸。

また、1919 年 3 月 10 日にインドシナ総督に宛てて作成された報告書¹⁰⁹の中では、1863 年 9 月 28 日に公式報告(rapport légal)の中でベトナム式度量衡制度をフランス式に変更することが明記されている、と報告されている。同レポートでは、1865 年 10 月 3 日のアレテによって土地の測量にはヘクタールを使うこと、1870 年の命令(order)では、穀物計量単位であるヴォンは 20 リットルとすることが定められたことも合わせて報告している。

史料の制約上、これら 3 つの法令の原文を見ることは叶わなかったが、少なくとも、フランスは第 2 次サイゴン条約によってコーチシナ全域を手中に収める前段階から、度量衡に関して高い関心があり、関連の法令制定を開始していることがわかる。さらに、土地測量に関わる重要な面積単位については、早い段階からヘクタールの使用を進めているのに対し、穀物用の計量器、つまり容積単位は現地で馴染みのあるヴォン

¹⁰⁸ 1898 年 2 月 11 日インドシナ総督によって公布された「特定の容積単位を植民地全域で使うことを義務づける」アレテ[JOIF 1898: 252-253]、および 1903 年 7 月 10 日に同じくインドシナ総督によって「コーチシナについては重量と容積単位についてフランス式制度を導入する」ことを決めたアレテ[JOIF: 826-828]の前文による。

¹⁰⁹ TTQGI, RST, 71315-03, Rapport à Monsieur le Gouverneur Général de l'Indochine (Hanoi, le 10 Mars 1919). Le directeur des affaires économiques au Gouvernement Général. Signé : GARNIER

をリットルによって容量を規定し、統一化を図ろうとしている。この違いは、統治制度の完成に重要である面積の測量は、フランス式を早期に浸透させたい意向があった一方で、人々の生活の中心である容積計量器と単位については、段階的にフランス式制度へ移行させた方がスムーズであるという認識が背景にあったと考えられる。

コーチシナにおいて、各単位のメートル法による定義だけでなく、計量検定制度にまで規定を設けた初めての法令が公布されたのは、1881年のことである。これに先立ち、1880年8月30日に特別委員会が任命され、度量衡統一計画に関する報告書が作成された¹¹⁰。それを受けて1881年2月21日にコーチシナ知事によってアレテが公布され、1882年1月1日から20区（サイゴン、チョロン、ザーディン）における市場、商店、船、作業場でフランス式度量衡制度を用いることが決められた[AGI 1889 1er: 117-118]。このアレテは12条で構成されており、今後コーチシナだけでなく、仏領インドシナ連邦形成後の度量衡法令にも影響を与える重要なアレテである。具体的な内容は、以下の通りである。

- 第1条：1882年1月1日から20区全域において、市場、商店、船、作業場で全ての商人は、フランスで使われている度量衡以外の使用を禁じられる。
- 第2条：計量検定員の役職を創設する。この役割を担う公務員は、このアレテの実施・実行、度量衡使用の正確さ、違反の確認に注意を払う責任を負う。定められた手数料を適用する。
- 第3条：全ての度量衡は商業活動で使われる前に検印を押さなくてはならない。計量器の原器は、内務局、サイゴン市役所及びチョロン市役所に置かれる。
- 第4条：計量検定用の検印はサイゴンの内務局で登録される。
- 第5条：一年に少なくとも1回計量検定を行い、新しい検印を貼付することで確認する。この定期計量検定以外に、特別検定、総検定、部分検定、あるいは個人的な検定が命じられる場合もある。
- 第6条：計量検定員は、商人の住所まで赴き、携帯用の登録簿を備え、計量検定であると告げた後商人は署名をする。拒否した場合は拒否した旨を記載する。
- 第7条：計量検定員は、違反調書が一見して反対であると明らかになった場合には、委員会に提出しなければならない。
- 第8条：最初の計量検定は無償で行われる。それに続く各計量検定では、検印に税を徴収する。その税額は今後植民地評議会に通知され、アレテによって決定される。

¹¹⁰ 1881年2月21日コーチシナ知事によって公布された「20区における市場、商店、船、作業場でフランス式度量衡制度を用いる」ことを規定したアレテの前文による[AGI 1889 1er: 117-118]。

第 9 条：1882 年 1 月 1 日から、上記で定義した以外の度量衡を維持することは全ての商人に対して禁止される。

第 10 条：全ての不許可、不備、変造された計量器は廃棄される。

第 11 条：このアレテの違反は、刑法典 479 条第 6 項に従って罰せられる。

第 12 条：内務局がこのアレテの実施、執行の責務を負う。必要なところにはどこにでも登録し、公示する。

つまり、計量検定員を創設すること、計量器は検印を押す必要があること、検定は少なくとも年一回の年次定期計量検定を行うこと、検定員は計量器保有者（商人）の住所まで赴き検定を行うこと、全ての未許可計量器、不正確な計量器、変造された計量器は破棄されること、などが決められている。計量検定の税額の確定は先延ばしされているが、アレテ公布後の 3 ヶ月後にあたる 1882 年 5 月 22 日には、年次計量検定税が決められたと報告されている¹¹¹。その税額はそれぞれ、長さ・重量・容積：0.01 ピアストル、さおばかり・天秤ばかり：0.04 ピアストル、台ばかり：0.2 ピアストルであった。

筆者が確認できた計量検定税の金額表は 1887 年 1 月 3 日に出版された植民地評議会の議決(délibération du conseil colonial)[AGI 1894 1er: 327]である。これによると、年次計量検定の税額は以下のように定められていた。長さ：0.04 ピアストル、重さ：0.03 ピアストル、容積：0.05 ピアストル、天秤ばかり：0.13 ピアストル、竿ばかり：0.25 ピアストル、台ばかり：0.75 ピアストル。

1882 年のものと比べると、5 年間で項目が細分化され、税額も 3-6 倍の上昇が見られる。全体的特徴としては、長さ（定規）や容積計量器といった、形状が複雑でないものは税額が低く抑えられていることがわかる。一方で、分銅などが多数ある天秤ばかりや竿ばかりは検定も複雑で時間がかかるため高額になっている。もっとも税額が高い台ばかりは、計量する対象が数十キロ単位の重量のあるものであり、つまり取り引き規模が大きい大型商店などが使用するものであるため、その分税額も引き上げられている可能性もある。

1882 年 7 月 31 日には、商業上穀物を計量する際の容積単位として、10 リットル、20 リットルと 40 リットルの計量器の使用と製作を許可するアレテが公布された¹¹²。

こうした度量衡法令史上重要となる 1882 年のアレテと、その背景となった 1881 年の特別委員会の設置と報告書作成、そして計量検定の税額の確定は、全てコーチシナの

¹¹¹ TTQGI, RST, 71315-03, Rapport à Monsieur le Gouvernement Général de l'Indochine (Hanoi, le 10 Mars 1919). Le directeur des affaires économiques au Gouvernement Général. Signé : GARNIER

¹¹² 1898 年 2 月 11 日インドシナ総督によって公布された「特定の容積単位を植民地全域で使うことを義務づける」アレテ[JOIF 1898: 252-253]、および 1903 年 7 月 10 日に同じくインドシナ総督によって「コーチシナについては重量と容積単位についてフランス式制度を導入する」ことを決めたアレテ[JOIF: 826-828]の前文による。

初代文官総督、ル・ミル・ド・ヴィレ(Le Myre de Vilers) (任期：1879-1883 年) の在任中に行われている。ヴィレは軍政下のコーチシナをより民主的制度へ置き換えるため起用され、インドシナ最初の諮問的代議機関であるコーチシナ植民地評議会を設置した総督である[太平洋協会編 1940: 24]。

以上から、コーチシナでは 1860 年代前半から度量衡への関心が高く、統治上重要な面積単位は、コーチシナ全域を対象として早くからヘクタールが導入された。一方、計量検定など度量衡周辺の幅広い分野にまで詳細な規定が盛り込まれた法令も公布されていたが、その施行範囲は 20 区という非常に限定された区画でのみ行われた。20 区はサイゴン、チョロン、ザーディンという商業的にも最も栄えていた地域であり、まずそうした商業の中心地からのメートル法の定着を目指していたことがわかる。

穀物計量の容積単位に関しては、1863 年ではヴォン=40 リットル、1870 年ではヴォン=20 リットル、1882 年ではそれぞれ 10 リットル、20 リットル、40 リットルの容積計量器が認められており、手探りの状態が垣間見られる。メートル法の施行については、強権的に一律に実施しようとしたのではなく、実現可能な地域を特定し、現地の慣習も尊重した形での導入が目指されていたことがうかがえる。

1883 年 8 月 25 日の第 4 回仏安条約によって、アンナンはフランスの保護権を承認し、トンキンも事実上フランスの統治下に入った。アンナン (阮朝) による度量衡法の整備は前項に示したとおりである。1883 年から 1887 年の期間中、フランスによるアンナンに対する度量衡関連法の公布は管見の及ぶところ見られない。

一方、トンキンでは、1886 年ポール・ベール(Paul Bert)総督が度量衡統一に対して非常に強い関心を寄せており、メートル法の一律の実施ではなく、メートル法と調和する現地の度量衡制度を模索する研究を始めていた¹¹³。ベール総督は、インドシナにおいて最初に協同主義を実践に移した科学者出身の総督である。1886 年 1 月にアンナン及びトンキンの理事長官に任命され、同年 11 月にハノイで客死するまでわずか 6 ヶ月間しか統治しなかったが、彼の施政はフランスの対インドシナ政策史上、一新紀元を画するものとさえ言われる[太平洋協会編 1940: 27]。

コーチシナ、トンキン共に、統治上注目すべき改革、政治を行った総督によって、度量衡問題が取り上げられてきたことが、大きな特徴といえる。

②1887 年 10 月以降 (仏領インドシナ連邦成立以降)

仏領インドシナ連邦が成立して以降、最初に出された度量衡の法令はコーチシナに限定されたものであった。コーチシナ知事は 1891 年 6 月 22 日、サイゴンとチョロンの薬剤師の用いる度量衡は 1892 年 7 月 1 日からフランス式の制度とすることを定めた [JOIF 1891: 702]。これは 1881 年 2 月 21 日のアレテの規定に順応させるためであり、ま

¹¹³ TTLTQG1, RST, 71315-01, 行政・政治局監督官(M l'inspecteur des affaires Politiques et administrative)兼地方度量衡委員会委員長に対して作成された文書 (作成者、日付不詳)。

ずアジア人の薬剤師のため、各店舗と倉庫にフランス語、ベトナム語（クオック・グー）、中国語の3カ国語併記の度量衡対照表を掲示することを定めている。つまり、この1891年のアレテ公布は、1881年のアレテが実際に機能していなかったことを物語っている。その上で、人々の健康に深く関わる薬の調合に関してだけでも、フランスの統一的度量衡制度を浸透させたいという意図が読み取れる。

インドシナ総督府による度量衡統一は、インドシナ連邦の財政・行政機構を初めて体系的に整備し、植民地支配を完成させたポール・ドゥメール(Paul Doumer)総督（任期：1897-1902年）以降、本格的に行われた（表1—3参照）。

ドゥメール総督着任以降、1897年から第1回植民開拓プログラム、耕地面積測量政策を実施することとなり、1897年6月7日、北部における長さに関するアレテが出され、アンナンメートル（つまりトゥオック、thước）は0.4メートル、1マウ(mẫu)=3600平方メートルと定められた[JOIF 1897: 481]。このアレテは全4条で構成され、第2条では各省知事は速やかに土地測量の修正を行うよう求めている。第3条では、金属製の原器を各省の法務局に配置し、これを不動産に関する全ての紛争に対する根拠とすることも定めた。他方で、容積や重量単位については触れられていない。これは、植民地政府による新税制では、より正確な耕地面積の測量と金納制への移行を目指しており、その関係上度量衡制度は面積に関する単位が最も重要となったことが背景にあると考えられる。

次に決められたのは、金、銀やアヘンの計量に用いられるテール(taël)である。インドシナ総督は1898年11月24日、1テールは0.376kgとするアレテを公布している[JOIF 1898: 990]。

表 1—3 主要な度量衡法と度量衡に関する通達の発信年

西暦	歴史事項	通達
1887	フランス領インドシナ連邦成立 インドシナ総督の設置	
1897	ポール・ドゥメール総督就任(～1902年) 第一回植民開拓プログラム開始 耕地面積測量政策実施 <i>1 トゥオック=40cm、1 マウ=3600 m²へ(アレテ)</i>	
1898		度量衡統一法草案に対する意見
1901		各省における度量衡実態調査依頼
1903	総合的度量衡法実施(アレテ) 公式ピクル=60Kg に統一	
1910		度量衡統一を実現させるための方法について
1911	アルベール・サロー総督就任(～1914年) コーチシナで総合的度量衡法実施(デクレ) ↑1903年のアレテと類似	各省における度量衡実態調査依頼
1912	外国製計量器の廃止(アレテ)	
1917	アルベール・サロー総督就任(～1919年)	
1919	フランス本土でのメートル法のインドシナ適用 (アレテ)	
1921		フランス式度量衡制度へのベトナム式制度 導入の是非について
1927		1911年コーチシナにおける決定の トンキン実施について
1936	度量衡に関する委員会の設置(アレテ)	各省における度量衡実態調査依頼
1943	木材、石炭用単位、デンステール、ステール採用(アレテ)	

(出所)Journal Officiel de l'Indochine française 1897年p.481, 1903年p.826-828, 1911年p.2655-2657, 1912年p.1763, 1919年p.1254, 1938年p.1732, 1943年p.2025およびベトナム国家第一文書館トンキン理事長官府コレクションNo.71312, Extension au Tonkin de la réglementation des poids et mesures en application en Cochinchin et au Cambodge 1899-1937. No. 71315, Arrêtés et circulaires du Gouverneur général.1886-1937. No.71315-02, Application au Tonkin et en Indochine du système métrique français 1901. No.71315-03, Application du système métrique française en Indochine 1914-1934. No.71315-01, Arrêtés et circulaires du Gouverneur général, Rapport des chefs des province 1886-1937. No.71315-04, Application au Tonkin du système métrique française 1936-1938から筆者作成。
斜体は度量衡関連法。

これらふたつの法令公布の間に、総督府はコーチシナ地域に限定して 1898 年 2 月 11 日にアレテを公布している。これは、1881 年に公布された全 12 条に及ぶアレテを発展させたもので、全 15 条で構成されている。この先 1903 年、1911 年に公布されるインドシナで最も完成された法令の基礎となるものであるため、具体的な概要を以下に示す。 () 内日本語は筆者補足。

第 1 条：1898 年 7 月 1 日から、植民地全域で以下の定められた容積単位を用いる。

升(measure)、あるいはヴォン(vuong)=1 リットル

=5 リットル

=10 リットル

=20 リットル

=40 リットル

この計量器は、一級ブリキで作られていなくてはならない。補強のために鋳鉄の金環、2つの柄を取り付ける。全ては政府第3事務局に登録された型に従う。高さとは直径は等しい。

第2条：市場の農民は自らの負担で計量器一式を備えることを義務づけられる。備えない場合には、一ヶ月ごとの遅れと各計量器を備えないことに対して100ピアストルの罰金が科される。

第3条：各監督庁の会計の係員は容積の計量検定の役割を与えられる。（役割を与えられた係員は）彼らの地区の管轄内にある裁判所か治安法廷の前で宣誓する。

第4条：地区の行政長の指導の下、アレテの実行、正確な度量衡の使用、違反の確認を行う責務を負う。

第5条：記録は、日付とサインは手書きによって書かなくてはならない。反証が提起されるまではそれらは正当な証拠となる。

第6条：容積計量器は使用する前に、計量検定の事務所で最も基本となる方法で、検印されなくてはならない。

第7条：年に一回計量検定を行い、新しい検印を貼付する。これ以外にも特別検定、総検定、部分検定、あるいは個人的な検定を裁判官が必要と判断したときに行う。

第8条：年次計量検定のため、検定員は各村の村長のところへ出向かなくてはならない。村長は事前に各商人を決まった時刻に集め、計量検定と検印を受けるために所有している計量器を持参させる。計量検定員は（その）年の検印を持参し、携帯用の登録簿に検定活動を記載する。

第9条：計量検定員は計量検定税（徴収）のため、各村に集団的役割を設ける。計量検定税の収入は予算第1章6節の「雑収入」の欄に記入する。

第10条：各計量検定員は、計量検定のためのゲージを持参しなくてはならない。容積計量器一揃いも原器として使用するため持参する。

第11条：初回の計量検定は、計量検定員の事務所で最も基本的な方法で無償で確認する。年次計量検定は、各検印ごとに10セントの税を課す。不定期検定、特別検定はいかなる税の徴収の根拠・理由にならない。

第12条：不許可、不備、変造された計量器は全て没収され破棄される。

第13条：このアレテの違反は、刑法典479条、480条、481条と482条に従って罰せられる。ただし、植民地において有効な刑法典423条および1851年3月27日の法律の適用を妨げない。

第14条：会計の担当者は、計量検定の責務を負い、巡回費用として年1200フラン受け取る。その他に行政によって交通手段は免除される。

第15条：コーチシナ知事はこのアレテを実施・執行する責務を負う。必要な場合には、常にそれを公示する。

1881 年のアレテと比較して、大きな変更点は以下の 8 点である。

第 1 に、対象となる度量衡がフランス式度量衡全般の適用から、容積単位のための適用となり、その容積単位もベトナムの慣習で用いられてきたヴオンという単位名の使用も認められた。第 2 に、対象地域は 20 区のみから植民地全体（つまり直轄植民地であるコーチシナ全域）に拡大された。これら 2 点から、商業中心地以外では、フランス式度量衡制度を最初から目指すのではなく、もっとも多種多様な計量器、単位が使用されていた容積に関して、最初に統一を図ろうとしたことが読み取れる。

第 3 に、罰則については新たに第 2 条が加えられ、罰金が科されることと罰金の額が明示された。罰金の額も 100 ピアストルと非常に高額な金額が提示されている。

第 4 に、計量検定員は新たにスタッフを設ける（増員する）のではなく、各監督庁の会計が兼務することになった（第 3 条）。第 5 に、計量検定員は個人個人の商人の住所に赴いて検定を行う方法ではなく、村ごとにまとめて、一度に検定を行うことになり、各村には計量検定税の徴収を担う集団が設けられた（第 8 条、第 9 条）。第 6 に、年次計量検定の税額は 1 検印につき一律 10 セントに定められた。第 7 に、計量検定員の具体的な手当支給額が明示された（第 14 条）。第 8 に、計量検定員の職務内容についての細かい内容が追加された（第 4 条、第 5 条）。

第 4 から第 8 は、全て計量検定員についての規定であるが、これは既存のスタッフを兼務させることで予算を縮小する代わりに、計量検定実行の際の負担を軽減させることが目的と思われる。また、計量検定が統一的に、かつ全地域で同質の内容で行われるよう、検定の業務内容についてもより細かい規定が追加されている。

その後、容積単位のみならず、重量に関しても、単位名、メートル法換算値、計量検定、計量器製造関連項目まで備えた体系的なアレテが総督により 1903 年 7 月 10 日に公布された [JOIF 1903: 826-828]。このアレテは全 20 条で構成されている。主な内容は、表 1—4 に挙げられた度量衡制度をコーチシナ全域で実施すること（第 1 条）である。

表 1—4 に挙げられた制度を実行するため、第 2、3、4、6 条は、計量器の素材、形状について細かく規定されている。第 5 条は、公式ピクルは 60kg に固定することが挙げられている。第 7 条から第 20 条は、1898 年 2 月 11 日のアレテ第 2 条から第 15 条にそれぞれ対応しており、全く同じ内容である¹¹⁴。

¹¹⁴ 1898 年 2 月 11 日のアレテと比較すると、以下の 2 つの条が本文が完全には一致しない。その箇所は、第 14 条で「第 6 節」が欠落していること、第 19 条では計量検定員の手当が具体的な額の提示から「1897 年 7 月 3 日に定めた巡回費用の手当を受け取る」と変更されていることである。上記 2 つは、注目すべき大きな変更、修正ではない。

表 1—4 1903 年のアレテ第 1 条で提示された新度量衡制度

現地新単位名	メートル法・十進法における相当量	計量器の形状と素材
重量単位		
基本単位		
1 ドン・カン・タイ (đồng cân tây)	グラム、キログラムの1000分の一	銅製円柱状の分銅
倍量単位		
2 ドン・カン・タイ 5 ドン・カン・タイ 10 ドン・カン・タイ 20 ドン・カン・タイ 50 ドン・カン・タイ 100 ドン・カン・タイ 200 ドン・カン・タイ 500 ドン・カン・タイ 1 カン・タイ(cân tây)	2グラム 5 グラム 10 グラム 20 グラム 50 グラム 100 グラム 200 グラム 500 グラム 1 キログラム。 0.01ピアストル硬貨100枚分の重さ (1セント:フランス共和国の肖像がフランスで刻印された、 穴の空いていないもの)	銅製円柱状の分銅
2 カン・タイ 10 カン・タイ 20 カン・タイ 50 カン・タイ 1 タ(ta)あるいはピクル(picul)	2 キログラム 10 キログラム 20 キログラム 50 キログラム 60 キログラム	鑄鉄の分銅
100 カン・タイ 1000 カン・タイ	100 キログラム 1000 キログラム	
重量で確認する計量器		
分量単位		
5 タック・ドン・タイ (tắc đồng tây) 2 タック・ドン・タイ 1 タック・ドン・タイ 1 リー・ドン・タイ	5 デシグラム、グラムの10分の5 2 デシグラム、グラムの10分の2 1 デシグラム、グラムの10分の1 1 ミリグラム、グラムの1000分の1	真鍮の薄片
容積単位		
基本単位		
ヴオン・1・バット・タイ (vuông 数 bat tây)	1 リットル、1立方デシメートル	ブリキ製で補強のために 金環をつけた計量器
倍量単位		
ブオン・2・バット・タイ ヴオン・5・バット・タイ ヴオン・10・バット・タイ ヴオン・20・バット・タイ ヴオン・1・ザ (vuông 数 gia) ヴオン・50・バット・タイ ヴオン・100・バット・タイ	2 リットル、リットルの2倍 5 リットル 10 リットル 20 リットル 40 リットル 50 リットル、1ヘクトリットルの半分 100 リットル、1 ヘクトリットル	ブリキ製で補強のために 金環をつけた計量器
0.5ヘクトリットルと同量の計量器		
分量単位		
ヴオン・5・ハップ・タイ (vuông 数 hạp tây) ヴオン・2・ハップ・タイ ヴオン・1・ハップ・タイ ヴオン・1・トウオック・タイ (vuông 数 thược tây)	5 デシリットル、リットルの10分の5 2 デシリットル、リットルの10分の2 1 デシリットル、リットルの10分の1 1 センチリットル、リットルの100分の1	ブリキ製の計量器

(出所)Journal Officiel de l'Indochine française 1903年p.826より筆者作成。

注: つづり、発音・声調記号は原文のまま。

このアレテから、制度としては基本的にメートル法によるが、単位名の表記はベトナム語に訳されており、現地語読みを尊重した形で導入されたことがわかる。さらに、十進法の単位名の他に、60kg はピクル、あるいはタ、40 リットルはザと、米穀の取引で商業上使われていた主要単位も組み込まれている。1898 年のアレテでは、40 リットルの計量器はあったにもかかわらず、この「ザ」は単位名として挙げられていなかった。この 5 年間で、ザはブオンと並び慣習の中に根強く定着している単位として、新たに認識された可能性がある。

コーチシナにとって、このアレテの意味合いは、1898 年に容積の単位と計量器を規定したが、次の段階として容積に加えて重量単位についても、メートル法と合わせた制度を導入したこと、といえる。

同じく 1903 年 7 月 10 日に、上記のアレテの第 1 条から第 5 条は、インドシナ全域でも適用することが定められた[JOIF 1903: 828]。つまり、インドシナ全域では第 7 条以下の計量検定に関する規定は除外し、まず度量衡の制度と計量器について周知させる方向であることが読み取れる。表 1—4 を実施するには、重量の計量器の種類、素材、形状を規定した第 6 条も同様に適用する必要があるが、ここでは除外されている。これが意図的に外されたとすれば、その理由はおそらく、はかりと分銅一式を新たに備えるにはコストも高く、コーチシナと比較して度量衡に関してまだ法整備も進んでいないトンキンとアンナン、ラオス、カンボジアでは現実的ではないと判断されたためではないか。

この時期発信された通達に目を向けると、1898 年および 1901 年に「度量衡統一草案に対する意見」¹¹⁵と「各省における度量衡実態調査依頼」¹¹⁶の通達が出されていることから、1903 年の 2 つのアレテはドゥメール総督時代から草案が練られ、準備されてきたものだとわかる。

1903 年のアレテに関してであるが、コーチシナで 2 回にわたって条文の修正が行われている。最初は 1905 年 3 月 7 日の GGI によるアレテで、1903 年のアレテ第 7 条が以下のように変更された。

1903 年アレテ第 7 条：一律に市場の農民に対して自己負担で計量器を揃え、揃えられない場合は計量器一つに対し、一ヶ月の遅れごとに 100 ピアストルの罰金を科す。

1905 年 3 月 7 日のアレテ：行政官と各省知事は個別の事案の場合には、各市場の経営仕様書の中に挿入された条項によって、重量と容積の計量を決定する。

¹¹⁵ TTLTQG1, RST, 71315。

¹¹⁶ TTLTQG1, RST, 71315-01。

つまり、新しい計量器を自己負担で揃えることに対して批判が多かった、あるいは難航したため、特例を認める判断を下したことになる。

もうひとつは、1909年10月9日に同じくGGIによって出されたアレテで、1903年の第9条が補完されている。この第9条は、計量器の不正は計量検定員が取り締まることを規定しているが、1909年では、「税、関税の係員、憲兵、ベトナム社会の現役の地方権力者も違反を確認することができる。また、計量検定員に提出して判断を仰ぐため、その計量器を押収することができる」と追加された。これは、計量検定員の負担が大きすぎたこと、人員を増強し、取り締まりを徹底したい意図があったものと思われる。

これらふたつの条項の修正、追加は、より実態に即した形で実際に1903年のアレテを実体化しようとしていることが読み取れ、ある程度コーチシナではこのアレテが機能していた、あるいは機能させようとしていたことがわかる。

1911年10月27日には、共和国大統領によって署名されたデクレ（décret）が公布される[JOIF 1911: 2655-2657]。しかしこのデクレは、1903年に公布されたアレテの内容とほぼ同じであり、施行範囲がインドシナ全土ではなくコーチシナに限られている。つまり、1903年においては総督がアレテを出し、その後現地の状況を見定めた上で、実現可能な地域に限定してより上級組織である共和国大統領がデクレを再公布したといえる。

1903年のアレテと1911年のデクレを比較して最も大きな特徴は、重量、容積に加えて長さの単位も規定されたことである。具体的には1トゥオック＝1メートルとし、そのメートルの倍量単位と分量単位を含め適用することが定められた。これによって、法律上コーチシナでは度・量・衡3つの単位系がメートル法によって規定され、統一の制度を用いることになった。

それ以外に、1903年のアレテと1911年のデクレで趣旨が大きく異なるような条項の変更は行われていない。第2—15、17—19条は1903年のアレテと同じである。その他、細かな相違点は、以下ようになる。

①第1条に関して：表1—4の「1センチグラム＝1 phât đông tây」が「1 phân đông tây」となっており、ベトナム語のスペルミスが訂正されている。

また、計量器の形状として、1903年のアレテでは1-20gの分銅は銅製の円柱状の形状とされ、50gから50kgの分銅は鋳鉄の分銅を用いることになっているが、1911年のデクレでは1gから50kgまで、全ての分銅は銅製の円柱状の形状を持つものになっている。

②第16条に関して：1903年のアレテは、年次計量検定税は検印ごとに10セントであったが、1911年では初回は無償で行い、年次計量検定では長さ：0.08 ピアストル、重量：0.06 ピアストル、容積：0.1 ピアストル、竿ばかり：0.2 ピアストル、天秤ばかり：0.4 ピアストル、台ばかり：1.25 ピアストルに変更された。これは1881年から1898

年まで適用されていた、計量器の種類によって税額を変更する方法が再度導入されたことになる。

③第20条に関して：法の実行責任者が、1903年ではコーチシナ知事のみであったが、1911年のデクレでは植民地省、司法大臣、法務省となり、より上級機関が責任を負うことになった。

以上が、1911年デクレの内容であるが、1905年、1909年に行われた条項の変更、修正が全く生かされていないことも指摘しなくてはならない。また、法の実行責任者の中にインドシナ連邦の行政機関、組織名が一つもあげられていない。つまり、このデクレは形式上公布されたと考えることもでき、実行可能性については疑問を持たざるを得ない。

一方、保護国に対しては、1912年8月26日、アルベール・サロー(Albert Sarraut)総督(任期：1911-1914、1917-1919)によって外国発祥の度量衡の使用が禁止されるアレテが出された[JOIF 1912: 1763]。全7条のこのアレテは、保護国においてはメートル法施行まで、メートル法以外に現地で慣用化している度量衡のみ認めるもので、その他全ての外国発祥の度量衡、特に天秤ばかり、あるいはイギリスのリーブルの目盛りがついた台ばかりを厳しく禁止する、というものである(第1条)。一方で、トンキンで1897年6月2日の1トゥオックを規定したアレテの条項と、インドシナ全域で公式ピクル=60kgとした条項を含む1903年7月10日のアレテ1-5条は維持される、としている。統一的度量衡制度を適用したいが、なかなか浸透しない現状に対して、保護国ではまず外国製のものから排除していこうとするものである。

こうした外国製の計量器を取り締まる人員としては、計量検定員を設けたり、検定員という役職名を兼任する人員を確保するのではなく、①司法警察員、②警察官、③権限を付与された公務員、④関税と税および公共事業を担当するヨーロッパ官吏、⑤水運警察官、がその役目を負うとしている。外国製の度量衡を問題にしたこともなく、早い時期から計量検定員について言及されていたコーチシナとはかなり異なる様相を呈しているといえる。

このアレテは、公布4ヶ月後の1912年12月に条項の修正が行われている[JOIF 1912: 2512]。

この修正の背景を示唆する史料が残されている。それは、中国人の帮代表者がアレテに異議を唱えてトンキン理事長官に宛てて送った書簡と、彼らを擁護する弁護士からトンキン理事長官に送られた書簡である。

前者は、1912年10月15日にトンキンの主要各省における広東、福建といった帮の代表者によって作成されたもので、各帮の印鑑と署名がつけられている(写真1—1、写真1—2、写真1—3参照)¹¹⁷。

¹¹⁷ TTLTQG1, RST, 71315-02. Lettre: les chefs des congrégations chinoises soussignés à Monsieur le Résident Supérieur au Tonkin(le 15 octobre 1912). この書簡の最後には、フランス語で各帮と帮の所

写真 1—1

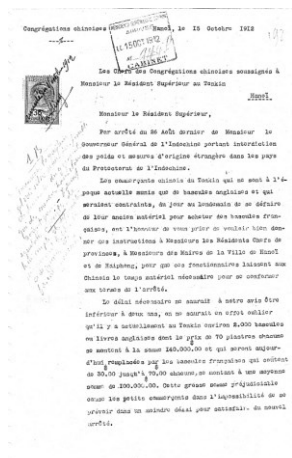


写真 1—2



写真 1—3



写真 1—1, 1—2, 1—3

1912 年 10 月 15 日に中国の帮代表者によって作成された書簡。

TTLTQG1, RST, 71315-02. Lettre: les chefs des congrégations chinoises soussignés à Monsieur le Résident Supérieur au Tonkin (le 15 octobre 1912).

彼らは、中国人に対してこのアレテに順応するための猶予期間を与える指示を、各省知事、ハノイ市長、ハイフォン市長に出すようトンキン理事長官に要望しており、その猶予期間は少なくとも 2 年は必要だとしている。その理由として、トンキンには約 2000 台のイギリス式台ばかりがあり、それぞれ 70 ピアストルの価格である。フランス式は 1 台 30—70 ピアストルするので、全体で 1000 万ピアストルもの費用がかかり、小規模の商人にはこの費用負担は不可能だとしている。

後者の弁護士からトンキン理事長官に宛てた 11 月 12 日の書簡¹¹⁸では、中国人とベトナム人の商人達がこのアレテを実行することは無理だと訴えてきていることを報告し、フランスの台ばかりを購入する準備期間として、法の執行を 3 ヶ月保留するよう要望している。また、このアレテの条文では、フランス式の見盛りのついた外国製の計量器が許可されていないとして、フランス以外の外国の見盛りがついたばかりを使用禁止にすると明記するよう求めている。

これは、台ばかりのほとんどは外国製であり、そうした大量の計量を必要とする大規模商人の多くは中国人であったため、特に中国人商人からの強い反発を招いたことがわかる。

在地が記載されており、その下に各帮の印鑑と署名がされている。各帮と所在地は以下の通り。広東帮長：ハノイ、ナムディン、福建帮長：ハノイ、広東および福建帮長：ハイズオン、バックニン、フー・ニン・ザン(Phu Ninh Giang) (ハイズオン省)、タイビン、バックザン。フランス語で広東および福建帮長と書かれていても、印鑑は広東のものだけの場合もある。また、最後のバックザンの広東および福建帮長は、フランス語の項目のみで実際印鑑や署名はない。

¹¹⁸ TTLTQG1, RST, 71315-02. Lettre: Monsieur Ferrand, Avocat-défenseur à Monsieur le Résident Supérieur au Tonkin (le 12 novembre 1912).

また、1912年9月6日に、トンキン理事長官は“Fairbanks U.S.A”と印されているアメリカのはかりで、英国のリーブルの目盛りがつけられたものを中国人の貿易商が使用しており、これがメートル法と同時に使われると混乱する恐れがあること、またこの混乱は現地人の不利益を犠牲にして中国人の利益につながることを挙げ、実際このはかりの使用状況について報告するよう通達が出されている¹¹⁹。これに対し、ニンビン省からの興味深い報告が残されている¹²⁰（写真1-4 参照）。

写真 1-4

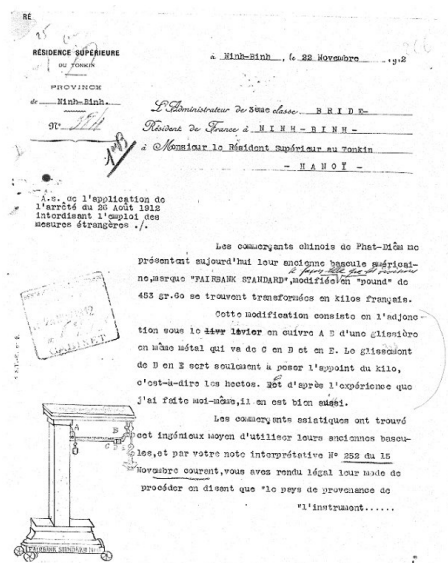


写真 1-5

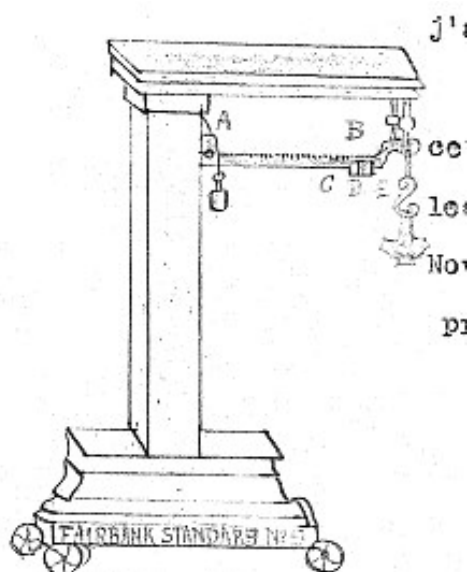


写真 1-4、写真 1-5

アメリカのはかり“Fairbanks U.S.A”に関するニンビン省からの報告。

写真1-5はスケッチ部分の拡大。はかりの台座下部に、“Fairbanks U.S.A”の文字が見える。

Letter l'administrateur de 3ème classe Bride Résident de France à Ninh Binh à Monsieur le Résident Supérieur au Tonkin. A.s. de l'application de l'arrêté du 26 Aout 1912 interdisant l'emploi de mesures étrangères (le 22 novembre 1912).

ニンビン省の知事は、このはかりを使ってメートル法への換算方法があることを報告している。リーブルの銅製分銅 A と滑り金具 B は C と D、C と E の間を動かすことができ（写真1-5 参照）、その滑り金具というのは D から E の間で 1kg の差を量ること

¹¹⁹ TTLTQG1, RST, 71315-02. Lettre circulaire. 1^{er} bureau. Le Résident Supérieur au Tonkin à Résidents chefs de province et commandants Territoire Militaire. A.s. usage de balances granduées ou mesures étrangères (le 6 septembre 1912).

¹²⁰ Letter l'administrateur de 3ème classe Bride Résident de France à Ninh Binh à Monsieur le Résident Supérieur au Tonkin. A.s. de l'application de l'arrêté du 26 Aout 1912 interdisant l'emploi de mesures étrangères (le 22 novembre 1912).

ができる、とあり、知事自身も実際この方法を試して、それはうまく機能していると述べている。さらにこうした変換を許可する権限を与えて欲しいと要望している。

これらの書簡だけでなく、他にも多くの反対意見があったと考えられる。1912年10月22日に、トンキン理事長官から各省に出された通達¹²¹には、「1912年8月26日のアレテの適用を延期するよう多くの要求が出されたが、トンキン理事長官府はいかなる延期も認めない」と明記されている。つまり、多数の反対意見や代替案が出されていたが、施行の延期の要望については聞き入れられることはなかったことになる。その後、12月23日にこのアレテは以下のように変更された。

第1に、適用される地域が「インドシナ保護国」に加えて「ハノイ市、ハイフォン市とツーラン市」が追加された。「市」は自治権を持つ特別行政区であるため、より明確に特別行政区も含めた保護国全域で施行することを提示したものといえる。

第2に、禁止対象となる外国の計量器についての既述が、「外国発祥の全ての計量器」から「外国の目盛りのついた全ての計量器」と改められている。この意図は、使っている目盛りがリーブルといった外国式の度量衡制度でなければ、計量器自体が外国製でも良いということであり、フランスの目盛りのついた外国製の計量器の使用を許可するよう求めた意見が反映されている。一方で、ニンビン省から出されたアメリカ製のはかりのメートル法換算方法などは生かされていない。

第3の変更点は、違反した際、その処分の根拠とされる法令が、1851年3月27日の法(*loi*)から、1905年8月1日の法へ変更されたことである¹²²。

同時期に通達は1910年「度量衡統一を実現させるための方法」と1911年に「各省における度量衡実態調査依頼」に関して2回¹²³出されており、法整備と並んで実質的な度量衡統一の実現に向けての模索が続けられている。

その後は1919年にフランス本土で使用する度量衡に関する法(*loi*)とデクレが出されている。法に関しては、重量、時間、電力、気温、光度に関する単位とその関連事項を定めたもので、1919年4月2日に公布されている。インドシナにおいてもその法を適用すると、1919年6月19日に総督がアレテを出した[JOIF 1919: 1254]。一方デクレについては、幾何学、重量、力学、時間、電力、熱、光学といったそれぞれの専門分野の度量衡について詳細に決めたもので、1919年4月2日に出された上記の法を充足する形で同年7月26日に共和国大統領が署名、公布された。それをインドシナにおいては、同年11月28日、行政機関において適用するアレテが総督から出されている[JOIF 1919: 2351]。このフランスでのデクレは、もちろん単位名もすべてフランス語表

¹²¹ TTLTQG1, RST, 71315-02. Note postale circulaire, le Résident Supérieur au Tonkin à Résidents chefs de province et commandants Territoire Militaire et Maires de Hanoi et de Hai Phong (le 22 octobre 1912).

¹²² 違反した場合、刑法典 479、480、481、482 条に従って罰せられるとしているのは両アレテとも同じである。理由がある場合に依拠する方としてあげられているのが変更前は 1851 年の法であり、変更後は 1905 年の法である、ということである。

¹²³ 両通達とも TTLTQG1, RST, 71315-02。

記であり、インドシナにおける現行法とも内容が合わないため、形式的に公布されたものと思われる。

1912年以降、実態のない1919年のアレテを除外して考えると、体系的な度量衡に関する法令の公布は見られない。

一方で通達は1921年、1927年、1936年にそれぞれ「フランス式度量衡制度へのベトナム式制度導入の是非」¹²⁴、「1911年コーチシナにおいて施行されたデクレのトンキンでの実施」¹²⁵、「各省における度量衡実態調査」¹²⁶に関して出されており、継続して度量衡統一に向け各省との協議が続けられている。

1936年6月6日には、各邦において度量衡地方委員会を設置するアレテがGGIによって公布されているが[JOIF 1936: 1732]、これは1936年の通達で指示される各省における度量衡調査¹²⁷を有効に実施するために設けられたものである。

個別の単位に関しての法令として、1943年4月30日にGGIは木材や石炭の計量の際、デジステール(décistère)、ステール(stère)とその倍量単位を用いることを義務づけた[JOIF 1943: 1320]。これがフランス植民地期最後の度量衡関連法の公布となった。

このように、コーチシナと保護国(アンナン、トンキン)では、度量衡関連法の内容も公布の時期も大きく異なっていたことが分かった。また主要な度量衡統一の法令と通達は、ポール・ドゥメール総督時代、およびアルベール・サロー総督が再任した前後、第一次世界大戦が終わった1919年以降に出されている。これは、インドシナで独自の政策を実行したことで有名なこの2人の総督が、度量衡に対しても関心を持っていたこと、また第一次世界大戦後の甚大な損害を埋めるために植民地から効率的に物資調達する方策のひとつとして、度量衡統一も目指されていたのではないかと考えられる。また、フランスが本国でパリ科学学士院とナポレオンによって導入され失敗した、古い単位とメートル法を合わせた命名法や折衷方式(本章第3節(1)①「フランスにおけるメートル用の受容」参照)と同様の試みを、インドシナでも行っていたことは非常に興味深い事実である。

度量衡制度統一に向けた通達も、1936年まで断続的に発せられている。また、1936年に出された通達の対象も「連邦の各邦」となっていることから、植民地後期に至るまでその模索がインドシナ連邦全体で続けられていたこともわかる。詳しくは第3、4章の分析に譲るが、言い換えれば、法整備上では進展したかに見える度量衡制度の統一、画一化も、実際は植民地期後期においても全国的に統一的な制度を実現することができなかったといえる。

¹²⁴ TTLTQG1, RST, 71315-03。

¹²⁵ TTLTQG1, RST, 71312。

¹²⁶ TTLTQG1, RST, 71315-04。

¹²⁷ TTLTQG1, RST, 71315-04。

第4節 度量衡統一をめぐる地域差

ここまで、度量衡法の整備がどのように進められてきたか見てきた。一方で、こうした法が有効に機能したかについては、その地域差を含め第2章以降で検討する。それに先立ち、ここ第4節では、これまでの研究で仏領インドシナ連邦のベトナム領内各邦の度量衡統一における地域差がどのように論じられ、その根拠はいかなるものかを、周辺の史料と合わせて提示したい。

ベトナム一国全体としてではなく、トンキン、アンナン、コーチシナといった地域別に度量衡の統一過程について言及している研究は非常に限られる。まず、ズンによると南部のコーチシナは、植民地政権側が推し進めた新度量衡制（メートル法）の導入が比較的成功的な地域であり、基本的には19世紀の終わりには完成していたが、中部、北部では1930年代になってようやく実現した[Hồ Tuấn Dung 2003: 48]。

また、アンリはコーチシナではメートル法が徐々に普及していると指摘した上で、ベトナム固有の度量衡制度を紹介しているが、トンキンとアンナンについては、メートル法について言及が見られない[Henry 1939: 17]。

つまり、度量衡が最も早く統一されたのはコーチシナであり、これら3つの地域が統一した度量衡制度を共有できるようになるのは、植民地期後半、それも植民地統治の終わりに近い時期であったと理解されているといえる。

ティエンの「度量衡統一の必要性」[Nguyễn Hữu Tiên 1934: 333-336]が『南風雑誌』に掲載されたのは1934年であり、また1930年代に大きな影響力を持っていた文学団体である自力文団が、1938年に出した「平民戦線の各団体の選挙に関する最小の章程」[今井 1988: 162、187-188]、および1941年に出されたベトナム独立同盟綱領[アジア・アフリカ研究所編 1970: 229]のなかでも度量衡の統一が掲げられていた。また、1936年11月21日にトンキン理事長官がコーチシナ知事にあてた書簡の中で、トンキンでメートル法の適用を目指しており、その方法について、すでにメートル法の適用に成功して長いコーチシナの状況を尋ねている¹²⁸。すなわち1930年代に入っても、メートル法の導入や度量衡の統一の必要性が提起されていることから、度量衡制度が統一されていない状況が続いていたと推定されるのである。

コーチシナが早く、保護国が遅かったという地域差の背景について言及された研究は管見の及ぶ限り見られないが、一般的に言われている次のような地域性がひとつの根拠になっていると考えられる。まず北部であるが、第1に、古くから稲作が盛んであり、強固な村落共同体が多数存在した。第2に、全国統一以降は阮朝、次に植民地政権による度量衡制度が新たに施行されたが、これらの政権に対する反発も合わせて、権力の農村社会への浸透力は弱く、度量衡制度がより複雑になった。そのために度量衡の統一が難しかったのではないかと推測する。

¹²⁸ TTLTQGI, RST, 71312. Lettre le Résident Supérieur au Tonkin, officier de la Légion d'Honneur, à Monsieur le Gouverneur de la Cochinchine. Objet: Application système métrique.

中部に関しては、北部や南部と比較しても耕作が可能な土地が少なく、特に着目すべき盛んな産業もないため、植民地政府側にとっては政治的、経済的にもその優先順位は低かったと考えられる。一方で、中部には阮朝の都が置かれるとともに、ホイアンという長期にわたって中国との交易が盛んな、華僑勢力の中心地域も含まれている。これらの要因が絡み合い、中部全体での度量衡統一は簡単ではなかったと思われる。

南部では、植民地期以前では農業も盛んではなく人口密度も高くない地域が多かった。そのため歴史的に地域ごとの村落共同体といった組織の結束も強くなかったことが考えられる。同時に、植民地期以降本格的な大規模農業開発が進み、それとともにメートル法の普及もスムーズに行われたのではないか。一方で、本論第2章「商業統計における度量衡とその地域的多様性」で、商業統計（公設市場価格表）を用いて中部、南部の各省の度量衡の事例も分析も行っているが、南部においても法定ピクルが 60kg と定められた 1903 年[JOIF 1903: 828]以降も、その原則が守られておらず、また南部特有の度量衡に関する慣習も見て取れる。

一般的には、上記で見てきたように南部での度量衡統一、メートル法の普及は早期に実現され、中部、北部においては実現が困難で時間がかかったとされる。しかし、度量衡統一に関する地域差や時差については、具体的な事例をもとに実証的に検討されていないことも、ここで再度指摘しておかなくてはならない。

第5節 阮朝における植民地期ピクルの導入

本節では、第2章で分析対象となるピクル、タについて、植民地期これらの単位の相当量が各地域、時期で多様な値を示す事となった背景、要因について検討する。

(1) 17、18 世紀における重量単位とタ

本節(1)では 17、18 世紀における重量単位、タについて明らかにする。まず、筆者が疑問に感じている論考について検討したい。

重量単位についてティエンは、五量法の導入を紹介した上で、典拠、年代は明らかにされていないが 10 リー(Ly)=1 ファン(phân)、10 ファン=1 ドン(đồng)、10 ドン=1 ラン(lạng)、16 ラン=1 カン(cân)、10 カン=1 イェン(yến)、10 イェン=1 タ(tạ)という制度を列記している[Nguyễn Hữu Tiền 1934: 333-334]。しかし、五量法は容積、重量、長さそれぞれを 5 つに細分化した制度である。つまり、これらの重量単位制度は五量法の原則から大きく外れたものであり、本章第1節で紹介した五量法とも異なっている。

ニャーおよびギーも、ティエンと同じ重量単位制度を紹介しているが[Nguyen Thanh Nha 1970: 105]、出所については触れていない。特にニャーは、重さを量る主要な単位はタ、カン、ランであり、タは西洋人からピクルと名づけられ、これらの制度は 17、18 世紀にすでに存在していたと推測しているが、その根拠は示されていない。タも 3

種類あるとしているが、典拠としているのは『トンキンの多様性』[Souvigniet 1903: 443-455]であり、これは植民地期に関するものである。「タは西洋人からピクルと名づけられた」という記述も、典拠が示されていないため文献資料によったのか、ニャー自身の見解なのか分からない。

以上から、ティエンもニャーも、その度量衡制度に関する認識、理解には疑問を持たざるを得ない。また、ティエンと、ニャーに加え、ギーも、阮朝・植民地期の重量単位制度（補論表補—23「重量単位」参照）同様の制度を 17、18 世紀のものとして挙げている。しかし、17、18 世紀は北部、中部で鄭氏と阮氏という異なる勢力が覇権を争っていたが、阮氏によって全国統一され、阮朝という新しい王朝のもと、その主権者も勢力圏も変わった。そのため、この阮朝による全国統一前後で、まったく同様の度量衡制度が存在していた可能性は低いと考えるが、資料の制約上、現段階で検討することは難しい。

上記の研究を除くと、本章第 1 節で検討してきた度量衡に関する記述の中には、容積単位以外の度量衡制度についてはまとまった記述がなかった。これは、税の徴収の際必要となる計量に用いられていたのが主に容積単位であったため、と考えられる。重量単位制度の考察は史料の制約上困難であるが、断片的な史料から北部、中部のタについて以下のことが推測できる。

北部の度量衡制度については、『国朝刑律』の体系的研究を行ったドゥルスタルが、この法制史料に内外の資料を駆使した詳細な注記を加える中で、長さ、容積の制度については言及している。しかし彼でさえ、「重量に関してはなにも見出すことが出来なかった」[Deloustal 1910: 42]と述べている。17 世紀に北部の語彙を収録したロードの辞書にも、ニャーが主要な単位と主張するタについては記載されていない¹²⁹。一方中部に関しては、中南部の語彙を収録し、1773 年宣教師ピニョーによって編纂された辞書に、「タは 100 カン」とすでに重量単位として記載されている[Pigneau 1772-1773/1999: 432]。しかし、タがピクルと同義であるという認識は、まだなかったこともうかがえる¹³⁰。

以上から、タは中部においては広南阮氏の統治下にすでに存在し、阮氏によって全国統一が果たされて以降、北部にも広められたのではないかと筆者は推測する。

¹²⁹ 同辞書で補論で挙げられている単位名すべてを調べたところ、度量衡の単位として掲載されている単語はカン(cân)、ダウ(dấu)、カップ(cáp)、ホック(hộc)、ダオ(dão)、ラン(lang)、ルオン(luong)、ネン(nén)、タン(thăng)、トゥン(thung)、ホム(hòm)であった[Rhodes 1651/1991]。

¹³⁰ トゥンも、このタは 17 世紀半ばより後に生じた単位ではないかと推論しているが、時代背景を考慮していないため、その地域についての言及は見られない[Nguyễn Tùng 2008: 453-454]。

(2) 阮朝のタとピクル導入に対する仮説

次に、タがなぜピクルと同等の単位として扱われるようになったのかについて、筆者の解釈を提起する。最初に、タの定義であるが、植民地政府公報のインドシナ年報には、尺の基準は嘉隆通宝の直径であり、阮朝の公式単位は 45 貫銭のタ・ピクルだとしている[AGI 1899: 516]。第 2 章で扱う商業統計にも、南部の事例であるが「1 タ=45 貫銭=67.950g」「1 タ=40 貫銭=60.040g」との記入が見られる¹³¹。パスキエ、シュライナー、スヴィネいずれも、貫銭の重さが基準だと明記している。シュライナーは嘉隆通宝の貫銭とであるととし[Schreiner 1901: 251]、パスキエは貫銭としか書いていないが、その前に紹介している長さの単位では、嘉隆通宝が基準であるとしている[Pasquier 1930: 265]。パスキエは補論表補—23「重量単位」に示した通り 42 貫銭で 1 タとしているが、シュライナーは扱う商品によって 1 タがそれぞれ 40、42.5、45、50 貫銭[Schreiner 1901: 251]、スヴィネは仲買人によって 40、45、50 貫銭の 3 種類のタ（それぞれ 60kg、67.5kg、75kg）[Souvignet 1903: 455]が使い分けられていたと記述している。さらに、銅銭を用いた場合と亜鉛銭を用いた場合によって重量も変わってくるため[Schreiner 1901: 251]¹³²、1 タの相当量は非常に多様なものとなったことは想像に難くない。

ここで、貫銭の実際の重さについて考えてみたい。嘉隆通宝はその発行時期によって 3 種に分けられ、その重さは第 1 期:1.3-2.47g、第 2 期:2.05-2.3g、第 3 期:3.3-3.62g に分布していた[Phạm Quốc Quân(chủ biên) 2005: 60]。仮に 1 通宝の重量平均値を 2.5g として算出すると、1 貫銭¹³³=600 文=1.5kg、45 貫銭は 67.5kg、40 貫銭は 60kg となる。この結果は、上記の商業統計の事例とも近似しており、タ=60kg の通説とも一致する。

一方で、『会典』『寔録』といった漢籍史料には、度量衡と嘉隆通宝の関係を明記したものは見つかっていない。しかし、複数の同時代資料で当時の運用状況についてそれぞれの見解が示されていること、行政文書のなかで実際の使用が確認されたこと、通宝の重さからの試算結果も、様々な史料に書かれているタの相当重量と大きく乖離していないことから、「タは通宝の重さが基準である」という説には、説得力がある。

本節(1)でみたように、広南阮氏の勢力圏においてタは重量単位と存在しており、「タは 100 カン」という規定は、阮朝におけるタと同様である。しかし、阮朝初代皇帝嘉隆帝が、度量衡統一は政治の重要事項であると認識し、施政初期に計量器に関して命令を出している（本章第 2 節参照）。また、ティエンは、王朝が変わる度に旧制度より新しいことを示すため、形式的であっても度量衡制度も変わったと指摘している[Nguyễn Hữu Tiên 1934: 333]。

¹³¹ TTLTQGI, GGI, 9553, Statistiques commerciaux de la province de Rach Gia 1904-05, 1909.

¹³² 阮朝の銅銭、亜鉛銭に関しては、藤原[1976: 303-324] に詳しい。

¹³³ 60 サーペク(銭, sapèque)が 1 ティエン(tiền)で、10 ティエンが 1 リガチュール(貫銭, ligature、ベトナム語で quan)であり[Lê Thánh Khôi 1955: 328]、つまり 1 貫銭は 600 銭であった。1922 年出版の仏越辞書にも 1 貫銭は 600 銭とある[Génibrel 1922: 619-620]。

以上から、タは阮朝以降、全国統一を果たした初代皇帝の通宝を基準として、本格的に全国で公式単位として導入されたものと考えられる。

次にピクルの導入に関して考えたい。阮朝が当時東南アジアにおける交易で広く使われていたピクルという単位を前提として、60kg 前後となる重量単位を策定したのかどうかも含めて、詳しい経緯は明らかではないが、筆者は以下のように推定する。

ピクルは本来「肩に担ぐ荷」という意味であり、周辺国では「担ぐ」の意味を持つ現地語が用いられていた¹³⁴。ベトナムでは、タは「榼」という現地語が充てられる¹³⁵。しかし、「榼」には「屋根のある台」の意味はあるが、「担ぐ」という意味はない。一方で米を量る単位として『阮朝硃本』の中には「擔」¹³⁶と「抬」¹³⁷も用いられており、それぞれダム(đám)とガイン(gánh)と「担う、担ぐ」という意味のベトナム語訳が充てられている。「擔」の俗字は「担」であり、その重量は訳注によると1擔=100斤であった。また、「抬」は「擡」の俗字であり、「担ぐ」という意味もある。しかしこの「擔」と「抬」は、筆者が見る限り『阮朝硃本』の中でのみで扱われた単位であり、使用頻度も少ないことから、広く普及していたとは考えにくい。そのため、フランスがインドシナを植民地化した頃にはおそらく一般的になっていたタが、ピクルに該当する最も適当な現地単位として選択されたのではないかと推定する。トゥンも、タはフランスの影響下で新しい観念が生じたが、それは19世紀の終わりまで存在していなかったと指摘している[Nguyễn Tùng 2008: 454]。

植民地期ベトナムにおいては、植民地政府による公式度量衡制度はあったが、地方や民間においては不徹底であった。ピクルに関しても、公式には1ピクル=1タ=60kgであったが、当時広く用いられていたタの単純な読み替えとしてピクルを導入した結果、1ピクル=1タまでは周知された。しかし、タは上で示した通り、長年に渡って非常に多様な用いられ方をしていた単位であったため、逆に地方役人はそれぞれのタを、単純にピクルと読み替えることにつながった。このことが、ピクル導入に際して、混乱を招く要因になったのではないかと考えられる。

以上、本章では、17、18世紀を対象とする前史を含めた度量衡制度史の把握のみならず、世界のメートル法受容の中でのインドシナのメートル法導入への動き、世界情勢およびインドシナ植民統治の中での度量衡関連法の整備とその背景について検討した。また、これらの検討を踏まえて、現在一般的に想定されているトンキン、アンナン、コーチシナの度量衡に見える地域性と度量衡統一の地域間時差について提示した。

¹³⁴ 例えばタイではピクルはハープ(hap)であり、語意は「担ぐ」である[野村・末廣 1986: 67]。

¹³⁵ TTLTQGI, 『阮朝硃本』成泰 卷 48 成泰 10 年 9 月 18 日戸部奏の条。

¹³⁶ TTLTQGI, 『阮朝硃本』維新 卷 40 維新 4 年 8 月 14 日領富安省布政使阮咨呈の条。

¹³⁷ TTLTQGI, 『阮朝硃本』成泰 卷 95 成泰 11 年 2 月 2 日南義總督續呈の条。

その結果、インドシナのメートル法導入は、世界的に見ても早い段階での試みであったこと、インドシナでの度量衡関連法は、植民統治で独自の政策を実行した各総督（ル・ミル・ド・ヴィレコーチシナ総督、ポール・ドゥメール総督、アルベール・サロー総督）と関係して行われたことが明らかになった。

さらに、植民地期、米の計量に主に用いられていたタ(榼、*ta*)、またはピクル(*picul*)と呼ばれる単位を対象として第2章で地域的多様性を分析するが、その一単位当たりの相当量が地域、時期によって様々に異なっていた。第2章に先立ち、ベトナム固有の単位でなく、植民地政府が導入した外来の単位であるピクルですら、なぜこのように地域ごとに不統一な用いられ方をしていたのかについても明らかにする必要がある。そのため、タ、およびピクルの背景と導入の過程、定義についても検討し、以下の結論を得た。

ピクルが多様な用いられ方をしていた背景としては、植民地期以前から様々な用いられ方をしていた「タ」を単純にピクルに読み替えたことが原因であったと考えられる。フランス側は、その換算値を **60kg** とし、**タ=ピクル=60kg** の対応関係を規定した。そして実際、タ=ピクルまでは周知されたが、その重さは各地方で昔から使われていた重量をそのまま使い続ける結果を招き、ピクル1単位あたりの重量に一貫性を持たせることができなかった、といえる。

第2章 商業統計における度量衡とその地域的多様性—米穀計量単位を中心に—

第2章では、各省月別商業統計の中に記載されていた、米穀計量単位の事例を対象として、トンキン、アンナン、コーチシナの省別比較を行う。米の計量には、公式計量単位、ピクル(60kg)を用いることが、1903年のアレテで定められていた。しかし、実際には1ピクルあたりの相当重量が60kgでない事例や、ピクル以外の単位も使用されて計量されていたことが、商業統計の事例から明らかになった。

ここで対象とする事例は、現在までに収集した商業統計263タイトル、その中で集めた米穀計量単位の約2150事例である。商業統計は、各省において月別に作成されたものであるから、これら事例の差異、分布、時系列変化を検討することで、度量衡の側面から各地における地域性と法の浸透度、浸透過程を明らかにできると考える。ここで言う地域性とは、インドシナの中のトンキン、アンナン、コーチシナ3地域の地域性だけにとどまらず、3地域内の地域性について、また行政区画を超えた共通文化圏についても論じることが可能となろう。

こうした地域性は、地理、地形に影響される自然的条件、王朝の勢力圏、区分と行った歴史的条件にも規定されることが考えられる。そのため、本章第2節では、地域性を規定する諸条件の概要も提示し、第3節以下の地域性の分析に備える。

商業統計には、米価の他にも様々な産品の物価が記載されており、それに伴ってそれぞれ計量に用いられた度量衡単位と相当量も記入されている。ここで、米に関わる単位に着目する理由は、以下の2点である。

第1に、どの地域でも主食として消費されていた米の計量単位を分析対象とすることで、より客観的にベトナム全域の地域間比較が可能となる。第2に、未だ本格的に研究が進められていない植民地期の度量衡を考察する際、植民地政権にとってもっとも重要な輸出産品であった米の計量単位の実態を明らかにすることは、度量衡研究の第一段階として効果的である。

以上から、第2章では商業統計上の事例から、インドシナの地域性を明らかにすること、度量衡統一の過程、実態について明らかにすること、の2点を目的としたい。

第1節 物価関連史料の概要

(1) 史料の所在

まず、本章が対象とする商業統計を含む、植民地期における省別物価関連史料の状況を整理したい。省別に物価を記録した統計、報告に関しては、植民地期の資料が保存されているベトナム国家第1(ハノイ)、2(ホーチミン)、4(ダラット)文書館、およびフランス、エクサンプロヴァンスの海外文書館で所蔵を調査し、2009年夏まで

に確認できた各省・月別商業統計は、一部を除きほとんどがベトナム国家第一文書館（以下 TTLTQGI）に所蔵されている。その範囲はラオス、カンボジアを含めた仏領インドシナ連邦全域の各省に及んでいるが、保管されている年代は限定的である。

① トンキンに関して

もっとも史料が充実しているのがトンキン各省における物価関連史料であった。トンキン各省、月別の物価統計は、1885 年から 1944 年の間に作成されたものの所在が確認できた。これらの物価関連史料は、その特徴から時期を 2 つに分けることが出来る。

1885 年から 1922 年の期間に作成されたものは、ほぼ商業統計(Statistiques commerciales)あるいは公設市場価格表(Mercurial)とタイトルがつけられている。記載されている品目数、統計のページ数などには年によって増減が見られるが、構成は基本的に同じである（次項参照）。これらの商業統計は、インドシナ総督府コレクション(Fonds du gouvernement général de l'Indochine、以下 GGI)、トンキン理事長官府コレクション(Fond de la Résidence Supérieure au Tonkin、以下 RST)、トンキン農業省コレクション(Fonds de la direction de l'Agriculture du Tonkin、以下 DAT)の 3 つのコレクションの中に所蔵されている。

3 つのコレクションでは、それぞれが所蔵している商業統計の省、年、月にばらつきが見られるが、重複している部分も多い。この重複した箇所を比較したところ、商業統計の様式、記入されたデータともに同じものであった。つまり、同じ様式を用いて作成された商業統計が、少なくともトンキンにおいてはインドシナ総督府、トンキン理事長官府、トンキン農業省へ送られ、それぞれの機関で保管されていたことになる。

次に、1935 年から 1944 年の期間に作成された各省月別の物価関連史料は、商業統計や公設市場価格表とタイトルがつくものは確認できなかった。しかし、「第一必需品の中の食料品価格リスト」¹³⁸、「トンキン各省における食料品及び実用品の価格変動」¹³⁹といった、様々なタイトルで、物価統計、報告書が RST に残されている¹⁴⁰。

この年代になると、物価を記載する際必要となる計量については、すでに計量单位名称と一単位あたりの相当量も印刷されており、その記載に沿って行うようになっている。つまり度量衡に関する記述は様式を作成する時点で統一されており、省別の地域

¹³⁸ TTLTQGI, RST, 75223-08, Listes des prix de 1^{er} nécessité pour le mois de Juillet 1937 dans Nam Dinh, Ninh Binh, Phu Tho, Phuc Yen, Quang Yen, Son La, Son Tay, Thai Binh, Tuyen Quang, Vinh Yen, Yen Bay. など。

¹³⁹ TTLTQGI, RST, 75227-02, Mouvements des prix des denrées et Marchandises produites pratiqués dans les provinces au Tonkin pendant Décembre 1936. など。

¹⁴⁰ その他、TTLTQGI, RST, 75227-01, Mouvement des prix des denrées et marchandises de première nécessité au Tonkin pendant de Novembre 1936. 75218-06-08, 75189-02-06, 75218-03-010, Surveillance des prix de détail des produits et denrées de première nécessité par les comités provinciaux など様々な名称で多数の史料が確認できている。

差などを検討することができない。したがって、本章ではこの年代に作成された物価関連史料は、対象外とする。

1923年から1934年までの期間は、これまでのところ省別物価関連史料について所在を確認できていない。この所蔵状況の偏りに関しては、作成されていないため史料が残っていないのか、散逸したのか、史料自体は存在するが未整理のため公開されていないのか、不詳である。

② アンナンおよびコーチシナに関して

アンナン、コーチシナの省別物価関連史料は、ほとんどGGIに所蔵されていた。基本的にアンナンの史料はベトナム国家第4文書館に、コーチシナの史料は第2文書館に移管されており、それぞれアンナン理事長官府コレクション(Phông khâm sứ Trung Kỳ、以下RSA)、コーチシナ総督府コレクション(Phông phủ Thống Đốc Nam kỳ、以下RSC)において所蔵を調査した。RSAの中に、量的には少ないがアンナン各省における商業統計を確認できた¹⁴¹。一方でコーチシナに関しては、RSCではこれまでのところ商業統計などの史料は確認できていない。しかし、トンキンの事例で見られるように、アンナン、コーチシナも同様に物価関連史料を作成し、複数機関におさめていたことが考えられる。

こうした史料の断片化、所蔵状況の偏りは、文書館での史料整理の進展、所蔵目録の新規作成、公開史料の範囲拡大などにより明らかに出来る可能性がある¹⁴²。商業統計のような一連の物価関連史料の作成に至る経緯や、それを規定する法令なども含めて、今後の課題としたい。

(2) 対象とする史料

本章が対象とする史料は、トンキン、アンナン、コーチシナの商業統計(一部公設市場価格表)である。トンキンにおいては、商業統計の他に1930年代以降に作成された物価関連史料が存在するが、前述のように度量衡に関してはすでに統一された様式を用いているため、ここでは対象外とする。

トンキンに関しては、商業統計はGGI、DAT、RSTの3つのコレクションの中に所蔵が確認できたが、重複する部分も多い。そのため、本章では1890年代後半から1908年はGGI、それ以降1918年までのものはDATに収められている商業統計(一部重複も見られる)を対象とした。GGI中の商業統計も、1907、1908年に関しては1月-12月まで、ほとんどすべての省において欠損なく保管されているが、それ以外の年については断片的であり、これはDAT中の商業統計も同様である。そのため、比較的データが

¹⁴¹ RSA, No.392: 3019. Statistique commercial de l'Annamde 2^e, 3^e et 4^{ème} et trimestre 1933-1934.

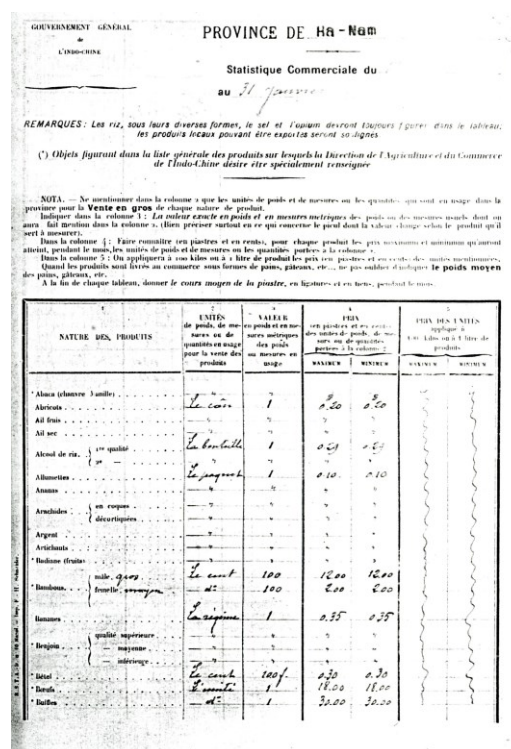
¹⁴² ベトナム国家文書館の概要と所蔵資料、公開状況については関本[2014b]が詳しい。

コーチシナの商業統計は、同じく GGI 中の 1900-1909 年、もみ、精米済みの米の度量衡の記入事例 21 省分、約 500 事例を対象とした。

商業統計はすでに品目・等級が印刷されており、それぞれ単位名、一単位に該当する相当量、単位当たり最高・最低価格、100kgないし1リットル当りの最高・最低価格を記入する表が設けられている（写真2—1参照）。

1908 年ハーナム省の商業統計の 1 枚

時代、省によって形式が異なっているが、1907 年以降のものは多くの省で比較的共通したものを使用している。それは約 200-250 品目の物価が記入できる一様式 7-10 ページの綴りである。表紙には、記入担当者に対する注意事項が書かれており、記載に関して細かく指定されている。しかし実際には空欄も非常に多く、度量衡に関しても単位名のみ書かれており、メートル法に換算した相当量が記入されていない場合も多々ある。ここで注目したいのは、ピクルに関して「製品に応じて量目に変化するピクルに関しては、その単位あたり（つまり 1 ピクルあたり）の量目を正確に記入すること[（ ）内は筆者補足]」と指示があり、行政側も 1 ピクル=60kg の原則が徹底されていないことを認めていたことがわかる。価格調査の正確さを期するために、各省の度量衡制度に基づいた記入が



108

本章が扱うのは米価に関する単位であり、大半はピクルが使われている。しかし、米という同品目における単位の比較であるにも関わらず、その1ピクル当りの相当量は省、時期によって異なる事例もあり、またピクル以外の単位の記入も見られる（本章第3、第4節参照）。植民地政府がもっとも重要視していた米においても記入に一貫性が見られないことは、民間はもちろん地方役人ですら、度量衡制度に関する布告や、統一の必要性を理解していなかったことを示唆している。

(4) 商業統計における度量衡の記入事例と本論での扱い

第3節以下の内容を先取りすると、全体的な傾向としては米の計量に際してピクルがかなり普及しており、ピクル以外の重量単位の記入が見られた省でも、これらの省が全てピクルで記入されている省と比較して、度量衡制度が大きく異なっていたとは結論付けることはできない。

他方で、カオバンでは一度リーブルの記入が見られるが、それ以外では1901年という早い時期から1ピクル60kgで統一されていた。しかし、『カオバン地誌』には「仏領期においては、商品の流通および交換のための重量単位についての統一された規定がなく、それぞれの地区、区域の規約に従っている」とも記述されている[Uỷ ban nhân dân tỉnh Cao Bằng 2000: 375]。

つまり、インドシナ総督府、農業省に送られた商業統計の単位において一貫性がみられたとしても、実際には統一されておらず、省レベル以下の各地域、地区によって大きく異なっていたことも事実であろう。これは、物価調査を担当した役人は中心部の比較的大きな市場などで調査するであろうし、前述の通り、配布された記入表には単位についての注意事項も記載されているため、省内、および北部ベトナムにおいてももっとも一般的な単位を記入しようとする意識が働くことに起因すると考えられる。

以上から、商業統計に記入されている単位およびそれに相当するキログラム数に一貫性があるからといって、その省内が統一された制度をもっているとは限らない。他方で、最も一般的で、一貫した記入をする方向に力が働くはずの商業統計において、度々異なる単位の記入が見られるということは、省内の各地域、地区においてより多様な制度が混在していた可能性を示唆する。また、史料の欠損も多く、頻度については史料の欠損によるものか、記入がなかったのか、判別することはむずかしい。

以上のことから、たとえ1ピクル=60kgではない記入の回数や、ピクル以外の単位の記入がみられた回数が少なくとも、その事実には着目する価値はあると考え、第3節以下こうした事例も取り上げ、検討する。

第2節 対象地域の歴史的背景—各地域の勢力圏の変遷

第2節では、度量衡の地域差に影響を及ぼしたと考えられる対象地域の歴史的背景について、特に版図拡大の過程に注目して整理する。

(1) ダン・チョン(Đàng Trong)とダン・ゴアイ(Đàng Ngoài) —南北分裂時代

ベトナムは、黎利が1428年に明の支配から独立し、黎朝(大越国)を建てた。15世紀半ばまでに紅河デルタの農業を重要な基盤とし、その版図は現在の中部と北部であり、東南アジアでは例外的に早熟な集権的国家体制を持つ自給的で閉鎖的な自己完結的国家となった[古田 1995: 23-24]。この背景には、15世紀までに紅河デルタ堤防網は基本的に完成する[桜井 1987: 237]が、その大規模な土木事業推進の過程で上級権力が村落内部に浸透していったことが考えられる[桃木 1990: 245]。

黎朝は1471年に中部のチャムパ王国を滅ぼし、版図は現在のビンディンあたりまで拡大した。北部紅河デルタの農業を基盤に置き内向的な農業国家として発展を遂げてきたベトナムは、ここで海のシルクロードの重要ルートを自らの領域に併合して、国際貿易への進出に本格的に乗り出した[古田 1995: 24]。

その後1527年に莫登庸が王位を奪還し、安南国を建ててからベトナムの国内は分裂状態となる。1545年以降、黎氏を擁した鄭氏政権が勢力を強め、1592年に莫氏を滅ぼして黎朝の復興に成功したが、この鄭氏政権に対抗して1558年にフエに阮氏政権が成立しており、その結果黎朝は南北に分裂し、200年にわたる南北構想を繰り返すことになる。

このように、クアンビン省のザイン川を境として南北に分かれた南北分裂期ベトナムでは、フエを中心とする南側をダン・チョン(Đàng Trong)、紅河デルタを中心とする北側をダン・ゴアイ(Đàng Ngoài)と呼ぶようになった。チョンは「中、内部」、ゴアイは「外」を示すベトナム語の意味からもわかるように、ダン・チョンとダン・ゴアイは南(中部)の人が1620年代に付けた呼び方である。この言葉の出現により、17世紀以降紅河デルタがベトナム唯一の文明の中心ではなくなり、ベトナム人が2つ別物となる概念が生まれた[Li Tana 1999: 16-17]

1651年に出版されたアレクサンドル・ド・ロードの辞書にも、すでにダン・チョンとダン・ゴアイが掲載され、ダン・ゴアイはドンキン(Đông Kinh)周辺の4省、ダン・チョンはドンキンからチャンパ王国までの間と説明されている[Rhodes 1651/1991: 201/83]¹⁴³。

¹⁴³ ダン・チョンのつづりは *đàng tlaó* となっているが、解説文から *Đàng Trong* のことを指していると思われる。

(2) コーチシナの対象範囲の変遷

コーチシナはフランス植民地期ではビエンホア以南からハーティエン省までのベトナム南部を範囲とする地域名で、仏領インドシナ連邦 5 つの邦の中の一つとして知られている。しかし、コーチシナという言葉はそれ以前からすでに存在しており、フランスが進出してくる前はダン・チョンと同義として外国人によって使われていた。その語源は諸説あるが、ひとつはオールソウが「コーチシナの名前について」の中で 19 世紀まではコーチシナは中部を指すが 19 世紀以降は南部も含む、とした上で、コーチシナはポルトガル人が付けたもので、マレー語の KUCHI が語源だと主張している¹⁴⁴。

一方グエン・ディン・ダウは、コーチは交趾の音がもとになっているが、コーチという地名はインドにもあったため、誤解を避けるために「清(sin, Ts'inn)」に近いコーチ、という意味でコーチシナ(Giao Chi gần Tân)となり、それがラテン語表記になると Cocincina、フランス語や英語だと Cochinchina, Cochinchine、日本語、中国語だと交趾支那となる、としている[Nguyễn Đình Đầu 2007: 46-48]。

リ・タナは、一部の他の研究者はコーチは日本人が漢字で交趾と呼んでいたものが語源だと主張しているが、16 世紀まで日本はベトナムと深い関わりはないのでオールソウの仮説の方が理にかなっている、と結論づけている[Li Tana 1999: 19]。

いずれにしても、このように 19 世紀まではコーチシナはダン・チョンのことを指しており、フランスが進出してからには特に南部を指す言葉となったことは、リ・タナも指摘しているようにこれまでの研究上でも混乱している[Li Tana 1999: 18]。文献資料にあたる際注意が必要となろう。

ダン・ゴアイについても、すでに外国からドンキンと呼ばれており、その表記は言語によって Tunquin, Tunkin, Tong King, Tonkin と様々であった。

(3) 南進に伴う版図拡大の過程

北からの攻撃を食い止めた阮氏は、南北期の戦争終結直後から南方への拡大（南進）を開始する。これは、17 世紀中部最大の港ホイアン¹⁴⁵は貿易の中継地としての役割を失っていたため、南部の農業開発が必要となったこと[Shigeru Ikuta 1991: 260]、中部の平野は農業を主としているベトナム人には狭小すぎたこと[八尾 2001: 252]による。

¹⁴⁴ [Li Tana 1999: 19]の L. Aurousseau. “Sur le nom de ‘Cochinchine’” BEFEO. Vol.24. 1924. p.563-566. (筆者未見) による。

¹⁴⁵ 都があるフースアンの港は安全保障上の理由で外国船舶の入港が制限されていた。そのため、ホイアンに外国商船が入港し、そこから国家の需要を満たすための物資供給ルートが確立し、ホイアンは水路、陸路、海路、馬車道全ての交通輸送モードの結節点でもあった[Đỗ Bang 1991: 236]。ホイアンの開港は 16 世紀末のことであり、中国と日本の迂回貿易の中継基地として、また東南アジア南部地域の貿易基地として大いに繁栄し、中国人街とともに日本人町も作られた[生田 1991: 46]。

南進前の 17 世紀南部は、サイゴンはプレイノコールと呼ばれクメール人が住んでいた[高田 2005: 433]。海から船に乗って移住してくるベトナム人商人は年々増加し、1623 年クメール王はベトナム中部の阮氏に対してプレイノコールの交易税の取得権を委譲し、ベト族移民の受入を承諾した。このことから、商人、農民、漁民などの移民増加につながった[高田 2005: 434]。

中国からの亡命者の労働力もこの南進達成のため、利用された。1683 年明朝滅亡後、一部の明朝信奉者、例えば楊彦迪、黄進が 3000 人の部下を連れて 50 隻のジャンク船でダナンに逃れてくる。時の領主、阮氏の潢王は彼らを南部に送り、開拓に従事させた。彼らは阮氏のためメコンデルタ地帯の開発に貢献し[坪井 1991: 104]、「ミン・フウオン（明香）」と呼ばれる中国人共同体の始祖となった[Woodside 1971: 270]。ミン・フウオンの人々は 1802 年以前にはクアンナム、ビエンホア、ザディン省に定住していたが、1802 年以後北部に進出した[坪井 1991: 104]¹⁴⁶。

南進の詳しい過程については表 2—1、地図 2—1 も参照されたい。

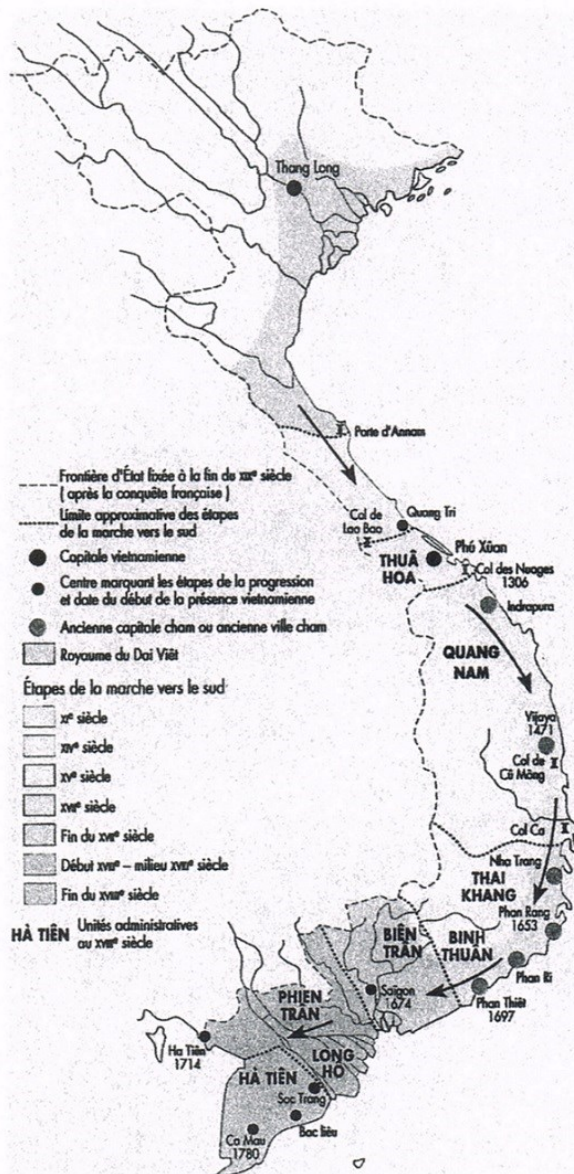
表 2—1 南進の過程（表）

年	項目
1653年	阮氏（拠点フエ）の勢力はニャチャンに到達
1658年	クメール王が阮氏への服属に同意（南進加速）
1680年	中国明朝の遺臣が国内の争乱を逃れてメコンデルタの入植を阮氏に希望 ドンナイ・ミトー両地域への移住を許す
1689年	阮氏もドンナイ、ミトー地域に軍隊と入植団を投入
1692年	ニントゥアン、ビントゥアンを属国化し、順城鎮を置く
1693年	ファンティエット占領
1698年	南部統治の拠点となる行政府をタンビン県(Tan Binh)の 県都（サイゴン地域）に置く（嘉定城）
18世紀	最前線はメコン川本流の一つ、（前江（ティエン・ザン）の東岸に達する フエ周辺の人々がサイゴン川及びドンナイ川流域に入植 植民者には土地が分配され、共同体が形成された
1777年	サイゴンも西山軍の支配下に入る グエン・フック・アインはフランス軍と中国人の力を借りて町を奪還 →嘉定城を建設

（出所）[高田 2005: 433-434]、[八尾 2001: 252]より筆者作成。

¹⁴⁶ 明香が明郷と呼称が変わる経緯は、坪井[1991: 104]に詳しい。

地図 2-1 南進の過程 (地図)



18世紀になると、ベトナム人のメコンデルタ進出に加えて、ベトナム周辺の中国人による進出も増大した。彼らはサイゴン川の中州に位置するフォー島(Cu Lao Pho)にジャンク船で到来しては交易活動に従事した。1744年にはチョロン市街から北西に2kmのところ、華僑献金で覚林寺を建立し、1784年以降は後のチョロンとなる華僑の町を建設、19世紀前半にはチョロンは余剰米を産する新開地メコンデルタの入り口に位置し、華僑交易活動の拠点として発展することになる[高田 2005: 434]。

中国人の進出は、チョロンを中心としたメコンデルタに限られたものではなく、ハーティエン省においても広東省出身の鄭玖を指導者として開拓を進め、諸国から商人の集まる盛大な貿易港を発展させ、阮氏の勢力をコーチシナ東部から一挙のシャム湾に拡大させた[藤原 1986: 211、226]¹⁴⁷。

このようにして、「南進」は明命帝の治世(1820-1841年)まで続き、「南端はカマオ岬から北はラン

(出所) Brocheux[2009: 12]に拠る。

ンソンまで」の現在のベトナム領とほぼ等しい版図を形成した[古田 1995: 15]。つまり、現在のベトナム領の概念はフランスが直轄支配する直前にできあがったものと言え、フランスによるインドシナ統治の様々な地域差、特徴はこうした歴史背景によって強く規定されている可能性を視野に入れて分析していく必要がある。

¹⁴⁷ 鄭玖は17世紀末から18世紀初めにかけてハーティエン地方の統治者として知られた華僑である。初めカンボジアの大官となりハーティエン地域を開拓し、カンボジアから離脱したのち阮氏広南国に帰属し、総兵の官となった。鄭玖に関しては「広南王阮氏と華僑」「鄭玖事跡考」「鄭玖の広南阮氏への帰附の年次」[藤原 1986: 191-235]に詳しい。

第3節 トンキン

本節から第5節にかけて、商業統計上の度量衡の事例を、行政区画によって分けられた3つの地域（トンキン、アンナン、コーチシナ）ごとに分析する。

トンキンは、1900-1917年の28省、約1280事例を対象とする。トンキンの全体的傾向は、米の計量に際してピクルを用いることは比較的浸透しているが、その相当量はまだ60kgに統一されていない。以下、ピクル以外の単位も含め、その傾向・地域的特徴をまとめる（トンキンにおける商業統計の事例は、表2-2参照）。

表2-2 トンキンにおける商業統計上の度量衡の事例

省名	1900-1903年	1904-1910年	1912-1917年
バクザン	ピクル Ⅱ.6,7 Kg Ⅲ.3-7	ピクル=60kg V.1,2, VII.VIII.1,3-6,8,10-11 ピクル V.3,4,7,8, VI.1,2,7 VIII.9,12 IX. 1,4, ,X.1-10,12	ピクル XII.XIII.1-9,XIV.3-12, XV.1-2,4-10,12
バクカン	ピクル=60Kg 0.9,11,1,1,3,11,Ⅱ.3,5	ピクル=60Kg V.1-4,7,8, VI.1,2,7,8 VIII.1-9,IX.1,4, X.1-8 Kg X.9-12	ピクル=60.45Kg XVII.2-4 Kg※ XII.6-XIII.8,XVI.12-XVII.1 カン(Cân)=0.604Kg XII.4-5,XIII.11-XVI.9 カン XVI.10-11
バクニン	ピクル=60Kg Ⅲ.3,4 ピクル Ⅱ.6	ピクル VI.1, VII.11-VIII.2,4,6-8,12 ピクル=60kg IX. 1,4 60kg VIII.9-12, X 100kg VII.1-10,VIII.3,5	ピクル XII.10-12 タ(Ta) XIII.1-3 60 Kg XII.1-9,XIII.4-9,XIV.4-9, XV.1-9,XVI.10-12
カオバン	ピクル=60Kg I.11-12,Ⅱ.2-3,6-7,10-11,Ⅲ.3-6 リーブル(Livre)=0.6Kg I.10 100Kg Ⅱ.1,4-5	ピクル=60Kg IV.4, VI.2,8, VII.2-6,9-10 VII.1-2,3-12, IX.1,4,12-X.12	ピクル=60Kg XII,XIII.2-9
ハドン	ピクル=62Kg 0.9 ピクル Ⅱ.3	ピクル=60kg V.2-4 ピクル V.8, VI.1,7,8, VII.1-4,7-VIII.6,8-IX.1,4, X.1,2	ピクル XVI.12
ハザン	—	ピクル=60kg VI.6,8, IX.1,3,4, X.1,2	ピクル=60Kg XII.1-11,XIII-XVII.4,10,12 100アンナンKg(kilo annamite) XVII.9
ハーナム	ピクル=60.4Kg I.4-5,8-9,12-Ⅱ.7,Ⅲ.3-4 ピクル I.10-11	ピクル=60.4Kg V.1-4,7,8, VI.1,2, VII-VIII.X.3-10 ピクル=60Kg IX.1,4, X.12	ピクル=60Kg XII-XIII,XIV.4-XV
ハイズオン	ピクル=62Kg 0.5,8-11, I.4,8-9, Ⅱ.1,6-7 Ⅲ.3,5,6 ピクル=60kg Ⅱ.5	ピクル=62Kg V.1-3,9, VI.1,7, VII-VIII.2,4-12 IX.1,2	ピクル XII.3,6,8,XIII.6,10,XIV.1,3 60kg XIV.1, 5-11, XV-XVI.9,11,12 100Kg XII.12,XIII.9,12

ハイニン	ピクル=60kg I.12 ピクル 0.9-11.1.11	ピクル=60kg VIII.1-6,8-9,IX.1,4 X.4-6	—
ホアビン	ピクル=60.4Kg I.8 ピクル I.7, II.5, III.3-6	ピクル=62kg VI.1,2 ピクル V.1-4,7,8, VI.7,8, VII.1-6,8-VIII, IX.1,4, X.4-12	—
フンイエン	ピクル=60kg I.9-10,II.2 ピクル=60.4Kg 0.12-14 ピクル 0.5-7,9	ピクル=60Kg VII-VIII,IX.1,4, X ピクル V.1-4,8, VI.8	ピクル XII-XIII.8
キエンアン	—	ピクル=60Kg VIII.1-9,IX.1,4, X.2,3,5-12 ピクル VI.6	ピクル=60kg XII.3,5-8,XIII.4-5,XIV.6-10,XV.2,XVI.2 ピクル XIV.11-XV.1,3,6,9,12,XVI.5
ランゾン	ピクル=60Kg I.10-II.8,10,III.3-6 ピクル 0.8-11	ピクル=63Kg VI.1, VIII.1-2,7-8,10-12,IX.1,4,X	ピクル=63Kg XII.1,3-4,7,10,XIII.1-6 ピクル XIII.8-9 100Kg XII.2 キンタルメトリック (quintal metrique) XIII.7
ラオカイ	ピクル=60kg I.4-7,10,II.2-5,10,III.3-5	ピクル(B), 100kg(P) IX.1 ピクル VII.7-VIII, IX.4, X.1,2,12	—
ナムディン	ピクル=60.4Kg 0.8,10-12, I.2,4-II.7,III.3-4 ピクル 0.5-6,15	ピクル=60.4Kg X.1,2,4,8, VI.1,8, VII-IX.1, .X	ピクル=60.4Kg XII-XV,XVI.4-9,XVII.1-6,10-12 100Kg XVII.7-9
ニンビン	ピクル=62Kg 0.12,I.8-9,12,II.7,III.3-6	ピクル V.1-4,7-VI.2,7,8, VII.2,8-IX.1,4, X.1,2 100Kg X.4-7,9-10	ピクル XIII.7-9 100Kg XII.3-4,9-12-XIII.6
フート	—	ピクル=60kg VII.7-IX.1,4, .X アンナンピクル=60Kg (picul annamite) VII.2-6	ピクル=60kg XII.1-9 100Kg XII.10-12
フックイエン	—	ピクル V.1-4, 7-VI.2, 7,8 ピクル=60kg VI.7,8 100Kg VIII.1-5,7-9,IX.1,4, X.3-4,6-12	—
クアンイエン	ピクル=60kg 0.8-10,I.12-II.1,3,III.3-4 ピクル 0.4,7 60Kg I.8-11,II.5	ピクル=60kg V.1-4,7,8, VI.1,2,7,8, VII.1-8,VIII.3 ピクル IX.1,4, XII, XIII.1-9 100Kg VII.11-VIII.2,4-7	—
ソンラー	—	ピクル=60kg V.7,8, VI.1,2,7,8, VII.1-8,10-12,VIII.3-12, IX.4 ピクル X.10-12	ピクル XII,XIII.4-6,10-12,XIV.4-9
ソントイ	タ II.7,III.4,5	タ=62.4Kg VII.11-VIII.12 タ=60kg V.7,8 ピクル=60kg V.3,4 ピクル V.2 100Kg VI.1,2,7,8, VII.2,4-7,9-10,IX.1,4, X.5-6,12	100Kg XII.6-XIII.4,6-7,9-XIV.8,10-11
タイビン	—	ピクル=60kg VII-VIII,IX.1,4, .X.3-6,9,12 ピクル V.4, 7,VI.2,7,8	ピクル=60kg XII-XIII.9

タイゲン	ピクル=60kg II.5 ピクル I.3 ノイ(nôi)=12Kg I.4	ピクル VII.1-2 ノイ V.1-4,7,8, 100kg VII.7,8,12-VIII.4,8,9,11-IX.1,4, X.2-7,9-12 フランスピクル VII.3-4	ピクル XII.1-3 100Kg XII.8-XIII.3
トゥエンクアン	ピクル 0.4,10,12-I.2.7 アンナンピクル I.10-12,II.2-3	ピクル=60Kg VIII.1-9, IX.1,3,4, X ピクル IV.4,6,10,12, V.2,4,7,8, VI.1,2	ピクル=60kg XII.1-11,XIII-XV,XVI.7 100Kg XII.12,XVI.8-10
ヴィンイエン	ピクル 0.4,5, III.3,6 パニエ(panier)=20Kg II.6-7	ピクル V.1,2,8, VI.3,9, VII.2,4-11 VIII.1-4,6-7,IX.1,4, X.1-7,9-12	ピクル=60Kg XII.1-9,12,XIII.4-6
イエンバイ	ピクル=60kg 0.11,12, I.4,12-II.7 ピクル III.3-4	ピクル V.1-4,7,8, VII.1-VIII.5,7-9,11-12 IX.1,4, X.1-6,9-12	ピクル XII-XIII.6
ハノイ	-	パニエ=14Kg(P1, B1),20Kg(B2) VII.1 パニエ=10kg(P),20Kg(B) VII.3,5-6 Kg VIII.1,8 シャルジュ(charge) VIII.9-IX.1,4,12, X	ピクル=60kg XII.8-10,XIII.1-2 シャルジュ=60Kg XII.1-5,7
ハイフォン	-	ピクル=60Kg VII.1-3,6,VIII.9-IX.1, ,X1 ピクル IX.4, X.2,4-12	ピクル=60Kg XII.2,6,XIII.1 ピクル XII.1,3 100Kg XII.4-5,7-12,XIII.3-7, 9-XVI.1,3-XVII.1,3-8,10-XVIII.1

(注)単位名の下に書かれているアラビア数字とローマ数字は、データの記載されていた年月を示している。年はローマ数字(1900年のみアラビア数字の「0」)で示し、月はアラビア数字1-12で示している。ローマ数字のみの場合は、一年12か月分のデータがすべてそろっていることを意味する。(例)XII.XIII.2-9→1907年1-12月、1908年2-9月分の価格表に記載が見られることを表す。

(出所) TTLTQG、(1)GGL北部各省商業統計(Statistiques commerciales)

史料番号9381, 9386, 9388, 9391-9394, 9397, 9399-9400, 9403-9405, 9407, 9410-9411, 9414-9416, 9418-9420, 9422-9423, 9426-9429, 9431-9435, 9437-9439, 9442-9445, 9447, 9449-4951, 9453-9457, 9459-9463, 9465-9466, 4006-4009, 7974.

(2)DAT、北部各省商業統計(Statistiques commerciales)史料番号75-82, 84, 86-105.より筆者作成。

(1) ピクルに関して

①1 ピクル=60kg で統一されていた省とその分布

対象期間中、1 ピクルが公式ピクルの 60kg で統一されていたのは、カオバン省、ハイニン省、クアンイエン省、トゥエンクアン省、フート省、ヴィンイエン省、キエンアン省とタイビン省の8省である。カオバン省を除く7省の地域の特徴は以下のよう

に分類できる。

- a)大河川沿岸部 (トゥエンクアン省、フート省、ヴィンイエン省)
- b)規模の大きい港を有する地域 (ハイニン省、クアンイエン省)
- c)紅河デルタ地域 (キエンアン省、タイビン省)

つまり、比較的早い時期に公式ピクルが普及していた地域は、交通の便が良い¹⁴⁸、あるいは貿易上外国と接触のある地域だと考えることができる。

¹⁴⁸ 1908 年において、喫水線 1.7 メートル以上の船舶が航行できたルートは以下の通りである[関本 2006: 48-50]。①紅河：フンホア(Hung Hoa)-ヴィエトチー(Việt Trì)間 (6 月-9 月) およびヴィエトチー-イエンバイ(Yên Bái)間 (6 月-10 月)。②カウ(Cầu)川：セプト・パゴダ(Sept Pagoda)-ダップカウ(Đáp Cầu)間 (1 年中)。③トゥオン(Thương)川：セプト・パゴダ-フーラントゥオン(Phủ

カオバンは、山間部に位置するため、水運といった交通の便も確立されておらず、鉄道も通っていない。しかし、カオバンは中国国境と接しており、長年にわたり重要な軍区として位置づけられていた。そのため、物価調査にあたった地方役人にも中央の規定が周知徹底され、商業統計上の度量衡の記入も早期から統一されていたと考えられる。

②ピクル 1 単位あたりの重量の差異とその分布

トンキン各省において、1 ピクルが 60kg ではなかった省は以下の通りである。

- a) 1 ピクル 60.4kg の省： ハーナム省、フンイエエン省、ナムディン省
- b) 1 ピクル 62kg の省： ハードン省、ハイズオン省、ニンビン省
- c) 1 ピクル 63kg の省： ランソン省
- d) 1 ピクル 60.45kg の省： バッカン省

データの欠損から年代を追ってその変化を見ることができない省もあるが、ハーナム省は 1910 年から、フンイエエン省は 1907 年から 60kg に変更されており、トンキン全体では 1 ピクル当り 60kg に統一されていたことがわかる。しかし、ナムディン省、ランソン省とバッカン省にはこうした変化が見られない。ナムディン省は 1918 年にいっても 60.4kg を守り続けており、ランソン省も同様に 63kg から変更は見られない。またバッカン省は、1910 年 8 月以降ピクルは使用されなかったが、1917 年 2 月から再びピクルが使用され始めた時は 60.45kg となっていた。このピクルが使用されていなかった期間はキログラム表示か、あるいはカン(cân)という重量単位を用いており、これは 1 カン当り 6.04kg であった。

上記の a) から d) の省の位置関係を見ると、バッカン省とランソン省を除く省はハノイ以南のデルタ地域に集中している。この地域は米田の歴史が古い地域であり¹⁴⁹、そ

Lạng Thương)間 (1 年中)。④ルックナム(Lục Nam)川：トゥオン川との合流地点-ラム(Lâm)間 (1 年中)。⑤ロー(Lô)川：ヴィエトチー-トゥエンクアン間 (6 月-10 月)。ローブカンが指摘しているように、植民地期、大量輸送は主に水運が担っていたが、大型船が航行できる範囲は非常に限られていた[Robequain 1939: 120-122]。しかしながら、トゥエンクアン省、フート省、ヴィンイエエン省は上記の大型船舶が航行できる範囲内に位置しているため、こうした水運の発達した地域は、比較的早く公式ピクルが周知されたと考えられる。

¹⁴⁹ ベトナム北部の人口については、大西[2011: 5-6]、桜井[1997: 25]が、『漢書』地理志に見える紀元後 2 年の前漢時代中国における中・南部の主要 4 郡(長沙、零陵、桂陽、南海)の戸口と、現在の紅河デルタを中心としたベトナム北部地域(交趾郡)の戸口を比較し、交趾郡の人口が中国側 4 郡の総人口を上回っており、いかに古代からこの地域において多くの人々が食べていくことができたかを明らかにしている。紀元前後に紅河デルタだけ高度な農業技術をもって低デルタまで開発していたという従来の見方に対しては、桜井は懐疑的であり、紀元前後における紅河デルタの農業規模、技術については[桜井 1979]で詳細に検討し、疑問を投げかけている。しかし、紅河デルタの稲作の歴史が紀元前後までさかのぼれることは事実である。また、ベトナムの社(つまり村)は、李朝創業期のレ・ホアンや大宗(1054 年)の時に登場し、最初は紅河デルタに作られた。それは現在のハノイ周辺から次第に低デルタに向けて発達し、11-15 世紀には海浜地方に、その後タインホア、ヴィンのデルタにも進出していた[菊池 1975: 14]とあり、古くからベトナム人によって開発が進んでいたことがわかる。ベトナム人の勢力範囲であるが、彼らの村は

れ故に独自の枡、秤での作業工程が確立されていた、と推測される。つまり、仏領期に入ってもしばらくは独自に確立された重量単位を使用し、徐々に周辺とあわせる形で変更されていったと考えられる。

ナムディン省は、1918 年に至っても 60.4kg のピクルを使い続けていた。ここは稲作がトンキンデルタでももっとも盛んであることが知られ、鉄道によるもみ、精米済み米の輸送量は、首都ハノイに次いで 2 番目に大きい[関本 2006: 43]。紅河とダイ(Đáy)川という北部の 2 大河川とその支流がナムディン省内を通じて流れており、またその幅や深さも十分に広く深かったため[Đo Đình Nghiem, Ngo Vi Lien and Pham Van Thu 1927: 63]、蒸気輸送船会社のほとんどは 1875 年からナムディン省から各地への定期便を運行していた[関本 2006: 51-52]。中心部タンロンから紅河を通り、海へと続く通り道でもあったため、東西南北を結ぶ結節点として、行政、商業上重要な地位を築いていた[Nguyễn Quang Ngọc (chủ biên) 2003: 551]。つまり、歴史的にも稲作、経済の中心的存在であったナムディン省であったからこそ、変更が困難であったと推測する。

北部に位置するバクカン省とランソン省が、他地域とは連動しない動きを見せることについては今後の課題としたいが、両地域とも米作が盛んではないことや、ランソン省は中国国境と接していること¹⁵⁰、バクカン省は周囲との交通網が確立されていなかったこと[Đo Đình Nghiem, Ngo Vi Lien và Pham Van Thu 1927: 13-14]などが関係していたと考えられる。

第 1 章第 5 節「阮朝における植民地期ピクルの導入」で検討したとおりタ、ピクルは貫銭の重さが基準となっており、流通していた通貨にも影響を受けていた可能性がある。本論が用いた商業統計には、1 ピアストルあたりのサーペクの換算率を記入する欄

標高 25 メートル以上のところはマラリアの危険や少数民族居住地のため住まなかった[菊池 1975: 15]ため、こうした低地のデルタが中心であったと考えられる。

¹⁵⁰ 中国廣西省東南は仏領インドシナと接し、左江の源流が仏領インドシナであるため、交易も多く、南寧、龍州地方ではインドシナピアストル銀貨も流通しており[東亜同文会編 1917a: 981-982]、雲南省河口では、トンキンの度量衡およびフランスのメートル法の使用もみられた[東亜同文会 1917b: 1010]。国境周辺では相互の通貨や度量衡制度が混在していたことは明らかであり、その影響を中国側の度量衡制度から検討する必要がある。しかし、中国においても度量衡制度は地方によって様々に異なっており[天野 1940: 1-14]、公式度量衡との比較だけでは不完全であることから、中国の影響については今後の課題としたい。

また、鉄道路線を有し、中国国境とも接しているラオカイ省は、極めてランソン省と似た環境と考えられるにもかかわらず、ラオカイ省は 1901 年では公式ピクルが普及していた(史料の欠損のため、その動向を時系列で分析することはできない)。ここで鉄道による輸送量を比較してみると、1918 年のデータではランソン省では出発 1805.4 トン、到着 222.5 トンであり、出発に関してはラオカイ省の 306 倍にも上る[関本 2006: 43]。一方で、ラオカイ駅の収益はランソン駅のそれよりも大きい。これは、ラオカイ駅がハイフォン-雲南路線に位置しており、金属工業品、繊維・織物、鉱油・石油、樹脂などの高付加価値の工業製品、加工製品を大量に輸送していたためと考えられる[関本 2006: 39-42]。このように、ラオカイ省とランソン省は地形、経済環境とも類似した背景が見られるが、度量衡の相違を生じさせるこれら 2 省の異なる諸条件については非常に複雑であり、稿を改めて論じたい。

が設けられており、ほとんどの省では 1 ピアストル当り何リガチュール、何ティエン、何サーペクと記入されていた¹⁵¹。

しかしこの原則から離れた記入が見られる省もある。さらに一時的ではあるが、サーペクの存在を否定する記入が見られたのが、ハイニン省¹⁵²とランソン省¹⁵³であった。換算レートを記入する代わりに、リガチュールではないと記入されていたのがバクカン省¹⁵⁴であった。これらの記入から、ハイニン省、ランソン省、バクカン省は他の省と比較して、通貨制度が標準化されていなかったか、あるいは他省と異なる事情を抱えており、タ、ピクルにも影響を与えていたことも考えられる。

(2) ピクル以外の単位とその分布

ピクルと異なる単位は、10 種類確認された。これらの単位を使用している省と、その単位の重量を以下に示す。

- ① タ(ta) : バクニン省 (相当重量不詳。以下「不詳」)、ソントイ省(62.4kg)
- ② カン(cân) : バクカン省(0.604kg)
- ③ アンナンキロ(kilo annamite) : ハーザン省 (不詳)
- ④ キンタル・メトリック(quintal metrique) : ランソン省 (不詳)
- ⑤ アンナンピクル(picul annamite) : フート省(60kg)、トゥエンクアン省 (不詳)
- ⑥ フランスピクル(picul française) : タイグエン省 (不詳)
- ⑦ ノイ(nôi) : タイグエン省(もみでは 1 ノイ 20kg、精米済みの米は 1 ノイ 12kg、もち米はもみも精米済みも 1 ノイ 20kg と記入されている)
- ⑧ リーブル(livre) : カオバン省(0.6kg)
- ⑨ パニエ(panier) : ヴィンイエン省(20kg)、ハノイ市(14 もしくは 20kg)
- ⑩ シャージ(charge) : ハノイ市(60kg)

上記の単位のうち、タ、カン、ノイはベトナム語で、それ以外はフランス語である。また、タ、カン、とピクル、リーブルはベトナム語とフランス語間で、1 カン=1 リーブル、1 イェン(yên)=10 リーブル、10 イェン=100 リーブル=1 ピクル=1 タ、という対応関係にある。つまり、タ、カン、及びリーブルは、表記される言語の違いであり、異なる単位を示したものではない。

キログラムとピクルも、「アンナン (ベトナム) の」と「フランスの」を区別して記入されていた事例もあった。本論序第 2 節 (3) 「ベトナム度量衡研究の諸問題と本論の位置づけ」で述べたトゥオックの事例のように、他の省で「ピクル」「kg」など同じ

¹⁵¹ リガチュール、ティエン、サーペクについては注 92 参照。

¹⁵² 1908 年 1-6 月、8-9 月、1910 年 4-6 月のハイニン省の商業統計に“*Il n'existe pas de sapèques ou zinc dans la province de Hai Ninh*”との記入が見られる。

¹⁵³ 1908 年 12 月のランソン省の商業統計に“*les sapèques ne sont pas employés dans la province de Lang Son*”との記入がある。

¹⁵⁴ 1917 年 8-9 月、11-12 月に“*pas de ligature*”と記入されている。

単位名でも、フランス側が策定したものとベトナム固有の制度が基になっているものが混同されて用いられていた可能性がある。また、アンナンピクルがベトナム固有のタを、フランスピクルが植民政府の公式ピクルを意味するとすれば、多様な用いられ方をされてきたタをピクルと単純に読みかえていたという第1章で検討したタの仮説の裏付けとなろう。

次に、ノイであるが、これはベトナム語で「鍋」という意味である。相当する重量も12-20kgとピクルと比較して軽量であることから、当時杵のように使用されていた鍋のようなものがあり、それが象徴的に容積単位の名前となったと考えられる。

キンタル・メトリックは一般的には100kgとされる単位である¹⁵⁵。しかし、ランソン省では実際に何キロに相当するか記入されていなかった。

ハノイ市とヴィンイエンのパニエは、補論第2節(4)「容積単位」で述べたように、民間で使用されていた米取引の際の容積単位であり、かごの意味である。ハノイ市のシャージはフランス語で「重荷、重み」の意味であり、これは重量単位である。ハノイ市だけはパニエとシャージがメインに用いられており、ピクルは1912年以降になって初めて現れる。ハノイ市はその他の省と違い、都市であり消費地であることがその理由と考えられるが、1シャージは相当重量も60kgである。それにもかかわらず、なぜ首都ハノイだけが、違う単位を使用して記入されていたのかについては、今後の課題としたい。

こうした単位の多様性は、担当官の裁量によって左右されると考えられ、その違いを過度に強調することは危険である。しかし、ピクルとキログラムとは異なる単位がどの省で見られたか地図上で位置関係を見てみると、全ての省がハノイ以北に位置している。つまり、米作が盛んであるトンキンデルタにおける省では、一度もピクルとキログラム以外の重量単位は記入されていない。加えて、トンキンを流れる2大河川（紅河とダー川）流域となるハノイ西北に当たる省も、すべてピクルで記入されている。

このことから、米作が盛んな地域や、近隣の省との連絡が比較的便利な地域では、米を計る際にピクル、あるいはタを使用するのがある程度常識となっていたのに対し、ハノイ以北の省ではそうした意識がまだ一般的ではなく、記入する担当官によって様々な単位が使用されていたのではないかと推測できる。こうした重量単位の多様性や非統一性は、取引や貿易の際大きな障害となる。つまり、度量衡の側面から、これらの地域は消費米の需要が主であったことの根拠を示すこともできると考える。

¹⁵⁵メートル法以前（1795年以前）の制度ではキンタルは約48.95kgであったが、現行では100kgである[新倉 1999: 612-613]。

第4節 アンナン

アンナンは1900-1909年、14省約360事例を対象とする（表2-3参照）。アンナンの特徴としては、ピクル以外に阮朝の公式単位ホック（hộc）、フオン（phuong）が報告されている。南部で主に使われている単位が報告されている事例もみられた。以下、傾向、地域性とその背景について具体的に検討する。ただし、タインホア省に限っては1904年、1908年で一貫してピクルが用いられているがその相当量が不明であるため、分析から外す。

表2-3 アンナンにおける商業統計上の度量衡の事例

ビンディン ピクル=60kg VI 11, VII 1, 4-6, 8-12 IX 9, X 1-3 ピクル IV 6-8, V 1-2, 6-8, IX 6-8	ビントウアン ピクル=60kg VI 10-12 VII 1-5, 12-VIII	ダックラック ピクル=60kg VI 11, 12 VII, VIII IX 4-9 X 1-9	ハーティン ピクル=60kg VI 11, 12-VII-2 ピクル=60.4kg VIII 3-12, X 1-3 ピクル VII 3-6 フオン(phuong)=22.5kg VIII 1 パニエ(panier) VII 9-11 シャーヅ(charge)=多様 パニエ=多様 VII 7-8
カインホア ピクル=60kg VII 5-6 ピクル VII 1-2 ホック(hộc)(P) フオン=22.5kg(B) VII 9-10	ニントウアン ピクル=60.4kg IX 4-9 タ(ta)=60kg VI 11, 12, VIII 1, 2	ゲアン ピクル=60kg VII 1, 2, 5-10, VIII 7-9, 1-6 ピクル=62kg VII 3-4 ピクル VIII 4 60kg VII 11-12, VIII 1-2, 5, 6, IX 4-6 4.5フオン=100kg(P) 2フオン6バット(bát)=100kg(B) VI 11, 12	フーイエン ピクル=60kg VIII 1-2 ピクル VII 3, 4, VIII 5, 6, 9 ザー(gia) VII 5-12 ヴオン(vuông)(P), ピクル VII 1, 2 ザー(P), ピクル(B) VIII 3, 4, 10, 12, IX 4-9
クアンビン ピクル=63kg VII 7-12, VIII, IX 4-9, X タ=63kg VII 7-8 タ VII 5-6	クアンナム ピクル=60kg V 3, 4, VI 11, 12, VII 1, 2 ピクル IV 7-9, V 6-8, VII 3-12 IX 4-9, X 1-9	クアンガイ ピクル=60kg VI 11-12, VII, VIII, IX 4-9, X	クアンチ ホック(hoc)=44kg(P), 40kg(B) ユニオン(union)=40kg(B) VI 11, 12 ホック(P), ヴオン(B) VIII, IX 3-5 ホック IX 7-9
タインホア ピクル IV 7-8, VIII 1, 2, 9, 10	トウアティエン ピクル IV 6-8, V 6-8 60kg VI 11, 12 100kg VII, VIII 1, 2, 7, 9, 12		

(注) 単位名の下に書かれているアラビア数字とローマ数字は、データの記載されていた年月を示している。

年はローマ数字(1900年のみアラビア数字の「0」)で示し、月はアラビア数字1-12で示している。ローマ数字のみの場合は、一年12か月分のデータがすべてそろっていることを意味する。(例) XII.XIII.2-9→1907年1-12月、1908年2-9月分の価格表に記載が見られることを表す。

P: もみ、B: 精米済みの米を意味する。

(出所) TTLUQGI, GGI, 南部各省商業統計(Statistiques commerciales)

史料番号9467-9473、9475-9522より筆者作成。

(1) ピクルに関して

①1 ピクルが 60kg であった省とその分布

1 ピクルが 60kg であった省は以下の 7 省である。ビンディン省、ビントゥアン省、ダックラック省、クアンナム省、クアンガイ省、トゥアティエン省、ハーティン省。ハーティン省は 60kg 以外のピクルも、他の単位も報告されており、その使用法が一定しない。そのため、ハーティン省については本節[2]「ピクル以外の単位とその分布」で、他の単位と合わせて検討する。

ハーティン省を除く 6 省は、1904 年から 1909 年を通じて一貫して 1 ピクル 60kg で統一されていた。これら 6 省が 1 ピクル 60kg を統一的に使用していた要因として、以下のことが考えられる。

第 1 に、経済規模が大きい地域を含む省、外国との貿易があった大型の港が存在する省は、国内外での物品の取り引き時に統一的な計量単位を使用する必要性が高く、早期にピクルが統一されていたことが考えられる。

具体的にこれらの省を見ていくと、まずトゥアティエン省はアンナンの中心都市、フエを有し、人口も多く¹⁵⁶、一大消費地としての機能も備えていたはずである。彼らは米を量る際ピクルの他に 100 キロを一つの単位としても用いており、このことから商品流通の規模やフエを中心とする経済規模が大きかったといえる。

クアンナム省とビンディン省は、同じく大規模な港を備えていた。クアンナム省はインドシナで第 5 位の規模を誇るツーラン(Turane)港[Bouault 1930(vol.2): 61]、ホイアンの貿易港として有名なファイフォ(Faifo)港を有しており、またビンディン省もインドシナで第 7 位に位置するクィニョン(Quy Nhơn)港[Bouault 1930(vol.2): 61]があった。またそれ以上に、これら 2 省はそれぞれトゥーボン(Thu Bồn)デルタとビンディンデルタを有している。この二つのデルタは農業に適した耕作地であり、当時すでに中部の米の生産の中心となっていた[Li Tana 1999: 21-22]¹⁵⁷。

ビントゥアン省とクアンガイ省は、主要な港もなく、農業が盛んな地域も有していない。一方で、これら 2 省は中部で農業生産の中心的機能を担っていた 2 つのデルタに接している。ビントゥアン省はドンナイデルタに近く、またクアンガイ省は既述のトゥーボンデルタとビンディンデルタに接している。つまり、これらデルタで生産された農産品の流通経路としての役割をビントゥアン省とクアンガイ省は担うこととなり、

¹⁵⁶ 中部各省の人口は 1899 年のデータで以下の通り[AGI 1899: 343-368]。トゥアティエン省：ヨーロッパ人（以下 E）66 人、ベトナム人（以下 A）77 万人、中国人（以下 C）375 人、カインホア省およびビントゥアン省：E30 人、A13 万 2 千人、C1300 人、チャム族およびモイ族 3 万人、クアンビン省：E22 人、A35 万人、C56 人、タインホア省：E16 人、A125 万人、C180 人、ゲアン省：E69 人、A86 万人、C256 人、ハーティン省：A69 万人。ビンディン省、フーイエン省、クアンガイ省はデータなし。

¹⁵⁷ トゥーボンデルタはトゥーボン川とその支流によって形成されるデルタで、面積は 1800 平方キロメートルにおよぶ。一方、ビンディンデルタは、ダーザン(Đà Rằng)川とライザン(Lai Giang)川からなる 1550 平方キロメートルのデルタである[Li Tana 1999: 21]。

その商品流通が発達していく過程で、公式ピクルが比較的早く浸透していったと考えられる。

ダックラック省については、上記の要因とは別の理由が考えられる。ダックラック省は互いに言語・文化も異なる少数民族が多く居住する高原から山間部に位置する省である。そのため行政的な統治、管理が難しかったことが容易に想像でき、公式度量衡制度が早期に周知徹底されていたとは考えにくい。しかしながら、商業統計上では1ピクルは60kgで統一的に使用されていた。この理由については、以下のように説明できる。この地域では、各少数民族が各地に点在しており、それぞれ異なる文化を持っていたため度量衡制度も非常に多様な様相を見せていた。しかしそれは、大多数の人々が省内を通じて慣習的に使用してきた度量衡制度ではない。ひとつの伝統的制度がダックラック省に根強く残っているわけではなく、多様な制度が局地的に分散していたといえる。それが逆に、地方行政の行政官が市場での価格調査の際に公式度量衡を自ら用いて計量することを容易にしたと考えられるのではないか。

②ピクル1単位当たりの重量の差異とその分布

1ピクルが60kgでなかった省と重量の差異は以下の通りである。

a)1ピクル60.4kgの省：ハーティン省、ニントゥアン省

b)1ピクル62kgの省：ゲアン省

c)1ピクル63kgの省：クアンビン省

ハーティン省、ニントゥアン省とゲアン省では、ピクル以外の単位も頻繁に用いられており、米を量る際ピクルがまだ主要な単位として機能していたとは言えない。これら3省は、以下3.「ピクル以外の単位とその分布」で他の単位と合わせて検討する。

一方クアンビン省では、一貫してピクルが米の計量単位として用いられており、その相当量も63kgで統されていた。なぜ公式の60kgではなく63kgに統一され、長期にわたりそれが使われ続けてきたのか。これに対する解答を提示するのは非常に難しいが、恐らく以下の要因が大きく作用していると考えられる。

クアンビン省には南北分裂代北部と南部の境界となっていたタムジエン(Tam Diên)山脈がある。鄭氏と阮氏は1620年以降国土を二分して争い、ザイン(Gianh)川北を鄭氏が、南を阮氏が領していた[藤原 1986: 236]。1627年から1672年頃まで両軍の戦闘が繰り返されたが、その後休戦が実現し、南北の境界はこのザイン川(リンザン/Linh Giang)となった[藤原 1986: 254]。つまり、この地域は重要な軍事拠点として位置づけられていたことになる。こうした軍事拠点への物資輸送はきわめて重要な国家事業であり、長期にわたる戦いの中で、軍事物資供給を通じて度量衡が徐々に統一されていったのではないかと考えられる。また、1ピクルが公式よりも重い63kgであったことは、このリンザンへの物資供給量が大きかったため、一単位当たりの相当量が大きい単位をより志向されたのではないかと考えられる。元来ピクルは一人が担げる重量であったこと、リンザンへの物資輸送は地形的な背景もあり、大型船舶や重機、輸送車が利

用できなかったため人力が主力であったことを考えると、その重量が 100kg ではなく、63kg となっていたことにも妥当性がある。

③ピクルが使われていない省

クアンチ省に関しては、1909 年まで一切ピクルが使われていない。この省では米の計量の際はもっぱらホックやヴオンが使われていた。これら 2 つの単位は阮朝の公式単位である。クアンチ省は阮朝の都フエに隣接しており、また特に発展した農業・工業地帯もない。そのため、新しい単位が普及する積極的要因がみられず、阮朝制度が根強く残っていたと考えられる。

(2) ピクル以外の単位とその分布

商業統計上では、ピクルの他に以下の 7 つの単位が確認された。ホック(hộc)、フウオン(phuong)、ヴオン(vuong)、バット(bát)、ザ(gia)、シャージ(charge)、パニエ(panier)。

①阮朝の単位

阮朝で使われていた単位：ホックとフウオンが商業統計上で報告されていた。これはアンナンに限って見られる事例で、トンキンとコーチシナにおいてはどの省においても一度もホックとフウオンは報告されていない。

クアンチ省とカインホア省では、20 世紀初頭にいたってもホックが使われていた。クアンチ省では 1 ホックは 44.4kg、カインホア省では 1 ホックは 45kg であった。

フウオンはゲアン省、ハーティン省、カインホア省で使われており、その相当重量はハーティン省とカインホア省では 22.5kg、ゲアン省では具体的に記載はなかった。

これら阮朝の単位を使っている省は、農業や工業が発展していない地域に分布している。カインホア省は北はビンディンデルタがあるが、2000 メートル級の山で隔てられている[Bouault 1930(vol.2): 3]。また、カインホア省の中心、ニャチャン(Nha Trang)では、カイ(Cái)川沿いの谷間、盆地であり、8-9 世紀の中国の史料によると、ニャチャンとファンラン(Phan Rang、ニントゥアン省)、ファンリー(Phan Rí)とファンティエット(Phan Thiết、ビントゥアン省)は、中部 3 つの盆地であり、これはひとつひとつ独立した国のようであったとある[Li Tana 1999: 21]。

1 単位当たりの相当重量は公式ピクルの 60kg よりもかなり軽い。ホックやフウオンに加えて、ゲアンでは商業統計上にバット(bát：鉢)と呼ばれる非常に小型・計量の単位で米の価格が報告されている。これらのことから、経済規模が小さく、注目されるべき農工業生産品、生産地がない地域、さらに近隣との交通連絡網が確立されていない地域では、前時代の単位が 20 世紀初頭に至っても行政文書上でも用いられ、それぞれの単位の容量も小さいものであったことがわかる。

②フランス名の単位

フランス名の単位では、パニエとシャージの2種類がハーティン省の商業統計上でみられた。

まず、パニエであるが、パニエとは籠の意味であり、前節トンキンの中でも言及したとおり、トンキンでは1パニエが14あるいは20kgであった。パスキエの『アンナンの昔日』によると、パニエはトンキンにおいて米を計量する単位と見なされており[Pasquier 1930: 269]、アンナンでは唯一ハーティン省でのみその使用を確認できた。ハーティン省はベトナムの南北朝時代の境界に接しており、その境界は軍事的境界だけではなく、地形的にも山脈によって南北に分かれていたとすることができる。そのため、ハーティン省は植民地期では中部ベトナム、アンナンに属してはいるが、植民地期以前では北部の文化の影響はここハーティン省にまで達していたと考えられる。

一方シャージは「重荷」を意味する単語であり、その一単位当たりの相当量は「多様」と報告され、明確な重量が記載されていない。これは恐らく当時民間の日常生活の中で用いられていた計量器があり、それを地方行政の役人が報告のためにフランス語、シャージと訳したのではないか。また、行政文書上でもこれら様々な単位の記載が見られることから、ハーティン省においての地方行政はその管理・運営共に十分とは言えず、植民地当局側が設定した公式度量衡制度も普及していなかった状況が見て取れる。

③アンナンにおいてコーチシナの制度が見られる事例

ザは南部において米の計量の際普及している計量単位であるが（次節で詳述）、この単位が中部のフーイエン省でも報告されている。

また、南部では米の計量の際、特徴的な制度が一部地域で見られる。詳しくは次節で検討するが、その制度とは同じ単位名を使っている、量る対象がもみか精米済みの米かによってその相当重量が異なる制度である（本論では便宜上この制度を「二重計量制度」と呼ぶ）。この二重計量制度には華僑の存在が深く関わっていると推測され、アンナンでも、この二重計量制度がフーイエン省、クアンチ省、カインホア省の3省で確認できた。

フーイエン省では、ザと、この二重制度の両方が報告されており、もっとも南部の、そして華僑、中国の影響を受けている省といえる¹⁵⁸。南部と異なり、華僑は一部地域を除き、中部には積極的には進出してこなかったとされる¹⁵⁹。しかし、南部、北部と

¹⁵⁸ フーイエン省で信仰されている鯨神は、三国志の関羽がモデルとなっており、これは中国からの強い影響が見られることを示している（2012年11月20日ベトナム宗教研究院客員研究員大西和彦氏へのインタビューによる。これはベトナム文化通信研究院フエ分院院長グエン・ヒュー・トン(Nguyễn Hữu Thông)氏による示教である）。

¹⁵⁹ 中部に華僑が進出してこなかった理由として、山脈がいくつも横たわり交通が不便なため商業は活発ではなく、米はわずかに沿岸平地に生産されるに留まり、現地需要も満たすことができないため、米の取り引きで利益を得ることが難しかったためである[満鉄東亜経済調査局 1939: 47-48]。

比較して少数ではあるが中部においても華僑は存在しており、その経済活動が度量衡制度に影響を与えている可能性は高い¹⁶⁰。

中部地域で特に華僑人口が多いのは、船舶を寄せるのに便利な凹凸に富む海岸線を有する南側の各省¹⁶¹とされ、中でもカインホア省、ファンラン省、ビントゥアン省は漁獲高も豊富であったとされる[満鉄東亜経済調査局 1939: 53]。

以上、アンナンの度量衡事例分析について要約すると、アンナンにおいては農業が盛んな地域、貿易港を有している省、海運、漁業が発達していると思われる省では、米の計量の際公式ピクルを用いることが一般的になっていることが確認された。一方で、1 ピクルが 60kg ではない省については、その理由が経済規模、地理的要因や前時代における歴史的背景に起因していること、およびその諸条件が具体的に検討でき、20 世紀初頭に至ってもこうした前時代の影響が色濃く残っていることが分かった。

第5節 コーチシナ

コーチシナに関しては、1900 年から 1909 年間の 21 省約 500 事例を対象として検討する（表 2-4 参照）。アンナンやトンキンとは異なり、コーチシナでは特異な度量衡制度が見受けられた。それはもみを量る場合と精米済みの米を量る場合で、異なる単位を用いる計量方法である。さらには、同じピクルを用いていても、もみを量る場合と精米済みの米を量る場合で相当量が異なる事例も多々確認できた。例えば、もみを量る場合 1 ピクルは 68kg であるが、精米済みの米を量る場合 1 ピクルは 60kg になる。これら 2 つの単位、あるいは 2 つの相当重量を同時に使い分ける制度のことを、本論では便宜上「二重計量制度」と呼び、論を進める¹⁶²。一方で、アンナンやトンキンの事例と同じく、この二重計量制度を用いていない地域もある。つまりもみも精米済みの米も、同じ単位、同じ相当重量で計量する方法である。さらには、これら 2 つの計量法

¹⁶⁰ 1907 年のデータによると、フーイエン省には約 700 人の中国人が住んでおり、その多くは商業に携わり、コーチシナと香港に向けてココナッツ、粳、トウモロコシ、アヒルの卵などを輸出し、カインホア省でも、米、綿、トウモロコシ、たばこ、さとう、絹を輸出していた[Annuaire Commercial Renseignements Généraux 1907: 253, 267]とある。

¹⁶¹ カインホア省、ファンラン省、ビントゥアン省、ビンディン省、クアンナム省、フーイエン省、クアンガイ省が挙げられている。この南に位置する各省の華僑人口は、中部ベトナム全体の 76% を占め、次いで中部北に位置する各省（トゥアティエン省、ゲアン省、タインホア省、クアンチ省、クアンビン省、ハティン省）が 22% となっている[満鉄東亜経済調査局 1939: 52-53]。

¹⁶² アンリも、粳の買い付けには 1 ピクル=68kg であったとしている[Henry 1932: 17]。ピクルの種類について、AGI では以下の 3 種類を紹介している[AGI 1889(2e): 399]。①米・もみ用：42.5 リガチュール（1 リガチュールは 1.5kg なので 63.750kg）、②塩用：45 リガチュール、③鉄・薪用：50 リガチュール。また、コーチシナでは玄米は 1 ピクル 60.7kg、もみでは 1 ピクル 68kg で用いられるとしている。

が両方使われている地域もある。そのため、コーチシナの商業統計における度量衡計量単位の分析は、非常に複雑で困難である。

加えて、15 世紀末にいたるまで、南部ベトナムは未開拓の地であり、少数民族やカンボジア人グループが分散して居住していたに過ぎない。16 世紀以降、ベトナム人(キン族)は南への領土拡張を開始し(「南進」第 2 節参照)、国家としての構造を形作り始めた。この状況は、紀元前 2 世紀からベトナム人による広大な農業生産地を有していたトンキンとは対照的である¹⁶³。

こうした複雑で独自の背景を抱えるコーチシナの分析を行う前に、(1)では米の計量法に影響を与えるであろう背景・要因について先にまとめる。コーチシナにおける米の計量単位については、(2)以降で論じる。

表 2-4 コーチシナにおける商業統計上の度量衡の事例

	バックリエウ	バーリア	ベンチエー
1903年まで	20リットル升=13kg(P) ピクル=68kg(B) 0 10-12, I 1, 6-9 II 6-12, III 3-10	ピクル=60kg 0 9 ザー=20kg(P) ピクル=60kg(B) 0 11, I 1, 3, 5, 9 II 7, 8, 10, 12 III 3, 4, 8, 11, 12	ザー=23kg(P) タ(ta)=68kg(B) 0 8, 9
			100ザー=2700.36kg(P) ピクル=68kg(B) 0 10, 11
			ザー=40lit(P) ピクル=68kg(B) 0 12, I 1, III 12
1904年以降	ピクル=68kg V 1, 2, VII 3, 4 20リットル升=13kg(P) ピクル=68kg(B) V 3, 4 ザー(gia)=40lit(P) ピクル=62kg(B) VII 1-2	ザー=20kg(P) ピクル=60kg IV 1, 2, 4-10, V 3, 4 ピクル=60kg V 1, 2, VII 1-4, IX 1, 2, 4-9	ザー=40lit(P) ピクル=68kg(B) IV 2, 4, 8, 10, 12 V 5, 6
			ザー=40lit(P) ピクル=60kg(B) V 3-4
			40リットル升(P) ピクル(B) V 10
			ピクル=60kg V 1, 2, VII 1-4
			ピクル=68kg IX 1-6

¹⁶³ トンキンデルタの稲作の歴史に関しては、注 108 参照。トンキンは、植民地化される前には農業がすでに高度に発達していた[津田 1970 : 54]。

	ビエンホア	カントー	カップサンジャック
1903年まで		ピクル=60kg 0 9-12, I 3,5-7, II 6-12 III 4,7-12	ピクル=60kg 0 9-12, I 4-6,8,9,12 II 7-12, III 4,8,10 ピクル=60kg(B) ザー=20kg(P) I 7
1904年以降	ピクル=60kg IV 1-10, V 1-6, 9,10 VII 1-4, IX 1-5 ピクル IV 11,12, IX 11,12	ピクル=60kg V 3-6 ピクル=68kg(P)、60kg(B) IV, V 9,10 ピクル=68kg VII 1-4, IX 1-6	ピクル=60kg IV, V 1,2
	チャウドック	チョロン	ザーディン
1903年まで	100kg 0 9 ピクル=60kg 0 10, I 1 100kg(P), ピクル=60kg(B) I 3,5,7, II 7,8,10,12, III 12	ピクル=68kg(P)、60kg(B) 0 9,11,12, I 1,3,5,7,9,10 II 8,10, III 12	ピクル=68kg(P)、60kg(B) 0 10, I 1 ヴォン(vuon)=40lit(P) ピクル=60kg(B) 0 11 40リットル升(P) ピクル=60kg(B) I 4-9,12, II 1, 6-12 III 3,4,7-12
1904年以降	100kg(P), ピクル=60kg(B) IV 4 ピクル=60kg IV 2,6,8,10-12, V 1-6 VII 1-4, IX 1-6	ピクル=68kg(P)、60kg(B) IV 1,4,6,8,10,12, V 1,2,5,10 VII 1-4, IX 1-6 ピクル=60kg V 3,4	ピクル=68kg(P)、60kg(B) IV 1-3 40リットル升(P) ピクル=60kg(B) IV 4-10, V 1-6, 9-12 ザー=40lit(P) ピクル=60kg(B) VII 1-4, IX 1-6
	ゴーコン	ロンセン	ハーディエン
1903年まで	ピクル=68kg 0 11, I 1,3,5,7,9, II 7,8,10,12 III 2,10,12 100kg(P), ピクル=60kg(B) III 4	ピクル=60kg 0 10-12	ピクル=79lit(B), 129lit(P) 0 10 ピクル=68kg(P)、60kg(B) 0 11 ピクル=60kg I 1,5,6,8,9, II 9-12 III 1-4,10-11
1904年以降	ピクル=68kg IV 2,4,8,10,12, V 1-6 40リットル升 VII 1,2 ピクル VII 3,4, IX 1-6 ミート	ピクル=60kg V 3-6, VII 1,2 ピクル=68kg VII 3,4, VIII 12, IX 1,4	ピクル=60kg IV 1-6,8,10-12, V 3-6,9-10 VII 3,4, IX 1-3 ピクル VII 1,2, IX 4-6
		ザックザー	サデック
1903年まで		ピクル=45貫銭=67.95kg(P) ピクル=40貫銭=60.04kg(B) 0 10-12, I 1-3,8,9,10 II 5,7-11, III 3-12 ピクル=45リール=67.95kg(P) ピクル=40リール=60.04kg(B) I 5,7	ピクル=68kg(P)、60.04kg(B) 0 10, I 6-9, II 6-10 III 1,2,4,9-12 ピクル=68kg(P) ピクル=60kgまたは60.04kg(B) 0 12, I 1, III 3,7,8 ピクル=68kg(P)、60kg(B) II 11
1904年以降	ピクル=68kg IV, V 1-6, 9-10 ピクル VII 3,4, IX 1-6	ピクル=45貫銭=67.95kg(P) ピクル=40貫銭=60.04kg(B) IV, V 1-6,9-10, VII 1-4 IX 1-6	ピクル=68kg(P)、60.04kg(B) IV 1,2,4,6-12, V 3-6,9,10 ピクル=68kg(P)、60kg(B) IV 1-6, VII 1-4, IX 1-6

	ソックチャン	タンアン	タイニン
1903年まで	キンタル(quintal) IXIX 3-9, 11, 0 1	ピクル I 7	ピクル=68kg(P)、60kg(B) 0 11, I 1, 7, 9, 11, II 8, 10, 12 III 4, 6, 8, 10, 12
	ピクル 0 10, 11	ピクル=60kg 0 11, I 1, 3, 5, 9 II 7, 8, 10, 12, III 4, 8, 10	ピクル=60kg II 7
1904年以降	ピクル=68kg(P)、60kg(B) 0 12, I 1-3, 6-9, II 8-12, III	ピクル=60kg IV 3, 4, 7, 8, 10, 12, V 3-6, 10	ピクル=68kg(P)、60kg(B) VII 2, 4, 8, 10, 12, V 3-6, 10
	ピクル=60kg VII 1-4, IX 1-6	40リットル升(P)、ピクル=60kg(B) VII 1-4, IX 1-6	ピクル=60kg VII 1-4
	トゥーダウモット	チャーヴィン	ヴィンロン
1903年まで	仏式40リットル升 2種類※1 0 3, 10-12, I 1-3, 6-9, II 6-12, III	ピクル=79lit(B), 129lit(P) I 1, 3, 5, 7, II 7, 8, 12, III 1, 3, 8, 10	ザー=40lit(P)、ピクル=60kg(B) 0 11
		ピクル=78lit III 12	ヴォン=20kg(P)、タ=60kg(B) I 1
1904年以降	仏式升40リットル 4種類※2 IV 1-6, V 9, 10, IX 1-3	ピクル=79lit(B), 129lit(P) IV 2, 4, 6, 8, 10, 12, V 1-6, 10	ヴォン=20kg(P)、タ=60kg(B) V 1-2, 5, 6
	仏式升40リットル 3種類※3 IV 7-12, V 3-6		ザー=20kg(P)、タ=60kg(B) V 3, 4
	仏式升40リットル 6種類※4 VII 1-4	ピクル=60kg VII 1-4, IX 1-6	タ=68kg(P)、60kg(B) IX 3
	仏式升40リットル IX 4-6		タ=68kg IX 6

(注) 単位名の下に書かれているアラビア数字とローマ数字は、データの記載されていた年月を示している。

年はローマ数字(1900年のみアラビア数字の「0」)で示し、月はアラビア数字1-12で示している。ローマ数字のみの場合は、一年12か月分のデータがすべてそろっていることを意味する。(例) XII.XIII.2-9→1907年1-12月、1908年2-9月分の価格表に記載が見られることを表す。

P: もみ、B: 精米済みの米を意味する。

※1 仏式升40リットル=23kg(P), 32kg(B)

※2 仏式升40リットル=23kg(P), 31kg(B1級), 32kg(B2級), 22kg(不明)

※3 仏式40リットル=23kg(P), 32kg(B), 22kg(不明)

※4 仏式升40リットル=23kg(P1級), 21kg(P2級), 30kg(P3級), 32kg(B1級), 31kg(B2級), 22kg(B3級)

(出所) TTLUQGL, GGI, 南部各省商業統計(Statistiques commerciales)

史料番号9523-9561より筆者作成。

(1) 米の計量法に影響を与える可能性のある諸要因

まず、フランスが植民地統治開始以前の南部における米の状況についてまとめる。

米の生産と消費については、全国どの地域においてもその地域内で行われており、凶作が起きた地域では飢餓が起きていた。余剰に米を蓄えているところはどこにもなく、不作・凶作が起きた地域に財力があっても、地域外から米を買うことは非常に難しい状況であった。しかし、南進が開始され、領土が拡張され、小規模な村落ができてくると、特に 1698 年以降からは制度も改良され、農作地面積も飛躍的に増大した。そして米は商品となった。ザーディンの人々は米をフースアンで売り、また遠方からは米を買うためにザーディンに集まってきた[Trần Văn Giàu and Trần Bạch Đằng 1998: 227]。

19 世紀前半には、ベトナム南部メコンデルタ地方は余剰米の生産地として知られ、中部に向けての食料の供給地であり、1867 年、フランスは南部を支配下に置くとすぐに米の輸出を開始した[高田 1995: 154]。1877 年には南部の米は外国にもかなりの量輸出されており、その際の計量はピクルで行われていた[Nguyễn Phan Quang 2004: 16]。

1875-84 年の時期に関しては、当時すでに米の単作と輸出に基礎を置く典型的なモノカルチャー経済の様相を呈していた[権上 1985: 67]。コーチシナの村々は一大商業都市 チョロンに無数の水路で結びつけられており、そのチョロンを介して外国市場と固く結ばれ、またこの脈管体系を支配していたのは外国貿易を独占するチョロンの華僑商人であった[権上 1985: 68]¹⁶⁴。こうしたコーチシナ内部の流通支配は、サイゴン開港、植民地化直後に突如生じたものではなく、それ以前に歴史的に形成されていた[菊池 1988: 14]¹⁶⁵。

以上から、17 世紀にはザーディンの米はすでに国内のあらゆる地域にリンクしており、19 世紀南部の米は外国にも輸出される主力輸出品に成長していた。これは常に米不足に悩まされていた中部や、長年にわたる米作の歴史がある北部とは対照的である。

植民地コーチシナの経済開発は、第一にチョロン、サイゴン地区の流通拠点を中心としたコーチシナ西部メコン・デルタ米生産と、第二にコーチシナ東部の天然ゴム生産の二つの生産活動を通じて行われた[高田 1994: 242]。

稲作の開拓が本格的に開始されたのは 20 世紀に入ってからであり、その主要な地域はコーチシナ西部であった。コーチシナ西部は稲作に適した土壌であり、用水路の整備・発展も徐々に進んでいった。払い下げが最も盛んに行われたのは 1902 年と 1904 年、ザックザー省、ソックチャン省、カントー省においてである。一方コーチシナ東部はゴムの栽培には適していた。一般的には、土地の払い下げは 1910 年以降に増加した[高田 1984: 241, 246, 250]。

次に輸出米の種類については、高田[1979]が詳しく動向を分析している¹⁶⁶。1860 年代から 1870 年代の主力商品は玄米(riz cargo)であったが、1880 年代では、もみの輸出が急増する。もみ米はヨーロッパの輸出商の輸出米分類に含まれていないため、中国輸出商の一手に握られていたと考えられる¹⁶⁷。19 世紀末、精米工業を向上させるために植民地政府はもみの課税額を上げたため、1896 年以降は精米済みの米の輸出が最も盛んとなった。こうした輸出米の形態変化は、コーチシナにおける華僑資本によるもみの流通の独占と精米業の発展と関係が深い[高田 1979:58-59; 1994: 244]。

¹⁶⁴ 南部に華僑が集中する理由としては、①広東、福建からの海路が至便であったこと、②この地の経済状況が商人を主とする華僑進入に好都合であったこと、③17 世紀の南進以来の古い伝統的基盤を有していること、が挙げられる[満鉄東亜経済調査局 1939: 45]。トンキンに華僑があまり進出しなかった理由は、①人口が過密であり、華僑に対する反感が特に激しいこと[満鉄東亜経済調査局 1939: 45]、②トンキンのベトナム人は（古くから中国人と混血していることも含め）商工業に熟達しており、華僑の進入の余地がないこと、③農産物の一部分のみしか輸出しておらず、華僑の特異とする対外貿易は制限的であること、④貿易の重要部分を占める鉱業は、ほとんど全てヨーロッパ人が独占していること[満鉄東亜経済調査局 1939: 47][Robequain 1939: 43]、による。

¹⁶⁵ 阮朝期、米は中国や諸外国へも密かに流出していた[高田 1995: 154][藤原 1986: 283-285]。

¹⁶⁶ 輸出米の動向については Coquelrel[1911]の巻末統計に基づき、分析されている。

¹⁶⁷ Coquelrel[1911: 131]の分類に基づいて高田[1979: 59]が指摘している。

輸出用の米は、様々な商標が付けられた。当時もっとも有名だったのは、「ゴコン (Gò Công) 米」、「ヴィンロン (Vĩnh Long) 米」、そして「バイサウ (Bãi Sau) 米」である。ヨーロッパと中国の市場は、特にこれらの米を好んだ [Nguyễn Phan Quang 2004: 18]。サイゴン米調査によると、最も有名なものは「ゴコン米」と「バイサウ米」であり、これらの栄養成分はトンキンの米よりも勝っていた [台湾総督官房調査課編 1925: 94-96]。つまり、これらの米の生産地であるゴコン省、ヴィンロン省とソックチャン省では、米の流通網が他地域と比較して発達していた可能性がある。

最後に、精米工場について見ていく。コーチシナで最初の近代精米工場はフランス資本のスプーネ・ルナール会社で、1869 年チョロンに建設された [Coquelrel 1911: 88]¹⁶⁸。19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、サイゴンとチョロンには多くの工場が開業したが、この工場のほとんどは華僑に属する精米工場であった [Nguyễn Phan Quang 2004: 120]。一方で、サイゴンとチョロン地区以外での各省におけるコーチシナ米改良委員会及び試験場と精米工場の設立は、1920 年以降となる [Nguyễn Phan Quang 2004: 49, 86-87, 139]。

各地での米の売買については、『九龍地誌』に興味深い記述が見られる。「商売上手なのは元華僑のベトナム人で、ベトナム人は遠くに行きたがらず、狭い範囲でしか売買しない。その担い手の中心は、女性である [Trần Thanh Phương 1989: 48]」。この記述はベトナム人の気質からも、その米穀取引に関して華僑とうまく住み分けが行われていたことを示唆している。

以上を要約すると、本節が対象とする期間 (1900-1909 年) は、農業開拓の初期段階といえる。南部の米はすでに商品となっていたが、コーチシナ西部における大規模な開発はまだ始まったばかりであった。20 世紀初頭、精米工場はほとんどチョロンとその近郊に集中しており、各省における精米工場や米に関わる機関・組織はまだ設立されていなかった。それ故に、20 世紀初頭とは前時代のシステムからフランスによる新しい制度への過渡期であったともいえる。

(2) 二重計量制度について

コーチシナにおいて特徴的な二重計量制度は、21 省中 18 省で確認できた。これはコーチシナ全土の 85% を占める。1881 年 1 月 5 日のコーチシナ知事による規定では¹⁶⁹、米の計量はピクルを使うよう求められている。この時 1 ピクルは慣習により 60.4kg に定められたが、同時期、サイゴンの市場では 1 ピクル 60.738kg であった [Nguyễn Phan Quang 2004: 16]。19 世紀末、米の計量にピクルを用いることが規定で定められていたにもかかわらず、1 ピクル当たりの重量は統一されていなかったことがわかる。しかし

¹⁶⁸ コーチシナにおける精米業については高橋[2006]に詳しい。

¹⁶⁹ トゥン [Nguyễn Phan Quang 2004: 16] によるが、JOIF においてはこの規定は確認できなかった。

ながら、本論が参考にした文献上ではほとんど二重計量制度について言及されていない。商業統計の事例から、20世紀初頭まで、この二重計量制度がまだコーチシナで一般的であったことが今回の分析で明らかとなった。二重計量制度は、1905年以降からその使用頻度が減少し、多くの省が公式ピクルの60kg一本でもみも精米済みの米も計量するようになっていった。

①1900年から1909年を通じて、二重計量制度を使用している省とその分布

1900年から1909年の期間中、米の計量に統一的に二重計量制度を使っていたのはチョロン省、ザーディン省、ザックザー省、サデック省の4省である。なかでも、チョロン省は一つの事例(1905年3-4月)を除いて一貫して二重計量制度を使っており、また上記期間中全てピクルで計量されている。南部においては、サイゴン(現在のチョロンも含む)は18世紀から華僑による貿易、特に米輸出の中心地となっていた[Nguyễn Thé Anh 2008: 201]。華僑の人々は、サデック省、ミート省、ヴィンロン省への移民を17世紀後半から開始しており[Brocheux 1995: 11]、これらの省は先ほど述べた当時有名な米の商標を持つヴィンロン米の生産地であるか、あるいは近接している。1930年代の史料によると、サデック省はもみ買い入れの一大中心地であり、チャウドック省、ロンスエン省、カントー省の一部の移出量も吸い上げていた[Henry 1932: 347]。

第2代明命帝(在位1820-40)が、統治の中央集権化を目指したところ、メコン川下流のヴィンロンあたりにはすでにベトナム人社会が相当の規模に成長していた。版図の最南端となったメコンデルタの分流、バサック(ハウ)川右岸に、ベトナム人屯田兵は少しずつ土地を開拓し、新しい村を開いた[高田 2009: 20]。

つまり、二重計量制度は華僑による経済活動の影響が考えられ、この慣習は非常に強く根付いていた。そのため1909年に至っても、特に華僑の経済活動が盛んである地域(チョロン省やサディック省)ではこの制度から新しい公式ピクルへの移行が難しかったと考えられる。

ザーディン省は、前時代のベトナムの対外関係の玄関口であり情報センターでもあった[嶋尾 1991: 180-181]南の中心都市であるが、二重計量制度といってもピクルによるものだけではなく、もみか精米によって単位自体も変えて計量している事例が見られる。精米済みの米では1900年から1909年の期間中一貫してピクル(60kg)を使って量っており、公式ピクルが普及していたといえる。一方でもみについては、ピクルのような重量単位ではなく、容積単位が主に用いられていた。容積で米を量ることはフランスが植民地統治する以前に一般的であった計量法である。この容積単位は、ザ、ヴォン、リットルの3種類が報告されている。コーチシナにおいては、直轄植民地となった直後の1863年から1882年にかけて、この容積単位についての法律が3回出されている(第1章第3節(2)「1887年10月以前」参照)。

ヴォンに関しては、1789年4月当時の米の計量方法について『ホーチミン文化地誌』の中で国朝正編(Quốc triều chánh biên)から引用されており、それによると当時の米を量

る単位はヴオンであり、ヴオンはザを意味する、とある[Trần Văn Giàu and Trần Bạch Đằng 1998: 258]。つまり、このヴオンとザという 2 種類の単位は少なくとも 16 世紀以降から使われている旧制度の単位といえる。その容量であるが、フランスが 40 リットルと規定する前、民間では 36 リットルのザ、ヴオンが使われていた[Son Nam 1984: 169]。

ザーディン省がピクルによる二重計量制度と、容積単位とピクルによる二重計量制度を併用していたことは説明が難しいが、上記のことから以下のように解釈できる。ひとつは、おそらく華僑による米の輸出にリンクしていたため、ピクルによる二重計量制度が普及していたこと。また、容積単位とピクルによる二重の制度においても、当時主な輸出品であった精米済みの米の計量では、公式ピクルが一貫して用いられていた。

一方で別の側面としては、このザーディン省は前時代南部の中心都市であったが米の生産地ではなかった。消費地としての側面が強いため、貿易にリンクしていないもみの売買では、より軽量で馴染みのある容積単位が用いられていたのではないか¹⁷⁰。

ザックザー省についても、一貫してピクルによる二重計量制度が用いられているが、唯一見られる独自の特徴がある。それは、ピクルの相当量を、キログラムで提示する前に貫銭の量を表記している点である。ザックザー省では、もみの計量には 1 ピクル 40 貫銭=60.04kg、精米済みの米の計量には 1 ピクル 45 貫銭=67.95kg を使うと報告されている。阮朝初期、ピクルの元となったタは嘉隆通宝の貫銭の重さで計量されていた(第 1 章第 5 節(2)「阮朝のタとピクル導入に対する仮説」参照) ことが、ここからも明らかにすることができる。

ここで転じてザックザー省の自然環境、地理的背景を見てみると、第 2 次世界大戦以前ではコーチシナ西部は森林に囲まれていたが[高田 1995: 136]、ザックザー省の土地払い下げ件数と面積は 20 世紀初頭以降に継続的に増加していった[高田 1984: 246]。これは広大な未開発の土地があったことを意味する。

以上から、1909 年までザックザー省は外部からの影響をあまり受けず、地方行政の行政官も旧式の計量法を行政文書上でも報告したのではないか。これは阮朝の影響がこの地域で色濃く残っていたことを示唆するものであり、大変興味深い事例である。

②二重計量制度から公式ピクルへ移行した省とその分布

コーチシナでは 21 省中 8 省で二重計量制度から公式ピクルへ移行する傾向が見られた。その 8 省とは、バーリア省、ベンチエー省、チャウドック省、ハーテエン省、ソックチャン省、チャーヴィン省、タイニン省とヴィンロン省である。

¹⁷⁰ トンキンの事例だが、アンリによると田舎では食用にもみを買って女子供が夜にもみ摺りをし、米を買うのは人出のない場合のみであった。都会では労働者階級は米を買うが、裕福な家庭は自家のもみを家庭でもみ摺りする[Henry 1932: 336]。つまり、もみは主に家庭で消費するために取引されているとすれば、60kg より軽量、簡便で馴染みのある計量器、単位を志向したと考えられる。

こうした傾向から想定される背景は、以下のように考えられる。上記 8 省は二重計量制度という旧来の制度で計量していたものの、その維持に関しては固執するほど根強いものではなかった。そのため、行政文書上では中央政府の法律に従って、比較的早い段階で公式ピクルの使用が一般的になったのではないか。これら 8 省をその特徴別に 3 つのグループに分け、以下具体的に検討する。

a) ピクルによる二重計量制度から公式ピクルへ移行した省

ピクルのみを用いてもみと精米済みの米を計り分ける二重計量制度から公式ピクルへの移行が見られた省は、ソックチャン省とタイニン省である。まず、度量衡の側面から、これら 2 省が位置する地域的背景を推測してみる。この 2 省は旧体制下で一般的であった容積単位も、あるいは旧体制の重量単位の記載も一切見られない。さらに、20 世紀初頭の早い段階（1907 年）には公式単位に移行している。つまり、その土地に強く根付いた制度がなかったと考えられ、米の取り引きや農業生産規模も植民地期以前は活発ではなかったことが推測される。

ブオルトによるとソックチャン省はハウ川（メコンデルタ西部）の河口に位置し、稲作に適した土壌であったが、その農業開発は 20 世紀以降に始められたとある[Bouault 1930: 41]。そのため、この度量衡の側面からの推測はある程度妥当性がある。また、ピクルによる二重計量制度を用いていたことは、チョロンを中心とする華人の米貿易にすでにリンクされていた可能性を示唆する。

タイニン省は稲作ではなくゴム栽培に適した土壌であり[Bouault 1930(vol.3): 41]、1907 年時点で最も重要な生産品は木材であったとされることから[Annuaire Commercial Renseignements Généraux 1907: 413]、やはり米の生産、取り引きは活発でなかったと考えられる。しかし、一方ではピクルによる二重制度が 20 世紀初頭統一的に使われていたことに対しては、今後の課題としたい。

b) 容積単位としてのピクルによる二重計量制度から公式ピクルへ移行した省

重量単位ではなく、ピクルを容積単位として用いての二重計量制度から、公式ピクルへ移行した省はハーティエン省とチャーヴィン省である。ハーティエン省はその過程で、重量単位のピクルによる二重計量制度が適用されていた時期も見られる。

容積単位は、既述のように旧体制下で一般的であった計量法、単位であり、こうした単位が植民地期に入ってから用いられていたことは、米の取り引き、生産共に歴史的に盛んであったことが推測される。そのため、ピクルによる二重計量制度が浸透していたが、その計量の際には長期にわたって使用してきた容積による計量方法が好まれたのではないか。

具体的に検討していくと、清朝期、中国から大量の中国人がハーティエン省に渡ってきており、ハーティエン省は大規模な華僑の中心地として有名であった[藤原 1976: 210]。17 世紀末、この地域は中国、カンボジア、ジャワなどからの商人で賑わってい

た[藤原 1976: 226]ことから、歴史的に比較的新しいメコンデルタの他の省と比べ、独自の文化、伝統が根付いていたことが考えられる。

チャーヴィン省は、メコンデルタの下部、2大河川ティエン川とハウ川の河口に位置している。チャーヴィン省の水田面積は19世紀末にデルタ全省で最大規模の11万ヘクタールに達していた（表2—5 参照）

表2—5 コーチシナにおける水田面積と省面積に占める割合および成長率

省名	省全体	水田面積(ha)		省内の水田面積占有率		成長率
	面積(ha)	1888	1898	1888	1898	
バックリエウ	710298	18984.98	50175.22	2.67	7.06	264.29
バーリア	187968	7035.48	7574.28	3.74	4.03	107.66
ベンチャー	154508	13594.99	78186.29	8.80	50.60	575.11
ビエンホア	681167	26996.38	23534.35	3.96	3.46	87.18
カントー	230019	80838.02	120669.86	35.14	52.46	149.27
チャウドック	275877	10335.18	15301.58	3.75	5.55	148.05
チョロン市	128007	58032.51	59184.35	45.34	46.24	101.98
ザーディン※3	181725	39662.02	45400.15	21.83	24.98	114.47
ゴーコン	61910	36713.59	37151.5	59.30	60.01	101.19
ハーティエン※1、2	169125	730.04	2396.93	0.43	1.42	328.33
ロンスエン	264433	39706.06	42360.24	15.02	16.02	106.68
ミート	229844	84602.04	90893.92	36.81	39.55	107.44
ラックザー※1	593263	29403.12	70331.13	4.96	11.85	239.20
サデック	152017	46040.58	61500.38	30.29	40.46	133.58
ソックチャン	241413	75380.78	144409.48	31.22	59.82	191.57
タンアン	379284	39030.78	41871.86	10.29	11.04	107.28
タイニン	451654	10334.23	13674.72	2.29	3.03	132.32
トゥーザウモット※1	279341	8865.37	10983.45	3.17	3.93	123.89
チャーヴィン	203407	108798	117288.44	53.49	57.66	107.80
ヴィンロン	114746	69712.72	77394.08	60.75	67.45	111.02

（出所）Coquerel[1911: 229]（省全体面積）およびBEI[1899 No.18: 607]（水田面積）より筆者作成。

※1:ラックザー、トゥーザウモットおよびハーティエンという区画は、1888年には存在していない。

1888年のデータは、1899年に形成されている区画の領域相当の水田面積を示している。

※2: 空き地と成っている未開拓の土地は塩水によって浸水し、マングローブの林に覆われている。

※3: 未開の広大な土地は、パラゴムの木の栽培のために作成された多くの払い下げ要求がある土地も含まれている。約5万ヘクタールの土地は非常に低地で満潮時には海水が浸水し、マングローブの林で覆われている。

さらに同省は19世紀末から20世紀初頭にかけて低地の開拓ブームを迎えた[高田 2001: 29]。コーチシナの中部に属している。20世紀以降に大規模な開発が行われるコーチシナ西部とは異なり、中部に関してはすでに稲作が盛んであった地域である。

これらのことから、チャーヴィン省は稲作の歴史はコーチシナにおいては早い時期から開始されており、容積での計量が 20 世紀に入っても見られることはこうしたチャーヴィン省の稲作の歴史が古いことの裏付けともなろう。チャーヴィン省の米は、ピクルによる二重計量制度が見られることからしても、すでに華僑の米取引きのネットワークに入っていたことも示唆される。

c)異なる単位による二重計量制度から公式ピクルへ移行した省

バーリア省、ベンチュー省、ヴィンロン省、カップサンジャック省とチャウドック省がこのケースに該当する。最初の 4 省は精米済みの米を量るときはピクルを用いるが、もみの計量にはザ、とヴオンを使っている。このザ、とヴオンは旧体制下の単位で、ピクルよりも一単位当たりの相当量をはるかに軽量である。既述のように、ザとヴオンは同じように使われる容積単位であるが、ここでは 1 ザ、1 ヴオンは 20kg あるいは 23kg と重量単位として記載されている。20 世紀初頭、主要な輸出商品となっていたのは精米済みの米であり、明命帝政期（1820-1840 年）にはヴィンロン省周辺にはすでに大規模なベトナム人社会ができあがっていた[高田 2009: 20]。しかし、1930 年代に至っても、ヴィンロン省にはカントー省に匹敵するもみの集積地はなく、華僑の仲買人は主要村落に住み、小舟で運河を通してチョロンへ米を輸送していた[Henry 1932: 348]。

それ故に、このケースは、ベトナム人による精米済みの米の取引きはすでに確立・安定していた地域であるが、一方でもみは国際貿易にはリンクしておらず、旧来の慣習が強く残っていたのではないか。一般的にはもみは重量で量られるが、まずで量って現金で支払う特に僅小な買い入れではザが使われていた[Henry 1932:345]ことから、そのことが推測できる。また、アンリの報告の中で「チャウドック省のティンビエン(Tin Bien)の中国人代理人は、容量 5000 ザの小倉庫を 3 つ持っており…」[Henry 1932: 346-348]とあることから、中国人商人も少量のもみ買取の際ザを使っていたことがわかる。

最後に、チャウドックの二重計量制度は、精米済みの米の計量には 100kg、もみの計量にはピクル(60kg)を使う、というものである。なぜ、精米済みの米の計量に 100kg という大きな容量で量るのかは、今後も引き続き検討が必要である。

(3)時期によって多様な単位が使われている省

時期によって使われている単位が多様で、傾向を読み取ることができないのは、トウザウモット省、バックリエウ省、カントー省、タンアン省の 4 省である。

最初の 2 省は（トウザウモット省とバックリエウ省）、20 世紀初頭は未開発の地であった。例えば、バックリエウ省は作物の栽培には不向きな土壌であった[高田 2011:

60]¹⁷¹。フランス植民地政府は、20世紀初頭以降に、開発のための交通路と排水路を兼ねた運河を貫通させ、運河一帯には可耕地が創出された[高田 2011: 60]。しかし、バックリエウ省は1910年の時点でも、米の品質向上を目的とした農業展への参加を拒否しており、その理由は、前回バックリエウ省で開催された展示会での失敗が挙げられている[Brocheux 1995: 60]。ここからも、バックリエウ省の農業発展レベルが他と比べても未発達であったといえる。トゥーザウモット省でのゴム試験栽培が始まったのは1897年[Lâm Hiếu Trung et al 2001 (vol. 1): 39]であり、表2—5で示されているように、省内の水田専有面積も1898年の時点で4%に留まっている。さらに米の自給率を見ても1918年—1930年の平均的動向として、コーチシナは20省中米を移出できている省が15省、均衡が2省、米不足で他の省から移入しているのはわずか3省である。その3省とは、バーリア省、トゥーザウモット省、ザーディン省であり、トゥーザウモット省は稲作に関して乏しい環境であったといえる。

カントー省は現在では米の生産地として有名な場所であり、省内の水田専有面積も1888年の段階で35%を占めてはいるが、度量衡制度が多様であったことから、タンアン省もカントー省も、この時期は農業開発の初期の段階であったことがうかがえる。

こうした経済発展が未発達であった3省では、度量衡が統一的に用いられている状況からはほど遠く、行政文書上であるにもかかわらず多種多様な単位が見られ、複雑な様相を呈している。

(4) ピクル以外の単位について

ピクル以外の単位も商業統計上に報告されている。それら単位は以下の通りである。

- ・ ザ：バックリエウ省(40 リットル)、ベンチェー省(23kg、40 リットル)
バーリア省(20kg)、カップサンジャック省(20kg)
ザーディン省(40 リットル)、ヴィンロン省(40 リットル、20kg)
- ・ ヴオン：ザーディン省(40 リットル)
- ・ 40 リットル単位(Mesure de 40 lit)：ゴコン省（不明）、タンアン省（不明）、
ベンチェー省（不明）、トゥーザウモット省(21-33kg)
- ・ 20 リットル単位(Mesure de 20 lit)：バックリエウ省(13kg)

¹⁷¹ この地方の農業開発が遅れた最大の要因は、作物の育成には適さない「広大低地」および「ピート層（植物の残骸が土中に埋もれ炭酸ガスとなって吹き出る）」を含む地形・土壌に問題があったからであり、年間を通じて同省内の広大な大地の大部分は浸水したまま、沼地とメラルーカ林で覆われていた[高田 2011: 60]。とりわけベトナム最南端のカマウ地区には未開地が多く、カマウ半島の西部のウーミンの森は第2次大戦前はメラルーカの原生林で覆われ、トラ、ワニ、ヘビの楽園であった[高田 1995: 136]。メコンデルタの地形区分は高田[1988]に詳しい。

まず、ザ、ヴオン、リットルの3つの単位について再度整理すると、コーチシナにおいて1863年ではヴオン=40リットル、1870年ではヴオン=20リットル、1882年ではそれぞれ10リットル、20リットル、40リットルの容積計量器が認められており、さらに1903年のアレテではザについても容積単位として掲載されている（第1章第3節(2)②「インドシナにおける度量衡関連法とメートル法の受容」参照）。

上記に挙げたほとんどの省は、1単位あたり40リットル、あるいは20kg前後の容積、および重量の計量単位として機能していた。つまり、米穀を量る際最も一般的であったのは、依然としてザ、ヴオンであったといえる。また、ザとヴオンは本来は容積単位であったが、キログラムという重量でも相当量が量られていることは注目に値する。つまり、計量単位は慣習のものを使い続けながら、計量方法は重量というフランス式の影響が現れてきた過渡期の状況であったと考えられる。

バックリエウ省のみ、1単位あたり20リットルの升も使われおり、これはこの省では一般的な計量単位である40リットルのザも普及しておらず、歴史的にも新しい地域で、経済規模も小さい地域であったことがうかがえる。

バックリエウ省以外でも、ピクル以外に報告されている単位は全て20kg、40リットルまでの軽量の単位であり、それともみの計量に使われていることが特徴として挙げられる。先にも述べたように、ザはまずで量って現金で支払う僅小な取引に用いられており、ザを用いる地域は大規模取引が行われていなかったことが推測される。また、もうひとつの見解としては、もみは通貨としての役割も果たしており[高田 2001: 56]、19世紀後半まではコーチシナの主力輸出品であった。これらから、もみが旧来の単位で量られているところは、その土地のもみが国際貿易にリンクしていなかったと考えることができ、なおかつもみが消費のため、あるいは通貨的用途で用いられていたため、1単位当たりが20kgまでの軽量の容積単位が広く一般的だったのではないかと考えることもできる。

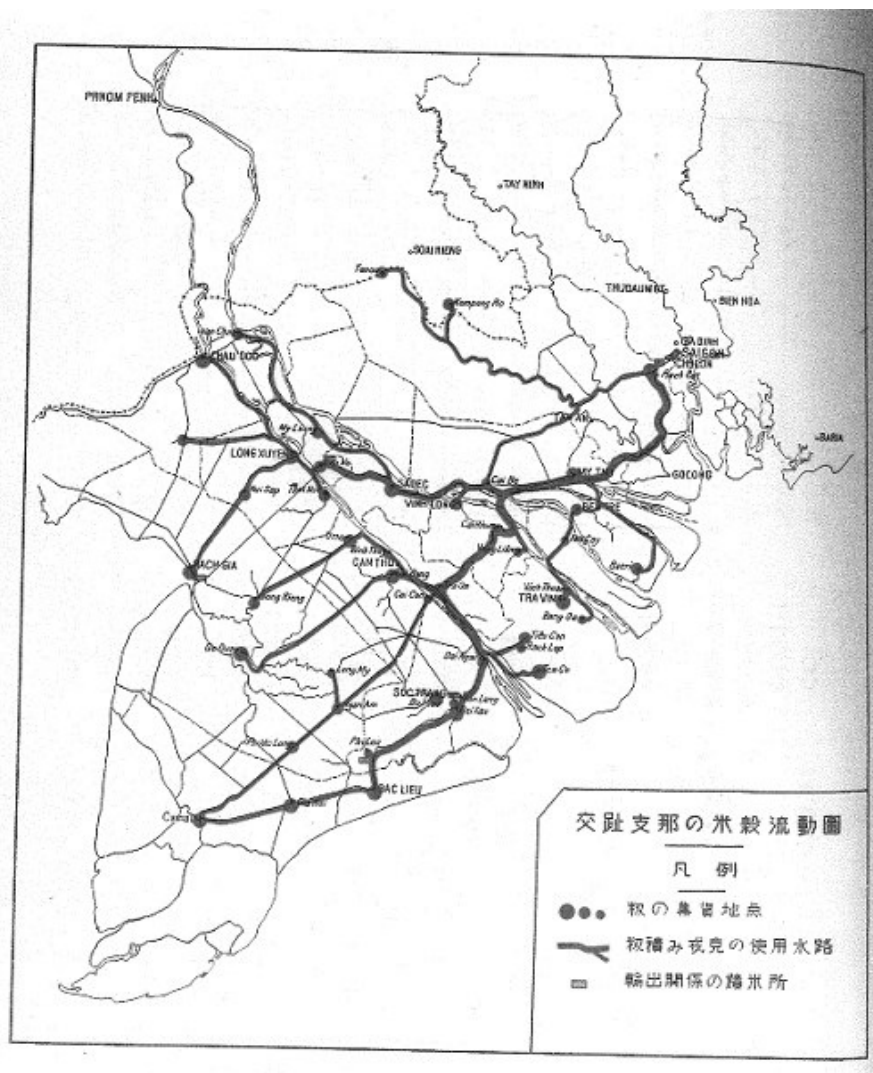
(5)二重計量制度が一度もみられなかった省

ビエンホア省、ロンスエン省、ゴコン省、ミート省の4省は、対象期間中(1900-1909年)一度も二重計量制度の記載が見られなかった。この中にはゴコン省、ミート省といった稲作が盛んであった地域も含まれているため、このケースを説明するのは非常に難しい。タンアン、ミート省はチョロンに近いためもみの大市場はなく、ゴコンは小さな戎克が各村落へもみを集めに行って、直接チョロンへ持ってくる[Henry 1932: 349]ということも影響していると考えられる。農業生産の規模だけでなく、上記4省での華僑の米の集荷状況や他の社会経済的要因なども勘案して考えて行く必要があるが、さらなる史料の発掘が不可欠である。

しかしながら、ビエンホア省のケースは注目に値する。ビエンホア省の土壤はゴムプランテーションに向いているが、農業には不向きである。17世紀に至るまで、ベトナム人だけでなく華僑もこの地に移り住み、クーラオフォー(Cu Lao Phô)は1776年まで南部ベトナムの中心であり続けた。その後西部地域の開拓が始まり、中心地はサイゴンへ移った。1873年、ビエンホア省は米不足に直面し、コーチシナ西部から米を買っている[Lâm Hiếu Trung et al 2001 (vol. 1): 39]。

このことは、ビエンホア省が南部ベトナムにおいては比較的長い歴史があり、18世紀まではベトナム人、華僑の中心地であったが、南進の過程でそこに移住してきたのは中部からのベトナム人であった。米の生産に関しては十分ではなかったといえる。アンリの1932年の米穀流動図を見ても(地図2—2 参照)、その流通経路にビエンホアは含まれていない。

地図 2—2 米穀流動図



(出所) アンリ[Henry 1941 (中巻): 163]に拠る。

加えて、ビエンホア省は山間部と高原地帯の間に位置しており、メコンデルタの中部からの入り口ともいえる。つまり、ビエンホア省こそが南部と中部の共通文化圏の境界であったと考えられる。

コーチシナに関しての商業統計の事例分析をまとめると、以下のようになる。まず、チョロン以南には二重計量制度という特有の計量制度が確認できた。これはもみと精米済みの米を異なる単位、あるいは同一単位でも相当量を変えて計り分ける制度である。この制度は時間の経過と共に、公式ピクルへ移行していく傾向が見られ、1905 年以降はほとんどの省が 1 ピクル 60kg に統一された。しかしながら、華僑の経済活動が顕著なチョロン省などでは、この二重計量制度は維持されていた。南部村落社会については、地域の開発、発展が域外、国際ネットワーク上に位置づけられていたのが特徴であると言われるが[大野 2009: 89]、度量衡の側面からこうした域外、国際ネットワークの影響を垣間見ることができたといえる。

また、1907 年以降一本化されなかったのはコーチシナ西端のザックザー省、バックリエウ省、山間部のトゥーザウモット省、タンアン省、それにゴーコン省であった。最初の 4 省は、開拓の進展が十分でなく、経済規模もまだ小さく、人口も希薄であったこと、さらには華僑ネットワークの外に位置づけられていたことが理由として考えられる。つまり、度量衡の変更に積極的な理由を見つけられずにより、フランスによる規定、法律に対しても感度が鈍かったとすることができる。

その一方で、稲作が盛んだと言われるゴーコン省で、行政文書上ですら一本化されなかった理由については、引き続き検討していきたい。

第 6 節 行政区画を超えた地域性、共通文化圏の検討

本章第 3 節から第 5 節まで、商業統計上に報告されている度量衡単位とその相当量に着目し、度量衡制度から見る地域性、多様性について分析してきた。この商業統計上の事例から、本章では 20 世紀初頭に使用されていた度量衡単位について、北部、中部、南部を含め全国的な状況、概要を提示することができた。要約すれば、20 世紀初頭はそれまでの慣習的、伝統的度量衡から、フランスが導入した新しい制度への過渡期であったといえる。この時期、各地で用いられていた度量衡は非常に多様であり、20 世紀に入っても、その多様性は経済発展レベルやフランスによる開発の影響だけでなく、植民地期以前の歴史的背景、地理的条件に強く規定されていたといえる。

第 6 節では、まず第一にこれまで見てきた地域性について、フランスによる行政区画区分に則ってトンキン、アンナン、コーチシナの地域性を再確認する。第二に、こ

うした行政区分にとらわれず、度量衡の側面から共通文化圏の境界や行政区分の枠を超えた「地域」の範囲について再考する。

(1)行政区分による地域性の検討

行政区画による地域性を考えるにあたり、まず最初にこれまで言われてきたベトナムの地域性についてまとめたい。

南進によってベトナムは北部ハノイ、中部フエ、南部サイゴンという新しいセンターをもつ多元的な社会となった[古田 1995: 25]。紅河デルタは自給的、閉鎖的な世界、中部ベトナム沿岸は国際的、開放的世界と、異なる特徴を形成していた[桜井 1994: 44]。

北部デルタは、アジア湿潤地域の稲作デルタとしては例外的な開拓史の古さをもっており、少なくとも 10 世紀には強固な政治勢力がデルタ地域に確立していた[桜井 1987: 237]。

また、前述のように、15 世紀までに紅河デルタ堤防網は完成し、その大規模工事の過程で集権的国家体制が浸透し、自給的で閉鎖的な農業国家としても発展を遂げてきた。北部は村落共同体が強固であったことでも知られ、近世ベトナムの村落共同体は国家からの政治的権限を一部譲り受け、自治を行っていた[竹田 1969: 136]。

土地所有に関しても、トンキン、アンナンでは極小所有者が多数で[菊池 1975: 40]、コーチシナとは真逆の様相を呈していた。

中部は阮氏がフエを拠点として順次南に版図を広げてきた。地形的に可耕地が少なく、トンキンと比べ歴史も新しいという特徴がある。

南部の村落社会については、村落内共同体、家族・親族集団における系譜意識、社会的凝縮力が希薄であること、小人口と余剰空間によって住民の可動性が高いこと、治水・水利共同体として村落組織を成立させる必然性もないこと、地域の開発・発展が域外・国際ネットワーク上に位置づけられていること、村落形成にあたって、国家、地方権力の介入が大きな要因であったことが特徴として挙げられる[大野 2009: 88-90]。南部ベトナム、特にメコンデルタ地域では親族組織の観念や機能が北部の村に比べて弱いことは、渋谷[2008: 37]も指摘している。

こうして互いに大きく異なる地域性を有している北部、中部、南部であるが、度量衡の側面から地域性を捉えなおし、その特徴をまとめると以下ようになる。

① トンキン

トンキンにおいては、トンキンデルタと 2 大河川沿いに位置する省ではピクルとキロしか使われていなかった。そのため、米作が盛んであり、交通の便が良いところでは米の計量に際してピクルを用いることが一般的になっていたと考えられる。しかし、その 1 ピクル当たりの相当量は、まだ地域によってばらつきが見られた。興味深いこ

とに、もっとも米作の歴史が古い地域では、逆に 1 ピクルが公式ピクル 60kg に変更されるまで時間がかかっていることである。これは、長年にわたり用いられてきた慣習が根強く残り、新しく導入された計量制度に変更が難しかったことが示唆される。

また一方で、ハノイ以北に位置し、交通アクセスがよくなく、農業も盛んでない地域では、ピクルはまだ一般的ではなく多種多様な単位が報告されていた。

②アンナン

アンナンにおいては、経済規模が大きい省、あるいは農業が盛んな地域において、公式ピクルが普及していた傾向がみられた。これは農業の歴史が古い地域ほど変更が難しかったトンキンとは対照的である。このことは、トンキンの村々が数世紀にわたる農業開発の過程で非常に強固な共同体となり、そこでの慣習も確立されていたこと、一方アンナンでは農業地帯でもそこまでの歴史も、確立された慣習もなかったことを示唆している。

また、アンナンでは阮朝が主に用いていた単位も報告されており、阮朝の都があったフエを中心とした中部では、その影響が 20 世紀初頭でも植民地政権の行政文書上で見ることができた。こうした阮朝の単位は、目立った産業も農業地域もない地域にみられており、新しい制度へ変更することへの積極的な理由が見いだしにくい地域ほど、旧式の制度が使われているといえる。

一方で、コーチシナで主に使われている単位が見られた省がフーイエン省、カインホア省、クアンチ省であり、これはアンナンにおけるコーチシナの影響、特に華僑の影響（ネットワーク）が度量衡の側面からも確認できたといえる。

③コーチシナ

コーチシナに関しては、チョロン以南で二重計量制度という特徴的な計量法が広く観察できた。この制度は、もみを量る場合と精米済みの米を量る場合で、異なる単位を用いる計量方法、あるいは同じ単位を用いても、もみを量る場合と精米済みの米を量る場合で相当量が異なる、というものである。全体的には、二重計量制度は 1905 年以降、大多数の省で公式ピクルへと移行している。しかしながら、華僑の勢力が強いチョロン省などでは、引き続き二重計量制度が維持されていた。

もみに関しては 20kg の計量の単位が使われている地域がある。こうした地域はもみが国際貿易にリンクしておらず、あるいは取引量が少ないため、地域内での消費が主な用途であったと考えられる。そのため軽量の単位が一般的であったのではないか。

また、ピクルを重量単位ではなく、容積単位として用いていた省もある。これはフランスが入ってくる以前一般的であった容積での計量が普及し、根付いていることから、稲作の歴史が特に古い地域であると考えられる一方、地形、交通網の未発達から中央の影響をほとんど受けていなかった可能性も指摘できる。

以上から、度量衡の側面から地域性を検討した結果、植民地以前からの農業形態、国内外の通商関係、移民といった要素が背景としてあり、さらに仏領期における各地域での農業、商業の変化や現状の違いが浮き彫りにできたと考える

(2)行政区画を超えた地域性、共通文化圏の検討

(1)を踏まえた上で、行政区画の枠にとらわれず、その文化的境界を考えるとどうなるか、検討していきたい。

まず、北部と中部の境界について、歴史・文化的側面から捉えなおす。北部デルタの広がり、16世紀からタインホア、ビンデルタにも拡大している[菊池 1975: 14]。また、アンリはトンキンおよび北部アンナン（タインホア省、ゲアン省）は明確な自然的一地方を成していると指摘している[Henry 1932: 334]。ブオルトも、「経済的に北部アンナンはトンキンの方を向き、南部アンナンはコーチシナの生活に参加している」として、アンナンの北部はトンキンの経済圏に含まれていることを示唆している[Boualt 1930(vol.2): 67]。『ゲ・ティン民間文化地誌』では、ゲ・ティン（ゲアン省とハーティン省）は特有の民間文化を共有しているひとつの伝統・統一単位であると位置づけている[Nguyễn Đồng Chi(chủ biên) 1995: 17]。第1章第2節で阮朝初代皇帝嘉隆帝が、黎朝の旧尺の使用を認めた地域も、ゲアン、タインホア以北であり、この地域は鄭氏の旧勢力圏で独自の伝統が根強く残っていたことが確認されている。

地名から広南阮氏の影響を考えると、その「広(Quảng)」がつく地名は、アンナンの最北がクアンビン省である。地理的条件から見ても、既述の通りクアンビン省とハーティン省の間にはタムディエン山脈が地域を分断しており、ここがかつての南北の国境となっていた。

度量衡の事例から考えると、北部で使われていた容積・重量単位のパニエが見られた最も南の省はハーティン省であった。ピクルに関しても、クアンビン省でピクルが独特の統一的な用いられ型をしていた影響がハーティン省では見られない。阮朝の影響が強く残っていると思われるホックとフオンを用いていた最北の省はクアンチ省であり、南北分断時代の最前線であったクアンビン省のひとつ南よりの省である。つまり、北の影響はハーティン省まで、阮朝の影響はクアンチ省までであり、その間に北部と中部の文化的境界があると考えられる。上記で挙げたように、地形、文化、歴史的背景を合わせて考えると、ハーティン省とクアンビン省の間のタムディエン山脈が境界だと言うことができよう。

次に、中部と南部の境界であるが、フランス植民地期、アンナンの南部はコーチシナの生活に参加しているとあるように、フースアン省、カインホア省、クアンチ省ではコーチシナ特有の二重計量制度が確認でき、これらの地域は華僑の交易ネットワークに組み込まれていた可能性が、度量衡の側面からも示唆された。

一方、南進の過程では、18世紀までビエンホアが中心地としての役割を担っており（本章第2節参照）、地形的にも高原地帯と、新しく開発が始まったメコンデルタとは異なる背景がある。また、稲作に向かない土壌、地形から、メコンデルタの発展と華僑ネットワークの外に位置しているといえる。度量衡の事例から見ても、南部に特徴的な二重計量制度はチョロンより南で見られ、それ以北では確認されていない。

つまり、アンナンは海上交易の視点から、南部の影響を受けている地域が局地的に見られること、そして南部と中部の文化的境界はビエンホアに求められるとすることができる。

以上、行政文書である商業統計の事例を通じて、各省レベルで20世紀初頭の米にまつわる度量衡の実態を、一国全体の動向として捉えることができた。その結果、本章が対象とした20世紀初頭は、慣習的制度からフランスの導入した制度への移行期であり、依然として植民地期以前の歴史的、文化的諸要因の影響が強く残っていたことが確認できた。また、その地域性については、トンキン、アンナン、コーチシナ3つの地域それぞれの個別的特徴を、度量衡を通じて再検討した。さらに行政区画を超えた文化的境界についても、それぞれの地域の背景や社会経済状況を踏まえて検討し、共通文化圏の空間的広がりについて、度量衡という具体的事例に基づいて、ひとつの可能性を提示することができた。その結果、フランス植民地期のインドシナ研究においては、行政区画の枠に規定された各地域の研究が行われてきているが、そうした対象地域の設定が必ずしも十分ではない可能性も示唆できたといえる。

すべてのケースを合理的に説明できたとは言えないが、今後は本研究が目指している交通、物価変動という別視点からの検討も引き続き行っていくことで、双方向でインドシナ各地の地域性や共同文化圏の理解が進んでいくと考えられる。この課題については、引き続き取り組んで行く。

第3章 度量衡統一に向けた模索—トンキンの事例—

第1節 トンキン理事長官が発信した度量衡統一に関する通達

第3章と第4章では、トンキン理事長官が発信した度量衡統一に関する通達2つに着目して検討する。ここでいう通達(Circulaire)とは、トンキン理事長官がある特定の事案について、トンキン各省知事の回答を求めたものである。トンキン内で出された度量衡に関する通達で各省からの回答がそろっているものは、ベトナム国家第一文書館で確認できる範囲では1898年から1936年の間に、計7回分であり、各省からの回答文書などを含めると、約1000枚の史料が残されている。それぞれの通達の出された時期と内容を以下に示す。

- ①1898年12月29日「インドシナ連邦全域で度量衡をメートル法で統一することの利点と困難について」¹⁷²
- ②1901年9月9日「各省における度量衡の実態調査依頼」¹⁷³
- ③1910年4月15日「度量衡統一を実現させるための方法について」¹⁷⁴
- ④1911年11月3日「各省における度量衡の実態調査依頼」¹⁷⁵
- ⑤1921年1月13日「過渡期における度量衡統一の方法について」¹⁷⁶
- ⑥1927年9月1日「現在カンボジアとコーチシナで適用されているメートル法による度量衡法をトンキンで施行することへの賛成と反対意見について」¹⁷⁷
- ⑦1936年11月17日「各省における度量衡の実態調査依頼」¹⁷⁸

これらの通達は、①現状把握のための現地調査依頼（1901年、1911年、1936年）、②度量衡統一に関する賛否とその理由を求めるもの（1898年、1910年、1921年、1927年）、の2つに分けることが出来る。通達の発信状況からわかるように、植民地期を通じて度量衡統一の模索が続いており、トンキンにおいては少なくとも1936年にいたっても度量衡の統一が実現できずにいたことになる。

¹⁷² TTLTQGI, RST, 71315, Application au Tonkin et en Indochine du système métrique français 1886-1900.

¹⁷³ TTLTQGI, RST, 71315-01, Application au Tonkin et en Indochine du système métrique français 1901.

¹⁷⁴ TTLTQGI, RST, 71315-02, Application au Tonkin et en Indochine du système métrique français 1903-1912.

¹⁷⁵ TTLTQGI, RST, 71315-02, Application au Tonkin et en Indochine du système métrique français 1903-1912.

¹⁷⁶ TTLTQGI, RST, 71315-03, Application au Tonkin et en Indochine du système métrique français 1914-1934.

¹⁷⁷ TTLTQGI, RST, 71312, Extension au Tonkin de la réglementation des poids et mesures en application en Cochinchine et au Cambodge 1899-1937.

¹⁷⁸ TTLTQGI, RST, 71315-04, Application au Tonkin et en Indochine du système métrique français 1936-1938.

前述の通り、上記の通達は、各省知事からの回答文書や報告書が全て残っており、これらの通達と回答全てを丁寧に分析すれば、北部ベトナム上で展開されていた各省レベルでの度量衡の実態と、統一できなかった背景について 1898 年から 1936 年の約 40 年間の時系列変化を通じて検討することが可能となる。

これら史料群に含まれる文書の内容であるが、理事長官から出された通達とそれに対する各省知事からの回答が中心になる。それ以外にも、理事長官府内史料、例えば各省からの回答をまとめた第一官房の報告、度量衡関連法案立案過程での理事長官府内でのやり取りなどが残されている。また、フランス人知事が意見をまとめる際に参考にしたベトナム人地方高級官僚の調査報告書（漢文、ベトナム語、フランス語）、計量器の図解史料、地方委員会の議事録なども含まれている。そのため、通達とそれに対する回答だけでなく、その文書が作成された背景、各省行政における官僚の役割や活動なども垣間見ることができる。

本章では、上記②にあたる「度量衡統一に関する賛否とその理由を求める通達 4 本（1898 年、1910 年、1921 年、1927 年）とその回答文書を対象とし、度量衡統一が進まなかった実態と背景について検討する。

実際に検討に入る前に、各省知事の回答に見られる全体的な傾向、特徴と、そこから考えなくてはならない史料の扱い方について、数点指摘しておきたい。

各省知事からの回答文書を見ると、多くの知事がトンキン理事長官の問いかけに対して賛成か反対か、明言を避けている。さらに重要なことは、各省知事はフランス人であるため、彼らの関心や統治の取り組み方によって、その担当地域の社会文化の理解の度合いが大きく異なることが想定されることである。また、度量衡統一に関する見解は人事異動に伴う知事の交代によっても、大きな変化が見られることもある。ニンビン省の事例を挙げてみると、1927 年の回答文書では、メートル法の施行に対して大変積極的、肯定的態度が見て取れるが、1937 年には一転してニンビン省内での度量衡統一に関して多くの困難を指摘し、消極的姿勢に打って変わるのである。これは知事となる人物の対象地域への理解や度量衡統一に関する個人的見解が、一連の通達に対する回答文書に大きく作用していることを明確に示している。

つまり、通達とその回答文書のみを対象として、各省における度量衡の実態や統一に対する姿勢、それらをまとめてトンキン内での度量衡の側面から見た地域性を論じ、結論を出すことは実態に即した事実の理解を妨げる可能性もある。従って、本章では各省が示した賛成か反対か、またその賛成、反対各省の地域的分布に関しては、初歩的な考察にとどめ、大きな意味をもたせることは控えたい。

一方で、各省知事が回答文書の中で示している意見や指摘している問題は非常に具体的で多岐にわたっており、まったく現状からかけ離れた内容であるとは言いきれない。1927 年の回答文書を例に挙げれば、ニンビン、ナムディン、ハーナム、ハイズオン、ハードンの各省がベトナム人地方高級官僚(*tuân phủ*)に作成させた報告書も知事の

回答文書に添付している。その他の省は報告書を添付していないが、おそらく多くの知事はまったくの独断で意見を述べているのではなく、現状をよく理解しているであろうベトナム人高級官僚などに現状報告をさせた上で、回答していると考えられる。そうでなければ、具体的に問題や困難を指摘することは難しいであろう。そこで、本章では、主に各知事が指摘している度量衡に関するさまざまな論点を中心に整理し、植民地期のトンキンにおける度量衡の実態、統一が困難な背景について具体的に明らかにすること、を中心の課題としたい。

第2節 1898年の通達およびその回答

(1) 1898年の通達

1898年12月29日付けで、トンキン理事長官は各省知事、副知事およびホアビンとヴァンブー政府に対して、また同日同内容を軍区の司令官に対して2通の通達を出している（写真3-1参照）。

これは、インドシナ総督が税および関税局によって提案されたフランス式度量衡の使用を、インドシナ全土に導入するアレテ案について、トンキン理事長官が意見を求められていることが背景にある。トンキン理事長官が回答を要求した論点は、①このアレテ案の利点と不都合、困難な点および②修正・変更が必要な条項についての2点である（表3-1「1898年の通達とその回答」参照）。

この通達に対して、19省の回答が残っている¹⁷⁹。

¹⁷⁹ 1898年の省編成に関するデータは、AGIから得ることができなかった。ここでは1899年のデータを参考に、その省編成を以下に示す（序 表序—1「トンキンの省編成」参照）。16省：バックザン※、バックニン、ハーナム※、ハノイ、ハイズオン、ハイフォン、ホアビン、フンホア、フンイエ、ナムディン、ニンビン、クアンイエ※、ソントイ、タイビン、タイグエン、ヴァンブー。4軍区：ランソン、カオバン、トゥエンクアン、イエンプイ。2都市：ハノイ、ハイフォン。その他、フーリー省からの回答が見られる。（※：回答なし）

写真 3—1

1898 年トンキン理事長官から軍区への通達 1 枚目。

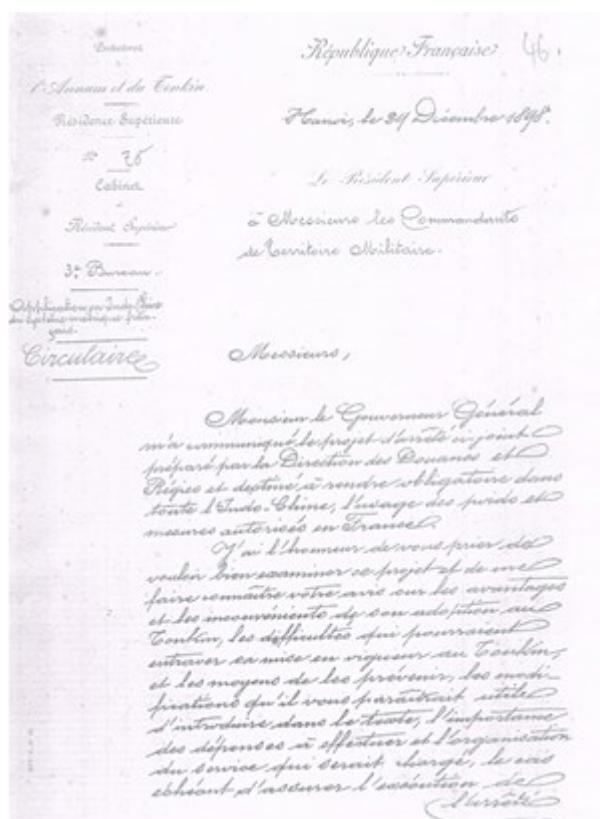


表 3—1 1898 年の通達とその回答

1898年通達の論点	各省知事の主な回答内容
1. この計画の利点と不都合、困難な点	<ul style="list-style-type: none"> ・計画に賛成：4省（全体の2割） ・計画に反対（無益、政治的に危険）：8省 ・計画に反対（時期尚早）：6省 ・その他：ヴァンヴァー省（条項のみに意見）
2. 各条項について変更・修正すべき点	<ul style="list-style-type: none"> ・1-3条（計量単位、計量器と製造）：3省 ・4-9条（計量検定員について）：8省 ・10条（計量検定税について）：4省 ・14-15条（罰則について）：1省 ・16条（計量検定員の手当について）：2省 ・18条（施行時期について）：4省
通達の回答内容から	
A. メートル法、フランス式度量衡を誰が知っているか、使っているか	<ul style="list-style-type: none"> ・中国人：3省 ・ヨーロッパと関係のあるベトナム人：1省
B. アレテ実行の経費について	<ul style="list-style-type: none"> ・アレテ案では不十分：2省

（出所）ベトナム国家第一文書館トンキン理事長官府コレクションNo.71315, Application au Tonkin et en Indochine du système métrique français 1886-1900より筆者作成。

この通達が問題にしている、税・関税局が作成したアレテ案を以下に提示する。

- 第1条：インドシナ全域の全ての商人は、市場、店、船、作業所で、フランスがフランス革命暦3年7月18日と1837年7月4日に許可した度量衡、あるいは添付の第1表、あるいはこのアレテ第2条の度量衡以外の度量衡の使用は禁じられる。
- 第2条：穀物用の容積計量器、**Vuông**（1リットル、5リットル、10リットル、20リットル、40リットル）の使用は同様に義務付ける。
- 第3条：これらの計量器は、第1級のブリキを材料とし、補強のために鋳鉄で金環を付け、2つの取っ手を備えて作成されなくてはならない。また、サイゴンとハイフオンの公共企業体に置かれている原器の高さ、直径にすべて合致しなくてはならない。
- 第4条：コーチシナおよびカンボジアの税・関税局の主要な倉庫管理者、トンキンとアンナンの区画長は度量衡計量検定員の役職の権限を与えられる。彼らは直接、あるいは副計量検定委員の権限を与えられた手段によって、法の違反を確認する。
- 第5条：計量検定員と副計量検定委員の証書記録は、手書きで書かれなくてはならない。これは反証が提起されるまでは正当な証拠となる。
- 第6条：全ての計量器は、使用する前にサイゴンとチョロンの村々では直接税の徴税監督官事務所で、その他の地域では省都の公共企業体における主要な倉庫管理事務所で検印を受けなくてはならない。
- 第7条：年に1回年次計量検定が行われる。それは新しい検印を貼ることによって確認される。これ以外にも、特別検定、総検定、部分検定、個人的検定が裁判官が必要と判断した場合には行われる。副計量検定委員は上記にある2段に規定された検定を行うことができるが、ただし、正計量検定員の命令を受けたときに限られる。その命令は、個別の検定作業ごとに更新されなければならない。
- 第8条：年次計量検定のため、検定員は各村の村長のところへ出向かなくてはならない。村長は事前に各商人を決まった時刻に集め、計量検定と検印を受けるために所有している計量器を持参させる。計量検定員は（その）年の検印を持参し、携帯用の登録簿に検定活動を記載する。
- 第9条：各計量検定員は、計量検定のためのゲージを持参しなくてはならない。容積計量器一揃いも原器として使用するため持参する。
- 第10条：最初の計量検定は、検定員の事務所か役所で無償で行われ、最も基本となる方法で確認される。
年次の検定には以下の税が徴収される。

長さ：0.08 ピアストル、重さ：0.06 ピアストル、容積：0.1 ピアストル、天秤：0.2 ピアストル、竿ばかり：0.4 ピアストル、台ばかり：1.25 ピアストル。
不定期検定、特別検定にはいかなる税の徴収の根拠・理由にならない。

第 11 条：税の徴収は、原符から切り離された納税証明書に基づいた検定に応じて行う。
第 8 条の該当項目に規定されている携帯用登録簿の記載事項をもって納税証明に代える。

第 12 条：徴収された税は、税・関税局の歳入に組み入れられる。

第 13 条：全ての不許可、不備、変造された計量器は廃棄される。

第 14 条：不許可、最初の検印のない計量器あるいは年次検印を提出しない者、その所有者は、刑法典 479 条第 6 項に従って罰せられる。

第 15 条：このアレテの違反は、刑法典 479 条、480 条、481 条と 482 条に従って罰せられる。ただし、植民地において有効な刑法典 423 条および 1851 年 3 月 27 日の法律の適用を妨げない。

第 16 条：計量検定員と副計量検定委員は、各年以下の手当を受け取る。

500 フラン：主任倉庫管理人と区画長、計量検定員

200 フラン：副計量検定委員の活動をした人員または団体（2 名以上いる場合は、その人員または団体に配分する）。

第 17 条：以前のアレテは全て廃止する。

暫定的条項

第 18 条：このアレテは 1899 年 1 月 1 日からしか執行されない。これまでにすでに使われている計量器は、計量検定員の事務所で検印される。卸売商のためには、省都で、その他に対しては役所で行う。

第 19 条：インドシナ税・関税局がこのアレテの実行・執行の責を負う。

このアレテ案は 1881 年 2 月 21 日、1882 年 7 月 31 日および 1898 年 2 月 11 日に、コーチシナを対象として適用されたアレテとほとんど重複しており、これらを参考にトンキンでのアレテ案を構想したことがわかる。

(2) 各省の回答—回答を求められている点に関して—

まず、論点 1「この計画の利点と不都合・困難な点」についてであるが、アレテ案に対して基本的に賛成している省が 4 省、反対している省が 15 省ある。ヴァンブー省は、アレテ案に対する基本姿勢を明らかにしないまま、修正が必要と思われる条項とその修正案についてのみ報告している（以下、論点 2 の検討参照）。

賛成の姿勢を示している 4 省は、ハイフォン市、ハノイ市、ニンビン省、イエンバイ省であり、首都であるハノイおよび貿易港を有するハイフォン市が賛成を示してい

ることは当然であると考えられる。しかし、ハノイ市、ハイフォン市も含めて、それぞれ全く賛成ということではない。

ハノイ市は、アレテ案の導入は新しい財源にもつながり、いかなる反対もしないとしながらも、長年の慣習を即時に変更することは困難であろうと予見している。ハイフォン市も、即時の導入は困難であるとの判断を示し、大都市から段階的に導入することを提案している。

ニンビン省は、この回答を作成するにあたり、有力者を省都に集め意見をまとめている。その結果、名士の大半は好意的な立場を示したものの、即時ではなく段階的に、徐々に商業慣習に入り込ませる必要を指摘し、またこのアレテ案は徴税の手段の検討を欠いていることを批判している。

イエンバイ省では、イエンバイ省とラオカイ省の村々でその試みは成功の可能性があると述べている。その根拠として、ヨーロッパとの商いがある商人の大部分はベトナム人であり、彼らはすでにフランス式の商業になれている、つまり彼らとの交流によって、イエンバイ省とラオカイ省の大きな市場では、徐々にメートル法の利点に気がついていくだろうとしている。逆に中国人は、メートル法を知っていても使っていないことも示唆される。しかし一方で、イエンバイの人々は無知であり、メートル法のメリットを理解できないし、しようもしない、中国やトンキンデルタと頻繁な交流も当然考慮に入れるべきであるが、中国人はおそらくこの導入に従いたくないだろう、とも報告しており、イエンバイ省の知事が賛成を表明しているのは大きな市場に限定してのことであることがわかる。

このイエンバイ省であるが、中国との関係で、興味深い観察も記載されている。

我々の本来の地域よりも、中国の領域に人口がより密集しており、そのことが最近の商取引の減少と我々にとって不利なことの全てにつながっている。営業中の市場は中国人によって取り戻され、次第に我々のものではなくなっている。

この報告から、中国、あるいは中国人の多いところに商業が集中しており、フランスが省都としての機能を備えた地域よりも発展していたことがうかがえる。さらにそのことに対して、イエンバイ省の知事が危機感をいただいていたこともわかる。

以上のように、1898年の通達で好意的な姿勢を示している4省も、その導入は段階的に行う必要がある、あるいは地域を限定しての導入を想定しており、完全に賛成していたということはない。

次に、反対意見を表明している省の中で、その理由を「無益である、無駄である、政治的に危険な状況を生じさせる」としている省について考察する。こうした理由を挙げているのは、タイビン省、フンホア省、ハーナム省、フンイエ省、ナムディン省、バクカン省、ハイズオン省、ホアビン省の8省である。

タイビン省の知事は、インドシナでの 13 年におよぶ在留経験から、「私はベトナム人からもヨーロッパ人からも、ベトナムの度量衡を使うことにいかなる困惑、不平も聞いたことがない」、「現地の人はメートル法に関していかなる知識もなく、それを変更するには何世代もかかるだろう」として、強くメートル法の導入に反対している。さらにフランスでのメートル法導入についても触れており、フランス本国でも度量衡の統一には 100 年かかったことを指摘している。

フランスにおける事例を挙げている省が、もうひとつある。フンホア省も、フランスでは強制的導入がなされていたにも関わらず、大多数の県で鉄道では昔の度量衡を存続して使っているとして、トンキンでの導入に懐疑的である。

このタイビン省とフンホア省は、ベトナム人はもともと風俗・習慣に執着する人々であると報告しており、さらにタイビン省は、全てのベトナム人は、彼らのところで使われている異なる様々な尺度を知っており、また商人が尺度で簡単にだませることに対して、子供の頃から非常に用心深く、それが習慣となっていると指摘している。

フンホア省は、コーチシナは占領が半世紀も前であり、エコール・フランセといった教育機関も多数あることから、トンキンとアンナンとは状況が異なることを挙げている。ここでエコール・フランセの学校数を実際に調べてみると、コーチシナでは 1889 年の段階で男子校 14 校、女子校が 7 校あり、生徒数は男子 2673 名、女子 1055 名であった[AGI 1889(1er): 113]。一方、トンキンにおいては、その 10 年後の 1899 年の時点ですら、男子校 2 校、女子校 3 校、生徒数は男子 14 名、女子 77 名にとどまり[AGI 1899: 209]、コーチシナとは全く異なる状況であった。

また、卸売りと小売りを区別する必要性があることを指摘している省がフンホア省とハーナム省である。フンホア省は、取引の対象となる主要な生産物は米ともみであり、買い手によって使われている度量衡があること、それは各市場で小売りされる際に使われている計量器とは異なることを報告している。さらに大口取引の主な担い手である中国人の商人はメートル法を知っているけれども、より多数のベトナム人をだますために彼らの計量器を利用していることも指摘している。その上でフンホア省は、ピクルを使う国とも隣接しており、こうした国々との取引を考えるとメートル法の導入は商業の発展を妨げること、さらに現地の人々はメートル法に関してなんの知識も持っておらず、メートル法を導入した場合は、計量検定員の侵入を恐れて市場の放棄を引き起こすだろうとして、全面的に反対との結論を示している。

一方で、ハーナム省は、同じく卸売りと小売りでは大きな違いがあるとしているが、卸売りを担う中国人、ヨーロッパ人はメートル法を理解していることを挙げ、①ヨーロッパとの取引、②中国との取引、③ヨーロッパと中国との取引、においてはメートル法を適用できる、との結論に至っている。

この卸売りと小売りを区別して対応する考えは、メートル法適用に非常に効果的、有効な現実的手段であると考えられるが、1898 年の時点で 2 人のフランス人知事がす

でにこうした提言を行っていることは注目に値する。植民地統治が始まった初期の段階でも、現地の状況を良く理解し、それを踏まえた上で実際的な方法を模索していた、真摯な姿勢がうかがえる。

バックン省とハイズオン省も、メートル法を適用するのは最初はヨーロッパとの取引にのみ限定する案を提示しているが、ハイズオン省はこれは我々の利便性を得ることにしかつながらず、計量検定の特別な業務を創設する必要に迫られることになると、消極的な姿勢も見せている。

ホアビン省は、1899年のAGIの人口統計を示した箇所、「ホアビン省」という省名はないが、省都がホアビンに置かれている省として「ムオン族の省」となっている[AGI 1899: 294]。つまり、ムオン族の割合が高い地域であったことがわかる。ホアビン省知事は、そのムオン族に関して、無知であり、状況も不安定であるため、導入を広げるのは不可能であると回答している。それだけ、少数民族の慣習とベトナム人(キン族)との慣習が互いに異なり、統治や管理の体制も整っていなかったため、かなり消極的な対応を見せていたことがうかがえる。

フンイエン省とナムディン省は、具体的な事例は示していないものの、商業的にも行政的にも無益であり、いかなる現実的需要にも応じない、政治的にもこの国の安定にとって深刻な事態を招く、として強く断定的な口調で反対を表明している。

最後に、反対の理由に時期尚早であることを挙げている6省を取り上げる。これら6省は、バックニン省、ソントイ省、ランソン省、カオバン省、トゥエンクアン省、タイグエン省である。

ソントイ省とランソン省はこの導入による混乱を危惧しており、トゥエンクアン省は高原地帯では少数民族も多く難しいため、人々が均一的でありヨーロッパとの接触があるトンキンデルタ地域からの適用を求めている。カオバン省は、省内のバオロック(Bảo Lạc)からの報告を添付しており、その報告では正確な計量器の製造と入手は困難であり、人々の因習と住民の無知が大きな困難となることが示されている。計量器の入手が理由として挙げられているのは、都市部、および省行政中心からも遠い山岳部のカオバン省、バオロック特有の事情であると考えられる。バオロックに限らず、都市部や省都から地理的に隔絶された環境にある他の山間部の地域も、同様のことが懸念されたであろう。

次に、論点2について、条項別に各省からの変更・修正案をまとめる。

第1—3条の、計量単位、計量器とその製造に関して意見が出されているのは3省である。フンイエン省は、ヴオン以外にも使われている計量器が多数存在することと¹⁸⁰、ベトナムの容積計量器は全て木製であることが示されている。ニンビン省では、排他的、強制的な容積計量器の使用は市場に相当な問題を引き起こすとして、もみ、米は

¹⁸⁰ ヴオン以外の計量器としてあげられているのは、パニエ(panier)、ピクル(picul)、ダウ(đầu)、バット(bát)、トゥン(thùng)、ホック(hộc)、フウオン(phuong)である。

輸出用にはピクル（=60kg）を適用することを求めている。この輸出用のもみ、米の購入者である中国人はメートル法を使っていないため、もしメートル法を適用した場合、輸出市場に深刻な混乱を引き起こし、最終的にはベトナムの生産者が犠牲者となると危惧している。また、第3条について、ニンビン省もベトナム人は木製のダウを使っており、ブリキはよく知られていないとしている。ヴオンではなく、ダウを0.5リットルとして規定したらどうか、との案も出している。第4章の現地調査からも明らかのように、トンキンではヴオンの使用はあまり報告されておらず、こうした意見はトンキンの状況をよく反映しているといえる。タイグエン省では、登録された計量器を省都の行政府において、現地の人の自由に使えるよう見本を置くことが提案されている。

つまり、コーチシナで適用したアレテをそのまま参考にしたこの案は、トンキンの実状と見合っておらず、単位の選定、計量器の素材といった最も基本的な項目ですら、現実的ではなかったといえる。

第4-9条の計量検定員に関する条項には、8省に上る省が意見を出している。まず、ニンビン省、フンイエン省、タイビン省は、この計量検定には多数のスタッフが必要で、現実にはそこまで人員を確保できないと訴えている。ヴァンヴァー省では、この省は高原地帯で連絡が悪く、税務局の特別な役目を担う代表者はいないとしており、計量検定員としての役割を担うことができる人材がもともと存在しないことを報告している。タイグエン省は第6条に関して、検印を押すのは商業関係の行政中央でも行うことができるようにするべきだと意見している。

計量検定の税率を定めた第10条に関しては、ニンビン省、フンイエン省、タイグエン省がその税率が高すぎると抗議している。ニンビン省は、修正案として長さ：0.04ピアストル、重さ：0.08ピアストル、容積：0.02ピアストル、天秤ばかり：0.1ピアストル、竿ばかり：0.2ピアストル、台ばかり：1.0ピアストルとするべきと述べている。これは小売業で少量量る際に使われる容積計量器の税率が特に低く抑えられており、実状をよく理解した上での判断といえる。

計量検定税として、ランソン省は最初の3年は徴収せず、税の適用も段階的に行うべきだとしている。

不正を働いた際の罰則規定について定めた第14、15条に関しては、興味深いことに、タイグエン省が最初は大いに黙認する必要があると述べている。その理由として、現地で用いられている計量器は不完全であるにもかかわらず、ベトナム人はまれにしか計量をごまかさないとし、ベトナム人の商習慣に対して肯定的な見方を示している。さらにこうしたことが、逆にメートル法の適用に対するベトナム人の関心を失わせることにもつながっていると、ベトナム人の商取引において現行の度量衡制度でもなんら支障なく、円滑に行われていると評価していることがわかる。

第 16 条は、計量検定員の手当に関する項目であるが、フンイエ恩省は正計量検定員と副計量検定委員の手当の額が不公平であるとし、ニンビン省も副計量検定員の手当を 350 フランに引き上げるべきだと答えている。

暫定的条項である第 18 条は、このアレテを施行する日付に関してであるが、フンイエ恩省が数ヶ月の猶予を与えるべき、ニンビン省が 2 年以内に行うのは不可能であると回答している。特に第 18 条に対しての意見ではないが、論点 1 に対して時期尚早と答えた省も同意見であると考えられる。また、ヴィントゥイ省はトンキンデルタや一般行政下に置かれている省と軍区では状況が異なるため、区別するのが当然であるとして、軍区の施行を「後日、日付を定める」と加える必要があるとしている。また、カオバン省は直接この件に言及していないが、添付されたバオラックからの報告書の中で、「このアレテ案は我々地域の人々を考慮して制限した、いかなる条項も含まない」と不満を明らかにしている。つまり、山間部では特別措置を取るべきであるとの考えがあることがわかる。

最後に、同じく暫定的条項である第 19 条に関して、ヴィントゥイ省はアレテを実行するための経費とその執行の責任を負う新しい部局を創設することを求めている。

以上から、1898 年の税・関税局提案のアレテ案は、大多数の省がその全面的、即時導入は困難であるとの判断を示していたといえる。各条項案に対しても、まんべんなく意見が寄せられており、特に規定された単位、計量器や計量検定についての内容がトンキンの実状に見合っていなかったことが示された。さらに、メートル法適用には、卸と小売り、軍区、山間部と都市部では区別して、差別化をしながら段階的に進める要望が出されていたことも確認できた。

(3) 各省の回答—その他独自の論点に関して—

次に、回答を求められた論点の他に、各省知事の回答から読み取れる事柄について取り上げる（表 3—1「通達の回答内容から A, B」参照）。

前項とも重複する内容をまず簡単に整理すると、ベトナム人が伝統や慣習に非常に執着すると、ベトナム人の気質について言及していた省が 2 省ある。これは長期にわたるインドシナ在留の経験などから得られた観察の結果であり、興味深い。フランスでのメートル法実施の状況を引き合いに出し、インドシナでも実施には長期間を要し、困難を伴うことを指摘している省も 2 省みられた。また、段階的に導入すべきであるとの意見も多数見られたが、具体的な方法が示されていたのは、カオバン省の知事に提出したバオラックの報告書のみであった。この報告では、人々に段階的に知識を導入する方法として印刷物を配布する案を出している。

次に、どこでメートル法が知られているか、についてまとめると、中国人が理解しているとしているのが2省あったが、興味深いのは「中国人と、その中国人と取引のあるベトナム人」ではなく、「中国人」のみ限定して答えていることである。

ヴァンブー省は、現地の取引は、現地の人が實際上自由にお互い行われており、中国人を除いて確立されているとし、中国人はトンキンデルタの同業者（帮）との商業関係を維持しており、ハノイで適用された新しい度量衡の情報を素早く入手していると報告している。つまり、日常的に行われる売買はベトナム人同士の間で完結しており、中国人は介在していない。一方で、輸出用の米の買い入れを主に行う中国人は、各地に点在する同郷の組織である帮と密接につながっており、独自の情報網を持っていたことが、ここからもわかる。さらに、前述のようにフンイエン省知事の観察では、中国人が買い入れるときは、メートル法を知っているにもかかわらず、より多くの現地の人をだますために彼らの度量衡を利用している、とあることから、輸出用の買い入れの際は買い手、つまり中国人が使っている計量器が優先的に使われ、メートル法を介することがなかったことがうかがえる。そのためベトナム人は、輸出用の米と関わりを持っていたとしても、メートル法に接する機会がなかったことも考えられる。

一方、ヨーロッパとの商いがあり、税関とも交流のあるベトナム人商人は、すでにメートル法になれているとのイエンバイ省からの報告にあるように、同じく輸出に関係しているベトナム人でも、ヨーロッパ人を介しての取引の場合は、メートル法をよく理解していたことがわかる。

アレテ実行の経費に関して、2省が疑問を呈している。ハイズオン省は、徴収された税でその業務（検定）を設置する費用を補うことはできないので、このアレテ案は理解に苦しむ、としている。ニンビン省は初年度の経費は各省で約4000フラン、翌年以降はニンビン省では3000フラン必要で、その埋め合わせを可能とする歳入はしばらく見込めない、と具体的な数値を示し、それをこのアレテは2年以内には実行できない根拠として挙げている。

その他、フンホア省とヴァンブー省から、興味深い報告が見られる。まずフンホア省は、日常的売買が行われる市場における計量の状況について、以下のように報告している。

異なる容積の計量器で米が買われており、一般的に最も多く使われているのはバット(bát)で、各家々でそれぞれの形を持っている。市場で米を買うとき、彼らはこのバットを持っていき、それを使い、提供された食品の価格に納得する。

つまり、売り手も買い手もそれぞれ自分の計量器をもち、お互い計り合いながら価格交渉をしていたことがうかがえる。さらに、計量器が統一されていなくても、さほど問題が生じていなかったことが、ここからも読み取れる。

また、ヴァンヴー省では、土地の測量についての記述が見られる。それによると、ヴァンヴー省では不動産税がなく、土地は少しも価値を持たないため、取引の対象にもならない。そのため、この省ではアールやヘクタールといった単位で記載された不動産登記証書も見つけることができない、とあり、山間部の土地の状況の一端を垣間見ることができる貴重な報告である。

以上から、1898年の段階では、メートル法は中国人、ヨーロッパ人を中心に、彼らと取引のある一部に限り知られていた状況であったといえる。また、税・関税局が出したアレテ案は、トンキンの実状に合わせて作成されたものとはいえず、トンキンにおけるメートル法適用への模索の初期段階であったことが、一連の各省からの意見から再確認できたといえる。また、各省フランス人知事からの提言は、ベトナム文化、慣習への深い理解や関心、独自の観察が感じられるものも多い。インドシナ連邦成立から約10年後のフランス人知事の状況、統治の姿勢をうかがい知ることができ、重要な史料、報告であるともいえる。

第3節 1910年の通達およびその回答

(1) 1910年の通達

1910年3月22日付けの総督からの要望により、1910年4月15日トンキン理事長官はトンキン各省、各軍区、各都市の長に通達を発信している。それに対して全29省中28省の回答が残っている¹⁸¹。

トンキン理事長官が各省知事に回答を要求した論点は以下の4つである（表3—2「1910年通達の論点1-4」参照）。

論点1：1908年3月以降、メートル法・十進法の拡張に進展はあったか¹⁸²。

論点2：完全な改革はまだ早すぎたか。

論点3：フランス式度量衡を有効に周知させるにはどうしたら良いか。

論点4：都市部の市場で先行して実施するのが良いか、またメートル法を強制するまでに必要な時間はどれぐらいか。

上記4つの論点を通じて、この時点ではフランス式の制度をそのまま導入するつもりであることがわかる。また、その適切な時期と方法について、まだ具体的な見通しが立っていなかったこともうかがえる。

¹⁸¹ 1910年の省編成。25省：バックザン、バックカン、バックニン、ハードン、ハイズオン、ハイニン、ハーナム、ホアビン、フンイエ、キエンアン、ライチャウ※、ランソン、ラオカイ、ナムディン、ニンビン、フックイエ、フート、クアンイエ、ソンラー、ソントイ、タイビン、タイグエン、トゥエンクアン、ヴィンイエ、イエンバイ。2軍区：カオバン、ハーザン。2都市：ハノイ、ハイフォン（序表序—1「トンキンの省編成」参照）。※：回答なし。

¹⁸² 1908年3月にトンキンで度量衡について検討する委員会が開催され、度量衡統一への方策について意見がまとめられているが、それ以降、メートル法の進展は見られたかどうかを問題としている。この委員会については現在のところ不詳である。

表 3-2 1910 年の通達とその回答

1910年通達の論点	各省知事の主な回答内容
1. 1908年3月以降、メートル法・十進法の拡張に進展はあったか	<ul style="list-style-type: none"> ・進展していない：23省（全体の8割） ・進展した：1省（ナムディン） ・その他：1省（バクカン：容積のみ進展なし）
2. 完全な改革はまだ早すぎたか	<ul style="list-style-type: none"> ・時期尚早・困難：9省 ・改革は実施できる：5省
3. フランス式度量衡を周知させる方策	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育：13省
4. 都市部の市場で先行実施するのがよいか、及び義務化するまでの必要期間	<ul style="list-style-type: none"> ・中心部の市場で先行実施：4省 ・計量器見本を備える：2省
通達の回答内容から	
A. メートル法、フランス式度量衡を誰が知っているか、使っているか	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人、外国人と関係のある商人：10省 ・政府の物資調達・供給、工事関係者：2省
B. 実際使用されている度量衡について	<ul style="list-style-type: none"> ・駐屯兵から手に入れた箱：2省 ・容積が一定しない慣習上の計量器：2省 ・英国式台ばかり：1省（ハイズオン）

（出所）ベトナム国家第一文書館トンキン理事長官府コレクションNo.71315-02, Application au Tonkin et en Indochine du système métrique français 1901より筆者作成。

(2) 各省の回答一回答を求められている点に関してー

次に、各省からの回答を整理する。論点1の1908年3月以降、メートル法・十進法の拡張に進展は見られたか、についてであるが、それに対しては25省から回答が寄せられている。その内全く進展しなかったと回答している省が11省、わずかにしか進展しなかったとしたのが12省であり、これらを合わせると23省にのぼる。つまり、1910年時点でメートル法・十進法の進展に否定的な省が全体の8割を占めていることになる。

進展したと答えているナムディン省も、外国と取引があるところでは普及したとしており、進展は限定的であったことがわかる。ナムディン省では、台ばかりは地方でも多く普及していると回答していることも注目に値する。これは米の生産地であり、またトンキンデルタの結節点として機能していたナムディン省(第2章第3節第1項「ピクルに関して」参照)である故に、多くの大規模商人、米の仲買人が存在し、取引規模が全体的に他の省と比べて大きかったことが考えられる。

また、特に明言を避けているバクカン省は、容積に関してフランス式度量衡は全く知られていない、と回答している。これらから、徴税や大口取引の際必要となる長さ、重量単位はまだしも、人々が日常的に用いる容積による計量に関しては統一からほど遠い状況であったことがうかがえる。

論点2、完全な改革はまだ早すぎたか、という質問に対しては14省が回答しているが、9省が時期尚早であった、あるいは困難であると報告している。逆に改革を実施できると回答したのは5省で、その理由をハーナム省は塩の新計量制度は問題なく普及したから、ヴィンイエン省はフランス式度量衡制度は論理的制度で理解が容易である

からと述べている。一方で、ホアビン省は同じく改革に肯定的意見を持っているが、その理由は混沌とした現在の状況を維持するよりも良いとしている。つまり現状を踏まえて改革の実現可能性を推し量っているというよりは、消極的理由から改革を実施したいと回答している省も含まれている。

ところで、ハーナム省が言及している塩の新計量制度というのは、塩に税金が 1892 年よりかけられており[Hồ Tuấn Dung 2003: 74]、その際効率的に課税するため計量制度が導入された可能性がある。使われていた単位はピクルであり、前述の通り 1904 年に公式ピクルは 60kg とされている。しかし 1906 年に至っても塩の徴税は 1 タ(tạ、タはピクルのベトナム語名)=100kg で行われていた[Hồ Tuấn Dung 2003: 76]ともあり、はっきりしない。

次に、論点 3 と論点 4 については、合わせて検討して回答している省が多いのでまとめて整理する。まず、学校教育での普及が有効と答えているのが 13 省ともっとも多くなっている。必要な時間についてはイエンバイ省では、子供が学校でメートル法を教わっても親は文字を読めないので親の世代には伝わらない、そのため子供が成人するまでの 15 年は必要だろうとしているのに対し、ハーナム省は子供から親には容易に浸透するという楽観的で、対照的な回答をしている。

省中心部での市場で先行して実施することに賛成を示しているのは 4 省あり、ハーナム省ではその理由を地方から来た客が、そこでメートル法を使って実際に売買することで理解し、村に帰ってそれを伝えるから、としている。ハイフォン市は中心都市の市場では生産者と購入者の取引が常にあるため、そこでメートル法が必要となれば生産者が出身地でこれを伝え、この改革の伝道者になるだろうと答えている。

ニンビン省は、各省の中心都市ではなく植民地の商業の中心地から先行して実施する方が良いとしている。つまり、ハノイ市、ハイフォン市といった大都市でまず普及させるべきであると主張しているのであり、各省の省都においてすら、まだメートル法の普及はかなり難しいと考えていることがうかがえる。

計量器の見本を備えるのが良いと主張しているのは 2 省あり、ランソン省は新しい制度を強制される前、準備期間の段階では人々は自分たちで新しい計量器を購入しないため、行政の検印が押された計量器見本を無料で小売商に分配する必要があるとし、フックイエン省では市場にポスターを掲示すると同時に見本を置き、その後各村で見本を買わせるのが良いとしている。

以上から、1910 年の段階ではメートル法の普及は進んでいなかったことがうかがえる。また、一気に改革を断行するのではなく、段階的に部分的にまず実行すべきとする意見が大半を占めていることになる。方法も強制的手法ではなく、あくまで教育や実際の売買を通じての普及が望ましいと考えられている点に特徴があるといえるだろう。

(3) 各省の回答—その他独自の論点に関して—

次に、回答を求められた論点の他に、各省知事の回答から読み取れる事項を整理する（表 3—2「通達の回答内容から A、B」参照）。まず、実際メートル法を使っているのは誰か、ということに言及しているのは 12 省ある。ヨーロッパ人と商売している現地の商人を挙げた省が 5 省あり、ハーナム省では特に米とトウモロコシ売買、フックイエン省では米、もみ、トウモロコシの卸業者が使っていると答えている。中国人商人を挙げている省は 4 省で、ランソン省はトウモロコシ売買において、ナムディン省では米の取引および寄港船舶主により使われていると言及している。また、ナムディン省は省都のインド人、アジア人もメートル法を使用しているとしている。

行政、政府の物資調達および供給、工事関係者によっても使われていると報告している省も 2 省ある。

つまり、メートル法を使用しているほとんどがヨーロッパ人、中国人、そして彼らと取引しているベトナム人商人および政府関係者とされ、取引されている商品は米、トウモロコシであったことがわかる。

また、ハーナム省からの回答では、行商人で鉄道を利用するベトナム人は、商品を駅員にフランス式度量衡で計量されるためよく知っている、と述べており、メートル法の普及は外国との取引だけでなく、鉄道を利用することも普及が促進される要因であったこともうかがえる。

論点 B の実際に用いられていた計量器はなにか、について、容量が一定しない慣習上の容積計量器を挙げているのが 2 省あり、そのうちキエンアン省は竹や木製の計量器が用いられていたと答えている。また、ハイズオン省では、英国式の台ばかりが用いられ、リーブルを単位として計ると報告している。こうした外国製の計量器や単位は 1912 年に禁止されるが[JOIF 1912: 1763]、これは 1910 年の段階でも実際に外国製の計量器が用いられていたひとつの事例となる。

一方で、駐屯軍から手に入れた箱、軍の飯盒・携行用のブリキ食器（gamelle）が使われていると報告した省も見られる。これは耐久性に優れ、形状も一定で便利なものは、民間においても急速に広まることを示唆している。

以上をまとめると、1910 年の時点では、メートル法の普及は非常に限定的であったといえる。メートル法を使っていたのは外国人商人と、彼らと取引のあったベトナム人商人が主で、取引される商品が米、トウモロコシなど主要な輸出品であったことから、かなりの大口取引に限定して用いられていたことが推測される。

民間で計量する際、もっとも身近であった容積単位とその計量器が、長さや重量と比較してなかなか統一的制度が浸透しなかった一方で、フランス軍が持ち込んだ携行用飯盒、食器が一般的計量器として報告されるほど、民間に広がっていた事実も興味深い。

度量衡の改革に最適な範囲、時期、方法についても、インドシナ総督府、地方行政主導の全面的、強制的、早期実現といった強硬姿勢ではなく、段階的でより間接的な方法を主張する省が大多数を占めていた点にも、注目すべきである。

第4節 1921年の通達およびその回答

(1) 1921年の通達

1921年の通達は、1920年12月29日、総督から各地方行政の長へ依頼があり、1921年1月13日トンキン理事長官はトンキン各省、各軍区、各都市の長に通達を発信している。それに対して全29省中18省の回答が残っている¹⁸³。

理事長官が回答を求めた論点は以下の3つである（表3-3「1921年通達の論点1-3」参照）。

論点1：もしフランス式度量衡そのままの実施が得策でなければ、現地の人が多く使っている度量衡を新制度の中に取り入れた方が良いのか、もしそうであれば、取り入れるべき度量衡はなにか。

論点2：計量器の素材について、現地の人になじみのある素材、竹や木などを取り入れた方が良いか。

論点3：無料で使える計量器見本を設置することに関して。

以上の論点を通じて、まず論点1と2からは、フランス式度量衡の画一的な導入にこだわるのではなく、必要であれば現地の制度も取り入れた実施を目指そうとしていることが読み取れる。また、1910年では普及の方法について全般的に尋ねていたが、1921年ではトンキン理事長官府はメートル法普及には無料計量見本の設置が最善の方法と考えていたことが論点3からうかがえる。

¹⁸³ 1921年の省編成。21省：バックザン※、バックカン、バックニン※、ハードン※、ハイズオン、ホアビン、フンイエ、ン、キエンアン※、ランソン※、ラオカイ、ナムディン、ニンビン、フート、クアンイエ、ン、ソンラー※、ソントイ、タイビン、タイグエン、トゥエンクアン、ヴィンイエ、ン、イエ、ンバイ※。4軍区：モンカイ、カオバン、ハーザン、ライチャウ。2郡：ハーナム※、フックイエ、ン※。2都市：ハノイ、ハイフォン※（序 表序—1「トンキンの省編成」参照）。※：回答なし。

表 3—3 1921 年の通達とその回答

1921年通達の論点	各省知事の主な回答内容
1. ベトナム式度量衡制度を新制度の中に組み込む必要性の有無	<ul style="list-style-type: none"> 賛成：3省（ピクル、マウなど主要なものを残す） 反対：8省（より複雑になるため） 中立：1省（フート：それぞれの長所、短所を述べる）
2. 計量器をベトナム人になじみのある素材にする必要性の有無	<ul style="list-style-type: none"> 賛成：3省（素材、計量器の形状もなじみのあるもの） 反対：10省（フランスの計量器の素材と類似、フランス式計量器をすでに使用している）
3. 無料で使える計量器見本の設置	<ul style="list-style-type: none"> 賛成：9省（一部は費用回収を主張、設置場所は省都の市場、各村など） 反対：1省（カオバン：経済規模小、人口まばら、見本管理・メンテナンスのための税負担増）
通達の回答内容から	
A. フランス式度量衡導入の可能性	<ul style="list-style-type: none"> 十分可能：6省 困難：2省（ラオカイ、ライチャウ）
B. 現地の要望(状況)	<ul style="list-style-type: none"> ベトナム人自身も複雑な慣習度量衡に困惑：2省 不正確な慣習度量衡の方が利益増（小売商、消費者、中国人）：1省（フート）
C. 新制度周知の方法	<ul style="list-style-type: none"> 新聞：2省 学校：2省
D. 計量器について	<ul style="list-style-type: none"> タイビン：ロベルヴァルの秤（中国人の米買い付け） カオバン：もっとも需要があるのは携帯さおばかり フート：安価なさおばかりの普及先決 ハーザン：さおばかりとロベルヴァルの秤すぐ導入可能

(出所)ベトナム国家第一文書館トンキン理事長官府コレクションNo.71315-03, Application du système métrique française en Indochine 1914-1934より筆者作成。

(2) 各省の回答一回答を求められている点に関してー

論点1は、もしフランス式度量衡の実施が得策でなければ、現地の人が多く使っている度量衡を新制度の中に取り入れた方が良いか、そうなら取り入れるべき度量衡はどれか、についてであるが、多くの省がかえって制度が複雑になるという理由で反対している。反対している省は7省であるが、ホアビン省は公式ピクルのみ残す、タイグエン省はマウを一時的に残す必要があると答えており、基本的に反対ではあるものの、結局一部はベトナムの単位を組み込む形を主張している。また、こうしたピクルやマウは輸出入や土地の測量すなわち税の徴収に深く関わってきた単位であり、国家の重要な社会経済活動においても依然として旧来の方式が残っていたことがうかがえる。

一方賛成であったのは3省である。この中でナムディン省はトゥオック、ピクル、サオ（sào）を残すこと、ニンビン省は、ベトナム独自の制度をまず統一した上で、フランス式制度を取り込むことを要望している。

中立的立場を取るフート省も、面積単位であるマウ、サオの廃止には反対している。特にマウは昔から土地を測る単位として使われ、税金の徴収の際にも重要であるから廃止すると深刻な影響が出ると懸念されている。

次に論点2の計量器の素材について、現地の人になじみのあるものにしたほうが良いかという問いに関しても、ほとんどの省は反対している。その理由としてバクカン省は、経済規模が小さいため、現在必要なのは軽いものを計る小型の計量器のみである、大量の計量が必要になる時には、もともとない計量器を導入するのであるからフランス式でかまわない、としている。つまり、バクカン省の知事はフランス式度量衡制度が適用される場所として、規模の大きな取引を想定していることになる。

ナムディン省は米の計量にバット (bát、鉢) からバターの箱が使われるようになったのと同様に、フランス式のものも普及する、と答えている。このバターの箱は、バター、コンデンスミルクの空き缶であり、多くは円柱形をしている。現在に至ってもオンボー(ông bơ)と呼ばれ家庭での米の計量にも広く使われている(写真3-1 参照)。

写真3-1

ここで、植民地時代に広く普及し、第4章の現地調査でも頻繁に報告されているオンボーについて整理したい。

現在でも家庭で米の計量に使用されるコンデンスミルク缶(2009年)。

ホップボー(hộp bơ, boîte de beurre)とホップスア(hộp sữa, boîte de lait frais)も文献資料に出てくるが、これらはオンボーと同類の計量器と考えることができる。直訳するとベトナム語もフランス語もホップボーはバターの缶詰、ホップスアは牛乳の缶詰となる。オンボーはオン(ông)は管、ボー(bơ)はバターを意味する。一般的には缶詰はホップ(hộp)と呼ばれるが、写真3-1、写真3-2、写真3-3からもわかるように、このバター、ミルクの缶詰は円筒形をしており、そのため日常的にはパイプ、管を意味するオンという単語も使われ、普及したのではない。



現在ではオンボーといえばコンデンスミルク缶¹⁸⁴を指し、米を計る計量器として用いられている。植民地期も、コンデンスミルク缶は缶詰貿易の主要な輸出品であり、毎年22-23万缶輸入していた。1937年では缶詰輸入全体に占めるミルク缶の割合は25.9% (金額ベース)、20.8% (重量ベース) を占め、ミルク缶中のコンデンスミルク缶の割合は重量、金額ベースともに95%以上を占めている[大東亜罐詰産業協力会1943: 11、仏印罐詰輸入統計]。

¹⁸⁴ 一般的には、オンボーといえばオント(ông thọ)のコンデンスミルク缶を指す。オントとは「おじいさん」のことで、パッケージに白髪のおじいさんのキャラクターが描かれているのでそう呼ばれる。

写真3-2

現在販売されているコンデンスミルク缶(380g)。
筆者が確認した限り(7種類)、スーパーの
店頭に並んでいるコンデンスミルク缶の規格は
同一であった。



写真3-3

1932年に発行された婦女新聞
(tạp chí phụ nữ tân văn)に掲載された
ネスレの広告。

現在では缶詰のバターや牛乳は一般的ではないため、オンボーはコンデンスミルク缶の意味しかもたなくなつた。一方植民地期では、こうしたバターや牛乳、コンデンスミルクの缶詰は広く出回っており、規格もそれぞれほぼ同一のものが用いられていたと思われる。ハノイ市の報告でも、ホップボーとホップスア、それぞれ一種類しか相当量の調査結果が挙げられていないのは、そのためであろう。1911年の現地調査報告では、ブレテル(Bretel)のバター缶について多くの省が言及しており(第4章第2節第2項④「容積単位」参照)、1936年の現地調査報告でも、ニンビン省では、ネスレのホップボーとメーカー名も具体的に報告している事例も見られる(第4章第3節第2項④「容積単位」参照)。しかし、1911年のタイグエン省の報告によると、バットはブレテルのバター缶より小さく、コンデンスミルク缶とほぼ同量だとされていることから、バター缶の方が容量が大きかつ



たことがわかる（第4章第2節第2項④「容積単位」参照）。

トゥエンクアン省ではフランスとベトナムでは計量器の素材は同じであるため、ベトナムの素材を取り入れる必要はないとしている。しかし、少なくとも容積計量器に関しては、民間レベルでは竹や鉢、空き缶などが使われており、この回答は若干現地理解が不十分のように感じる。あるいは、もともとそうした民間レベルでの短小の計量に用いられる度量衡を想定しておらず、バクカン省のように大型の計量のみを対象と捉えている可能性もある。

一方で論点2に賛成している省も3省あり、ソントイ省およびヴィンイエン省は計量器に素材形状ともベトナム人になじみのあるものを使うべきだと答えている。またフート省は素材に安価なものを使い、形状は伝統的計量器に似せるのが良いとしている。

論点3の、誰でも無料で使える見本を与えるべきか、については9省が賛成しているが、そのうちいくつかの省は無料ではなく費用は回収すべきだと答えている。トゥエンクアン省およびタイビン省では、費用は3—6ヶ月で回収するとし、フート省は見本購入のための税金を設ける必要があるなら、まず豊かな商人に販売することで始めるのが良いとしている。見本の設置場所は、港、市場、学校などが候補に挙げられている。反対しているカオバン省は、経済規模が小さく人口もまばらで、見本を管理するスタッフの給料を賄う税金まで必要となる、カオバン省ではこうしたことは無駄であると答えている。

(3) 各省の回答—その他独自の論点に関して—

フランス式度量衡導入の可能性については、6省が可能であると答えている（表3「通達の回答内容からA-D」参照）。興味深いのは、可能であるとしながらも、クアンイエン省は本国、およびフランス人だけで実施すれば良いのではないかと指摘していることである。つまりフランス本国や植民地政府の関係のあるところ、必要なところだけメートル法が使われれば良い、と考えていることがわかる。そのように意見しているクアンイエン省は、ベトナム人の柔軟さと賢さでフランス式度量衡の導入は、フランスの農民に導入したときよりもスムーズに進むとも考えを述べており、当時のクアンイエン省知事がベトナム農民の能力を高く評価していたこともわかる。

一方で、フランス式度量衡の導入にはっきりと難色を示している省がラオカイ省とライチャウ省であり、ライチャウ省は商業活動が活発でないため制度は入れ替わらない、ラオカイ省は山間部の人々はデルタのベトナム人が慣習としている度量衡も知らないとしている。この2省のように山間部で少数民族も多い地域では特に新制度の導入が現実的でないことがうかがえる。

現地の要望、状況については、ベトナム人自身も複雑な慣習に困惑していると報告している省が2省ある一方、逆に不正確な計量で利益を得ている小売商、消費者、中国人は新制度の導入に反対するだろうという報告をフート省がしている。こうした不正確さを好む人々がかなりいることも、普及を阻む要因のひとつであったことが推測される。

新制度を周知させるための方法としては、新聞や学校を利用するのが良いとの意見も4省から挙げられている。ハノイ市は、メートル法の利点、政府の目的と意向を新聞に掲載する方法を良しとしている。

計量器については、もっとも需要がある、あるいは普及が優先されるべき計量器として竿ばかりが挙げられている。竿ばかりとは竿の一端にものをのせる皿をたらし、反対の方を指などに引っかけて支点とし、竿が水平になるまで分銅を動かして重さを量るはかりである。このはかりは植民地時代の風俗を表わしたデュムーティエ(G.Dumoutier)の絵などにも見られ[Huard et Durand 1954: 172, 203] (図3-1 参照)、現在でも、特に北部において自転車や天秤棒で移動しながら販売する人たちの間で使われている(写真3-4 参照)。

写真3-4

フート省では、竿ばかり以外の計量器は価格が高く、小規模な企業、商人は購入することができないとしている。カオバン省は、新制度の計量器は必要ときに容易に購入できるよう環境を整えておくべきであり、計量器の製造は行政か行政の管理下で行い、販売も行政が担当するのが良いとしている。

また、実際に用いられていた計量器として、ロベルヴァル(Roberval)の秤という、上皿が左右両方についた台ばかりも使用されていた(写真3-5 参照)。このロベルヴァルのはかりは米の買い付けに中国人やその他の商人が使っていた。これ以外でも、木製のダウの代わりに軍隊の飯盒やブルテル(Bretel)というメーカーのバター缶も使われているとヴィンイエン省が報告している。

竿ばかりで重さを量る行商人。
(2012年7月、ハノイ市近郊の
ハードン市場前で)。



図3-1

植民地期における漢方薬計量の様子。
(出所) [Huard et Durand 1954: 172]
G.ドュムーティエの図版による。



写真3-5

約100年前のロヴェルヴァルのはかり。
(2008年2月、フエ市内の骨董品店にて)。



以上をまとめると、理事長官から発せられている質問から、フランス式度量衡制度の強制的画一的実施ではなく、現地の制度、実情も尊重し、新制度に反映させようとする姿勢が見てとれる。

各省の報告から、1921年時点でも貿易や税の徴収の際重要となる重量単位ピクルと面積単位マウが依然として用いられており、これらの単位の撤廃による影響を心配している省が多数あることも、当時の実情を知る上で興味深い報告である。

また、度量衡新制度導入を、最初から大口の取引やフランス人、外国人が関わるところに限定して考えている知事が複数いることから、民間レベルでの複雑で混沌とした状況を反映しているといえるのではないか。

こうした制度の導入に関しては、ラオカイ省、ライチャウ省といった山間部で依然として困難であり、ベトナム人自身も多種多様な慣習に困惑している一方で、不正確な計量により利益を得ている人々、そしてその意識が根強くあることも、具体的な報告により浮かび上がってきたといえる。

第5節 1927年の通達およびその回答

(1) 1927年の通達

1927年9月9日、トンキン理事長官は各省知事に宛てて通達を発信している。この中で、トンキン理事長官府は1911年10月27日にコーチシナで公布された度量衡に関するデクレをトンキンにおいても適用する意向があることを示している。このデクレは1911年12月14日にコーチシナにおいて施行され、同様のデクレは1914年にカンボジアでも公布されている（詳しくは第1章第3節(2)「インドシナにおける度量衡関連法とメートル法の導入」参照）。トンキン理事長官は通達にこのデクレの全文を添付

し、北部全域においてこのデクレを施行することに対する意見、特に困難な点について報告するよう求めている（表 3—4 参照）。

さらに、このデクレの中でも計量検定に関する規定を定めた第 8 条について特に注意し、この条項がトンキンの実情に照らして合理的かどうか、具体的に意見を述べるよう付け加えている。この第 8 条は、計量検定を行う際の担当機関、担当者について定めたものである。トンキン理事長官が度量衡統一の実現に向けて、正規度量衡計量器の実際の管理、監査、検定をどの機関に担わせるべきかについて、強い関心を寄せていることがうかがえる。

表 3—4 1927 年の通達とその回答

1927年通達の論点	各省知事の主な回答内容
1. 1911年10月27日コーチシナに関して 公布された度量衡デクレのトンキン適用 に対して	・賛成：19省 ・反対：9省 ・その他：1省（タイビン：委員会設置提案）
2. 計量検定について定めた第8条について	・毎年の計量検定不可能：4省
通達の回答内容から	
A. メートル法実施状況	・商業活動上で普及：6省
B. 法律の施行範囲	・大都市で先行実施：6省
C. 法を適用するまでの時間	・すぐに適用可能：11省 ・すぐには困難：7省
D. 伝統的度量衡、慣習について	・ナムディン：合法的度量衡制度未確立、計量検定 組織の不在、容積と重量は売り手と買い手双方が 何度も計り直して値段交渉 ・タイビン：法律文書の中でもベトナム固有の制度 ・ニンビン：容積、重量単位はベトナム固有の制度 ・フックイエン、ランソン：容積はホップ・ボー、ビン
E. その他	・学校教育の重要性：2省 ・反対運動の可能性：2省 ・計量器購入の自己負担反対：2省 ・トンキンでの計量器製造困難：1省（ナムディン） ・単位のベトナム語訳撤廃：1省（ハイズオン）

（出所）ベトナム国家第一文書館トンキン理事長官府コレクションNo.71312, Extention au Tonkin de la réglementation des poids et mesures en application en Cochinchin et au Cambodge 1899-1937より筆者作成。

ここで、1911年10月27日のデクレの内容について、再度簡単にまとめると以下のようになる。

- 第 1 条：コーチシナ全域において、以下の度量衡制度を使用することを定める。
- 第 2、3、4 及び 6 条：計量器の製造方法について（材質、形式、寸法など）
- 第 5 条：ピクルの正式重量について
- 第 7 条：商人に対する度量衡計量器の配布について
- 第 8、9 条：計量検定担当者の職務について
- 第 10—16 条：年次計量検定における認定計量器への認可済み証明の記載方法について
- 第 17、18 条：違法行為について
- 第 19 条：計量検定に伴う経費について
- 第 20 条：このデクレを施行するに当たって責任を負う担当機関について

(2) 各省の回答—回答を求められている点に関して—

1927年の通達に対しては、28省からの回答がそろっている¹⁸⁵。ここでは、便宜上これら28省を賛成グループ（積極的、あるいは一部肯定的）、反対グループ（完全に否定か、あるいは一部について消極的）2つのグループに分けることとする。先の述べたように、多くの知事は賛成か反対かを明言していないが、第一官房による回答文書の取りまとめ結果が同じ資料ファイルの中に保存されていた。筆者もそれぞれの回答文書を確認しその内容から判断した結果、この取りまとめ結果と同じ結論に達した。賛成グループ、反対グループの内訳は以下の通りである。

賛成グループ：バックザン、カオバン、ハーザン、ハーナム、ハノイ、ハイフォン、フンイエ、キエンアン、ランソン、ラオカイ、ナムディン、ニンビン、フックイエ、クアンイエ、ソンラー、ソントイ、トゥエンクアン、ヴィンイエ

反対グループ：バクカン、バクニン、ハードン、ハイズオン、ライチャウ、モンカイ、フート、タイグエン、イエンプイ

その他：タイビン（直接度量衡に関して意見は述べず、度量衡に関する問題を検討する委員会の設置を提案）

上記のグループ分けからの地域性の考察は最低限にとどめるが、反対グループの中に見逃せないひとつの特徴がある。国境沿いや少数民族が多く居住する省で度量衡の統一が困難であるのは当然のことであるが、反対グループの中にも比較的農業が盛んか、あるいは交通の便も確立された紅河デルタ周辺の省、例えばバクニン省、ハードン省、ハイズオン省、タイビン省といった省が入っているのは興味深い事実である。これは、植民地期の北部ベトナムではある程度交通網が確立され、農業が盛んであったり、発展している地域でも多種多様な度量衡制度が存在し、その統一の必要性があまり認識されていなかった、あるいは必要としていなかったことがうかがい知れる。

トンキン理事長官が意見を求めた第8条に関してはもちろん、その他の各条項についても各省から様々な意見が出されている。特にそれは計量検定に関する条項に集中している。カオバン省とハーザン省は、毎年省内全域で計量検定を行うことは不可能であると答えている。両省は山間部に位置し、交通網も確立されていないことから計量検定員が全ての行政機関、各村々に毎年訪れることは困難であり、また検査を受ける計量器保有者にとっても指定された日時に検定が行われる場所まで時間通り出席することは期待できないだろうとしている。

トンキンデルタに位置するナムディン省とハードン省も、この計量検定の各条項については実現は難しいとしている。もっとも大きな理由は、行政スタッフの人手不足

¹⁸⁵ 1927年の省編成。23省：バックザン、バクカン、バクニン、ハードン、ハーナム、ハイズオン、ホアビン※、フンイエ、キエンアン、ランソン、ラオカイ、ナムディン、ニンビン、フックイエ、クアンイエ、ソンラー、ソントイ、タイビン、タイグエン、トゥエンクアン、ヴィンイエ、イエンプイ。4軍区：カオバン、ハーザン、ハイニン、ライチャウ。4都市：ハノイ、ハイフォン、ナムディン、ハイズオン。（※：回答なし）

をあげ、すでに仕事量が多く厳しい状態の中で計量検定員の確保は難しいとしている。また、ナムディン省は710村、ハードン省は850村の村を抱えており、これら全ての村を毎年計量検定員が回ることもほぼ不可能に近いと述べている。

(3) 各省の回答—その他独自の論点に関して—

以下、各省知事からの回答文書の内容を A-E の 5 つの論点に集約し、それぞれの論点ごとに考察する。

A. 各省におけるメートル法の使用状況

バックザン省、ハイフォン省、ラオカイ省、ナムディン省、フックイエン省とヴィンイエン省では、商業活動上ではメートル法が普及していると報告している。その中でラオカイ省では地方の商業活動ではメートル法と伝統的度量衡制度の両方が用いられており、ヴィンイエン省ではより具体的に、セメント、砂の取引にはキンタルメトリック、布地の取引にはメートル、油と酒の売買にはリットルが用いられていると報告している。ナムディン省では多くのベトナム人商人はメートル法を用い、その計量器もフランスと似たものを使用しているとある。カオバン省、ランソン省、ハーナム省では、行政組織の上級役人だけでなく一般市民もメートル法を周知していると報告している。

メートル法が使用されていると報告を上げている省は、全て賛成グループに属していることがわかる。

B. 施行範囲

ここでは、1911 年の法律を施行する際、その施行範囲について言及したものをまとめる。まず賛成グループに属する省の中で、ハイフォン省、ソントイ省はこの法律の施行はまず大都市から前倒しで行っていくべきだと主張している。その理由としてソントイ省は政治、財政上の問題と、地方では公式計量器を普及させるためにより多くの時間がかかることを挙げている。ハイフォン省は特に理由を明記していない。

反対グループでは、タイグエン省がトンキン全体を見通した意見を述べている。トンキンデルタでの法律の施行は賛成だが、各軍区、ソンラー省、ラオカイ省、イエンバイ省、トゥエンクアン省、タイグエン省、バクカン省、ランソン省、ホアビン省の各省、およびマン族（ザオ族のこと）ターイ族、ムオン族、メオ族（ザオ族のこと）といった少数民族居住地域では、まだこの法律の利点を理解するにいたらない、つまり、山間部の省と少数民族の多い地域での度量衡統一は難しいとの認識を示している。

ハードン省とイエンバイ省はほぼ同様の意見で、計量器の管理や違法行為の摘発が十分に行える大都市からの施行を主張している。イエンバイ省は、計量器の検定と管理の問題も指摘している。バクカン省と中国と国境を接するモンカイ省は、発展レベルが（他の省と比較して）まだまだ低いことを強調した上で、特に中越間貿易、あるいは

は少数民族との交易が行われている地域では度量衡の統一は非常に難しいだろうと述べている。

ライチャウ省も同じく国境沿いの省であるが、外国や少数民族との交易には触れず、省都ライチャウやディエンビエンフーといった重要な交易が行われている都市でまず法律を施行するべきだとしている。地方においては、先祖代々続く旧来の度量衡制度を廃棄させることは、想像を絶するほど困難なことであると付け加えている。

要約すると、国境沿いのほとんど全ての省と、少数民族が多く居住している省では1911年と同様のデクレの施行や度量衡の統一に関して消極的な態度を見せている。しかし、ソンラー省だけは、国境にも接しておりタイ族という少数民族がいるにもかかわらず、度量衡の統一はソンラー省における商業活動に大きな利益をもたらすとして積極的に実現させたい意向を示している。これは、度量衡の統一が容易であると楽観視しているわけではなく、それ以上に統一の必要性を強く認識していたことの現われと捉えることが出来るだろう。実際「タイ族、隣国のラオス人、ベトナム人との商業活動において、かなり以前から正確な基準を望んでいた」と報告があり、それだけ複雑、不便な現状があったことが推測される。

C.デクレを施行するまでの時間

1911年と同様のデクレを施行する場合、すぐにでも施行できるとした省は賛成グループ18省のなかで約6割の11省（ハノイ、ハイフォン、フンイエン、キエンアン、ランソン、ラオカイ、ニンビン、ソンラー、ソントイ、ヴィンイエン、カオバン）である。

残りの8省のうち7省（バックザン、ハーナム、ナムディン、フックイエン、トゥエンクアン、ハーザン、ランソン）は、公式度量衡計量器を準備するのに時間が必要であり、このデクレはすぐには実現不可能であるとしている。具体的には、トゥエンクアン省は6ヶ月、ハーザン省は6ヶ月から1年、ランソン省は5年から10年は必要と述べている。クアンイエン省はこの件について特に言及していない。

D.伝統的度量衡制度の使用状況

賛成グループ内からの報告をまず整理する。

バックザン省：ホップ・ボー(hộp bơ)や鉢(bát)といった伝統的な計量器は規模の小さい商業活動のなかでももはや使われていない。

カオバン省：国境付近で中国人と接触のあるベトナム人は、それぞれ大きく異なる度量衡制度を維持している。

ランソン省：ホップ・ボーは、豆や穀類を図るのに非常に普及しており、特に容積単位は統一するのに5年から10年の時間がかかることが予想される。

ナムディン省：トンキンではいまだ合法的な度量衡制度が確立されておらず、また計量検定を行うような組織もない。一般的には、売買の際、売り手も買い手もそれぞれ

自分の計量器を持ち（特に容積と重量）、お互いの計量器で何度も量りなおして値段交渉をする。

ニンビン省：容積単位と重量単位に関しては、まだフランスの計量器を用いていない。

フックイエン省：ホップ・ボー、国営の工場で生産されたビンが多く使われる。

反対グループに属している省の中でこの問題に触れているのは以下の2省である。

タイビン省：法律文書の中でも、ベトナム独自の度量衡制度が用いられている

ハードン省：ダウ、バットといった単位は昔から（今に至るまで）使用されている。

バックザン省だけは旧来の制度はすでに用いられていないと回答しているが、これは度量衡統一に対する賛成の意とその実効可能性の高いことを強調するためであろう。賛成グループに属している省でも、その多くが依然として旧来の度量衡制度が用いられていることを指摘しており、特に容積と重量の計量器や単位は、ベトナム固有の制度が一般的に使用されていたことがうかがえる。

E. その他

①教育

教育に関しては、賛成グループではナムディン省、反対グループではハードン省のそれぞれ1省が言及している。まず教育レベルの問題に関して、ハードン省が以下のように指摘している。トンキンの教育レベルはコーチシナのそれに達していない、なぜならトンキンはコーチシナより30年近くフランス式教育の導入が遅れたからである。トンキンの地方では識字率が低く、このことはフランス式度量衡制度の実現に際して大きな障害となるだろう、と。

次に、メートル法をどのように広く周知徹底させるかについて、ナムディン省は学校、政府機関でまずメートル法を使うようにし、そこから全ての人民にメートル法を広めるべきだと述べている。ハードン省もほぼ同じ意見であるが、加えて各企業、商社、公共事業でも率先してメートル法を取り入れていく必要を訴え、なかでも学校での使用・普及が最も重要だとしている。

②新度量衡制度に対する反対運動

多くの省は、トンキンにメートル法というフランス式の制度の導入によって抗仏運動が起こる可能性について言及していない。つまり、度量衡の統一、それに伴う伝統的度量衡制度の廃棄が抗仏運動の火種になるとは考えていないようである。フランスに対する反応について言及しているのはカオバン省とニンビン省（いずれも賛成グループ）、フート省（反対グループ）の3省のみである。それもカオバン省とニンビン省は特に大きな反対運動にはつながらないだろうという見解を示しており、フート省は「抗仏運動」という言葉は用いず、ただ民衆に植民地統治に対する新たな不平、不満の原因になるだろうと言うにとどめている。

③1911年公布のデクレの中の各条項について

第7条について、モンカイ省、タイグエン省、ハイズオン省が反対の意見を示している。第7条の具体的な内容は、各市場における市場出店許可を得ている者は、新しい度量衡制度で用いられる法定計量器一式を自らの経費で整えなければならない、購入が遅れた場合は1ヶ月ごとに、あるいは不法な計量器を使用した場合その計量器ごとに、100ピアストルの罰金が科せられる、というものであった。モンカイ省はこの件に関して、小規模の生産者は利潤も少なく、計量器を一式自己負担で購入させることは非常利な要求であると反対している。タイグエン省は、1910年10月23日の法令で、各市場における出店許可制度は廃止されたとし、第7条はトンキンの実情に合わないことを示唆している。ハードン省は特に「第7条に関して」と明言していないが、フランス式の度量衡計量器は非常に高価であり、大衆は自己負担で所有することは不可能であろうと述べている。

第2条から第4条、および第6条については、ナムディン省のみ意見を示している。これらの条項では、計量器の製造方法が仔細に規定されているが、こうした特別の規格を製造できる場所にはないと。

以上、各論点に分けて各省知事からの回答をまとめてきたが、上記以外にも興味深い指摘がいくつか見られる。なかでもハイズオン省は、単位名の記入方法について言及しており、これは筆者が序で指摘したベトナム度量衡制度史研究の諸問題にも通じるところがある。ハイズオン省は、単位名を記入する際、たとえばメートルはトゥオック・タイ（西洋尺 *thước tây*）、キログラムはカン・タイ（西洋斤 *cân tây*）と全てベトナム語に訳しているが、多くの場合「西洋」を現す「タイ」を付け忘れたり、書かないことも多く、ベトナム旧来のトゥオックやカンと混同して大きな混乱を引き起こしている。ゆえに、今後は単位名はベトナム語に訳さず、フランス語の音をそのまま用いてキログラムはキロ(kilo)、メートルはメツ(met)、リットルはリッ(lit)と記入するのがよいと述べている。

バックニン省はベトナムの農民は新しい度量衡制度を必要としていないと明言し、フート省はカンボジアにおいても1911年のデクレが公布されているが、その効果について疑問視している。

1927年の通達に対する回答の分析を通じて明らかになった点を、改めて整理したい。まず、度・量・衡の各制度に関しては、特に容積と重量単位が依然として旧来の制度を用いており、統一には程遠い状況であったことがわかる。容積単位にいたっては、コンデンスミルク缶やビンなど、日常生活の中で用いられている容器が計量器として広く使われていた様子も見て取れる。

また、計量検定に関する条項に対しても、多くの消極的意見が寄せられている。計量検定を行う組織がないと報告している省があることから、北部ベトナムでは計量器の不正を取り締まる制度や伝統がなかったこともうかがえる。規定通りの計量器を製造できないという意見からは、植民地期のみならず、それ以前も規格どおりの計量

器の製造・使用の歴史が北部ベトナムに根付いていなかったということができよう。ナムディン省からの報告のように、売買にはそれぞれが自分の計量器を持参し、量りあいながら値段交渉を行う、という方法が長くとられていたと考えられる。

地域性に目を向けると、比較的農業が盛んであったり、交通網が確立されていた紅河デルタ周辺の省でも、度量衡の統一に反対の意見が見られたのは興味深い点である。バックニン省のように「農民は新しい度量衡制度を必要としていない」と言い切っている知事もいる。以上から、1927年において北部ベトナムの度量衡制度がいかに多様であり、依然として伝統的制度が根強く残っていたかをうかがい知ることができるだろう。

第6節 度量衡統一に対する姿勢・変化とその背景—各省の回答から—

第3章では、度量衡統一に関する各省の賛否と理由を、トンキン理事長官が発信した度量衡統一に関する通達（1898、1910、1921、1927年）に着目し、賛否とその理由の時系列変化や、報告内容から読み取れる各地における度量衡の実態、地域性を総合的に論じることが目的であった。

まず、メートル法の導入に対しては、1898年の時点では反対意見が多数を占めていたが、1927年ではトンキン内の約7割が賛成の姿勢を見せ、一見導入に対する考え方、意見が時代の変遷と共に逆転したかのようにみえる。

しかし一方で、議論されている内容は1898年から1927年の約30年間を通じて大きな変化はみられず、またメートル法が実際に使用されていたのは外国との取引や鉄道などに限られていた状況も変わっていない。

つまり、メートル法導入に対する賛否は、実情に即して各省知事の意見が肯定的方向へ転換していったというより、あくまで希望的観測、総督府やトンキン理事長官の意向に対する表面上の賛成姿勢を示すためのものであったと考えることもできる。

しかし、1898年で多くの省が危惧していたメートル法の導入が引き起こすであろう混乱、反対運動に対しては、1927年の時点で心配されなくなっている。多くの省で言及されなくなっただけでなく、言及している省も大きな反乱、反対運動にはつながらないと予測している。それは、統治の状況が安定してきた、地方行政も落ち着きをみせてきたことを反映しているということもできよう。

各省知事によって挙げられる論点も、年を追うにつれてより具体的になり、内容も広がりを見せていたことも確認できた。これは各省における現地社会、文化への理解が深まっていった、また度量衡制度統一に対する興味、関心が高まっていった、つまり、度重なる度量衡に関する通達により、議論が深化していった過程を捉えられたといえる。

個別の論点からは、大きく5つの点が確認された。

第一に、メートル法が理解されていた、もしくは普及していた地域は、30年を通じて中国人、外国人との間の取引と、鉄道輸送においてであった。日常生活における売買では、以前と変わらず慣習的度量衡が残されていたことがわかった。さらにそれは、ベトナム人にとって困惑するような状況ではなく、一人一人、売り手も買い手も自らの計量器を持ち、お互い計り合いをしながら値段交渉をしていたという、日常の様子も捉えることができた。

第二に、計量検定について多くの省は、その実施に対して難色を示しており、これは植民地期以前から計量検定の伝統がなかったことを示唆している。

第三に、軍区、山間部、少数民族地域では度量衡関連のアレテ内で制限的条項を加える、あるいは他地域とは区別した特別措置を望む声が多数みられた。つまり、こうした地域は民間レベルまでの権力、管理の浸透がみられず、統一的制度の導入や計量検定といった監督、管理体制を組織することがより困難であったといえる。

第四に、総督、および地方行政の公布する法令の拘束力については、1903年にトンキンでも適用されたアレテが実際実施されていないこと、度量衡関連の法令公布後も各地で模索が続けられていたことから、法令の実施は地方行政に委ねられていたといえることができる。

各行政府の権限の範囲は、序第4節第2項「統治体系」で提示しているが、実際の法令の現地への浸透度、実施状況や影響力の範囲に関して、実証的に検討されたものは少ない。度量衡関連法に関連して、本章はそうした問題関心に対しても、一つの事例として提示することができる。

第五に、植民地統治といえども、少なくとも度量衡制度の統一、メートル法導入に関しては、全面的、強制的、早期実現といった強硬姿勢を取るのではなく、あくまで現地の実状を重視し、現状に見合った形での段階的導入が求められていたこともみえてきた。フランス人の知事達が現地理解のために努力している姿、想像以上に現地の実態を把握していたことも浮き彫りにされた。これは、統治する側、される側の二元論で、フランスの圧政とそれを受け入れるしかなかったベトナム側、というこれまで語られてきたベトナムにおける歴史認識からは見えてこなかった一側面であるといえる。

第3章では、同時期同目的のために作成された体系的な行政文書を通じて、トンキン各省レベルでの検討を通じて当時の度量衡制度やメートル法導入に対する試論の過程を捉えられた。それに加えて、そこからトンキン各地における社会、文化、政治状況や、フランス地方行政の一端、統治のあり方の一側面についても垣間見ることができたといえる。

第4章 トンキン各省における度量衡運用の実態

フランス植民地期を通じて度量衡統一に対して発信された通達の概要については第3章第1節で整理した。本章では現状把握のために各省に指示された度量衡現地調査の通達と、その回答（1901年、1911年、1936年）について考察し、フランス植民地期を通じトンキン各省において用いられていた度量衡制度がいかなるものであったか、およびメートル法への移行の過程について検討する。

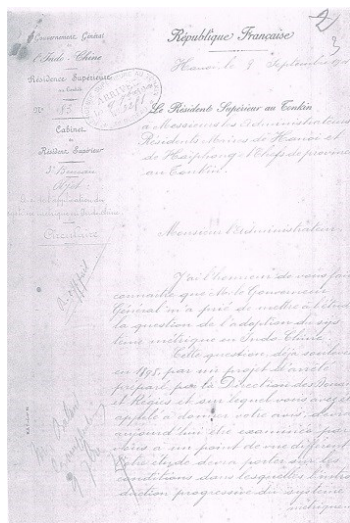
ここで、3つの通達とその調査報告の検討の方法について提示する。1936年の現地調査報告依頼では、調査結果を記入する雛形となる表も添付されており、この表を基本として調査報告を提出するよう求めている。そのため、各省がそれぞれ独自の調査報告ではなく、統一した形式に則って作成されており、3回の調査の中で各省相互間の比較がもっとも容易である。1901年と1911年の通達では、そうした定められた形式が提示されていないため、各省とも報告内容も言及されている度量衡、単位が様々に異なっている。そのため、これら3つの通達を同じ基盤で比較検討することはできないが、現地で使われている度量衡として報告されている単位を整理する際、少しでも客観的、効果的に比較を行うため、1936年の形式、表を1901年、1911年の調査報告でも利用し、作表した。

第1節 1901年の通達および現地調査報告

(1) 1901年の通達

1901年9月9日、トンキン理事長官からハノイ、ハイフォン市市長および各省知事に対して現地調査依頼の通達が出されている（写真4-1参照）。

写真4-1 1901年9月9日の通達（1枚目）



第3章で取り上げた通り、1898年税・関税局によって準備されたアレテ案に対しての意見はすでに各省から提出済みである（第3章第2節「1898年の通達およびその回答」参照）。それを受けて、この通達では1898年の通達とは異なる視点でメートル法導入について検討し、報告するよう求められている。

具体的には、メートル法の段階的導入についての意見と、現地で用いられている度量衡制度で十進法による単位系とその正確なメートル法換算値の報告を要求している。また、今回の通達では、軍区は対象外となっている。つまり、メ

メートル法と融合させ得る現地の一般的な度量衡制度を選定し、折衷案の制度を利用することでより早く普及・定着させる方法を模索していたといえる。

この通達は、1901年8月20日にインドシナ総督府からの要請を受けて発信されたものである。

(2) 各省からの現地調査報告

1901年の通達に対しては、22省が回答を提出している¹⁸⁶。長さ、面積、重量などの個別の度量衡単位に関する回答だけでなく、全体的考察を述べている省もいくつか見られる。ここでは、まずそうした意見を考察した後、個別単位への検討へ移る。

最初にメートル法が普及している地域については、イエンバイ省とハノイ市からの回答に言及が見られる。イエンバイ省は、中国人の商人和彼らに雇われているベトナム人は、フランスとの取引にすでに慣れている、米ともみの取引にはベトナム人も100kg、ピクル(60kg)で計算する、と報告しており、貿易や数十キロ単位で売買する大口取引ではメートル法が普及していることが再確認できる。また、ハノイ市では、市場でも現地の度量衡と共にメートル法が普及していると報告が見られるが、一方でこの2つの制度はいかなる対応も持たず、長さと面積以外の単位系は十進法ではないとも答えている。つまり、ベトナムの度量衡制度とメートル法が体系的に関連した制度が普及しているのではなく、それぞれ必要な度量衡単位を個別的に使っているに留まっているといえる。

ハノイ市からこうした報告がみられたことは、おそらく市内でも多くのヨーロッパ人が現地の市場で日常の買い物をする関係で、市場の商人達も彼らを相手にするために、メートル法を取り入れていったと考えられる。ベトナム人の客に対しては、以前と変わらず慣習の度量衡を使い続けていたのだろう。

次に、現地で使用されている度量衡単位が非常に多様であり、省、場所、人によって異なると報告している省が3省ある。トゥエンクアン省では、村々で度量衡が異なる、タイグエン省では、省ごとに異なるのに加えて、裕福な商人(特に中国人)によっても違うものを使うと答えている。クアンイエン省は、現地調査報告で報告した度量衡制度と他のものも実際には使われており、決められた計量器もない、とした上で、通常長さは両手を広げた長さ、面積は「歩」で、米はかごを用いたりひとつかみで計量する、と旧来の人体を用いた慣習的計量方法がまだ根強く使われていることを報告し

¹⁸⁶ 1901年の省編成。19省：バックザン、バックカン、バックニン、ハーナム※、ハノイ、ハイズオン、ホアビン、フンホア、フンイエン、ナムディン、ニンビン、フーリエン、クアンイエン、ソントイ、タイビン、タイグエン、ヴァンヴァー、イエンバイ。4軍区：ランソン※、カオバン※、ハーザン※、ラオカイ※。2都市：ハノイ、ハイフォン。(※：回答なし)(序 表序―1「トンキンの省編成」参照)。1901年に省として記載されていないフーリー、ハードン、トゥエンクアンも、1901年の通達に対する回答を提出している。

ている。また、クアンイエン省の高原地帯では、面積の計り方はマウヤサオではなく、その土地にどれぐらいの種が必要か、を基準にして考えられる、とも回答している。少数民族地域や山間部で用いられているこうした面積のとらえ方が、クアンイエン省でも確認されたことになる。

ナムディン省からは、度量衡の統一は効果的な監視・監督の実行を可能にするという意味では関心がある、と報告している。これは度量衡統一による経済社会の利益よりも、地方行政の管理体制を整えるきっかけとなることの方を期待していたといえる。

最後に、現地の多様な制度によって混乱している事例を紹介しているのがニンビン省である。フランスからやってきた工事の現場監督、機械操縦士、測量技師、運転手達は、現地の度量衡を用いた設計図などに非常に混乱していると報告している。

以下、単位系ごとに現地で使用されている単位について整理する。

①長さの単位

現地で使われている単位として報告された長さの単位系は、表 4—1 の通りである。

表 4—1 各省において用いられている長さの単位 (1901 年)

単位名	相当長さ	換算値 (メートル)	使用している省
グー (Ngũ)	5 トゥオック	2	バックザン、フンホア、ニンビン*2、クアンイエン、ヴィンイエン*3
チュオン (trọng)	10 トゥオック	4	バックザン、カウドー(4.2m)、ハーナム、フンホア、フンイエン、ニンビン*2、クアンイエン、ヴィンイエン*3
リー (Ly)	180 チュオン	720	カウドー(150チュオン=630m)、フンイエン(150チュオン=600m)
ダム (Dăm)	1000 チュオン	4000	なし
トゥオック (Thuốc*1)	10 タック	0.4	バックザン、バックカン、カウドー(0.42m)、フンホア、フンイエン、タイグエン、クアンイエン、イエンバイ*4、ヴィンイエン*3
タック (Tắc)	1/10 トゥオック	0.04	バックザン、バックカン、カウドー(0.042m)、フンホア、フンイエン、クアンイエン、イエンバイ、ヴィンイエン*3
ファン (Phân)	1/100 トゥオック	0.004	バックザン、バックカン、カウドー(0.0042m)、フンホア、フンイエン、クアンイエン、イエンバイ、ヴィンイエン*3
リー (Ly)	1/1000 トゥオック	0.0004	バックカン、フンホア、ヴィンイエン*3

*1: トゥオック (0.4メートル) は 1897 年 7 月 2 日に定められた法定単位

*2: 木材用のトゥオック、仕立て屋のトゥオック、稲田用のトゥオックの 3 種類が報告されており、それぞれ
トゥオック=0.42メートル、0.41メートル(時に0.62メートル)、0.4メートルとその分量・倍量単位が
10進法で展開している。

*3: 長さのトゥオックは 3 種類あるが、最も使われているのはトゥオック・モックであるとし、その値が報告されている。

*4: イエンバイでは、中国人のトゥオックは 9 タックであると報告されている。

長さの単位に関しては、報告している省の大半が 1897 年に定められた法定単位 トゥオック=0.4 メートルを基本とし、十進法で展開するリー、タック、チュオンを挙げている。

また、トゥオックについてその長さを嘉隆通宝で示している省がある。タイグエンでは、1897 年 7 月 2 日、フランスによってトゥオックが 0.4 メートルと規定される前は、嘉隆通宝 22 枚分の直径分の長さであったとし、イエンバイ省では嘉隆通宝 18 枚分の長さ (0.434 メートル) で、現地行政で使われていると報告されている。このトゥオックと嘉隆通宝の関係は、補論でも扱っているように文献資料によって該当する枚数が様々であるが、1901 年の調査でも異なる枚数で用いられていた事例が確認できた。

バックザン省は、チュオンについて、10 チュオン=ザイ(giây)という単位名も報告しており、このザイはフランス語で弦、ロープを表わす corde があてられていることから、もともとザイ(dây)であり、発音が同じであるためザイ(giây)と表記された可能性もある。

次に、3 種類のトゥオックが報告されている省が 4 省ある（この 3 種類のトゥオックについては、補論第 2 節(1)「長さの単位」も参照されたい）。そのうちフリーエン省は、表 4—2 のように、その倍量単位、分量単位についても報告が見られる。

表 4—2 現地で使われている 3 種類のトゥオック（1901 年フリーエン省の事例）

	トゥオック・モック (Thuốc mộc)	トゥオック・ドー・ズオン (Thuốc đo ruộng)	トゥオック・ヴァイ (Thuốc vải)
倍量単位	— —	チュオン(Trượng) 10 トゥオック グー(Ngũ) 5 トゥオック	チャウ(Châu) 40 トゥオック ドゥオン(Đuống) 20 トゥオック
基本単位	トゥオック・モック=0.42m	トゥオック・ドー・ズオン=0.423m	トゥオック・ヴァイ=0.413m
分量単位	タット (Tất) 1/10 トゥオック ファン (Phân) 1/10 タック リー (Ly) 1/10 ファン	タット (Tất) 1/10 トゥオック ファン (Phân) 1/10 タック リー (Ly) 1/10 ファン	タット (Tất) 1/10 トゥオック ファン (Phân) 1/10 タック リー (Ly) 1/10 ファン

しかし、3 種類のトゥオックを報告している各省で、必ずしも表 4—2 と一致しない事例も多い。それぞれのトゥオックのメートル換算値を以下に示す。

トゥオック・モック：0.43m（ソントイ省）、0.42m（ニンビン省）0.425m（ハノイ市）
 トゥオック・ズオン：0.4m（ソントイ省）、0.4m（ニンビン省）、0.47m（ハノイ市）
 トゥオック・ヴァイ：0.65m（ソントイ省）、0.41m か 0.62m（ニンビン省）、0.644m（ハノイ市）

写真 4—1



写真 4—2



写真 4—1、4—2

現在使われているトゥオック・ヴァイ。襟ぐり、袖ぐりのために片側が弓形になっている。現在のトゥオック・ヴァイは 50 センチメートル。2012 年 8 月 4 日ハノイ市南部ハードン区 (quận Hà Đông) ヴァンフック村 (làng Vạn Phúc) (繊維業専門村) にて筆者撮影。

ニンビン省では、ベトナム語の名称は挙げていないが、それぞれ木材用、稲田用、仕立て屋用のトゥオックとして上記の数値を挙げている。ハノイ市では、トゥオック・モックの倍量単位について、トゥオック・ドー・ズオンと同様にグーとチュオンがあるが、トゥオック・ヴァイには分量単位としてのリーはないとしている。さらに、ハノイ市は市場やハノイ市の現地卸売商のところで最もよく使われているのはトゥオック・クアン・チェウ(thuoc quan chieu)であり、略称として、ただ単にトゥオックとも呼ばれると、別のトゥオックの報告が見られる。このトゥオック・クアン・チェウは亜鉛銭 17 個分の長さで、0.424 メートル、十進法でタック、ファン、リーと続く。

また、同じくハノイ市から仕立て屋に関して、必要な布の量をヴオン(vuong)で量る例も報告されている。ヴオンで量る場合は、それ自身の布を折りたたんで量る、とある。

ハイフォン市では、「メートル」は全く未知であり、慎重に導入する必要があると述べている。貿易港を有し、メートル法がすでに普及しているとの報告が何度も見られるハイフォン市でも、主要な輸出品である米、もみの計量以外の長さの単位はほとんど知られていなかったことになる。これはメートル法の各単位、単位系の普及の時差を考える際に注目すべき事例である。

フンイエン省からは、毎年印刷されるアンナン公式カレンダーの表紙の長さは、公式トゥオックの半分である、との報告があった。「アンナン公式カレンダー」とは、恐らく阮朝がベトナム人高級官吏に支給する暦のようなものがあり、その表紙の長さが 1897 年に規定された公式トゥオック 0.4 メートルの半分であるとすれば、20 センチメートルであったことになる。これが、ベトナム人高級官吏が長さの尺度の目安にできるよう意図的に設計されたものか、偶然 20 センチメートルであったかは不明であるが、フランス人知事の観察力、あるいはベトナム人高級官吏との近い関係性がうかがえる。

最後に、ホアビン省からの報告で、1897 年 7 月 2 日に決められた 1 トゥオック 0.4 メートルは、実行されていないとしている。ホアビン省は第 3 章でも述べたように、ムオン族の省と呼ばれるほど、少数民族であるムオン族の割合が高い地域であり、1901 年の現地調査でも、少数民族の度量衡と思われるアンパン(empan)とクデ(coudée)という単位（共にフランス語に訳された名称）が報告されている。アンパンは親指と小指を張ったときの長さであり、20 人の現地人に調査したところ、平均 20 センチメートルであったことも報告している。クデは一般的にフランス語で肘から中指までの長さであるが、具体的なメートル換算値は示されていない。面積の測量に際しては、アンパンを使った竹の棒を使う、とある。

②面積単位

面積単位に関して報告している省は、わずか 9 省にとどまる。これはニンビン省が指摘しているように、常に使われているのは容積、重量単位であること、またハノイ

市が報告しているように、面積の測量で使われるトゥオック・ドー・ズオンという長さの単位、尺はベトナム人高級官吏しか使わないこと、つまり、日常生活の中で面積の単位は使われる頻度が最も低いため、調査の対象としなかった省が多数あったことが考えられる。9省のうち、6省から提出された報告書を整理したものが、表4—3である。

表 4—3 現地で使われている面積単位（1901 年）

単位名	相当面積	換算値 (m ²)	使用している省
マウ(Mẫu)*1	10 サオ	3600	ハノイ*2、フンホア(6000m ²)、フーリエン、タイグエン*2
サオ(Sào)	1/10 マウ	360	イエンバイ(50アール)、ヴィンイエン ハノイ*2、フンホア(600m ²)、フーリエン、イエンバイ(5アール)
トゥオック(Thước)	1/15 サオ	24	ハノイ*2、フンホア(0.4m ²)、フーリエン、イエンバイ(33m ²)、ヴィンイエン
タック(Tắc)	1/10 トゥオック	2.4	フーリエン、イエンバイ(3.33m ²)、ヴィンイエン
ファン(Phân)	1/10 タック	0.24	フーリエン、ヴィンイエン
リー(Ly)	1/10 ファン	0.024	フーリエン、ヴィンイエン

*1: マウ(3600m²)は1897年7月2日に定められた法定単位

*2: メートル換算値不明

6省すべてマウを報告しており、マウが面積単位として最も一般的なものであったことがわかるが、その換算値は法定単位の 3600 平方メートルと異なる場合もいくつか見られる。それ以下の小さい単位になると、使われている省の数は徐々に減ってくるが、これはマウとサオがより多く使用されるため、使用頻度の低い単位は報告書に挙げていない可能性もある。サオ以下に続く単位も、法定のマウおよびサオの面積が反映されており、ひとつの制度として確立していたといえる。

また、9省のうち4省は、表4—3とは異なる単位系を報告している(表4—4 参照)。

表 4—4 異なる面積単位系を示した4省とその単位系

カウドー			フンイエン		
マウ(Mẫu)	10サオ	3969m ²	マウ(Mẫu)	150平方トゥオック	3600m ²
サオ(Sào)	90カーン	396.9m ²	サオ(Sào)	1/10マウ	360m ²
カーン(Khẩn)	1平方グー	4.41m ²	ミエン(Miêng)		36m ²
グー(Ngũ)	5トゥオック	2.1メートル	カーン(Khẩn)		3.6m ²
			タン(Thang)		0.936メートル
クアンイエン			ヴィンイエン		
マウ(Mẫu)		3600m ²	マウ(Mẫu)	10サオ	3600m ²
サオ(Sào)		360m ²	サオ(Sào)		360m ²
ガム(Ngâm)		120m ²			
ミエン(Miêng)		40m ²	ミエン(Miêng)	3平方グー	36m ²
フエット(Huyêt)		4m ²	グー(Ngũ)	5平方トゥオック	2m ²
トゥオック(Thước)		0.16m ²	グー(Nghê)	1平方トゥオック	0.4m ²

ヴィンイエ省は、表 4—3、表 4—4 両方の単位系を報告しているが、表 4—3 は主に農民が使う単位系であり、表 4—4 はベトナム人高級官吏によって使用されるとして、その性格の違いを示している。これらのことから、面積単位系は民間と行政で異なる単位系が使われていた地域もあるが、その両方にマウとサオは共通して用いられている。ヴィンイエ省の報告に依拠すると、民間より行政で使われていた単位系の方が、省によって展開方式も用いられる単位名も様々に異なっていたことになる。

③重量単位

現地で使われている重量単位は、基本的には 1936 年で報告された表に見られる単位が主であるが、その相当量は非常に多岐にわたっている（表 4—5 参照）。

表 4—5 現地で使われている重量単位（1901 年）

単位名	相当量	換算値 (kg,g)	使用している省
イエ（Yến）	10 カン	6 kg	11省
タ（Ta）	10 イエ	60 kg	14省
タン（Tân）	10 タ	600 kg	なし
カン（Cân）	16 ラン	600 g	12省
ラン（Lạng）	1/16 カン	37.50g	10省
ドン・カン（Đồng cân）	1/10 ラン	3.75g	10省
ファン（phân）	1/10 ドン・カン	0.375g	9省
リー（Ly）	1/10 ファン	0.0375g	ホアビン(0.03775g)、ヴィンイエ(0.0398g)

例外

1. イエ、タ、カンについて

バックカン、ホアビン、フンイエ、ニンビン：イエ=6.4kg、タ=64kg、カン=640g

バックザン：タ=62.48kg

ソントイ、ヴィンイエ：イエ=6.36kg、タ=63.6kg、カン=636g

カウドー：イエ=6.56kg、タ=65.6kg、カン=656g

タイビン：タ=42両鉛貫銭

*ハノイはイエ、タ、ともに上記の表と等しいが、カンのみ17ラン、704gとなっている。

*イエパイは、タ=45貫銭(67.95kg)とトンキンデルタで用いられている40貫銭(60.4kg)

の2種類のタと、その倍量・分量単位を報告している。

2. ラン、ドン・カン、ファン、リーについて

バックカン(ランではなくルオンlượng)、ハノイ、ホアビン：ラン=37.75g、以下十進法で展開。

ニンビン：ラン=37.7g、以下十進法で展開。

カウドー：ラン=41g、以下十進法で展開。

ヴィンイエ：ドン・カン=3.98g以下十進法で展開。

*フンイエはランも6.04gと、イエ、タ、カンから続いて十進法で展開した数値を示している。

表 4—5 を見ると、使われている単位名とその展開方式は多くの省で共通しているが、それぞれに対応している換算値は各省によって異なっていたことがわかる。これはタが 60kg とアレテによって規定される 1903 年よりも前の状況であるため、形式的に法定

単位に合わせた形で報告しようとする意識が全く働かないことも要因の一つと考えられる。また、各地で用いられているタ、カンを単純にメートル法のはかりで計量し直し、それを報告したことにも起因すると思われる。つまり、最も現地の実状を反映した調査であったと考えられる。さらに、フンイエーン省は、タは 60.4kg と報告されているが、「実際私が量ると 63kg であった」と知事が書き添えており、一般的に周知されている（ベトナム人高級官吏が報告した）相当量も、実際計量してみると異なる値を示すことが頻繁であった、あるいは実際はその時々によって異なっていた、とも考えられる。

表のなかに見られない単位についても報告が見られる。

ネン(nén)は、バックザン省では 360 グラム、フンイエーン省では約 6.04 グラムであるとされ、その相当量は地域によって大きく開きがある。

ビン(bình)という単位も、バックザン省のみ報告しているが、相当量は 31.24kg でタの半量となっている。

バックカン省は、フウオン(phương)：約 28kg、ホック(hộc)：約 56kg と、旧制度の単位の報告もある。

単位だけでなく、計量器としてののはかりについて報告している省も見られる。3 種類のはかりを報告しているのは、バックザン省、ホアビン省、ハノイ市である。バックザン省は、①大ばかり：米、もみ、塩用、②カン・ティエウ(cân tiêu)、カン・チュン・ビン(cân trung bình)：商人によって使い分ける、③カン・ティエウ・リー(cân tiêu ly)：金・銀、高価なものの用の 3 種類を挙げ、フランス式の制度や台ばかり、竿ばかりは中国人によって知られ、普及しているが、中国人のところで使われている計量器は細工されており、正確な計量ができないと報告している。

ホアビン省は、①カン・タ(cân tạ)：ピクルで量る、96.640kg まで計測可能、②カン・チュン・ビン：2.189kg まで計測可能、③カン・ティエウ・リー：硬貨、アヘン、金、銀用、207.625 グラムまで計測可能、の 3 種類を報告している。計量器は竿ばかりであるが、それぞれ非常に異なるとも指摘している。

ハノイ市は、カン・タ：366.66kg まで計測可能（1 目盛り 5.5 イエーン）、カン・チュン・ビン：20 ランまで（20 目盛り、1 目盛り 41.15 グラム）を挙げているが、3 つめはカン・ティエウ・リーではなくカン・イエーン(cân yển)：62 ランまで、というはかりを報告している。計量器に関して、市場では区別なくフランスのはかりやベトナムの竿ばかりが使われ、これは 500 グラムのリーブルで量っても、0.704kg のカンで量っても、現地の人にはどんな困難も感じないという根拠となる、と指摘している。

次に、2 種類のはかりを報告しているのは 2 省ある。トゥエンクアン省はカン・チュン・ビン：45 貫銭、トゥ・ナーはかり(balance Tư Nã)：42.5 貫銭と、重量のあるものを計量するはかりが紹介されており、これらは住民と山岳地方では持っていないとして

いる。つまり、日常的な売買の一般的な量には使われない、ということであろう。これら2つのほかりは、中国にその起源を求められると報告されている。

フンイエ恩省も、カン・タとカン・ティエウ・リーを報告している。

最後に、「キログラム」の普及状況について、ハイフォン市が大多数の現地商人と中国人の店では使っていると述べている。

④容積単位

容積単位については、各省で使われている単位が、同一単位名であってもその相当量が多様であり、かえって理解しにくくなる恐れがあるため、表に示すことは避ける。1936年で報告された容積単位の表(表4-15参照)では、タン(thang)、トゥン(thùng)、トゥン(thung)、フウオン(phuong)、ホック(hộc)、ダウ(đầu)、バット(bát)の8種類の単位が記載されているが、今回の調査ではフオンとレーについて報告している省はなかった。また、ハノイ市が唯一トゥン(容量22.5リットルの竹の編みかご)について報告しているが、声調・発音記号がついていないためトゥン(thùng)とトゥン(thung)のどちらか判別ができない。「竹の編みかご」という説明から考えて、トゥン(thúng)の可能性も高い。

タンについては、クアンイエ恩省のみ報告しており、相当量は1/26ホック=32.76平方センチメートルであった。トゥン(thùng)についてはヴィンイエ恩省が米の計量に使い、高さ50センチメートル、直径0.4メートルだとしている。また、フンイエ恩省はトゥン(thùng)をパニエ(panier:かご)と訳し、相当量は20kg強だとしている(パニエ、トゥン、竹かごについては次ページ参照)。

ホックは、クアンイエ恩省とバックザン省は税を現物納していた時代のものだとしながらも報告している。フンホア省は、ヴオン(vuông)=1/2ホック、ホック=10ダウとしながらも、そのダウの容積は極端に多様であるとし、実際的ではない単位系を挙げている。

フンイエ恩省は、ホックを用いた単位系として、ヴオン(vuôn)=1/2ホック、バット・クアン・ドン(官銅鉢)=1/39ホック、カップ=10バット=1/195ヴオン=1/390ホック=ひとつかみ、としているが、現物納が廃止されて以降使われていないとしている。このほかに、フンイエ恩省はトゥオック(thuộc)=1/10カップ、サオ(sào)=1/10トゥオック、トアット(tóat)=1/10サオも報告しているが、これらは理論上の単位にすぎないと述べている。

クアンイエ恩省も、カップ(cáp)が基本と考えられる以下の単位系について報告している。

カップ：1/250ホック、あるいは1/390ホック、トゥオック：1/10カップ、サオ：1/100カップ、トアット(tóat)：1/1000カップ、米用：フウオン(phuong)：300カップ、ウィエン(uyên)：10カップ。

しかし、この単位系も基本となるカップが2種類あること、またそれぞれの関連付けが、第1章および補論で検討した容積単位の単位系と比較しても一般的ではなく、フンイエン省で理論上の単位に過ぎないとされているトゥオック以下の単位も並んでおり、あまり実際的ではないと考えられる。

ハノイ市もホックを用いた以下の単位系を示すと同時に、こうした十進法のような一貫性もなく、メートル法と対応させた単位系は形成できないと考察している。

10/タン=13/フオン=26/ホック=2/フウオン

カウドー省もトンキンには2つの系統があるとした上で、①公式（現物納用）つまり物納時代のもの、②商業用、2系統の単位系を以下のように報告している。

①現物納用公式単位系

フウオン（パニエ、panier）21-22 リットル

ホック=2 フウオン

ダウ=1/5 フウオン

タン(thăng)=1/10 ダウ

トゥオック(thước)=1/10 タン

カップ=1/10 トゥオック=一握り

②商業用単位系

小ズオック(giước)=2 センチリットル

ズオック=10 センチリットル

トゥン(thùng)=22.5 リットル（トンキン北部ではこのトゥンはノイと呼ばれる）。

ノイについては、バックザン省とヴィンイエエン省も報告しており、バックザン省ではもみ用では、ノイ=22ダウ=33リットル、米用ではノイ=11ダウ=16リットルであった。このもみ用のノイは、1マウの米田に植え付ける種子を計量するために使われるとされる。ヴィンイエエン省では、ノイは竹かごであり、容積は25-30リットルとしている。

竹のかごに関連して、フランス語のパニエに訳されているものもと、ノイ、トゥン(thùng)の関係について、1901年の事例の中で考えてみたい。ニンビン省では、パニエという単位は、トゥン・ガオ(thung gao)であり、25-30ダウと報告している。声調・発音記号がついていないが、このトゥンは(thùng)であり、かごいっぱい（ガオはベトナム語で米の意味）をフランス語でパニエと訳していたことが考えられる。また、フンイエエン省でも、トゥン(thùng)=パニエ=20kg強、2パニエ=1 シャージ(charge)、3パニエ=1 ピクルとその関係を示している。バックザン省も、2ノイのもみは通常1シャージ=ガイン(gánh)と呼ばれるとあり、つまりパニエとノイ、トゥン(thùng)、ガインは同一の単位を指していることになる。一方で、前述の通りカウドー省ではフウオンをパニエと訳している事例も見られ、さらに容積単位であるトゥン(thùng)と竹かごのトゥン(thúng)は外国人からすると混同する可能性も高い、つまり、これらの thung、

thúng、thùng と、 nôi、 panier、 phương は誤訳、あるいは誤記されていることも少なくなく、これも対応する換算値や展開方式が多様になっている原因の一つと考えられる。これは通達に関連した報告だけでなく、一般の文献史料中の事例にも同じことが懸念される。

次に、最も報告した省が多かった（8 省）、ダウについてである。しかし、このダウは省によって非常に多様であり、具体的にリットルなどでの換算値を示さず、「多様」とのみ回答している省もあるほどである¹⁸⁷。また、2 番目に多くの省が報告した（5 省）バットについても、同様である。フンホア省がダウは「極端に多様」であると報告している。またフーリエン省が、「驚くことに穀物に関する容積は実際には存在しない」とした上で、「ダウの容量について述べることは不可能であり、一人一人がそれぞれ異なるものを持っている」、という記述からも明らかなように、ダウは単位として、あるいは計量器としての機能を持たされているものの、それは実際いかなる単位系とも連携されておらず、使い手によって限りなく異なっていたといえることができる。バットも、ダウと共に 2 バット=1 ダウなどと報告される単位、および計量器であるが、ダウの状況が示しているように、そのダウと連携しているバットも、限りなく多様であることが推測される¹⁸⁸。クアンイエン省も、バットの容量を 1kg あるいは 0.6kg と報告しながらも、実際は人によって異なると付け加えている。

その他、塩の容積単位として、ニンビン省がカー(ca)=375 グラム、トゥン(thung)=11.250 グラム、フランスピクル=45kg という単位を列挙している。バックザン省では、穀物を量る際に軍隊の飯盒や、バター缶なども使う、との報告が見られる。

最後に、液体用の容積単位についてまとめる。液体については、公式に決められたものはないとフンイエン省、フンホア省、フーリエン省が明言しているが、現地で実際に使われているものとして、様々な計量器、単位が報告されている。

液体の計量に用いられるズオックについては、ホックを用いた単位系に関連してカウドー省の事例は前述した通りであるが、他にハノイ市とヴィンイエン省、フンイエン省が報告している。ハノイ市はズオックは円筒のブリキ缶であり、ズオック=10 センチリットル、小ズオック(giuoc nho)=5 センチリットル、小ズオック(giuoc be)=2 セ

¹⁸⁷ ダウについて、多様と回答しているのはフーリエン省、フンホア省、ヴィンイエン省であり、その他の省が報告しているダウの容積は以下の通りである。ソントイ省：2 ボール(bol, フランス語で碗)分=約 0.7kg、3 ボール=約 1.005kg、バックザン省：10 バット、蜂蜜、カルダモンなどの高いものを量る際は 5 バット、ハノイ市：穀物用 1.25 リットル、液体用 1 リットル、ホアビン省：大ダウ=3 タス(tasse, フランス語でカップ)=915.15 グラム（米用の場合）、小ダウ=2 タス、ニンビン省：もみの場合小ダウ=468.75 グラム、中ダウ=585.937 グラム、大ダウ=703.125 グラム、米の場合小ダウ=585.937 グラム、中ダウ=732.421 グラム、大ダウ=878.960 グラム、カウドー省：公式=1/5 フウオン(phuong)、商業用=1.25 リットル。

¹⁸⁸ バットについて、多様と回答しているのはフンイエン省であり、その他の省が報告しているバットの容積は以下の通りである。バックザン省：換算値不明、クアンイエン省：1/39 ホック=21.84 立方センチメートル、トゥエンクアン省：1kg あるいは 0.6kg（実際は人による）、ニンビン省：もみ用=234.375 グラム、米用=292.968 グラム。

ンチリットルとしている。フンイエン省も同じくブリキ製としながら、その容積については記述がない。ヴィンイエン省は、ズオックは竹製の計量器で、単位系はまったく連続性がないと述べている。

ニンビン省では酒の計量用にガオ(gao)=0.111 リットル、フン(hung)=5 リットル、油用にズオック(duoc)=0.1 リットルが挙げられている。

フーリエン省ではオン(ông : ベトナム語で筒)、ガオ(gáo : ベトナム語でひしゃく)、ズオック(duộc)、フンホア省ではムオン(muông¹⁸⁹)=1/20 リットル、トゥエンクアン省ではフー(hủ)、ロ (lọ : ベトナム語で壺、ビン)、ナイ(nai)、チャイ(chai : ベトナム語でビン)、ズオック(duộc)が報告されており、日常生活の中で使われるさまざまなものが、そのまま計量器、単位としての機能があったことがわかる。1901 年の現地調査ではないが、第 3 章で検討した 1898 年の通達に対する回答で、バクカン省が省内で用いられている計量器のスケッチを添付している。このスケッチからも、容積に関しては生活の中で各個人個人によって所有されていた食器などが計量器として使われていたことがわかる(写真 4-2、写真 4-3 参照)。

写真 4-3

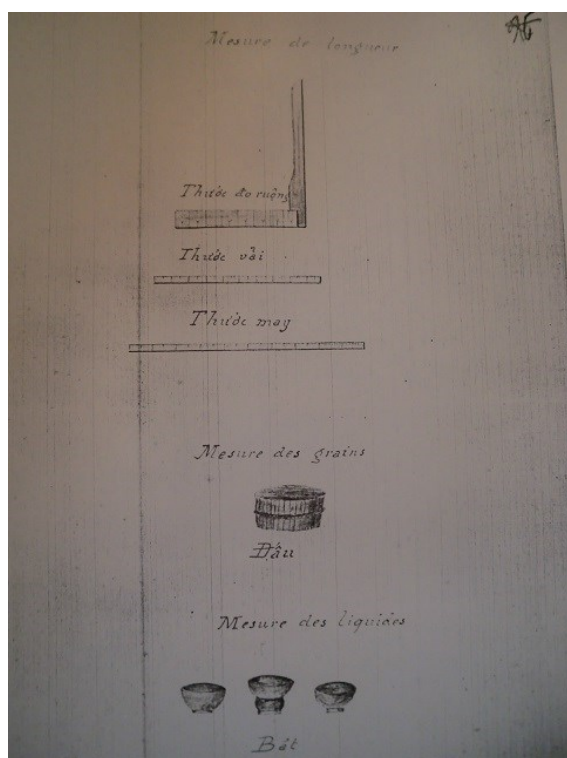


写真 4-4

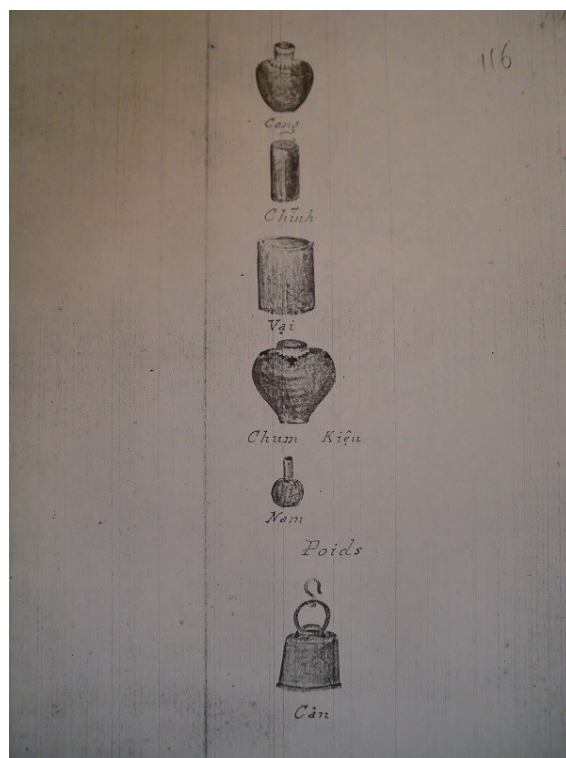


写真 4-3、4-4

1898 年の通達に対するバクカン省からの回答文書に添付されていたスケッチ。

¹⁸⁹ ムオン(muông)であればベトナム語でさじを意味する。声調記号の誤記の可能性もある。

これらの中で挙げられているズオック(duoc)は、発音が同じズオック(giuoc)と同一のものの可能性もある。

以上のように容積単位に関しては、その計量器も含めて非常に多種多様であり、各個人個人で異なっていたことも、珍しいことではなかったことが実証された。こうした状況に対して、実際市場での取引はどのように行われていたのか、言及している省がある。バックザン省では、商人と消費者は、それぞれ自分のもので量って値段を決める、としている。ハノイ市からは、各家庭各個人で量る、自分で消費するものだから、金額、品質、季節、その年の収穫量などの情報からおおよその見当はつけられる、売り手は売り手で自分の計量器で量って交渉する、と報告している。さらに 10 の市場で調査した結果、3 つ同じ対応をする計量器を見つけることはできなかった、との報告もある。つまり、自家消費の範疇では自分たちが使うのに不足ない量が購入できればよく、また金額についても、それぞれ情報を持っているため、計量器がお互いに異なっているにもかかわらず取引に困らなかった様子が伝わってくる。

(3) メートル法適用への具体的方策・意見

個別の単位への意見をまとめる前に、メートル法適用に対しての全体的な意見を整理する。

段階的に徐々に導入していく必要があるとしているのは、フーリエン省、ニンビン省、タイグエン省の 3 省であり、フーリエン省は数百年にわたって続いてきた慣習を急激に変えることは不可能だと理由も述べている。

段階的に導入することと関連して、地域を限定することを望んでいる省が 5 省、メートル法を使用する取引、業務などを限定する方法を示している省が 3 省、単位によって適用の時期に差をつけるのがよいとする意見が 1 省で見られる。

地域を限定することに関しては、ソントイ省とイエンバイ省がハイフォン市、ハノイ市、ナムディン市などの大都市から開始する方法を唱えている。ハイズオン省も、中心部（省都、行政の本拠地、重要地域）から義務化を始めるべきであり、それ以外の場所では義務化に 2 年の猶予を与える案を出している。フーリエン省は、それぞれ適用開始の時期について具体的な案を出している。それは現時点ではメートル法の使用は任意とし、1903 年 1 月 1 日からハノイ市、ハイフォン市で義務化、1904 年 1 月 1 日から各省省都で義務化、1907 年 1 月 1 日からトンキン全体で適用と、6 年間かけて全体に広げる計画案である。ヴィンイエン省では、同じくハノイ市、ハイフォン市、ナムディン市などから適用することを求めている一方、トンキン全体に関しては、フランスの統治開始以降 30 年後から開始するのが良いと回答しており、かなりの時間が必要だと考えていることがわかる。また、コーチシナでも、フランスの尺度はサイゴンと

チョロンでしか使われていないだろう、とも述べており、当時コーチシナではメートル法が全般で普及していたという一般的観測に対して懐疑的な考察を寄せている。

取引、業務などを限定する案を出しているハーナム省は、ヨーロッパとの取引に限定すること、ハイズオン省はアジア外国人およびベトナム人とヨーロッパ人との間での取引に限定することを求めている。一方でバッカ省は、現地の度量衡制度とフランスの制度の間の同等性を分からせ、メートル法が必要な取引、裁判と行政書類において変えていけば、公式書類上では現地の度量衡問題はなくなる、と回答している。メートル法が必要な取引、とは貿易が関係する大口の取引を指していると考えられ、他2省と同じ意見といえる。次の公式書類に関しての案からは、バッカ省の知事は日常生活に關係する小売り取引を最初からメートル法適用の対象としていないことがうかがえる。

ニンビン省は、どの単位系も一律に適用を開始するのではなく、面積と重量の単位から始める案を提示している。多種多様な容積単位よりは容易に変更できると予想されるのが、その理由である。

次に、教育・宣伝活動について7省から言及が見られる。クアンイエン省は、あらゆる限りの方法で、という表現を使っているが、具体的な方法や場所には触れられていない。学校や市場で掲示物による普及を推進するべきとしているのがハイズオン省、同じく掲示物を用いるがそれを掲示する場所は学校と寺が良いとしているのがイエンバイ省、学校でもエコール・フランセではなく現地の学校での教育が必要としているのがヴィンイエン省である。フンイエン省では、フランス式の教育が浸透するに従ってアラビア数字の使用も身につく、とのみ述べており、つまりそうしたフランス式の基礎教育の浸透がメートル法普及につながると考えていることがわかる。タイグエン省とトゥエンクアン省は、まずマンダリン、現地人高級官吏を教育し、彼らに担当地区の住民を教育させること、商人達の協力を仰ぎ、積極的にメートル法の使用につなげることを挙げている。

モデルとなるメートル法による計量器見本について、トゥエンクアン省では1セットから数セットの計量器の見本を各市場の長に委ね、売り手も買い手も自由に使えるようにするのが良いとしている。イエンバイ省も計量器見本を全ての市場に置くよう要望している。

単位の表記法については、タイビン省がインドシナ人にわかりやすい表記をするべきと答え、またタイグエン省とクアンイエン省ははっきりベトナム語表記を残すことを求めている。

中国人の商人について言及しているのがニンビン省とフンホア省である。フンホア省は、他の国籍の商人を除き、中国人商人はフランスの度量衡をよく知っており、このメートル法の義務化を利用して現地の人につけこみ、騙すのではないかとの懸念を示している。ニンビン省も、メートル法が適用された場合中国人の技術者は新しい制

度を巧みに利用し、それは中国に非常に大きな利益をもたらすが、必然的にトンキンの販売者の利益に反する、ベトナム人の生産者が被害者となる、と予測している。

フランスでもメートル法の適用、完全施行までには時間がかかったことを引き合いに出している省も2省（フーリエン省とイエンバイ省）見られた。

最後に、メートル法適用に対して好意的か、反対か、その姿勢が比較的是っきりと示されている省が9省ある。明らかに好意的であるのは3省で、ハーナム省は大きな問題ない、イエンバイ省はメートル法をベトナムの度量衡と関連付ければよい、フンイエエン省はベトナムの度量衡も十進法であり、そろばんを使って早く確実に計算できる人々であるから適用できる、としている。一方反対の立場を明らかにしているのは6省である。先ほど公的文書でのみメートル法の適用を考えていたバックン省は、時期尚早であるし、メートル法とアンナンの尺度を組み合わせることはできない、と明言している。ソントタイ省は、支障なく行うには①実際用いられている単位を選び、単純な計算に関連させる、②1つの長さの単位を基本単位に設定する、③その基本単位と原器をメートル法と合わせて簡単な計算に関連させる、これら3つのことが必要であるが、ベトナムの単位系は十進法で形成されていないため、①と③は実現不可能、つまり事実上ベトナムでは適用できないという立場を示している。ヴァンブー省とトゥエンクアン省も、ベトナムの度量衡はとても多様なため、互いを連携させることも、基本となる単位系を形成することも難しい、とソントタイ省と同様の意見を示している。クアンイエエン省は、この計画は現地の慣習に対して非常に曖昧な共通点を与えることにしかならない、ヴィンイエエン省はメートル法は理論上最も完全なものであるが、トンキンのように不寛容で敵対する慣習を持つところでは問題である、と消極的な姿勢を見せている。

以上が、メートル法適用に対しての全体的な意見であった。次に個別の単位系について、各省が考える効果的な適用の方法についてまとめる。

①長さの単位（案）

最も体系的に提案しているのはタイビン省であり、その長さの単位系は以下の通りである。

チュオン・タイ(trượng tây) : キロメートル

タン・タイ(tân tây) : デカメートル (10 メートル、ダム)

トゥオック(thước) : 1900 年鑄造直径 2.5 センチメートルの

20 セント硬貨 40 枚分=1 メートル

タック(tắc) : デシメートル (1/10 メートル)

ファン(phân) : センチメートル

リー(ly) : ミリメートル

この単位系は、基本単位はトゥオックであり、その長さの基準として硬貨を使用して、タイビン省は、ベトナム人は異なる硬貨の直径が長さの基本となることを知っ

ており、新しいトゥオックには1900年鑄造の20セント硬貨40枚分=1メートルとすれば、容易に定規を作ることができるだろうとしている。つまり、タイビン省の知事は、ベトナムのこれまでのトゥオックが嘉隆通宝などの亜鉛銭や銅銭などの直径の長さが基本となっていたことを理解していたことになる。また、トゥオックの倍量単位には西洋を表わすタイをつけ、また新しくタン、という単位を導入して十進法により展開させたことになる。分量単位はこれまでの長さの単位系と同様の単位名を用い、メートル法と関連づけたものである。長さが決まれば面積も容易に決まるとして、タイビン省は特に面積単位については言及していない。

同じく、20セント硬貨に着想を得ているのがカウドー省である。カウドー省が提案した長さの単位系は、1トゥオック=20セント硬貨40枚分=1メートル=10タック=100ファンと、分量単位はタイビン省と同じである。倍量単位に関しては、十進法に変更するとした上で1000トゥオック=1チュオン=1キロメートルと、同じくチュオンを1キロメートルに対応する単位として採用している。ベトナム本来のチュオンは10トゥオックに該当するので、その展開の方法を大きく変えたことになる。

1トゥオックを基本単位として提案しているのは他にタイグエン省があるが、タイグエン省は1トゥオックの相当する長さは0.5メートルとしている。

基本単位を1メートルとしている省として、ハーナム省が挙げられるが、ハーナム省は1メートルに対応するベトナムの単位として、トゥオックではなくチュオンを採用している。

他とは異なる独特の単位系を提案しているのはホアビン省である。ホアビン省は現地で使われている単位としてはいわゆるベトナム人(キン族)のものではなく、ムオン族の度量衡制度を報告している。メートル法適用に際しての長さの単位系案でもこの少数民族の単位を基準として、以下の単位系を提案している。

5 アンパン(empan:親指と小指を張った長さ)=1メートル=トゥオック・タイ(thước tây)

10 トゥオック・タイ=1タイ・バック・スィック(tây bách xích:西百尺)=100メートル

10 タイ・バック・スィック=1タイ・チュオン(tây trượng:西丈)

10 タイ・チュオン=1タイ・ニャット・リー(tây nhất lý:西一里)

ホアビン省の知事は、20人のアンパンを実際に調査し、平均が20センチメートルであったことから、基本単位を1メートル=5アンパンと設定している。また、チュオンに加えて、ベトナム本来の単位系にはないタイ・バック・スィックとタイ・ニャット・リーを追加して十進法で倍量単位を展開させている。

最後に、具体的には明言していないが、フンイエン省はトゥオックはすでに十進法であり、困難なく保つことができるとして、現状維持をほのめかしている。2500トゥオック=1キロメートルに置き換えることもできるとしており、これは1897年に定められた1トゥオック=0.4メートルを基に計算されたものであるため、特にこの基本単位を変更する必要はないと考えていることがうかがえる。

②面積単位（案）

面積単位系の新たな案を提示している省は3省ある。最初に、ハーナム省は表4—3の単位系のチュオン（4メートル）を1メートルとし、以下の単位系を示している。

1 平方チュオン=1 平方メートル

25×1 平方チュオン=1 アール

マウ=900 平方チュオン

次に、表4—4の単位系を十進法に修正したものとして、カウドー省が以下の単位系を提示している。

1 カーン=1 平方トゥオック=1 センチアール

1 サオ=100 カウ=1 アール

1 マウ=100 サオ=1 ヘクタール

上記の単位系を提案しながらも、カウドー省は土地の取引において深刻な混乱が生じるとして、面積単位の急進的な改革には絶対反対との姿勢も示している。

ホアビン省は、長さの単位と同様に、アンパンを用いて以下の単位系を示している。

5 アンパン×5 アンパン

=タイ・ニャット・フウオン・スィック(tây nhất phương xích: 西一方尺)

=1 センチアール

100 タイ・ニャット・フウオン・チュオン(tây nhất phương trượng: 西一方丈)

=1 タイ・マウ(tây mẫu: 西畝)=1 ヘクタール

最後に、フンイエン省が、具体的な単位系案は示していないが、面積単位はすぐに変えることはできないとして、その理由に①阮朝は全ての土地はマウで算定されているため、新しい単位を課すことは不動産の算定、現地行政文書上に大混乱を招くこと、②ベトナム人は正確な幾何学の基礎知識がないため、フランス式の方法を適用するために初等教育が必要不可欠であること、を挙げている。同時に、フンイエン省は、ベトナム人が経験に基づく方法による面積の算定は十分正確であるとし、ベトナム人の慣習的面積の測量法の正確さについて評価している。

③重量単位（案）

重量単位について言及が見られるのは5省である。

まず1kgに対応する単位として、タイグエン省はイエン(yến)を採用し、カン(cân)を100グラムに対応させている。一方カウドー省は、基本単位をどれにするか、また原器をどうするかは決められないとしながらも、フランス共和国の刻印があり、穴が空いていない1セント銅硬貨1枚がちょうど10グラムであることを利用し、1kgはカンに対応させ、以下の単位系を示している。

タ(tạ)=10 イエン(yến)=100kg

イエン=10 カン(cân)=10kg

カン=100 ラン(lạng)=1kg

ラン=10 ドン(đồng)=10 グラム (1 セント銅硬貨 1 枚分の重さ)

ドン=10 ファン(phân)=1 グラム

ファン=デシグラム

ホアビン省は、1kg をやはりカンに対応させながら、単位系だけでなく 3 種類のはかりも同時に提案している。最も大きいのはかりはカン・タ・タイ(cân tạ tây)であり、10kg、1kg、0.5kg の区分だとしている。中間のはかりはカン・チュン・ビン・タイ(cân trung bình tây)であり、10kg まで量れる。その区分は 1kg (カン)、1 ヘクトグラム (100 グラム：ラン)、0.5 ヘクトグラム (50 グラム、ドン) である。最も小さいのはかりはカン・ティエウ・リー・タイ(cân tiểu ly tây)で 1kg まで量れる。区分はヘクトグラム (100 グラム：ラン)、デカグラム (10 グラム：ドン)、グラム (ファン) となっている。この区分によると、カン・チュン・ビン・タイのドンは 50 グラムで、カン・ティエウ・リー・タイのドンは 10 グラムとなるが、これはおそらくはかりの分銅と単位系の区分を明確にしなかったために起こった誤記か、あるいは分銅の種類を示したものであると考えられる。メートル法は十進法で展開するため、ドンは 10 グラムを想定した単位であったと思われる。はかり 3 種類も、1911 年の調査で各省から報告されているもっとも代表的な 3 種類のはかり (次項参照) に西洋を示すタイをつけた名称にしており、慣習を生かした提案であるといえる。

タイグエン省は、ファンを 0.5 グラムとして適用する案を示している。

最後に、ハーナム省は、重量はメートル法の単位に帰着させるのは難しいとのみ回答している。

④容積単位 (案)

容積単位については、8 省が回答を寄せている。

1 リットルの単位として、タイグエン省はウィエン(uyên)、ハーナム省はドウミ(半)・タン(demi thăng)、カウドー省はダウ(đầu)、を挙げており、各省でそれぞれ異なる単位が提案されている。カウドー省はその分量単位として、1 デシリットルをズオック(giợc)に対応させている。ホアビン省も、ズオックを液体用の 1 デシリットル単位とするのが良いとしている。ホアビン省はダウも挙げていますが、容積ではなく、重量に対応させている。大ダウを 1kg とし、この新しいダウはダウ・タイ(đầu tây)と呼ばせる。10 ダウ・タイ=1 トウン・タイ(thùng tây)=10kg と倍量単位も示されている。

フンイエ省は、液体の単位はアルコール公社ができて以来リットルがよく知られているとして、「リットル」にそのまま変更できる、としている。

バックザン省は、特に単位系の提案はないが、1 リットル、5 リットルなど、リットルに基づいた計量器を配布して使わせる案を出している。

最後に、容積単位を統一する、メートル法と対応させることは不可能だとした省はハノイ市とフンホア省である。ハノイ市は、前項で示した現地調査結果から、容積単位は一貫性がなく、フランス式の制度と対応させることはできないとしている。フンホア省も、基本となる単一の単位を選び出すことすら難しいとし、みんな使っているバット(bát)をモデルにすることも考えられるが、取引の慣習を変えることは困難だとしている。補足として、フンホア省は、ベトナムは昔、物納で税金を納めており、一様の単位が省の担当商店で義務付けられていたが、それが各市場において受け入れられることはなかった、つまり日常の取引は旧来の慣習がかわることなく使われていた、ことを指摘している。そのため、アジア、ヨーロッパが関わる取引では変えることができて、ベトナム人同士の売買ではかわることはないだろうと結論づけている。

以上から、1901年の調査報告で得られた知見をまとめると、まず現地度量衡調査からは、長さの単位は比較的共通して用いられていた制度があったが、それ以外は地域によって使われている単位、展開方法および換算値も、様々に異なっていたことが確認された。長さに関しても、1897年の法定トゥオックの影響で統一されたとの見方もできるが、反対に調査した担当官が意識的に法定単位寄りの報告をした結果、一見統一が進んでいるように見える可能性もある。

メートル法適用への具体案として示された全体意見では、第3章でも議論された段階的導入、教育、計量器見本の配布などが同様に挙げられていた。一方で、計量検定について言及している省は一切なく、こうした検定作業、管理、税の徴収といった業務・役割について、实际的に検討できる環境が整っていなかったことがうかがえる。個別単位系の導入案では、基本単位の選定すら、各省で異なる意見を持っており、トンキンにおける実現可能な単位系に関して、ひとつにまとめられるような基盤すら共有できていないことがわかる。

第2節 1911年の通達および現地調査報告

(1) 1911年の通達

第3章第3節で検討した1910年の通達に関して、1911年9月23日にインドシナ総督がトンキン理事長官に対して書簡を送っている。内容は、フランス式の度量衡の適用は、コーチシナを除いて時期尚早であるとの結果になったことを確認した上で、インドシナ総督としては依然として積極的な宣伝によってできるだけ早く普及させることを望んでいる旨が記されている。植民地省大臣も、インドシナでのメートル法の普及に最近再度関心を示しており、この問題を見失わないよう各省知事に命じている。さらに、1910年の通達に対しての各省からの回答から着想を得ながら、フランス式度量衡の使用の普及に専心させるよう、調整や支援を行うこともトンキン理事長官の役目であると述べている。

同年 11 月 3 日、このインドシナ総督の書簡を受けてかどうかははっきりしないが、トンキン理事長官は再度、各省知事に対して、使われている現地の度量衡を知らせるよう通達を出した。この通達では、回答に際しての形式の指定はなされていない。

(2) 各省からの現地調査報告

1911 年の通達に対しては、25 省からの回答が残されている¹⁹⁰。その内ソンラー省は、一文「ベトナム人のところで使われているシステムと同様である」とのみ回答しているため、具体的な報告が見られない。ソンラー省は山間部で少数民族も多いところであるため、ベトナム人、とくにトンキンデルタの度量衡と同様の制度が一樣に広まっていたとは考えにくく、これは知事がこの問題にあまり関心を持っていなかったか、現地調査するだけの人員や予算が確保できなかったことを示唆している。

以下、①から④では、ソンラー省を除く 24 省を対象とする。

もう一点、この通達では回答方法の形式を設定していないため、各省が自由な形式で回答している。そのため、長さから容積までの全ての度量衡に関して報告している省は少ない。特に、面積単位に関しては、9 省しか報告が見られない。1901 年でも同様の状況が見られたが、これは、面積単位は一般的に、行政や、各都市、村々で役割を担った一部の人々しか用いられない単位であり、また日常的に使われる頻度は重量や容積単位と比較して少ないため、対象と含めなかった省が多かったことが考えられる。反対に、重量や容積単位は 24 省全てから調査報告が作成されている。しかし、その報告に挙げられている単位の数、主要な単位のみ挙げている省と、倍量単位、分量単位合わせて網羅的に挙げている省とあり、様々である。ラオカイ省は少数民族で使用されている単位のみを報告している。そのため、報告数が 24 省にならない場合も多々ある。

バクザン省からは、省内で作成された報告書が添付されているが、これは同一の内容であるがフランス語、ベトナム語、漢文と 3 つの異なる言語で作成されている（写真 4-5、4-6、4-7 参照）。それぞれの内容の一部を以下に原文で示す。

① フランス語

En réponse à votre lettre no.1649 par laquelle vous m'avez invité à vous faire connaître par détail les poids et mesures d'usage local employés dans la province, j'ai l'honneur de vous faire connaître queles bascules et les mesures étaient autrefois dans les années par l'Administration, aux bureaux administratifs et aux particuliers pour servir de modele et

¹⁹⁰ 1911 年の省編成。25 省：バックザン、バックカン、バックニン、ハードン、ハーナム、ハイズオン、ハイニン、ホアビン※、フンイエ、ン、キエンアン、ライチャウ、ランソン、ナムディン、ニンビン、フート、フックイエ、ン、クアンイエ、ン、ソンラー※、ソントイ、タイビン、タイグエン、トゥエンクアン、ヴィンイエ、ン、イエ、ンバイ。2 軍区：カオバン、ハーザン。2 都市：ハノイ、ハイフォン。（序 表序一「トンキンの省編成」参照）（※：回答なし）

pour l'usage public. Elles étaient fabriquées d'une façon déterminée. Aussi dans la loi annamite, un article a été prévu au sujet de l'interdiction de construire de son propre désir, une mesure, une bascule ou un mètre qui ne se conforment pas aux règles. … (以下、略)。

②ベトナム語

Giả nhời tờ tự no.1649 hỏi về ở tỉnh này, người ta đong lường như thế nào. Kể rõ từng khoản, trình để quan lớn biết.

Tôi xét những cái cân cái đấu, từ đời Gia Long Minh Mệnh đã làm cân đấu, ban cho sở công và nhà riêng để dùng. Cũng đã có kiểu mẫu nhất định, xem trong luật Annamites có điều cấm về việc làm riêng những đấu cân và cái thước. (Trong luật có một khoản rằng : nếu làm đấu cân và thước riêng, và đem những cái đấu của công, mà làm nhón hơn lên hay làm bé kém đi … (以下、略)。

③漢文

北江巡撫社 為覆呈事茲接 貴座咨文第一千六百四十九号叙祈照省轄人民常用之秤衡斗量如何逐款計明覆呈等因照衡斗之製所以防民之相欺久奉究 国朝嘉隆明命等年倣考古法製造衡斗各有一式頒給公私行用以同風俗而一制度考之南律私造斛斗秤尺律有條禁 (以下、略)。

これはおそらく、最初の調査、報告をベトナム人高級官吏が漢文で作成し、それをベトナム語に翻訳した上で、最終的にはフランス人知事が読めるようフランス語に訳されたものと考えられる。地方行政内の各役人の役割、文書作成の過程がうかがい知れる貴重な資料といえよう。

写真 4-5

北江巡撫杜 為覆呈事茲接 貴座咨文
 照者轄人民常用之秤衡斗量如何逐款計明覆呈等因承貼衡
 斗之製所以防民之相欺多奉 國朝嘉隆明命等年倣
 古法製造衡斗各有定式頒給公私仍用以同風俗而一制度考之
 南河和造斛斗秤尺得有條禁 載內一款在和造斛斗秤尺亦市行便及
 然而民間情緣俗異間有和製衡斗以便行用致有使斗有大小街
 有重輕俗弊由來積習已久茲請詳究衡斗之原式與民間之
 用計到覆呈鏡新審辦順呈 覆呈者

写真 4-6

Le 13 novembre 1911
 Rapport du Résident Provincial
 à Monsieur le Résident de France
 Huân Lang Thôn

Gửi nhứt tờ tếp số 1649 hỏi về
 ở tỉnh này, người ta dùng đồng
 như thế nào. Kề số từng thôn,
 trình để quan lên biết.

Cải tiến những cái cân cái
 đấu, từ đời Gia Long định mạnh
 đấu làm cân dân, ban cho 50°
 cân và nhà riêng để dùng, cũng
 đã có nhà mẫu nhất tỉnh, bên
 trong luật Annamite có điều cấm
 về việc làm riêng những đấu
 cân và cái thớt, nhưng luật có
 một khoản rằng: nếu làm đấu cân
 và thớt riêng, và làm những cái đấu
 của công, mà làm nhỏ hơn lên, hay
 làm bé hơn đi, thời phải có chứng,
 mà những người thợ làm những cái
 cân cái đấu và cái thớt ấy, cũng
 bắt tội như thế, những nhà, cửa
 nhà quê, mỗi chỗ khác nhau,
 cũng có...

写真 4-7

N° 996
 Le 13 novembre 1911
 Le Fran Phu de Bac Giang a
 Monsieur le Résident de France a
 Bac Giang

Monsieur le Résident,

En réponse à votre lettre n° 1649
 par laquelle vous m'avez invité à vous
 faire connaître par détail les poids et
 mesures d'usage local employés dans
 la province, j'ai l'honneur de vous
 faire connaître que les balances
 et les mesures étaient autrefois dans
 les armées de Gia Long et de Minh Mạng
 distribuées par l'Administration, aux
 bureaux administratifs et aux particuliers
 pour servir de modèle et pour l'usage
 public. Elles étaient fabriquées d'une
 façon déterminée. Aussi dans la loi
 annamite, un article a été prévu au
 sujet de l'interdiction de construire
 de son propre désir, une mesure, une
 balance ou un mètre qui ne se
 conformerait pas aux règles.
 C'est cet article: "Celui qui
 aura fabriqué, précédemment une
 balance, une mesure de capacité ou

写真 4-5、4-6、4-7 バックザン省からの報告書（順に漢文、ベトナム語、フランス語）

最後に、ハーザン省は、省内複数箇所の調査結果をまとめているが、統一された項目によってそれぞれをまとめているため、相互に比較が可能である。特にハーザン省は山間部で中国とも国境を接しているため、省都が置かれている中心部、少数民族地域、中国国境沿いでどのように用いられていた度量衡制度が異なっていたかを、具体的に提示できる貴重な報告である。そのため、国境地域の事例の1つとして、最後に(3)「省内における地域差—ハーザン省の事例」として独立して取り上げる。

①長さの単位

各省から報告された長さの単位で、主要なものは表4-6の通りである。

表4-6 各省において用いられている長さの単位（1911年）

単位名	相当長さ	換算値 (メートル)	使用している省
グー(Ngũ)	5トゥオック	2	ハノイ、ハードン、ハイズオン(=bộ)、ニンビン、フート タイビン、タイグエン(換算値不明)
チュオン(trượng)	10トゥオック	4	ハノイ、ハードン、ハイズオン、ニンビン、フート タイビン、タイグエン(換算値不明)、イエンバイ ランソン(dặm, lý:385m)、タイビン(135チュオン=540m)
リー(Lý)	180トゥオン	720	ランソン(dặm, lý:385m)
ダム(Đặm)	1000トゥオン	4000	ランソン(dặm, lý:385m)
トゥオック(Thước*1)	10タック	0.4	18省*2
タック(Tắc)	1/10トゥオック	0.04	ハノイ、ハードン、ハイズオン、ランソン、フート、 タイビン、イエンバイ
ファン(Phân)	1/100トゥオック	0.004	ハノイ、ハードン、ハイズオン、ニンビン、フート タイビン
リー(Lý) *3	1/1000トゥオック	0.0004	ハノイ、ハイズオン、ニンビン、フート、タイビン

*1:トゥオック(0.4メートル)は1897年7月2日に定められた法定単位

*2:うち8省はトゥオックに関して他に数種のトゥオックが存在することを報告している。

*3:リーの分量単位は、ハイズオンが十進法で、ハオ(háo)、ティー(ti)、ホット(hốt)と報告している。

例外

トゥオック

クアンイエン:40-42cm、タイグエン:嘉隆通宝17個分の長さ、フートはトゥオック・ズオンは40cmとしている。

長さの基本単位であるトゥオックは18省から報告が見られるが、約半数の8省から3種のトゥオックの報告も見られる。

長さの計量器、定規については、以下の3種類が報告されている。

まず、建築に主に用いられるトゥオク・モック(thước mộc)について報告している省が4省ある。ソントイ省とトゥエンクアン省はトゥオック・クアン・モック(官木尺、thước quan mộc)、フート省がトゥオック・モック、ベトナム語名は出していないが、「大工用のトゥオック」と報告しているのがハイズオン省である。これら4省で言及されているトゥオックは、それぞれソントイ省が50センチメートル、トゥエンクアン省が40センチメートル、フート省が41センチメートル、ハイズオン省が38.5センチメートルと異なる数値を示している。

次に土地の測量用のトゥオックを報告している省が4省ある。ソントタイ省とトゥエンクアン省はトゥオック・クアン・ディエン（官田尺、*thước quan điền*）、ナムディン省とフート省がトゥオック・ズオン(*thước ruộng*)と表記しており、ナムディン省以外はその相当長さは40センチメートルとしている。ナムディン省は、具体的なメートル法で換算した長さは示さず、明命通宝18枚分の長さ、と報告している。

最後に、布の長さを測るトゥオックを報告している省が、5省ある。ソントタイ省とトゥエンクアン省は、トゥオック・クアン・フン（官縫尺、*thước quan phùng*）、ナムディン省はトゥオック・マイ(*thước may*)、フート省はトゥオック・ヴァイ(*thước vải*)、ハイズオン省は仕立て屋のトゥオックと報告している。その長さは、ソントタイ省が60センチメートル、トゥエンクアン省が36センチメートル、フート省が63センチメートル、ハイズオン省が39.8センチメートルと、大きく異なっていたことがわかる。ナムディン省は、トゥオック・ズオンと同様、メートル法換算値ではなく、嘉隆通宝（亜鉛銭）26枚分の長さとして回答している。

その他、カオバン省はトゥオック・クアン（官尺、*thước quan*）としか表記されていないが、異議申し立て、裁判の目的の時のみに使われる40センチメートルの尺があるとしており、これは土地に関係する紛争を想定したトゥオック・クアン・ディエンのことを指していると考えられる。

また、キエンアン省では、ただ「トゥオック」としているが、各皇帝の治世で異なるトゥオックがあったとして、嘉隆帝時代は42センチメートル（水田測量用）、嗣徳帝帝政下では47センチメートルと、2種類の紹介が見られる。また、田舎では現在でも土地の測量に嘉隆帝のトゥオックが使われるとして、フランスが導入した40センチのトゥオックが使われていないことを示唆している。

タイビン省からは、フランス式のメートルはトオック・タイ(*thước tây*)、西洋の尺(*tây*は「西」の意味)と呼ばれており、分量単位も同様に0.1メートルはタック・タイ(*tắc tây*)、0.01メートルはファン・タイ(*phân tây*)と、ベトナム式の単位名にタイを付けて区別することが書かれている。ベトナム式とはっきり対照させるために、ベトナム単位名に *annam* を付けたタック・アンナン(*tắc annam*)、ファン・アンナン(*phân annam*)、も合わせて紹介している。また、フランスの1メートルに対応する単位として、ボ(*bộ*)=2.5 トウオック=1メートル（トゥオック・タイ）を挙げている。

以上、定規に関して見てみると、面積を測るトゥオックに関しては、呼び方も漢越語とベトナム語に対応する2種類の名称が使われており、長さも40センチメートルと1898年に定められた公式トゥオックの値を統一的に使われていたことがわかる。次に大工用のトゥオックも、名称は漢越語とベトナム語でそれぞれ対応する用語は1種類のようなのであるが、その長さは地域によってばらつきが見られた。最後に、布を測る仕立て屋のトゥオックは、名称もその相当する長さも大きく違いが見られた。ソントタイ省からの報告では、布を扱う商人によって異なるトゥオックが使われ、布の幅も単位

のように使われる、と記されている。用途が限定され、なおかつ用いる職種も限定されている定規ほど統一が進み、個人を相手とする日常の取引、売買で用いられ、使用する人口も裾野が広い定規は、地域によっても大きく異なったままであったことがうかがえる。

少数民族で使用されている度量衡を報告しているラオカイ省は、長さの単位としてスィ(xi)を挙げ、これは中国の単位で、トゥオックやアンナン・メートルよりも短く30.5センチメートルだとしている。この定規は同じくスィであり木製で、もっぱら布を測るときにのみ使われる。現地の人々は、キロメートルやヘクトメートルと言った単位を全く知らないと報告している。

②面積単位

先に述べたように、面積単位について報告しているのは9省に限られ、面積単位が日常生活と密接に関わっておらず、多くの省で現地で使われている度量衡調査の対象にならなかったことがうかがえる。以下、回答のあった9省の報告から、当時の面積単位について整理する。

9省中7省で使われていた単位系は、表4-7の通りである。

表4-7 各省において用いられている面積単位（1911年）

単位名	相当面積	換算値(m ²)	使用している省
マウ(Mẫu)*1	10 サオ	3600	カオバン*2、ハードン、ハイズオン、キエンアン(2969m ²) タイグエン、イエンバイ(換算値不明)
サオ(Sào)	1/10 マウ	360	ハードン、ハイズオン、フート(換算値不明)、イエンバイ
トゥオック(Thước)	1/15 サオ	24	ハードン、ハイズオン、フート(換算値不明)、イエンバイ
タック(Tắc)	1/10 トゥオック	2.4	ハードン、ハイズオン(thôn)
ファン(Phân)	1/10 タック	0.24	ハードン、ハイズオン(6リー=0.24m ²)
リー(Ly)	1/10 ファン	0.024	ハイズオン(1平方ガンgang=0.04m ²)

例外

リー(ly)に関しては、ハドン、フンイエン、タイピンは0.04m²

*1: マウ(3600m²)は1897年7月2日に定められた法定単位

*2: マウ=種まきに必要の種子の重さが50カンの面積

一方で、ハイフォン市とタイピン省は、同じくマウとサオを使うが、その分量単位の展開が異なる単位系を挙げている（表4-8 参照）。

表 4-8 ハイフォン市とタイビン省で用いられていた面積単位（1911 年）

	ハイフォン	タイビン	
マウ(Mẫu)	3000m ²	10サオ	3600m ²
サオ(Sào)	300m ²	10ミエン	360m ²
ミエン(Miêng)	36m ²	9タン	36m ²
タン(Than)	4m ²	25平方トウオック	4m ²
ガン(Gang)	0.04m ²	ー	0.04m ²

表 4-7、4-8 の違いは、1901 年の調査報告でヴィンイエー省が前者が民間、後者が行政が使用する単位系であると報告している。表 4-8 は、1901 年の報告で見られる 4 章の単位系（表 4-4 参照）と完全に一致するものではない。また、表 4-4 と異なる省から、この単位系の報告が見られるということは、他にも報告しないだけでこの単位系も同時に併用している省があることを示唆している。

ラオカイ省の、少数民族地域の面積単位であるが、現地の人々は面積の単位といういかなる考えも持たず、土地の価値は米やトウモロコシの収穫可能性によって決まる、と報告している。ベトナム人のマウは知られていないとしている。

③重量単位

主に使われている重量単位は、表 4-9 に示したとおりである。

表 4-9 各省において用いられている重量単位（1911 年）

単位名	相当量	換算値 (kg,g)	使用している省
イエー(Yến)	10 カン	6 kg	ハードン、ハイズオン、キエンアン、ライチャウ ニンビン、フート、ソントイ、タイグエン
タ(Tạ)	10 イエン	60 kg	16省
タン(Tấn)	10 タ	600 kg	なし
カン(Cân)	16 ラン	600 g	16省
ラン(Lạng)	1/16 カン	37.50g	13省
ドン・カン(Đồng cân)	1/10 ラン	3.75g	9省
ファン(phân)	1/10 ドン・カン	0.375g	8省
リー(Ly)	1/10 ファン	0.0375g	ハイズオン、ハイニン、ニンビン、タイグエン
例外			
1. イエン、タ、カンについて キエンアン: 6.34kg, 63.4kg, 634g ニンビン: 6.045kg, 60.45kg, 604.5g		2. イエン、タについて ハイズオン: 6.045kg, 60.45kg	
3. タ、カンについて ハイフォン: 64kg, 640g		4. タのみについて ランソン: 100kg, トウエンクアン: 60.4kg	
5. カンのみについて ハイズオン: 664g, フックイエン: 625g クアンイエン: 604-605g		6. ラン、ドン・カン、ファンについて ハイフォン: 40g, 4g, 0.4g フート: 60g, 6g, 0.6g タイビン: 37-38g, 約3.7g, 約0.37g	
7. ラン、ドン・カン、ファン、リーについて ニンビン、ハイズオン: 37.783g, 3.7783g, 0.37783g		8. ランについて フックイエン: 100g	

表からもわかるように、ベトナムの重量単位系の展開は全て十進法ではない。しかし、フート省ではラン=60 グラム、ドン=1/10 ラン、ファン=1/10 ドンと、全て十進法で報告している。これは、1936 年の調査でフートは表 4-9 と同様の展開をみせていることから、報告書を作成した担当官の勘違いだと思われる。

また、ソントタイ省では、金や銀を量る際には、ネン(nén)=10 ラン=380 グラムの単位も使われたとしている。

この他にも、ノイ(nòi)も報告されている。タイグエン省では、省都でもノイが使われ、その系統は 1 ノイが 13kg、7.75 ノイが 100kg となっている。

また、タイビン省では長さの単位と同じく、フランス式の度量衡単位を示すためにタイを付ける方法が、重量単位でも同様にあり、その制度をタ・タイ(tạ tây)=100kg、カン・タイ(cân tây)=1kg、ラン・タイ(lạng tây)=100 グラムと紹介している。

パニエ(panier)については、ハイズオン省がドン・チェウ(Đông Triều)地方では、現地の人々は穀物取引に 18kg のパニエを使い、荷物運搬人には 2 パニエがあてられると報告している(ノイ、パニエについては、本章第 1 節第 2 項④「容積単位」参照)。

また、はかりによっても同一単位名の相当重量が変化するとソントタイ省とナムディン省が回答している。

重量の計量器であるはかりに関しては、7 省が数種のはかりを報告している。ナムディン省は、5 種類のはかりを報告している。

①タ(ピクル)用のはかり:100 カン=45 貫銭、およびカン・タ(cân tạ) : =42.5 貫銭

②50 はかり(balance dite de 50) : 50 カンの分銅のみ

③カン・イエン(10 カンばかり)

④カン・チュン・ビン(cân trung bình) (=1 カン)

⑤カン・ティエウ・リー(バック・ルック(bách lục)ばかり) : 5 ランの分銅のみ

①はもみ、米、薪、石炭、鉄、錫など、②と③は魚、肉、薬、④は砂糖、小麦粉、金、銀、⑤は金、薬などが量られる。ここで、ランの重さについて、1 ランは 16 両鉛船の重さもしくは 14 銀銭の重さと同量であるとされている。

フックイエン省は、以下 4 種類のはかりを報告している。

①カン・タ : 3 ピクル(180kg まで)、もみ、米、薪、石炭など用

分銅大 : 6kg、分銅中 : 224 グラム、分銅小 : 14 グラム

②カン・イエン : カン・タと同じタイプ、分銅はイエン、小麦粉、砂糖、肉など用

③カン・チュン・ビン : 245 グラムの分銅のみ、軽量の計量用

④カン・ティエウ・リー : 分銅 : 10 グラム、金、銀、貴金属、アヘン、薬用

バックザン省は、嘉隆帝によって作られたはかり 3 種類と、商業用に使われているはかり 3 種類の計 6 種類を報告している。嘉隆帝によって作られたはかりは、①カン・チェン・ビン(cân chiêm bình) : 50-300 カン、②カン・チュン・ビン : 30-150 カン、③小カン・チェン・ビン(cân chiêm bình nhỏ) : 1-50 カンと、重量のあるものを対象と

したはかりであることがわかる。一方で、商業に用いられているはかりは、①カン・タ：1—300 カン、②カン・チュン・ビン：1 ラン—50 カン、③カン・ティエウ・リー：1 ファン—5 ランと、少量のものから重量のあるものまで、幅広く量れる計量器がそろっているといえる。

タイグエン省、ハイニン省、ソントイ省でも、同じく3種類のはかりが紹介されている。タイグエン省は①イエン、カン、ランの目盛りがついているはかり（もみ、米、トウモロコシなど用）、②ドンまでの目盛りがついているはかり（食料品と銀など用）、③カン・ティエウ・リー：リーによって目盛りが分けられている（金、アヘン、貴金属用）の3種類、ハイニン省は①大はかり：100 カン(60kg)、200 カン、250 カン、260 カン、270 カン、280 カン、②小規模商売用はかり：16 カン(9.6kg)、20 カン、25 カン、③カン・ティエウ・リー：ラン、ドン、ファン、リー用の3種類、ソントイ省は①カン・チュン・ビン、②カン・トゥ・マー(cân tư mã)、③カン・ティエウ・リーの3種類が報告されている。これらはそれぞれ完全には一致しないが、バックザン省が報告しているように商業用には主に大、中、小の3種類のはかりが普及していたことがわかる。

フンイエンス省では、省内8カ所での調査報告を提出しているが、その内はかりについて言及が見られたのは以下の5カ所である。コアイ・チャウ府(phủ Khoái Châu)では、①カン・タ：3タまで、②カン・チュン・ビン：10カンまで、③カン・ティエウ・リー：10ランまで、の3種類が挙げられている。ヴァン・ラム県(huyện Văn Lâm)では、3タまで量れるはかりと、10カンまで量れるはかりの2種類、アン・ティ県(huyện Ân Thi)ではカン・チュン・ビンのみ、イエン・ミー県(huyện Yên Mỹ)では竿ばかりのみ、フー・クー県(huyện Phù Cù)では中はかりとしてカン、小はかりとしてカン・ティエウ・リーの2種類が報告されている。大から小まで、3種類のはかりの報告が見られるのが府だけであることから、中心部で取引規模が大きいところほどはかりの種類がそろそろ、あるいは大きなはかりの報告がみられることがわかる。

バクカン省も3種類のはかりを報告しているが、山岳地帯にある省であるからか、上記の3種類とは若干状況が異なるようである。バクカン省では、①カン・チャム(cân cham)：30—160カン、②カン・イエン：10—30カン、③カン・ラン：1ラン—5カンが挙げられており、カン・ランとカン・イエンの間のはかりは見つからなかったと報告されている。最も大きいはかりも160カンまでしか量れないことから、バクカン省での商取引規模が他の省より小さかったことが、度量衡の側面からも捉えられる。

ヴィンイエンス省は、具体的にはかりの種類には触れていないが、はかりを使わない地域もある、と報告しており、日常の買い物には重量より容積での計量が一般的だったことを示唆している。さらにカン・チュン・ビンやカン・ティエウ・リーを使うところもあるが、はかりは統一されていないことも指摘している。バックニン省も、良いはかりは少数で、悪い偽のはかりが蔓延していると報告している。

以上のように、7省すべてそれぞれ3-5種類のはかりを報告しており、比較的共通して用いられているのはかりはカン・タ、カン・チュン・ビン、カン・ティエウ・リーの3種類だと言える。しかし、その3種類もそれぞれ統一されてはおらず、地域によってさまざまに異なっていたことも明らかになった。また、トンキンデルタの結節点として機能していたナムディン省で、他の省よりも多くの種類のはかりが報告されていることは、商業規模や取引環境などの影響を、度量衡制度が強く受けていることを表わす1つの事例となるであろう。

外国製のはかりの使用を報告している省も見られる。外国製はかりの使用が禁止されるのが1912年であるから（第1章第3節第2項「インドシナにおける度量衡関連法とメートル法の導入」参照）、その1年前の報告となる。ハイフォン市では、中国人は英国の台ばかり：100リーブル＝約45kgを使っているとしている。バックニン省は、このリーブルは4貫銭と15銭＝255銭、ヴィンイエン省もヨーロッパと取引のある地域では、ヨーロッパのはかりや台ばかりを使うとして、リーブル＝4.5貫銭で使うところもあると報告している。ハイズオン省では、中国人の米買入人が使うアメリカの台ばかりを使う際は、カン・バン(cân bang)＝44.6kgという単位が使われるとしている。

ラオカイ省の少数民族の重量単位は、Yi-tchin（アンナンキロ）、Yi Thô（ピクル＝60kg）の2種類の単位と、Tân Su というのはかりが報告されている。市場において7-8種類の竿ばかりが確認され、最も小さいものはアヘンを量る繊細なもの、大きいものは100kgを超える計量が可能なものであった。

④容積単位

容積単位として報告が見られたのは、表4-10の通りである。

表 4-10 各省において用いられていた容積単位（1911年）

単位名	相当量	換算値 (リットル)	使用している省
1. 穀物			
タン(Thang) トゥン(Thùng)*2	2ダウ	2 15-17	ハイズオン(10カップ:cáp) バックニン(10-20ダウ)、キエンアン(20ダウ=20リットル) ハイズオン(20チャイ:chai=約15リットル)、 ハーナム(20ダウ=20バット)、ソントアイ*1
トゥン(Thung)*2 フォン(Phuong)	20ダウ 30ダウ	20 30	ハイフォン ハードン(25-30ダウ)、ハーナム(25ダウ=25バット) キエンアン、ソントアイ*1、タイビン
ホック(Hộc) ダウ(Đầu)	60ダウ 10レー	60 1	ハイズオン(26タン)、キエンアン、フート、ソントアイ*1 17省(換算値は省により多様)
バット(Bát) レー(Lê)	1/2ダウ 1/10ダウ	0.5 0.1	ハイフォン、ハーナム(ダウ)、ソントアイ*1、タイビン、トゥエンクアン ハードン(一握り)、タイビン

*1: 換算値不明

*2: 声調・発音記号がついていないため、どちらのトゥンが識別できない事例は以下の5省。

ハノイ: 20リットル、イエンバイ: 30ダウ＝約23kg(穀物用)、20リットル(穀物用)、10リットル(液体用)、
タイビン: 20ダウ＝約20リットル、フックイエン、トゥエンクアン、ヴィンイエンの3省は換算値不明。

表 4-10 で示されたとおり、表中の単位名については報告されている数は 1901 年より増えているが、それぞれ異なる換算値や相当量を示しており、ダウに至っては表中で示しきれない多様性がみられた。このダウについては、1901 年と同様各省において多様な換算値が示されているが¹⁹¹、キエンアン省、フート省の 2 省のみ、表に示された 1 リットルの換算値を示した。トゥエンクアン省は、ダウの容量は人によっても異なると報告している。フンイエン省とニンビン省は、各府、各県でそれぞれ異なるダウを 2、3 種類報告している¹⁹²。

ブレテル(Bretel)のバター缶について言及している省が 7 省あり、ハードン省とソントタイ省はダウはブレテルのバター缶に取って代わられている、と報告している。ニンビン省、ハイフォン市、ハノイ市、バックニン省では穀物用の計量器としてこのバター缶が挙げられており、バックニン省ではダウは一律でないのでブレテルの箱の方が理にかなうとしている。タイグエン省では、バットはブレテルのバター缶より小さく、

¹⁹¹ 各省の報告は以下の通り。バックニン省：0.5-1.5 リットル、ハイフォン市：2 リットル、ハイニン省：竹製の箱=約 300 グラムの米が入る、ソントタイ省：840 グラムの米（ブレテルの箱、オンボー）、ハーナム省=バット、イエンバイ省：5, 3, 2 碗(bol)=約 765 グラム、タイグエン省：あるときは 4 バット（このとき 10 ダウ=1 ノイ）、あるときは 3 バット（このとき 13 ダウ=1 ノイ）、ヴィンイエン省：2-7 バット、フックイエン省：①4 バット（10 ダウで 1 ノイ）、②3 バット（12 ダウで 1 ノイ）、③2.5 バット（16 ダウで 1 ノイ）、④2 バット（20 ダウで 1 ノイ）、1 ノイは米で 14-15kg、もみで 20-21kg、バックザン省：ダウ・カー・モン(đầu cá môn, mèn)=1 ノイを使い、田舎の市場では木製のダウを使う、ハードン省：30-36 ダウ=1 ノイ、ダウはブレテルのバター缶に取って代わられている、タイビン省：多様。ニンビン省は次の注を参照のこと。ナムディン省は以下の 5 種類のダウ（円柱形）を紹介している。①ダウ・オン(đầu ống)=3 バット（3 タック 5 ファンの直径、1 タック 4 ファンの深さ）3 バット分の米、もみと同量の容積のため、ダウ・オン・バー・バット(đầu ống 3 bát)ともよばれる。②ダウ・オン・ハイ・バット(đầu ống hai bát)=2 バット分の米、もみ（直径 3 タック、深さ 1 タック）。③ダウ・オン・モット・バット(đầu ống 1 bát)（直径 2 タック 5 ファン、深さ 6 ファン）。④ダウ・ガン・ハイ・バット(đầu ngạn de 2 bát)=2 バット分の米、もみ（直径 4 タック、深さ 6 ファン）。⑤ダウ・ガン・モット・バット(đầu ngạn de 1 bát)=1 バット分の米、もみ（直径 3 タック、深さ 4 ファン）。

¹⁹² フンイエン省の調査報告は以下の通り。コアイチャウ府(Phu de Khoai Châu)：大ダウ=ダウ・ニョン(đầu nhon)（直径 15cm、高さ 6cm）、中ダウ（直径 14cm、高さ 5cm）、小ダウ（直径 13cm、高さ 4cm）。アンティ県(huyen de Ân Thi)：木製のダウが使われ、俗称はダウ・アン・アン(đầu un an)（米 1 バット分）、ダウ 2 アン(đầu 2 an)（米 2 バット分）、ダウ 3 アン(đầu 3 an)（米 3 バット分）。キムドン県(huyen de Kim Đông)：穀物の売買には 4 種類のダウ（1.5 リットル、1 リットル、0.8 リットル）を使う（実際報告されているのは 3 種類のみ）。フークー県(huyen de Phù Cù)：大ダウ（3 バット（1 ダウの米は 20 ティエンの値段）、小ダウ=1 バット（1 小ダウの米は 40 サーク）、15 大ダウ=1 トゥン(thùng)。ミーハオ府(Phu de My Hào)：大ダウ、小ダウあるが彼らの慣習に従っており、定義付けは極めて困難。イエンミー県(Huyen de Yên Mỹ)：大ダウ=約 5 バット、中ダウ=約 3 バット、小ダウ=2 バット。ヴァンラム県(Huyen de Văn Lâm)：大ダウ、中ダウ、小ダウの 3 種類ある。ティエンルー県(huyện de Tiên Lữ)では、地域によって大ダウ（3 バット分）、中ダウ（2 バット）、小ダウ（1 バット）をそれぞれ使っているとしている。

ニンビン省の調査報告は以下の通り。イエンカイン府(Phu de Yên Khanh)：2 バット、2.5 バット、3 バットに相当する 3 種類のダウ。ニョクアン府(Phu de Nho Quna)、ザーヴィン県(huyen de Gia Viên)、イエンモー県(huyen de Yên Mô)：2 バットのダウ、キムソン県(huyen de Kim Sơn)：3 バットのダウ、イエンホア県(huyen de Yên Hòa)：2 バット、2.5 バット、3 バットのダウ、ザーカイン県(huyen de Gia Khanh)：2 バット、3 バットのダウ。

コンデンスミルク缶とほぼ同量であると、コンデンスミルク缶についての言及も見られる。名称については、ソントイ省がブレテルのバター缶をホップボー(hộp bơ)とも呼ばれていると述べている。

また、バットであるが、ダウとバットを同量の単位と認識しているのがハーナム省である。

次に、ノイ(nôi)については、重量単位としても報告されていた。バックニン省は大量の穀物計量にはトゥン(thùng)とノイが使われるが、ノイは慣習の単位であるとしている。タイグエン省では、ノイもその相当量は多様であるが、例として省都の市場では40バットであったと報告している。ヴィンイエン省も、いくつかの地方ではノイを使うとし、その相当量は一定ではなく、14-32ダウの間を推移する、ハードン省も1ノイは30-36ダウの間を推移するとしている。フックイエン省は、ノイは量るものによっても異なり、米の場合は1ノイ14-15kg、もみの場合は1ノイ20-21kgであると報告している。バックザン省は、1ノイ=ダウ・カー・モン(đầu cá món, あるいは mèn)という、少数民族のタイ族が用いるとされる特殊なダウとの対応関係を報告している。

その他の計量器については、バックカン省が竹の節で切ったオン(ống、管)にもみや米を満たすと約1カンになる、と報告している。ライチャウ省はもみ計量用には木製の計量器(2.5カンに相当)、米の計量には竹の計量器(1カンに相当)、カオバン省はブリキ製の計量器(900グラム=1.5カン相当)と竹製の計量器(600グラム=1カン相当)と、2つの容積計量器を挙げており、この竹の計量器はオンを指しているものと思われる。これら3省は山間部に位置する省であり、こうした地域では節で分けた竹の筒も計量器として普及していたことがわかる。

バックザン省では、田舎の市場では木製のダウ、銅製のバットが使われるが、一様ではなく、キエンアン省は村々では木製の升(1リットル)を使うが、町では一種類のブリキ缶が米の売買の計量器になっており、0.8リットルであるとの報告が見られる。デルタ地域の村々では木製計量器が一般的に使われていたことがわかる。また、この一種類のブリキ缶は、恐らくバター缶のことだと考えられる。

ハイニン省では、ラ(là)と呼ばれる17カン(10.2kg相当)のもみ、米用の単位も報告されている。

最後に、液体用の容積単位に関してであるが、ハイフォン市は容積を量るいかなる常用の単位もない、タイビン省は、液体用にはいかなる原器もないが、カー・タイ(ca tây)とよばれるリットルが、徐々に普及しているとしている。

具体的に液体用としていくつかの単位が報告されている。バックニン省からは、油や石油はカオ(cáo、ココヤシの実)を使うので容積は一定ではなく、まれにトゥン(thùng)と呼ばれる円柱状の木製計量器も用いられた、とある。ソントイ省は、油とはちみつ用にルオン(lượng)があり、その他21リットルの容量のある漆の壺はサーイ(sỏi)、約14リットルの容量のある漆の金属製容器(touque)はトゥン(thùng)、排水パイプ付の計

量器はカウ(cầu)があったと報告している。フート省は油はガオ(gáo)、トゥン(thùng)で量り、漆はバット(300 グラム)で量る、その他容積が 100 バットとされるルオンを、ニンビン省も、ガオ、ズオック(duộc)、ヴォー(vò, 8 リットル)を液体用として列挙している。

ラオカイ省によって報告されている容積単位は、xin (米ととうもろこし用) と Thia (アルコール用) である。この xin は長角錐の形状をしており、米の場合は 16xin で 1 ピクル、1xin の米は 18－22 セントの値段であった。とうもろこし用には大きめの xin が使われ、10xin=1 ピクルとなる。1xin のとうもろこしは 38－40 サーペク (19－20 セント) の値段であった。アルコール用の Thia は、竹で作られており、容量は約 10 センチリットル、1thia の米酒(choum choum)は 2 セントの値段であった。

(3) 省内における地域差—ハーザン省の事例

ハーザン省の報告では、省内 5 カ所の現地調査結果がまとめられている (表 4－11 参照)。ハーザンは省都、バッククアンはイエンバイ省とトゥエンクアン省に囲まれ、ホアンスーフィーはバッククアンの北部に位置し、中国国境に近い。ドンヴァン省はハーザン省の北端にあり、バオロックは中国とカオバン省の中間に位置している。

表 4－11 ハーザン省内の地域別度量衡の事例

地名	長さの単位	面積単位	重量単位	容積単位
ハーザン Hà Giang	アンナンメートル (18サーペク=0.4m) タック(thac)と呼ばれる。	マウ(mẫu)とサオ(sao) カオ(cao)=稲の苗100束分を 移植する350kgのもみが 収穫できる広さ	アンナンキロ=0.5kg=16taē 1 アンナンピクル シャージ(charge)薪用 Đieng Kim=37.8g (貴重品用)	竹箱=15cl (アルコール、油用) 竹升=1kg (もみ用)
バッククアン Bắc Quang	ハーザンと同じ	マウとサオ	アンナンキロ=600g (液体にも使われる) アンナンピクル Đieng Kim=37.8g (貴重品用)	立方メートルは 中国人が使う。 ベトナム平方タック(thác) (木材、薪用)
バオロック Bảo Lộc	ベトナムの度量衡 仕立てと呼ばれる尺は 16亜鉛銭の長さ=0.37m	ベトナムの度量衡	ベトナムの度量衡	ベトナムの度量衡
ドンヴァン Đồng Văn	①親指の頂上から中指 までの長さ ②中指の端から腕の長さ	マウとサオ	アンナンのキロ	—
ホアンスーフィー Hoàng Su Phì	Y Chi = 0.35m Y Chôn = 0.035m Y Tồng = 0.0035m (中国の度量衡)	マウとサオ	竹箱=10 liang (両) =375g 160個分の竹箱=ピクル (米用) 200個分の竹箱=ピクル (もみ用)	竹箱=4 liang (両) (150gのアルコール分)

省都であるハーザンは、基本的に他の省でもよく見られる単位系を報告しているが、一方で山間部でよく見られる面積の概念 (収穫量を基準とする) も同時に報告されている。バックアンとバオロックも基本的にはベトナムの度量衡とされており、その文化圏はベトナム側にある。重量単位として、ハーザンとバックアンが Điang Kim という単位名を挙げているが、貴重品用で換算値が 37.8 グラムであることから、ベトナムのルオン(lượng)、ラン(lạng)、中国の両にあたる単位と考えられる。なぜベトナム式でも

中国式でもない単位名であるかは、少数民族語の可能性も含めて今後の課題とした
い。

中国国境に近いのはホアンスーフィーとドンヴァンであるが、度量衡制度は2地域
で大きく異なる。ホアンスーフィーは面積単位はベトナムのマウとサオを報告してい
るが、その他は完全に中国の影響を受けている単位であったことがわかる。つまり、
中国との交易が盛んに行われていた地域であったことが推測される。

一方、ドンヴァンは中国式の度量衡制度は報告されておらず、長さの単位では少数
民族地域でよく見られる身体尺が見られる。ドンヴァンは、ホアンスーフィーと同じ
く国境に近いが、国境貿易のない山間部の少数民族地域であったことがうかがえる。

ハーザン省内の事例からは、省内における地理的条件、周辺環境によって文化圏が
大きく異なっていることが確認できた。また、度量衡の側面から国境貿易の有無や少
数民族の影響などもうかがい知ることができた。詳細な経済統計などない時代や地域
に対しては、こうした事例もその土地の社会、経済状況に関しての重要な情報となり
得るといえる。

以上から、長さに関しては比較的法定単位のトゥオックで統一されてきたように見
えるが、職業別に用いられている3種類のトゥオックについては相変わらず地域によ
って様々に異なっていた。面積の単位について報告している省は少ないが、2系統の単
位系が1901年と同様確認された。重量は、使用されている単位と相当量（展開方式）
は各省とも同じ方向へ収束しているように見えるが、対応する換算値は2省、3省が同
一の単位系を示すことがないほど、依然として多種多様である。また、計量器である
はかりについても報告がみられたが、はかりの計測可能範囲、種類の数がその地域の
経済規模、取引の大小を反映している事例を提示できた。ラオカイ省やハーザン省で
みられた少数民族、中国の度量衡制度の報告から、こうした国境山間部まで中央およ
び地方行政の管理、権限が及んでいなかったといえることができる。容積については、
いまだ統一とはほど遠い状況であるが、ブレテルのバター缶が米、もみの計量用とし
てかなり普及してきた様子を捉えられたといえる。

第3節 1936年の通達および現地調査報告

(1) 1936年の通達

1936年の通達の発信元は、トンキン理事長官ではなく度量衡地方委員会委員長
(Président de la commission locale des poids et mesures)となっている。この度量衡地方委
員会委員長は、ハードン省の知事が兼任しており、トンキン理事長官からトンキンに
おけるメートル法の施行について、有益な提案をするよう委託されていた。そのため

度量衡地方委員会は各省において実際に用いられている度量衡単位と、その計量器について調査するよう求める通達を 1936 年 11 月 17 日に発信している。

興味深いのは、この調査の目的がメートル法の施行を目指すだけでなく、「残していく必要があれば、その現地の度量衡単位を決定するため」と書かれていることである。つまり、画一的な政策の施行に固執するのではなく、現地の実情に合わせた合理的な政策の立案も視野に入れている。この背景には、2 回にわたる大戦によるフランス本国側の財政の困窮や、世界恐慌、ブロック経済化といった世界情勢の変化も影響していると考えられる。植民地国における不安定要素を出来るだけ排除し、効率的に統治、運営していくためには、現地への譲歩も必要との判断が度量衡統一の動きの中にも反映されているといえるだろう。

この通達には、調査結果を記入する雛形となる表も添付されており、この表を基本として 1936 年 12 月 22 日までに調査報告を提出するよう求めている。表の縦軸には長さ、面積、重さ、容積の項目が並んでおり、横軸には①クウオックグー（ベトナム語）での単位名、②ベトナム度量衡単位での相当量、③メートル法に換算した場合の相当量、④一般に用いられている計量器（その形状と素材）、⑤考察、の 5 項目を書き込む欄がもうけられている。この⑤の欄には、それぞれの単位の相当量の最小値と最大値を記入するよう通達の最後に指示が見られる。

(2) 各省からの現地調査報告

1936 年の通達に対しては、28 省が報告書を提出している¹⁹³。前項でも述べたように、今回対象とする通達は調査表が決められているため、報告内容の選定（どの単位をどのように報告するか）が、報告者によって左右されず、相互に比較しやすい状況である。ハノイ市とバックカン省は、それぞれ都市内、省内複数箇所において行った調査も報告されているため、これら 2 つの事例を個別に取り上げ、次項以下第 3 項「省内における地域差—バックニン省の事例—」、第 4 項「都市内における地域差—ハノイ市の事例—」で検討する。

①長さの単位

各省における長さの単位の使用状況をまとめると「表 4-12」になる。

¹⁹³1936 年の省編成を確認できる資料がないため、1931 年の編成を基準とする（序 表序—1「トンキンの省編成」参照）。23 省：バックザン、バックカン、バックニン、ハードン、ハーナム、ハイズオン、ホアビン※、フンイエン、キエンアン、ランソン、ラオカイ、ナムディン、ニンビン、フックイエン、クアンイエン、ソンラー、ソントイ、タイビン、タイグエン、トゥエンクアン、ヴィンイエン、イエンバイ。4 軍区：カオバン、ハーザン、ハイニン、ライチャウ。4 都市：ハノイ、ハイフォン、ナムディン、ハイズオン。（※：回答なし）

表 4-12 各省で用いられている長さの単位 (1936 年)

単位名	相当長さ	換算値 (メートル)	使用している省
グー (Ngũ)	5 トウオック	2	ハノイ, ランソンを除く全省
トウオン (trượng)	10 トウオック	4	ハノイ, ソンラー, フートを除く全省
リー (Ly)	180 トウオン	720	ランソン
ダム (Dặm)	1000 トウオン	4000	フックイエン
トウオック (Thước*1)	10 タック	0.4	全省
タック (Tấc)	1/10 トウオック	0.04	ハノイを除く全省
ファン (Phân)	1/100 トウオック	0.004	ハノイを除く全省
リー (Ly)	1/1000 トウオック	0.0004	ハノイ, バックザン, バッカシ, クアンイエン, タイグエン, イエンバイを除く全省

*1: トウオック (0.4メートル) は1897年7月2日に定められた法定単位

長さについては、1897 年 7 月 2 日に法定単位、トウオック (thước, 0.4 メートル) が定められた。表 4-12 を見ると、1936 年までにトウオック、及びそれを基本として十進法で展開する各単位はすでにトンキン各省で普及していたことがわかる。

ランソン省とフックイエン省の 2 省では、比較的大きな単位としてリー (ly) とザム (dặm) が使われていたと報告があるが、この相当する長さはやはり法定単位トウオックの 0.4 メートルが基準となっている。その他、表 4-12 以外の単位として、ニンビン省と山間部に位置するソンラー省、カオバン省、ハーザン省、ライチャウ省の各省が、サーイ (sải、尋、16 メートル) とガン (gang、親指の頭から小指の頭までの距離、20 センチメートル) という単位もまだ用いられていると報告している。

興味深いのは、ライチャウ省とソンラー省が、これらの単位名を少数民族語で報告している点だ。ライチャウ省はサーイをヴァー (vả、1.7 メートル)、ガンをカップ (khập、20 センチメートル)、ソンラー省はサーイをヴァー (vả、1.6 メートル)、ガンをクップ (cup、20 センチメートル) と報告し、さらにケン (khèn、khieu tay、両手を合わせた距離)、コー・ム (khôo mư、đốt tay、指の節の長さ) という単位も挙げている。ライチャウ省、ソンラー省、ハーザン省は、これらの単位は身体の一部を使って計るため、人それぞれ長さが異なるとも指摘している。つまり、こうした山間部では長さを示す表現として体の部位の呼称が残っているだけでなく、依然として実際の計測にも体の一部を用いていた、標準化されていなかったことがわかる。

表 4-12 以外にも、1901 年、1911 年と同様に、職業別に専門の単位もいくつか挙げられている。一般的に仕立て屋ではトウオック・キン (60 センチメートル、thước kinh)、建築にはトウオック・モック (42 センチメートル、thước môc)、織物、布地の計測にはヴオン (vuông) が用いられていた。ブオンは相当する長さが一定ではなく、キエンアンでは 30 センチメートルから 40 センチメートルの間、タイビンでは 32 セン

チメートルから 40 センチメートルの間と報告している。また、タイピンはこのブオンを基準に展開する度量衡制度も紹介している¹⁹⁴。

トゥオック・キンについて言及が見られるのはバックザン省、ハードン省、ニンビン省、ソントイ省とハノイ市、トゥオック・モックについてはハードン省、ヴオンについてはキエンアン省とタイビン省のみである。しかし、これは上記以外の省で使用されなくなったということではなく、調査の対象が一般的度量衡とされていたため、一部の職人の中でしか用いられていない度量衡は報告していない可能性のほうが高いと思われる。

②面積単位

1937 年の報告書の結果は表 4-13 の通りである。

表 4-13 各省で用いられている面積単位 (1936 年)

単位名	相当面積	換算値 (m ²)	使用している省
マウ (Mẫu) *1	10 サオ	3600	全省
サオ (Sào)	1/10 マウ	360	全省
トゥオック (Thước)	1/15 サオ	24	19省
タック (Tắc)	1/10 トゥオック	2.4	12省
ファン (Phân)	1/10 タック	0.24	バックニン、ハドン、フンイエン、フート、タイビン
リー (Ly)	1/10 ファン	0.024	バックニン、ハドン、フンイエン、フート、タイビン

例外

リー (ly) に関しては、ハドン、フンイエン、タイビンは 0.04m²

*1: マウ (3600m²) は 1897 年 7 月 2 日に定められた法定単位

面積に関する単位も長さと同様、1897 年 7 月 2 日にマウ (mẫu) が法定単位として定められた。マウ (3600 平方メートル) とサオ (sào 360 平方メートル) は、トンキン内の全ての省で普及していることがわかる。

表 4-13 に見られない単位を報告している省も見られる。バックザン省、バックニン省、フンイエン省とフックイエン省はミエン (miêng) という単位が用いられているが、その相当する面積はやはり法定のサオがもととなっており、9 分の 1 サオ = 40 平方メートル) である。バックニンではミエンの下にタン (thân, 9 分の 1 ミエン、4.44 平方メートル)、ゲー (ghe, 25 分の 1 タン、0.177 平方メートル)、ガン (gang, 4 分の 1 ゲー、0.0444 平方メートル) と展開していく単位も用いられている。これらタン、ゲー、ガン

¹⁹⁴ タイビン省で紹介されているヴオンが基準となる制度は以下の通りである (表記はフランス語史料中の表記のまま)。タム (tâm, 40 ブオン = 14 メートル 40 センチ)、ルオム (luom, 10 ヴオン = 3 メートル 60 センチ)、ヴオン (vuông, 約 8-10 タック tác = 36 センチメートル)、ヌアブオン (nua vuông, 2 分の 1 ヴオン = 18 センチメートル)、ゴンブオン (ngon vuông, 3 分の 1 ヴオン = 12 センチメートル)。それぞれメートル法で相当する長さが示されているが、ブオン自体の長さが 32 センチメートルから 40 センチメートルの間と定まっていないため、あくまで目安の長さである。

も法定のサオを基準とした数値を示しているが、十進法ではなく、不規則な並び方をしている。

フンイエンス、ナムディン省、フックイエンスとハイフォン市は、こうしたマウやサオを基準とする制度とは異なった単位、カウ (khau、4 平方メートル) も用いていたと報告している。これらは、1901 年、1911 年で行政によって用いられていた面積単位系と同一のものと思われる。

面積を計測する時に用いられていた計量器は伍(ngũ)と尺、定規(thước)である。一方で、山間部に位置するランソン省とソンラー省は実際は稲田の面積は米の収穫高で測るとしている。例えば、ランソン省では15カンの米は1カオ(cao)、1タ(tạ)あるいは1ザン(dàn)は1フン(pung)=1マウとなる。

③重量単位

各省における重量単位の使用状況をまとめると表 4-14 になる。

表 4-14 各省で用いられている重量単位 (1936 年)

単位名	相当量	換算値 (kg.g)	使用している省
イエンス(Yến)	10 カン	6 kg	全省
タ(Tạ)	10 イエンス	60kg	ハノイ以外の全省
タン(Tấn)	10 タ	600 kg	ランソン、ハイフォン
カン(Cân)	16 ラン	600 g	全省
ラン(Lạng)	1/16 カン	37.50g	ハノイ、ソンラーを除く全省
ドン・カン(Đồng cân)	1/10 ラン	3.75g	ハノイ、ソンラーを除く全省
ファン(phân)	1/10 ドン・カン	0.375g	21省
リー(Ly)	1/10 ファン	0.0375g	15省

例外

1. イエンス、タ、カンについて

ハーナム、フンイエンス、フート、ソントアイ、ハイフォン: 6.045kg, 60.45kg, 604.5g.

ラオカイ、フックイエンス: 6.4kg, 64kg, 640g

2. ラン、ドン・カン、ファン、リーについて

ハーナム、フンイエンス、フート、ソントアイ、ハイフォン: 37.78g, 3.778g, 0.3778g, 0.03778g.

ラオカイ、フックイエンス: 40g, 4g, 0.4g, 0.04g.

表 4-14 を見ると、トンキン全体で通常用いられている重量単位は、どの省でも同様の単位系を持っている。しかし同じ単位名を用いていても、その相当重量は省によって異なっていたこともわかる。ただ、それも省によって脈絡なく異なっているというよりは、3 つの系統が見て取れる。カン(cân)、タ(tạ)、イエンス(yến)は、カンが 600 グラム、604.5 グラム、640 グラムの 3 系統に分かれ、その後十進法でタ、イエンスと続く。604.5 グラムの系統はハーナム省、フンイエンス省、フート省、ソントアイ省、ハイフォン市の 4 省 1 都市、640 グラムの系統はラオカイ省とフックイエンス省で、その他の省は 600 グラムを基本としている。

リー(ly)、ファン(phân)、ドンカン(đồng cân)、ラン(lạng)も3つの系統に別れ、それぞれリーが 0.0375 グラム、0.03778 グラム、0.040 グラムから十進法でファン、ドンカン、ランと続く。0.03778 の系統はハーナム省、フンイエ恩省、フート省、ソントタイ省、ハイフォン市の4省1都市、0.040 グラムの系統はラオカイ省とフックイエ恩省、その他の省は 0.0375 グラムの系統である。

カン、タ、イエ恩の3つの系統と、リー、ファン、ドンカン、ランの3系統、合わせて6つの系統があるわけだが、それぞれハーナム省、フンイエ恩省、フート省、ソントタイ省、ハイフォン市の4省1都市、ラオカイ省とフックイエ恩省の2省、その他20省の3つに分かれるのも興味深い。

また、1単位あたりの相当重量が 600kg と非常に大きな単位、タン(tân)がランソン省とハイフォン市省から報告されているが、これはトンキン最大の貿易港を有するハイフォン市、中国との貿易が盛んなランソン省は、日常的に規模の大きな取引が行われていたことが度量衡にも反映された結果だといえる。ラオカイ省も中国との国境貿易が盛んで、当時鉄道も中国と通じていたが、その取引量はランソン省には及ばなかったと思われる。例えば、1918年の鉄道統計を見ると鉄道発着輸送量は、ランソン省は発送がラオカイ省の306倍、到着が3.4倍であった¹⁹⁵。この鉄道発着輸送量は、その貨物の載積地や目的地を知ることができないが、その省内での貨物の取引量を知る上で貴重な資料といえる。1936年当時でも、こうした傾向は続いていたと考えられ、取引量に度量衡単位が反映されているひとつの事例といえるであろう。

さらに、ハイフォン市は大口の取引に必要な単位、タンが公式ピクル 60kg を基準として 600kg であったのに対して、タン以下の単位、タ、イエ恩からリーにいたるまで、公式度量衡の相当重量ではない制度を使っていたとの報告があったことも注目に値する(表4-14参照)。貿易港を有し、都市として指定されていたハイフォン市でさえも公式度量衡制度が浸透していなかったとすれば、トンキン全体で、特に民間レベルではいかに多種多様な制度が併存、維持されていたかが推察される。

一方、キエンアン省では唯一ホア(hoa)と呼ばれる単位が見られる。1ホアは7.2グラム、5ホアで1ラン(lạng)=36グラムである。ラン以上の単位、カン、タン、イエ恩、タは、公式ピクル 60kg を基準とした十進法で、表4-14と同様の制度を報告している。

バックザン省からの報告では、宝石、金や銀といった貴金属、高価な漢方薬の材料(雄鹿の角や高麗人参など)を計る際にはラン、はかりにはカン・ティエン・リー(cân tiến ly)を用い、アヘンにはラン、テール(taël)を用いたとある。相当重量はラン、カン・ティエン・リー、テールいずれも 37.5 グラムである。テールについてはバックザン省からしか報告に記載が見られないが、これも、バックザン以外の省では使用されていないということではないであろう。アヘンという特定の産品にのみ用いられる単

¹⁹⁵ TTLTQGI, RST, 77501, Statistiques des chemins de fer de l'Indochine de l'année 1918. No.28, 32.

位であり、ラン(lạng)、ルオン(luong)と同義で用いられている事例も 1901 年、1911 年の報告から数多く見受けられる。筆者は商業統計を閲覧する際、アヘンについても事例を集めたが、トンキン、アンナン、コーチシナいずれの各省もテールを用いている。

計量器に関しては、フックイエン省を除くトンキン各省でロベルヴァルの秤、あるいは天秤ばかり、竿ばかりが普及していた。大きなはかりの腕は木や竹でつくられ、小さいものは骨や象牙で作られていた。分銅は主に鉛、銅、鉄や石製であった。

④容積単位

容積単位について各省からの報告をまとめたのが表 4-15 である。

表 4-15 各省で用いられている容積単位 (1936 年)

単位名	相当量	換算値 (リットル)	使用している省
1. 穀物			
タン(Thang)	2 ダウ	2	ハードン、ハーナム、ソントイ、ハイフォン、ニンビン
トゥン(Thùng)		15-17	ニンビン、フックイエン、ナムディン
トゥン(Thung)	20 ダウ	20	10省
フォン(Phuong)	30 ダウ	30	9省
ホック(Hộc)	60 ダウ	60	ハーナム、ハイフォン、ソントイ、トゥエンクアン
ダウ(Đầu)	10 レー	1	23省
バット(Bát)	1/2 ダウ	0.5	8省
レー(Lê)	1/10 ダウ	0.1	12省
2. 液体			
ズオック(Ruộc)			ランソン、ソントイ、タイビン、ヴィンイエン、ハーザン
ガオ(Gáo)			ソントイ、タイビン、ヴィンイエン

例外

1. タンについて: フックイエン: 4.8リットル
2. トゥン(Thùng)について: バックザン 13 Kg
3. トゥン(Thung)について: タイビン、イエンバイ: 20 Kg, バックザン: 22Kg
4. フォンについて: バックザン: 20kg, タイビン: 40 Kg, ヴィンイエン: 15リットル
5. ダウについて: 8省: 1リットル, 3省: 1kg, 3省: 1リットル以下、モンカイ: 13.5リットル、クアンイエン: 100cm³
6. レーについて: バックザン: 0.13kg

容積単位に関しては、1937 年にいたっても、トンキン内では統一的に用いられていた度量衡制度は見られないということが出来よう。カオバン省、ニンビン省、ライチャウ省からの報告では、容積単位についてはその地域、村ごとに違い、村の中でさえ異なっていると明記している。たとえ同じ単位名を用いていたとしても、その相当量が異なっている場合も多く見受けられる。また、使われていた計量器も様々な素材によって作られ、その形状も多様であった。

トゥン(thung)用の計量器は、省によって立方体であったり筒型であったり、その材料も木であったり金属であったりした。ダウ(đầu)用には木製あるいはブリキで筒型の

計量器が用いられていた。ズオック(ruộc)用のものはやはり木製の筒型の計量器であったが、容積は各省ごとに異なっている。ガオ(gáo)はココナッツの実に柄をつけたものであるため、その実の大きさに左右される。

上記以外にも、民間では日常に使う度量衡としてより簡易な制度、計量器が用いられていたことも指摘されている。例えばバクカン省とモンカイでは竹筒、ニンビン省、クアンイエン省、ハーザン省では石油缶、ライチャウ省、ソンラー省、ニンビン省、キエンアン省ではホップボー(hộp bơ, boîte de beurre)、キエンアン省とニンビン省ではホップスア(hộp sữa, boîte de lait) (ホップ・ボーとホップ・スアに関しては第3章第4節第2項参照)、ソンラー省ではビール瓶が計量器として広く用いられていたと報告がある。ニンビン省では、ネスレのホップボーとメーカー名も挙げている。

(3) 省内における地域差—バックニン省の事例—

バックニン省は省内の各府、各県それぞれに実態調査を行わせ、その結果をひとつにまとめることなく全てを提出している。そのため、これら報告書に依拠することによってバックニン省内における度量衡の実態とその地域差を、府・県レベルで検討することが可能である。調査結果が残っているのは以下の2府8県である。

2府：トゥアンタイン(Thuận Thành)府、トゥーソン(Từ Sơn)府

8県：ティエンズー(Tiên Du)県、ヴォザン(Võ Giàng)県、ザーラム(Gia Lâm)県、ルオンタイ(Lường Tài)県、ヴァンザン(Văn Giang)県、イエンフォン(Yên Phong)県、ザービン(Gia Bình)県、クエズオン(Quê Dương)県¹⁹⁶

以下、2府8県の調査結果を長さ、面積、重量、容積の単位ごとに検討する。

①長さの単位

長さに関してはティエンズー県のみ報告が見られないため、ここではその他2府7県の調査結果を検討する。どの府・県も前節で掲げた表4—12と同様の制度が用いられていた。特に全ての府・県に共通するのは、トゥオック(0.4メートル)を基準としたグー(=5トゥオック=2メートル)とチュオン(=10トゥオック=4メートル)である。

トゥオック以下タック、ファン、リーもそれぞれ十進法によって数値が決まっており、それも表4—12と同じである。ただ、日常的にあまり用いられないためか、リーについてはヴァンザン県、イエンフォン県、ザービン県、クエズオン県が報告しておらず、イエンフォン県ではタック、ファンについても記載がない。

また、仕立て屋が生地の計測に使用する尺について、3つの県から報告が見られる。ヴァンザン県ではフランス語で仕立て屋の尺(thước des tailleurs)と記入し、木製で0.8メー

¹⁹⁶植民地期においてバックニン省には上記の他にドンガン県(Đông Ngạn)があった[Đo Đình Nghiêm, Ngô, Vi Lien và Phạm, Văn Thư 1927: 18]。しかし、1936年の調査報告の中にドンガン県の名を見ることはできず、それが史料の紛失によるものか、県の再編が行われた結果かは定かではない。

トルとしている。トゥーソン県はトゥオック・キン・フエ(thước kinh Huế)=トゥオック・ト・マイ(thước thợ may、つまり仕立て屋の尺)であり、ザーラム県でもトゥオック・キンと書かれた後「仕立て屋で布を計る尺」と説明を付している。トゥーソン県とザーラム県のトゥオック・キンは0.6メートルと報告されている。

②面積単位

面積の単位もティエンズー県のみ報告が見られないため、その他2府7県を対象とする。面積単位に関しては前節表4—13とほぼ同様の制度が見られるが、長さの単位ほど共通性はない。各府・県で共通しているのは、マウ、サオ、トゥオックの3種類であり、これらのメートル法での換算値も同じ値を示している。トゥアンタイン府とヴウザン県、ルオンタイ県以外は、表4—13のようにトゥオック以下タック、ファン、リーが十進法で展開する(ヴァンザン県はリーの記載はない)。

一方で、トゥアンタイン府では公式面積単位と民間で使用されている面積単位の2つの制度を示している。公式面積単位は、表4—13と同様の制度である。しかし、最も小さい単位リーの換算率が10分の1ファン=0.24平方メートルではなく、6分の1ファン=0.04平方メートルとなっている。民間での単位は、マウとサオ以下異なる単位名が使われている。その制度はマウ(3600平方メートル)、サオ(360平方メートル)、ミエン(miếng, 10分の1サオ=36平方メートル)、タン(than, 9分の1ミエン=4平方メートル)、ゲー(ghé, 25分の1タン=0.16平方メートル)、ガン(gang, 4分の1ゲー=0.04平方メートル)である。これは1911年ハイフォン市から報告されている範囲系と同一のものである。

ヴウザン県では、上記の公式、民間の2制度が混ざりあい、ひとつの制度(マウ、サオ以下トゥオック=24平方メートル、ミエン36平方メートル、タン=4平方メートル)として報告されている。ルオンバイ県はマウ、サオ、トゥオック以外の単位は報告されていない。

③重量単位

重量単位はどの府・県も前節表4—14のタンをのぞき、同様の単位、制度を用いている。つまりイエン、タ、カン、ラン、ドン・カン、ファン、リーと展開していく。ただし、トゥーソン府、ティエンズー県、ザーラム県ではカンとランの間にネン(nén, 8分の5カン)という単位が見られる。

また、同じ単位名を使っている、その系統は、1カン=600グラムを基準とする系統と、604.5グラムを基準とする系統の2つに分けられる。604.5グラムを基準としているのはトゥアンタイン府、ティエンズー県であり、ザービン県とクエズオン県は1タは60kgであるが、それ以外は1カン604.5グラムを基準としている折衷型である。その他の1府5県は1カン=600グラムを基準とした制度を用いている。バックニン省の省都であるトゥアンタイン府が、政府が定めた公式ピクル(1ピクル=60kg)を用いて

いないことは興味深い事実である。これらの位置関係を見ると、604.5 グラムの系統はトゥアンタイン府北側からヴォザン県までの間に分布している。

ヴァンザン県、ヴォザン県はドン・カン以下、少量の単位については報告していない。

④容積単位

容積単位に関しては、各府、県ともに非常に多様な単位を報告しており、その傾向、概要を把握するのも難しいほどであった。共通しているのはダウとトゥン(thùng)であるが、その相当量は府、県によって異なっている。その他は表4—15に見られる単位を報告している省も多いが、相当量は様々である。表4—15にない単位の報告も見られ¹⁹⁷、バックニン省内でも府・県レベルで土地固有の独自の制度が根付いていたことが伺える。

(4) 都市内における地域差—ハノイ市の事例—

1936 年の通達に対する回答として、ハノイは市内数ヶ所で現行度量衡制度の実態調査を行い、その結果を報告している。長さと同様の単位に関しては、用いられていた計量器のスケッチも添えられており、当時一般的であった度量衡の計量器を視覚的に理解するうえでも貴重な史料である。本節ではその事例を取り上げ、トンキンで政治、経済の中心であるハノイ市内においての度量衡制度運用の実態を明らかにしたい。

重量に関しては、カン(cân)について調査が行われている。調査地点はハンガオ通り(phố Hàng Gạo, rue de Riz)で1箇所、ハントゥオン通り(Hàng Đường, rue du Sucre)で3箇所、ハンバック通り(phố Hàng Bạc, rue des Changeurs)で2箇所、ハンマム通り(phố Hàng Mắm, rue des Saumures)で1箇所、ハンベール通り(phố Hàng Bè, rue des Radeaux)で2箇所の計7地点である¹⁹⁸。どの調査地点でも1カンは16ラン(lạng)であり、用いられていた計量器は全て竿ばかりであったが、その1カンあたりの相当重量は最小値が570グラム、最大値が610グラムと40グラムの誤差が確認されている¹⁹⁹。7地点のうち4地点で、法定ピクル60kgが基準となって算出された1カン600グラムの原則が守られていた。

¹⁹⁷表4—15に見られない単位はコイ(cỏi、約10リットル、トゥアンタイン府、ザービン県、クエズオン県)、トゥン(thúng、約20リットル、ザーラム県)、ボー(bơ、0.0016-0.0014 m³、ザーラム県)、ガイン(gánh、40リットル、ザービン県、クエズオン県)、ホエ(khoe、約5リットル、ザービン県、クエズオン県)、チェオ(chéo、2.5リットル、ザービン県、クエズオン県)である。

¹⁹⁸通りの名前はすべてフランス語で書かれているが、そのベトナム語名はグエン・バー・チンの『ハノイガイド』内の通り名フランス語、ベトナム語対応表[Nguyễn Bá Chính 1923: 31, 44-46]を参考にした。

¹⁹⁹調査地と調査結果の詳細は以下の通りである。ハンガオ通り20番地(570グラム)、ハントゥオン通り15番地(600グラム)、ハントゥオン通り26番地の2(590グラム)、ハントゥオン通り38番地の2(600グラム)、ハンバック通り75番地(600グラム)、ハンバック通り10番地(590

カン他には、宝石商の用いる単位として、カン・ティエウ・リー(cân tiếu ly)という単位を挙げ、1カン・ティエウ・リーは5ラン(lạng)に相当し、メートル法に換算すると188グラムであったと報告している。このカン・ティエウ・リーの調査地は1箇所、ハンバック通りの121から123番地のみである。カン・ティエウ・リーは、バックザン省からの報告でも名前が挙がっている単位名であるが、バックザンでは37.5グラムであり、5倍の開きがある。

長さについては、ハンバック通り75番地にあるベトナム人の仕立て屋1箇所での調査結果が報告されている。ここでは2つの尺、トゥオック・ター(0.4メートル、thước ta)とトゥオック・キン(0.6メートル、thước kinh)が使われている。これまでの1936年各省における調査でも見てきたように、長さや面積については北部ベトナム全域にわたって統一が進んでいた単位である。ハノイでもおそらく、このトゥオック・ターとトゥオック・キンはメートル法に換算した値も含めて普及しており、その事例を挙げるために1箇所だけ調査し報告したものと推測される。

容積単位は、固体、液体用2種類に分けて調査・報告が行われている。固体用の容積単位、計量器は大市場(grand Marché)で調査され、カー(ca)、ホップボー、ホップスア、ダウゴォ(dầu gồ)の4種類が報告されている(写真4-8、図4-1参照)。

写真4-8

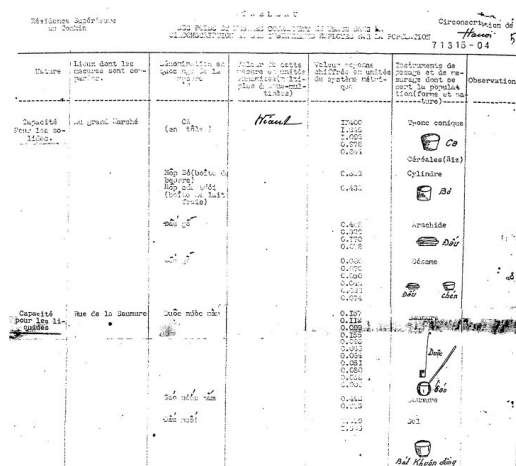


図4-1

計量器名	図	計量器名	図
カー (Ca)		ズオック・マム (Được nước mắt)	
ホップ・ボー (Hộp bơ)	穀物・米用	ガオ・ヌック (Gáo nước mắt)	ヌック・マム用 マム
ホップ・スア・トゥオイ (Hộp sữa tươi)		ダウ・ムオイ (Đầu muối)	塩用
ダウ・ゴォ (Đầu gồ)	落花生用		
	ゴマ用		

ハノイ市からの報告書に添付されていたスケッチ(写真4-8)および、それを基に作成した計量器一覧表(図4-1)。

カーは金属製の円錐形をした計量器で、相当量は5つの事例が挙がっているがそれぞれ異なっている。最も軽いものは644グラム、最も重いものは1.4kgであった²⁰⁰。

グラム)、ハンマム通り62番地(600グラム)、ハンバー通り33番地(605グラム)、ハンバー通り37番地(610グラム)。

²⁰⁰ 5箇所の計測値は、それぞれ644グラム、978グラム、1.092kg、1.245kg、1.4kgであった。

ホップボーとホップスアについては、それぞれ1種類しか換算値の調査結果が挙げられていない。これは、ハノイ市で出回っていたホップボーとホップスアは、規格が同一のもの、あるいは同じメーカーのものであったためであろう。

次にダウ・ゴォは、落花生を計るダウ・ゴォとゴマを計るダウ・ゴォの2種類に分けられている。落花生を計るダウ・ゴォは4箇所での計量が行われ、最小値が0.078kg、最大値が0.488kgでその差は6倍以上である²⁰¹。ゴマを計るダウ・ゴォは落花生のものより小さく、6箇所での計測値が報告され、最小値が0.014kg、最大値が0.08kgであった²⁰²。

液体用の容積単位、計量器はハンムオイ通りで調査が行われ、ヌックナム用ズォック(duộc nước mắm)、ヌックナム用ガオ(gáo nước mắm)、塩用のダウ(đầu muối)の3種について報告されている。ヌックナム用のズォックは11箇所の事例が挙げられているが、全て異なる数値を示しており、最小値は39グラム、最大値は155グラムであった²⁰³。ヌックナム用のガオは2箇所での計測結果しかないが、ガオはココナツの実に柄をつけたもので、ココナツの実の大きさによって、その容積はいくらでも変化するであろう。ここでの報告によれば、1ガオは小さい方は393グラム、大きいほうは492グラムであった。塩用のダウは2カ所での事例が挙げられている。計量器は銅枠の鉢(bát khuôn đồng)で小さい方は1.326kg、大きいほうは2.293kgと報告されている。

上記全ての容積単位は、それぞれが独立した計量単位であり、例えば1カー=10ホップボーというような相互に系統的に展開している制度ではない。

本節では1936年の度量衡現地調査報告を北部ベトナム各省について検討し、さらに省内、市内の事例としてバックニン省とハノイ市の調査結果も紹介した。省、府・県、市の三つの行政レベルを通じて、長さや面積単位については北部ベトナムの広い範囲で比較的統一されていたことが明らかにできた。一方で、重量、容積単位は依然として多種多様な単位名、計量器が各地で用いられていた。面積単位も、全省がマウ3600平方メートル、サオ360平方メートルの報告がみられた。一方で、重量、容積は依然として多種多様な単位名、計量器が各地で用いられていた。カオバン省やライチャウ省といった山間部の地域だけでなく、ニンビン省というデルタに位置し米作が盛んな地域でも「村の中でも異なる」と、1901年、あるいは1898年の通達の回答と同様の状況を報告している。しかし、重量はこれまでのように脈絡なく多様ではなく、3つの系統に収束している様子がわかる。

²⁰¹ 4箇所の計測値はそれぞれ、0.078kg、0.170kg、0.322kg、0.488kgであった。

²⁰² 6箇所の計測値はそれぞれ、14グラム、22グラム、43グラム、50グラム、70グラム、80グラムであった。

²⁰³ 11箇所の計測値はそれぞれ、39グラム、51グラム、58グラム、64グラム、66グラム、80グラム、95グラム、99グラム、112グラム、155グラム、157グラムであった。

次に、ライチャウ、ソンラーが、この調査報告に少数民族語の単位名を、ランソンとソンラーが地方独自の米収穫高による測量法（面積）を、そのまま報告している点も興味深い。1911年には、ラオカイ省とハーザン省でも少数民族や中国の度量衡制度の報告が見られるが、これは地方政府がその土地の実情に合わせて、少数民族やその土地固有の制度の自立性を尊重していた、と捉えることもできる。一方で、中央の権力が山間部にまでは到達していなかったひとつの事例ということもできよう。

また、容積単位については、1927年と同様、使われていた計量器は竹筒、コンデンスミルク缶、ビン、ココナッツの実など、その素材、形状とも様々であったことがわかる。

バックニン省とハノイ市の事例からは、同じ省内、市内においても度量衡、特に重量と容積単位は非常に多様で統一されていなかったことが実証できた。特にハノイ市からの報告では、同じ市内の、同じ通りにおいても番地が異なると相当量も異なるという実情が明らかになった。カオバン、ニンビン、ライチャウが、容積単位についてはその地域、村、村の中でも異なっていると報告しているが、実際にそのことが史料に即して確認できたといえるだろう。

第4節 実際に用いられていた度量衡制度とその時系列変化

本章では、各省別現地調査を用いて、トンキン内、省別、府県都市別にどのような度量衡制度が用いられていたか、およびその時系列変化、度・量・衡それぞれの統一の地域差および時差を明らかにすることを目的とした。

本章の検討を通じて、植民地期末期に至っても度量衡の統一は実現されずにいたが、長さと面積単位は40年ではほぼ北部ベトナム全域で統一されていたこと、重量と容積単位については多種多様な制度が維持されていたことを省レベルから府・県レベル、さらには市レベルで実証することが出来た。

また、こうした多種多様な制度が乱立していた背景には、第3章で実現が困難といわれていた計量検定といった管理体制がほとんど確立していなかったことの裏付けにもなろう。1901年、ナムディン省は「度量衡の統一は効果的な監視・監督を実行可能にするという意味では関心がある」と述べていた。これは度量衡統一による経済的利益よりも、地方行政の管理体制を整える起爆剤となることの方を重要視していたといえる。つまり、それだけ地方行政の権限、管理の基盤が脆弱であったと考えられる。計量検定は、度量衡統一とそれによる経済利益の増加に関係するだけでなく、行政、統治の体制の強化とも大きく関わっているといえる。計量検定が実現できないということは、それだけ地方行政の府・県・村への権力の浸透が進まなかったということの意味しているのではないか。

長さと面積の単位系は統一傾向に向かったと述べたが、これは長さの法定単位トゥオック=0.4メートル、面積の法定単位マウ=3600平方メートルが施行された後、現地調査の担当官がそうした法定単位を使っているよう報告する意識が働いた結果とも考えられる。1901年と1936年の調査報告結果を比較すると、その統一化の傾向ははっきり示されている。一方で、トンキンで最大の貿易港を有し、中国へと続く鉄道の発着点でもあったハイフォン市でさえ、1936年の段階で『「メートル」は全く未知である』、と述べている。つまり、トゥオックは新しい呼称でも概念でもないため、植民地以前から、植民地期を通じて使われ続けている。しかし、そのトゥオックが法定単位としての40センチメートルであったのか、あるいはトゥオックと40センチメートルという関連性について理解がどれほど進んでいたのか、疑問が残る。実際民間では慣習上の40センチメートルとは異なるトゥオックが使われ続けていた可能性も大きい。

さらに、面積の単位系についても1936年バックザン省内のヴウザン県では、一般的に行政と民間で2つに分かれている単位系が混ざり合い、1つとなった独自の単位系の報告も見られる。

おそらく、第3章でも明らかになったように、メートル法を使用する方が合理的な取引や場所において、局地的に統一されていく傾向がみられ、それ以外の領域では1901年とほぼ変らない状況であったことも十分考えられる。

また、本章では各単位系の制度や単位の用いられ方だけでなく、計量器についてもその種類や特徴について提示することができた。各地でどのように取引、売買が繰り広げられていたかについても、報告が複数確認され、各村々、各人がそれぞれ異なる計量器で計り合いをしながら交渉していた姿を捉えられた。これは第3章でもみられた報告であるが、異なる時期、省から複数同様の内容が確認できたことで、こうした状況がトンキンに広汎に広がる一般的な活動の姿であることが実証されたといえる。

リットルも、酒の計量、表記によって広く普及していたとの報告が複数見られるが、これはフランスによって酒が専売制となり、その製造から販売まで強力に管理されていた影響と見られる。

オンボーについても、計量器として1910年の報告から多数確認さえるようになったことから、少なくとも1901年ではそれほど目立っていなかったオンボーは、その後急速にトンキン全土に拡大していったことがわかった。

これらのことから、民間でも入手しやすく便利であるものは、自然と短期間で普及していくことが確認できた。これは第3章で、「ベトナム人は古い慣習に執着する気質がある」と観察したフランス人知事の意見とは異なる行動ということができる。

1901年、ハノイ市からの報告で、市場でも現地の度量衡と共にメートル法が普及しているとあった。これはそれぞれ必要な度量衡単位を相手によって個別的に使い分けられている、つまりハノイ市という都市に居住しているヨーロッパ人の日常生活用の買い

物が行われる市場では、ヨーロッパ人にはメートル法の単位で売り、ベトナム人に対しては慣習の方法で売るという、臨機応変な対応をしていたと考えられる。

以上から、ベトナムにおける度量衡制度は、公式的には長さ、面積単位が統一される傾向にあった。しかし実際は、特に外国貿易や外国人と接触がないところにおいては、40年を通じてほとんど変化がなく、旧来の慣習制度、やり方が用いられていた。

しかし一方で、安価、あるいは入手しやすく耐久性があって便利なものは、民間においても簡単に慣習と取って代わるという側面もあった。さらにヨーロッパ人を相手にするなど、商売にとって利益につながる場合もメートル法は急速に浸透していた。

つまり、民間、都市部、貿易関係、政府・行政関係それぞれが、もつとも必要、あるいは便利な方法を用いて制度を使い分けていたということができ、インドシナ連邦、特にトンキンという「場」は、そうした互いに異なる社会の棲み分けを共有、あるいは許容していた空間であったといえることができる。

結論

本論の目的は、植民地統治によって変容し、画一化される社会がある一方で、根強く地域の多様な固有性、個性が残っていく事例を、仏領インドシナ政権の度量衡統一政策とベトナム各省における実態を通して検討し、①対象地域の地域性（地域差）、②その多様な地域性、個性の存続の背景、を明らかにすることである。

本論は単なる度量衡制度史にとどまらず、①インドシナ総督府、②コーチシナ副総督府、アンナン理事長官府、トンキン理事長官府、③各省という 3 つの行政レベルで、度量衡政策の進展と各省における運用の実態、度量衡の統一が実現できなかった背景を、植民地期前・中・末期という時系列変化通じて総合的に検討する。

さらに、度量衡統一政策と各省における実態を通じて、植民地統治の一端、あり方、およびベトナムの社会的・文化的背景を明らかにすることも本論は目指している。つまり、本論を通じて、インドシナ各地で展開されていた被植民社会の立体的な、そして生き生きとした実態を描くこと、ひいては末端から国家までを通じて植民地時代の社会の個性（変容する社会と根強い地域性の共存）、そして現代にまでつながるベトナム社会・文化の理解を深める一つの事例となることを試みている。

まず、各章から得られた結論について、章ごとにまとめる。

第 1 章では、17、18 世紀を対象とする前史を含めた度量衡制度史の把握のみならず、世界のメートル法受容の中でのインドシナのメートル法導入への動き、世界情勢およびインドシナ植民地統治の中での度量衡関連法の整備とその背景について検討した。また、これらの検討を踏まえて、現在一般的に想定されているトンキン、アンナン、コーチシナの度量衡に見える地域性と度量衡統一の地域間時差について提示した。

その結果、インドシナのメートル法導入は、世界的に見ても早い段階での試みであったこと、インドシナでの度量衡関連法は、植民地統治で独自の政策を実行した各総督（ル・ミル・ド・ヴィレコーチシナ総督、ポール・ドゥメール総督、アルベール・サロー総督）と関係して行われたことが明らかになった。

植民地期、米の計量に主に用いられていたタ(榼、*ta*)、またはピクル(*picul*)と呼ばれる単位を対象として第 2 章で地域的多様性を分析するが、その一単位当たりの相当量が地域、時期によって様々に異なっていた。第 2 章に先立ち、ベトナム固有の単位でなく、植民地政府が導入した外来の単位であるピクルですら、なぜこのように地域ごとに不統一な用いられ方をしていたのかについても検討し、その定義付けを以下のよう

に明確にした。

公式には 1 ピクル=1 タ=60kg であったが、タはその重さの基準が亜鉛銭、銅銭、嘉隆通宝によるなど、長年に渡って各地域で多様な用いられ方をしていた単位であった。そのため、逆に地方役人はそれぞれのタを、単純にピクルと読み替えることにつながり、公式単位のピクルが、地域によって多様に異なる状況となった。

第2章では、各省月別商業統計263タイトル、その中で集めた米穀計量単位の事例約2150事例を対象として、それらの分布や時系列変化を見ることがトンキン、アンナン、コーチシナそれぞれの地域性と、各地域内での地域性の両方を検討した。地域性に影響を与えた可能性の高い、植民地期以前の勢力圏の変遷についても提示した。さらに行政区画を超えた文化的境界についても、それぞれの地域の背景や社会経済状況を踏まえて検討し、共通文化圏の空間的広がりについて、度量衡という具体的事例に基づいて、ひとつの可能性を提示することができた。

具体的に得られた成果は、以下の通りである。

①20世紀初頭は、慣習的制度からフランスの導入した制度への移行期であり、依然として植民地期以前の歴史的、文化的諸要因の影響が強く残っていた。

②3地域の個別的特徴が度量衡の側面から浮き彫りにできた。

- ・トンキン：米作が最も盛んな地域ほど、最後まで変らないという傾向がみられた。つまり、米作が盛んでその歴史も長い地域では、地方ごとに用いられていた慣習が根強く、新しい制度へ移行するのに、より時間を必要とした。

- ・アンナン：農業が盛んな地域から公式単位が普及した。つまり、トンキンほどの

強い慣習を生み出すほどの歴史や主要産業がなかったことが推測された。また、南部特有の単位が見られた地域もあり、度量衡の側面から南部との交易可能性を提示できた。

- ・コーチシナ：特有の計量制度が見られ、その背景には華僑ネットワークの影響に

強く関係していることがうかがえた。

③行政区画を超えての共通文化圏の検討を行い、北部と中部の境界はハーティン省とクアンビン省の間のタムディエン山脈であり、中部と南部の境界は、ビエンホア省であることを、度量衡とその周辺分野の状況から明らかにした。また、フランス植民地期のインドシナ研究においては、行政区画の枠に規定された各地域の研究が行われてきているが、そうした対象地域の設定が必ずしも十分ではない可能性も示唆できたと言える。

第3章では、度量衡統一に関する各省の賛否と理由を、トンキン理事長官が発信した度量衡統一に関する通達（1898、1910、1921、1927年）に着目し、その時系列変化や地域性を総合的に論じることを目的とした。具体的な成果は以下の通りである。

①メートル法普及地域は中国人、外国人と取引のあるベトナム人や鉄道といった場所に限られ、日常での取引では多様な慣習が併存していた。

②計量検定の実施に難色を示される状況が続いており、これは計量検定の伝統がないこと、および統治、管理の基盤、制度が脆弱であったことを示唆している。

③植民地統治の範囲は制限的であったこと、特に少数民族地域や山間部では、度量衡関連のアレテに対して制限的条項や特別措置を求めており、各地において均質的な統治体制が整っていなかったことが明らかとなった。

④全面的、強制的、早期実現といった強硬姿勢には反対であり、段階的に導入する方法が志向されていたことから、フランスによる統治が必ずしも圧政的ではなく、現地の実状を考慮した上で政策が練られていたことが明らかとなった。

第4章では、各省別現地調査を用いて、トンキン内、省別、府県都市別にどのような度量衡制度が用いられたか、およびその時系列変化、度・量・衡、それぞれの統一の地域差及び時差を明らかにすることを目的とした。第4章を通じた検討の結果、植民地期末期に至っても度量衡の統一は実現されずにいたが、長さと面積単位は40年でほぼ北部ベトナム全域で統一されていたこと、重量と容積単位については多種多様な制度が維持されていたことを省レベルから府・県レベル、さらには市レベルで実証することが出来た。しかし一方で、行政文書上ではなく、民間でそうした統一の傾向が実際にあったかどうか、疑問が残る。また、計量器として使われていたオンボーは1910年前後から広汎に普及したことから、民間でも入手しやすく便利なものは急速に広がることが確認できた。さらに、民間、都市部、貿易関係、政府・行政それぞれが、自分たちの利益や需要に応じて制度を使い分けており、こうした互いに異なる社会の棲み分けが共有、あるいは許容されていた空間であったことを明らかにした。

補論では、第一に、政府側の発行資料としてインドシナの官製年報を、第二に、社会経済史研究から代表的な研究者の文献と取り上げ、その中でみられる紹介、記述、事例をできるだけ集め、整理を行った。そしてそれら文献・史料間の不一致の度合いと、その齟齬がなぜ起こるのか、現在における植民地期度量衡研究の状況の把握と問題点を提示した。大きな問題は、それぞれの文献資料の度量衡制度に対する理解が部分的であること、ベトナム語、フランス語、漢文中の単位名の訳語が統一されておらず、またベトナム語の声調・発音記号の欠落による誤解、誤訳が頻繁に生じている可能性が高いこと、であった。さらに、各文献資料は、互いにそれぞれ典拠を明らかにしないまま列挙しているため、使用される単位名とその定義がさらに混乱している状況にあることが具体的に明らかとなった。

補論を含め、本論では研究史上で取り上げられてきた度量衡制度、計量器を整理し、全体像を含めて提示しただけでなく、第2章から第4章の報告から今まで研究史上で見ることの出来なかった多くの度量衡単位についても、実態に即した形で体系的に紹介できた。これも本論の成果の一部であると自負している。

さらに、度量衡統一政策と各省における実態を通じて、植民地統治の一端、あり方、およびベトナムの社会的・文化的背景を明らかにすることも本論は目指している。こ

れら2点の課題について、本論における考察から導き出された結論は次のようである。

まず、植民地統治の実態について度量衡から得られた知見をまとめたい。

メートル法の導入やその法案整備の過程は、独自の政策で知られる総督によって進められた。しかし、総督、および地方行政の公布する法令の拘束力については、度量衡関連の法令公布後も、各地で模索が続けられていたことから、法令の実施は地方政府に委ねられていたことがうかがえる。

また、フランス植民地政権の権力の浸透については、特に村落への浸透について1904年以降本格化した[Hickey 1964: 178]、あるいは1880-1890年代に土地所有権確定事業が展開され、それが植民地権力の村落レベルへの浸透を伴っていた[松尾 2000: 285]とされる。しかし、ナムディン省が1901年に管理の確立を図る面でも、度量衡の計量検定制度に関心を示していたこと、また省内で府・県レベルでも様々に度量衡制度が異なっていたことを考えると、少なくとも管理、監督を行うに必要な地方行政の組織は確立されていなかったということもできよう。あるいは、第4章で指摘したように、異なる背景を持つ人々、集団による棲み分けが共有、許容されていた社会ともいうことができ、植民地統治の権力の浸透も必要に応じて、局地的、あるいは一時的に行使、実行されていた可能性も示唆される。

さらに地方行政に関して、各省の行政機関においてベトナム人高級官吏の役割はこれまでの歴史研究でも軽視されてきた。しかし実際は非常に重要な役割を果たしていたことがポワソン氏によって指摘されている[Poisson 2006: 441, 444]。今回各省知事の回答に添付されているベトナム人高級官吏が作成した漢文、ベトナム語、フランス語の報告書などからも、かなり活発に調査や進言を行っている様子が明らかになってきた。各省知事が回答のなかで示している意見も非常に具体的で多岐にわたっているが、これが多くの知事はベトナム人高級官吏からの報告を受け、それを取り込んだ上で回答しているからにはほかならない。また、中央・地方行政が現地情勢を理解しようと努力している姿勢があったこともうかがえる。

一方で、こうした行政文書のやり取りは活発にあったものの、40年を通じて誰も何も積極的に行動を起こしていない、ということも指摘しなければならない。例えば、1921年の報告でナムディン省の現状報告が明瞭に述べているように、民間レベルでもコンデンスミルク缶など入手しやすく便利なものは自然と普及しており、誰も旧式の度量衡制度に固執しているわけではない。本当に必要であれば大量の見本を配る、憲兵を導入して普及を促進する、といったこともできた。また、複数の知事が述べていたように、外国との取引があるところではメートル法は早期に普及しており、国益や物資調達に必要なところだけメートル法が普及していればそれで良かったと考えることもできる。もちろん、財政的な問題があったのは確かであるが、ここにもお金のか

かる植民地経営はしない、というフランス式植民地経営の一端と、実際は誰も責任を取りたくなかったという官僚主義が表れているのではないだろうか。

ここで、植民地以降、ベトナムにおける度量衡の状況について若干補足しておきたい。1949年12月18日、経済省大臣のファン・アイン(Phan Anh)は、ホーチミン主席に対して、度量衡の現状を以下のように述べた上で、統一的度量衡実現のための制度を要望している。

現在、各省における我が国の度量衡制度は非常に複雑である。各計量方法は不十分で、唯一のものはない。ある場所では、メートル、キログラムといった国際的に認められた方法を適用しているが、ある場所では旧来のトゥオック・ター(thước ta)、カン・ター(cân ta)、ダウ(đầu)、トゥン(thùng)などの粗末な方法を使っている。各省、各県それぞれで統一されていない。米の計量に10連区(liên khu)ではノイ(nồi)、トゥン(thùng)、ラー(là)を使い、3連区ではトゥン(thùng)、フウオン(phương)、ダウ(đầu)を使っている。村々によっても異なっており．．．（中略）。

こうした状況は、度量衡の統一や商業の進展に大きな障害となるため、すぐに規定が必要である（以下、略）[Việt Nam Dân Quốc Công Báo 1950(số 1): 7 (tờ trình)]。

つまり、1945年以降も植民地期と同様の状況が続いていたことがわかる。これを受けて、1950年1月20日に、度量衡に関する国家主席令(sắc lệnh)が出された[Việt Nam Dân Quốc Công Báo 1950(số 1): 7 (tờ trình)]。この国家主席令は全11条で構成されており、単位名から一切のベトナム慣習度量衡単位名（トゥオック、マウ、ダウなど）が排除されている。表記は全てメートル法単位で、音をベトナム語表記に合わせたもの（例えばメートルはメツ(mét)）が示されている。計量器に関しても、第4条から第6条にかけて規定されており、計量検定の条項も罰金の額も含めて第7、第8条で提示されている。

しかし、少なくとも面積単位のマウは現代でも用いられており、こうしたメートル法による単位系の浸透は、植民地期以降でも時間を要し、すぐには達成されなかったことが推測される。

次に度量衡が不統一であったベトナムの社会的・文化的背景について考察した結果は、以下のようにまとめられる。

①阮朝時代から度量衡問題は認識されていたが、日本のような升改めといった計量検定の制度や組織が存在していなかったことが今回の回答から明らかになった。そのため、法律はあってもそれに従って統一的計量器を用いるという概念が育っていなかったと考えられる。

②同一単位名による多種多様な制度が乱立していたことも背景として挙げられる。ベトナムは各王朝、各地域によって同一単位名でも異なる使い方をしてきた、その単

位名をメートル法のベトナム語名に当てたため、余計に混乱した状況があったのではないかと考えられる。

③人々の意識としても、度量衡統一の必要性や利点が見いだせなかった、そのためメートル法がなかなか末端にまで浸透しなかったといえる。自発的に度量衡研究の組織や機関誌の発行、メートル法実施に向けた働きかけ、運動が見られなかったことから、そうした意識がうかがえる。個人的には、南風雑誌の中でティエンが度量衡統一の必要性を説いたり[Nguyễn Hữu Tiên 1934: 333-336]、地方紙において村や人によっても異なる不都合についての訴えを見ることができるが²⁰⁴、それが民間を巻き込んで大きな運動にはつながらなかった。

今回の分析から得られた知見は以上であるが、この社会的・文化的背景の考察結果③で言及した「人々の意識」に関しては、従来教育が不十分である、利点が理解できない、不正によって利益を得ているといった否定的な理由が度量衡統一に関わる通達とその回答の中では主であった。

しかし、各省知事の回答から見られたように、植民地期ベトナムの一般的な商売規模というのは非常に限定的であり、生産者と消費者が中間業者を介さず直接売買を行うことが多かった。北部は村落共同体も強固であり、生産から消費の多くの部分が共同体内で完結していたと考えられる。ほとんどが顔見知りの社会の中では、おそらく「買い物」という行為自体がコミュニケーションの一部でもあり、さらに「買い物」の目的が薬の調合や工業製品の生産といった正確さを要求されるものではなかったことを考えると、「正確さ」に対する概念がもともと異なっていたことも考えられる。こうしたベトナムの社会的・文化的背景から植民地時代の度量衡統一問題を議論するのは困難であるが、最後にその糸口として現代の事例から考えてみたい。

筆者は2008年と2012年に度量衡についての現地調査を行っている。2008年ではフエ、ホイアンを中心に、阮朝の度量衡制度と中部の慣習的度量衡についての調査を行った。2012年では国家機関の側面から度量衡の統一や計量器の管理、検定についての歴史と現状について、また個人的見解として度量衡に対するベトナム固有の文化や概念があるかどうかについて、科学技術省度量衡品質基準総局度量衡院でのインタビュー調査を行った。また、現在売買に使用している計量器と計量器の検定、統一について、市場管理委員会および市場における販売者、消費者、周辺の行商人への調査、インタビューを行った。地域は、首都ハノイ市内、北部山間部であるバクカン省とタイグエン省、および南部中心都市ホーチミン市内とした。

興味深いのは、現在でも計量器に関して北部と南部で置かれている状況が大きく異なる点である。

²⁰⁴ 1936年11月発行のニンビン省の新聞(Tỉnh Ninh Bình Novembre 1936 số 3 tháng mười năm bảo đại 11, p.6)による。

ハノイ市内では、現在でも古くから使われている竿ばかりが現在でも見られたが、近年市場の中では近代的な台ばかりに取って代わられている。こうした移行は国、あるいは市場管理委員会などの組織が規定して行われたのではなく、販売人個人の判断で自然に行われたことが分かった。その年代は2000年代初め頃からであり、理由としては竿ばかりよりも計量が簡便であり、消費者に目方をすぐ見せられるためトラブルを避けられることが挙げられている。一方で行商人においては今でも竿ばかりを使っている姿がみられる。竿ばかりを使う理由として、軽量であること（公安の取り締まりの際すぐに逃げられる）、使用する人が良心を持っていれば台ばかりと同じぐらい正確に計量できること、としている。ハノイから北に170キロメートルのバクカン省と80キロメートルのタイグエン省においては、状況はハノイと同様であったが、行商人の数が近年激減しているとのことであった。ハノイ市では現在でも行商人による野菜、果物、花、日用品などの販売が多く見られるが、これは昔からの伝統が残っていることに加えて、時間的に忙しく、生活時間も多様化している都会人のニーズに合った商売として需要があることが考えられる。地方においては、市場の再建といった近代化も進んでいる一方で、生活スタイルは依然と比べ大きな変化がなく時間的ゆとりがあるため、行商人の需要が低下する現象が見られるようである。

ホーチミンにおいては、竿ばかりはほとんど見ることができず、北部よりもかなり早い段階で民間レベルでも台ばかりに移行していたことがわかった。正確な年代は、インタビューする人によってかなりひらきがあるが、ビンタイ(Bình Tây)市場で米を売っているチン(Chín)氏は、「40年この市場で商売をしているが、40年間ずっと台ばかりを使っている」と話、また同じく米を売っているトゥー(Tu)氏も、「80年間ここで米を売っているが、最初から台ばかりを使っている」と答えている。また、北部では竿ばかりを売っている店が見られるが、ホーチミン市では計量器を扱う店を数軒訪ねても、「そんな昔の古いはかりはどこにも売ってない」と言われるに留まり、見つけることができなかった。この地域差は南部は村落共同体意識が希薄であること、大規模な取引が昔から盛んであり、また華僑の影響も強く中間業者を介在した商品流通網が確立していること、など北部と対照的な社会・文化基盤に起因していることが考えられ、非常に興味深い。

2012年7月26日に行った科学技術省度量衡品質基準総局度量衡院計画協力室室長グエン・マイン・フン(Nguyễn Mạnh Hùng)氏へのインタビューによれば、女性は市場での経験が豊かであり「目で見れば」それが十分か足りないかわかることであるし、固形物はグラムではなく個数で判断する方が合理的であることも指摘している。これは1901年ハノイ市のフランス人市長が述べていた、各家庭各個人消費するものだから、金額、季節、品質から、おおよその見当がつけられる、とする意見と主旨は同じであり、100年を経た現在でも同様のことが言われ続けていることになる。

実際筆者は2012年7月27日に絹織物を生業とするハノイ市南郊ヴァンフック村(Làng Vạn Phúc)で調査したところ、現在に至っても各工場、各家の織機に取り付けられている尺は、正確に100センチメートルではなかった。しかし、102センチメートル、101センチメートルと100センチメートルより長くなっている。同村で絹製品の生産および販売をしているグエン・ティ・タム(Nguyễn Thị Tâm)氏によれば、これは保管中生地が縮み買い手に損が出ることを防ぐためであり、昔から家によって100センチメートルに1-3センチメートル長めに尺を作っていたという。

「王の掟は村の決まりに及ばず」「国の法は村の垣根まで」ということわざに象徴されるように、民間レベルでは国の法律より自分の属する共同体の規律が重視される。さらに「情(tình cảm)」が人間関係、社会生活においてもっとも重視される伝統がある。そうした背景の上に、ベトナムの商売の方法は売り手も買い手も女性であること、北部では中間業者が介在せず自分で生産したものを直接消費者に売る方式が圧倒的に多いこと、消費者も商品の購入の目的は個人的生活内で消費やものを作るためのものであり、その目的が達成される範囲内であれば細かな正確さは必要ないこと、などの特徴があるといえる。

ベトナムには、筆者が調査地で頻繁に聞いたカン・トゥオイ(cần tươi)、あるいは中間業者でもザー・ヴォン(gia vốn)という、「多めに計る」を意味する言葉がある。これらの言葉に象徴されるように、消費者の心理を尊重し、思いやる、そうした中で生きていく、という共同体文化があることも一つの側面として捉える必要があるように感じる。

以上が、本論で得られた結論である。本論は仏領インドシナ連邦のベトナム全域を対象としていることから、範囲が広く、各地域が置かれている地理的条件や歴史的背景も異なり、検討が非常に困難であった。一方で、植民地期を通じて、各地域で多種多様な度量衡制度、単位が用いられていたことも実証でき、つまりこれは一部地域を対象とした個別の事例のみを検討しても、その導かれる結論を相対化できず、学術的貢献が制限されるという結果につながるといえる。本論全体の検討を通じて、本論が目指した一国全体の分析と、それを可能とする同質性の高く体系的な史料に依拠する方法論は、現時点での植民地期ベトナムの度量衡研究には必要であり、基礎研究としての役割を十分果たすことができたと考える。

また、度量衡は商品流通や商業形態、交通網、各地域、各民族における歴史・文化的背景など、非常に多様な分野と密接な関係をもっており、こうした分野についての幅広い知識なしには、得られた研究成果を深く理解し、意味付けを行うことは難しく、大変苦勞した。こうした多岐にわたる分野からの検討は、本論では十分とはいえないが、今後は度量衡を主軸に置くのではなく、これら関連分野を主軸とした研究も平行して進め、より多面的で奥行きのある度量衡研究につなげる必要がある。こうした度

度量衡研究の深化は、関連する学問領域に対しても、ベトナム社会、地域の理解に貢献できる相互作用を有するものである。これは筆者が目指す中長期的課題「植民地期ベトナムにおける「地域」の形成・展開とその相互関係・重層的構造」に通じる。

さらに、ベトナムにおけるベトナム人研究者による歴史研究の現状として、個別具体的テーマによる実証分析の欠如が問題として挙げられる。例えば、度量衡というテーマはすでに「小さすぎ」る。さらに、度量衡が多様であることは「当たり前」であり、それが各地域によって異なる背景がある、あるいは各地域の様々な社会、経済条件が度量衡に影響を与えていることも「当たり前」である。しかし、その「当たり前」とされる一般論は、実際最も実証分析が難しい部分でもあり、またその根拠は具体的に示されていない。

こうした一般論、歴史の通説は研究する対象とされず、その研究の意義さえ大半の研究者には理解してもらえない。

個別具体的なテーマから実証的に分析し、再検討することは、単にその個別のテーマに対する理解だけでなく、その周辺の知見にも大きな貢献が期待できる可能性があるといえる。本論が、ベトナムにおける歴史研究にこうした一般論の再検討の意義と可能性を少しでもうたえることができたなら、それは望外の喜びである。

最後に、本論の今後の課題についてまとめたい。

先に述べたように、度量衡およびその地域性は関連する社会・経済分野の理解なしには分析することはできない。そのため、度量衡の地域性、共通文化圏について分析を深めるためには、歴史的背景、地理的条件、社会経済的条件などに規定されるそれぞれの「地域（空間）」の遠近、相互関係を検討していくことが求められる。これは、本研究が目指す中長期的課題（序第1節(2)「問題の端緒」参照）につながる。

今後は、①交通網の広がりによる移動・流通可能範囲の特定および②ヒト・モノの移動による流通圏の特定（鉄道輸送統計、水路の航行可能性に関する史料、バス路線開設に関する史料、トラム輸送統計、仏印統計書内の交通インフラ整備統計などを使用する）、③通貨制度による共通文化圏の特定（商業統計によって収集した各省月別の使用通貨の種類と1ピアストルあたりの現地通貨換算率を使用する）、④物価変動から見る共通商業（市場）圏の特定（商業統計上の事例を使用する）、について検討を進め、そこから得られた成果を度量衡の地域性分析にも応用していきたいと考えている。

また、度量衡の地域性については、本論では特に米に関わる単位の事例によって分析を進めた。しかし他の主要製品の事例、特に塩、酒といった専売制の商品と、一般食料品（とうもろこし、肉、魚、魚醬など）にも対象を広げていきたい。その理由は、これらの度量衡の統一の時期や地域的時差を比較することで、植民地政権による政策の影響と、一般における状況の変化の有無を、さらに検討することが可能となるから

である。植民地権力の浸透や、それぞれの集団、社会の棲み分けが共有、許容されていたことに対しての考察を深めることにもつながろう。

本論では、植民地統治の地方への浸透力についても考察した。また、度量衡の計量検定制度が行政スタッフの人員不足が大きな要であったことも明らかにした。しかし、それらをより具体的に実証するためには、各省における行政機関の検討が必要である。仏領インドシナ連邦に関して、こうした地方行政の組織や構成については、その時系列変化も含め各省別に詳細に検討されていない²⁰⁵。度量衡統一が難しいとする理由として、こうした地方行政の担当部署やスタッフの不足を回答で挙げている省も少なくないが、その実態は不明である。以上から、度量衡統一政策を最前線で担う地方行政の実態について明らかにすることは、各省からの回答分析をより多面的、総合的に検討するためにも必要である。筆者は1897年から1930年代にかけて、各省内部の部局名、人員数の推移を検討できる資料を収集済みであり、各省の地方行政の組織と構成とその変遷を明らかにすることができる。

現地調査に関しては、2012年の調査を通じて、現在ベトナムで使用されている台ばかりのほとんどがニョン・ホア(Nhon Hoa)社という計量器製作会社によるものであること、ハノイ市内の行商人や農村部で使われている竿ばかりを専門に製作する職業村がハノイ市近郊にあることが分かった。このニョン・ホア社および竿ばかり作成専門村の生産規模や販売実績の経過をたどれば、民間における計量器統一の時期や地域的傾向がより鮮明に把握できる。さらに、これまでは都市部（ハノイ市、ホーチミン市）と山間部での調査しか行うことができなかったが、稲作といった農業が盛んであるデルタ地帯の農村部ではまた異なる状況が見られる可能性があり、そのことについては複数の研究者から指摘を受けている。また、市場における計量検定は主に市場管理局という国の機関が行っていることも分かった。これら農村部や市場管理局における調査を行うことも、ベトナムにおける度量衡、計量器統一の全体像や地域差を把握するために重要であり、今後継続してこれら課題に取り組む予定である。

これらの研究については、順次成果を発表していく予定である。

以上の課題については引き続き取り組み、度量衡だけでなく、本研究の目指す中長期的な課題について、明らかにしていきたいと考えている。

²⁰⁵ 地方行政の概要は岡田[2010]、特定の省についてはポワソン[Poisson 2006]があるが、トンキン全ての省を対象とし、またその時系列変化まで検討したものは管見の及ぶところまだみられない。

参考文献

(一次史料)

ベトナム国家第一文書館所蔵

(1)インドシナ総督府コレクション(Fonds du Gouvernement Général de l'Indochine, GGI)

各省商業統計(Statistiques commerciales /mercuriale de la province de...)

分類記号L7

史料番号	省名	年	史料番号	省名	年
No.4006	Lao Kay	1901-1902	No.9471	Quang Nam	1905
No.4007	Hanoi	1907	No.9472	Thanh Hoa	1905
No.4008	Bac Giang	1908	No.9473	Thua Tien	1905
No.4009	Bac Giang	1908	No.9475	Binh Dinh	1906
No.4018	Bien Hoa	1900-1903	No.9476	Binh Thuan	1906
No.4019	Bac Lieu	1904-1909	No.9477	Dac Lac	1906
No.7974	Hai Duong	1901	No.9478	Ha Tinh	1906
No.9381	Bac Ninh	1900-1903	No.9479	Nghe An	1906
No.9382	Bac Kan	1901-1902	No.9480	Ninh Thuan	1906
No.9383	Bao Lac	1901-1903	No.9481	Quang Ngai	1906
No.9384	Bao Ha	1901-1903	No.9482	Quang Tri	1906
No.9385	Bac Quang	1901-1903	No.9483	Quang Nam	1906
No.9386	Bac Giang	1902-1903	No.9484	Thua Tien	1906
No.9387	Cau Do	1901-1903	No.9485	Binh Dinh	1907
No.9388	Cao Bang	1901-1903	No.9486	Binh Thuan	1907
No.9389	Coc Lieu	1903	No.9487	Dac Lac	1907
No.9390	Hai Phong	1900-1907	No.9488	Ha Tinh	1907
No.9391	Hai Duong	1900-1903	No.9489	Khanh Hoa	1907
No.9392	Hung Yen	1900-1903	No.9490	Nghe An	1907
No.9393	Ha Nam	1900-1903	No.9491	Nghe An	1907
No.9394	Hoa Binh	1901-1903	No.9492	Phu Yen	1907
No.9395	Hung Hoa	1902-1903	No.9493	Quang Binh	1907
No.9396	Ha Giang	1900-1903	No.9494	Quang Nam	1907
No.9397	Lang Son	1902-1903	No.9495	Quang Ngai	1907
No.9398	Mon Cai	1901-1903	No.9496	Quang Ngai	1907
No.9399	Nam Dinh	1900-1903	No.9497	Thanh Hoa	1907
No.9400	Ninh Binh	1901-1903	No.9498	Thua Tien	1907
No.9401	Phu Lo	1903	No.9499	Thua Tien	1908-1909
No.9402	Phu Lien	1901-1903	No.9500	Binh Thuan	1907-1908
No.9403	Quang Yen	1900-1903	No.9501	Dac Lac	1908
No.9404	Son Tay	1901-1903	No.9502	Ha Tinh	1908
No.9405	Thai Binh	1900-1903	No.9503	Khanh Hoa	1908

No.9406	Tuyen Quang	1900-1902	No.9504	Nghe An	1908
No.9407	Vinh Yen	1900-1903	No.9505	Ninh Thuan	1908
No.9408	Van Vu	1901-1903	No.9506	Phu Yen	1908
No.9409	Van Linh	1901-1903	No.9507	Quang Binh	1908
No.9410	Yen Bay	1900-1903	No.9508	Quang Nam	1908
No.9411	Bac Giang	1907	No.9509	Quang Ngai	1908
No.9412	Bac Kan	1907	No.9510	Qnang Tri	1908
No.9413	Bao Loc	1907	No.9511	Thanh Hoa	1908
No.9414	Bac Ninh	1907	No.9512	Thua Tien	1908
No.9415	Cao Bang	1907	No.9513	Binh Dinh	1909
No.9416	Ha Dong	1907	No.9514	Dac Lac	1909
No.9417	Ha Giang	不明	No.9515	Nghe An	1909
No.9418	Ha Nam	1907	No.9516	Ninh Thuan	1909
No.9419	Ha Nam	1907	No.9517	Phu Yen	1909
No.9420	Hai Phong	1907	No.9518	Quang Binh	1909
No.9421	Hai Ninh	1907	No.9519	Quang Nam	1909
No.9422	Hoa Binh	1907	No.9520	Qnang Ngai	1909
No.9423	Hung Yen	1908	No.9521	Quang Tri	1909
No.9424	Kien An	1907	No.9522	Thanh Hoa	1909
No.9425	Kien An	1907	No.9523	Bac Lieu	1900-1903
No.9426	Lao Kay	1907	No.9524	Ba Ria	1900-1903
No.9427	Nam Dinh	1907	No.9525	Ben Tre	1900-1903
No.9428	Ninh Binh	1907	No.9526	Can Tho	1900-1903
No.9429	Phu Tho	1907	No.9527	Cho Lon	1900-1901
No.9430	Phuc Yen	1907	No.9528	Cap Saint Jacques	1900-1903
No.9431	Quang Yen	1907	No.9529	Chau Doc	1900-1903
No.9432	Son La	1907	No.9530	Go Cong	1900-1903
No.9433	Son Tay	1907	No.9531	Gia Dinh	1900-1903
No.9434	Thai Binh	1907	No.9532	Ha Tien	1901-1903
No.9435	Thai Nguyen	1907	No.9533	Long Xuyen	1900-1901
No.9436	Tuyen Quang	1907	No.9534	My Tho	1900-1903
No.9437	Lai Chau	1907	No.9535	Rach Gia	1898-1903
No.9438	Vinh Yen	1907	No.9535b	Sa Dec	1900-1904
No.9439	Yen Bay	1907	No.9536	Soc Trang	1898-1903
No.9440	Bac Kan	1908	No.9537	Thu Dau Mot	1900-1903
No.9441	Bao Lac	1908	No.9538	Tan An	1900-1903
No.9442	Cao Bang	1908	No.9539	Tay Ninh	1900-1903
No.9443	Hanoi	1908	No.9540	Tra Vinh	1900-1903
No.9444	Hai Phong	1908	No.9541	Vinh Long	1900-1901
No.9445	Ha Dong	1908	No.9542	Ba Ria	1904-1909
No.9446	Ha Giang	1908	No.9543	Ben Tre	1904-1909
No.9447	Ha Nam	1908	No.9544	Bien Hoa	1904-1909
No.9448	Hai Ninh	1908	No.9545	Can Tho	1904-1909
No.9449	Hai Duong	1908	No.9546	Cap Saint Jacques	1904-1909
No.9450	Hung Yen	1908	No.9547	Chau Doc	1904-1909

No.9451	Hoa Binh	1908	No.9548	Cho Lon	1904-1909
No.9452	Kien An	1908	No.9549	Gia Dinh	1904-1909
No.9453	Lao Kay	1908	No.9550	Go Cong	1904-1909
No.9454	Lao Kay	1908	No.9551	Ha Tien	1904-1909
No.9455	Nam Dinh	1908	No.9552	My Tho	1904-1909
No.9456	Ninh Binh	1908	No.9553	Rach Gia	1904-1909
No.9457	Phu Tho	1908	No.9554	Sa Dec	1904-1909
No.9458	Phuc Yen	1908	No.9555	Soc Trang	1904-1909
No.9459	Quang Yen	1908	No.9556	Tan An	1904-1909
No.9460	Son Tay	1908	No.9557	Tay Ninh	1904-1909
No.9461	Son La	1908	No.9558	Thu Dau Mot	1904-1909
No.9462	Thai Binh	1908	No.9559	Tra Vinh	1904-1909
No.9463	Thai Nguyen	1908	No.9560	Long Xuyen	1909
No.9464	Tuyen Quang	1908	No.9561	Vinh Long	1909
No.9465	Yen Bay	1908			
No.9466	Vinh Yen	1908			
No.9467	Khanh Hoa	1905			
No.9468	Binh Dinh	1905			
No.9469	Binh Thuan	1905			
No.9470	Nghe An	1905			

各省商業統計(Statistiques commerciales /mercuriale de la province de...)

分類記号L7

史料番号	省名	年	史料番号	省名	年
No.9034	Hoa Binh	1901	No.9072	Ha Nam	1910
No.9035	Hung Hoa	1901	No.9073	Ha Tinh	1909-1910
No.9036	Nam Dinh	1901	No.9074	Hai Ninh	1909-1910
No.9037	Phu Lien	1901	No.9075	Hung Yen	1910
No.9038	Quang Yen	1901	No.9076	Kien An	1910
No.9039	Tuyen Quang	1901	No.9077	Lang Son	1910
No.9040	Bac Giang	1909	No.9078	Ninh Binh	1910
No.9064	Bac Giang	1910	No.9079	Nghe An	1910
No.9065	Bac Kan	1910	No.9080	Phu Yen	1910
No.9066	Binh Dinh	1910	No.9081	Phuc Yen	1910
No.9067	Cao Bang	1909-1910	No.9082	Quang Binh	1910
No.9068	Dac Lac	1910	No.9083	Quang Nam	1910
No.9069	Ha Dong	1910	No.9084	Quang Ngai	1910
No.9070	Ha Giang	1910	No.9085	Thai Nguyen	1910
No.9071	Hanoi	1910	No.9086	Tuyen Quang	1910

(2) トンキン理事長官府コレクション(Fonds de la Résidence Supérieure au Tonkin, RST)

No.71312. Extension au Tonkin de la réglementation des poids et mesures en application en Cochinchin et au Cambodge 1899-1937.

No. 71315. Arrêtés et circulaires du Gouverneur général.1886-1937. No.71315-02, Application au Tonkin et en Indochine du système métrique français 1901.

No.71315-01. Arrêtés et circulaires du Gouverneur général, Rapport des chefs des province 1886-1937.

No.71315-02. Application au Tonkin et en Indochine du système métrique français 1901.

No.71315-03. Application du système métrique française en Indochine 1914-1934.

No.71315-04. Application au Tonkin du système métrique française 1936-1938.

No.77499. Statistiques des chemins de fer de l'Indochine de l'anne 1916.

No.77501. Statistiques des chemins de fer de l'Indochine de l'anne 1918.

(3) トンキン農業局コレクション(Fonds de la Direction de l'Agriculture du Tonkin)

各省商業統計(Statistiques commerciales /mercuriale de la province de...)

史料番号	省名	年	史料番号	省名	年
No.75	Ha Dong	1905-1917	No.91	Bac Kan	1900-1917
No.76	Hai Ninh	1908-1910	No.92	Tuyen Quang	1900-1916
No.77	Phuc Yen	1908-1910	No.93	Cao Bang*1	1901-1913
No.78	Vinh Yen	1900-1912	No.94	Ha Noi*2	1910-1913
No.79	Phu Tho	1908-1912	No.95	Thai Binh	1900-1913
No.80	Son La	1908-1913	No.96	Lao Kay*3	1901-1908
No.81	Yen Bay	1900-1916	No.97	Lao Kay	1910-1917
No.82	Quang Yen	1900-1913	No.98	Lang Song*4	1900-1913
No.83	Phu Lien	1900-1902	No.99	Son Tay	1901-1914
No.84	Kien An	1900-1916	No.100	Nam Dinh	1900-1917
No.85	Bac Quang	1900-1910	No.101	Ninh Binh	1901-1913
No.86	Hoa Binh	1900-1912	No.102	Hai Phong	1900-1917
No.87	Bac Ninh	1901-1915	No.103	Bac Giang	1901-1915
No.88	Ha Giang	1912-1917	No.104	Hung yen	1900-1913
No.89	Ha Nam	1900-1915	No.105	Hai Duong	1900-1917
No.90	Thai Nguyen	1901-1913			

*1: Cao bng et du Centre de Bao Lc

*2: zone suburbaine de Hanoi

*3: Lao Kay et des cercles de Bao Ha, Côt Lieu

*4: Lang Son et du cercle de Van Linh

(4) トンキン公共事業局ファイル

(Fonds de la circonscription territoriale des travaux publics du Tonkin)

No. 1338. Navigation fluviale: améliorations des voies fluviales et des canaux du Tonkin 1905-1908.

(5) 阮朝硃本(Châu Bản Triều Nguồn)

Thành Thái Tập 1-98
Duy Tân Tập 1-21
Khải Định Tập 1-10
Bảo Đại Tập 1-20

(目録)

Commission française du Guide des sources de l'histoire des nations. 1981. *Sources de l'histoire de l'Asie et de l'Océanie dans les archives et bibliothèques françaises*. München ; New York : K.G. Saur.

Gazquez, Denis et Agathe Larcher-Goscha. 2004. *Publications officielles de l'Indochine coloniale : inventaire analytique (1859-1954)*. [Paris]: Bibliothèque nationale de France.

Giacometti, Jean Dominique. 2001. *Vietnam historical statistics bibliography : printed sources and institutional context of the statistics in Vietnam before 1954*. (Working paper) Institute of Comparative Economic Studies, Hosei University, no. 99. 近現代アジア比較数量経済分析シリーズ no. 12) Tokyo: Institute of Comparative Economic Studies, Hosei University.

Ngô Thiệu Hiệu et al. 2001. Sách chỉ dẫn các phong lưu từ thời kỳ thuộc địa-Bảo quản tại Trung tâm Lưu trữ Quốc gia I – Hà Nội. Hà Nội: Văn hóa Thông tin.

菊池道樹. 1980. 『ヴェトナム・カンボジア・ラオス社会経済史関係解題つき文献目録 : 18 世紀後半から第一次大戦まで』(総合研究(A)「資本主義世界市場の形成」に関する文献目録シリーズ, no.2)総合研究(A)「資本主義世界市場の形成」研究組織.

(官製年報・定期刊行物)

Annuaire Général de l'Indochine française

Bulletin économique de l'Indochine

Bulletin de l'Office colonial

Bulletin officiel du Ministère des colonies.

Gia định báo

Journal officiel de l'Indochine française

Việt Nam Dân Quốc Công Báo

(漢籍史料)

越史通鑑綱目	大越史記全書	大越史記全書統編	大南会典事例
大南会典事例統編	大南寔録	大南典例撮要	漢書(律曆志)
国朝刑律	国朝詔令善政	撫辺雑録	黎朝会典
黎朝旧典	歷朝憲章類誌(国用誌)		歷朝襍記

(ベトナム語文献)

- Cao Tự Thanh, Hồng Duệ và Hoàng Mai (chủ biên). 2007. *Lịch sử Gia Định Sài Gòn trước 1802* (『1802 年以前のサイゴン、嘉定の歴史』). Hồ Chí Minh: Tổng hợp TP. HCM và Văn Hóa Sài Gòn.
- Diệp Đình Hoa và Bùi Xuân Đính. 1983. “Quan hệ giao lưu buôn bán qua một chợ làng trung du trước cách mạng tháng Tám (「8 月革命以前のデルタにおける村の市場を通じての商業交流関係」).” *Dân tộc học* (『民族学』) 2(1983): 21-26, 32.
- Đàm Thị Uyên. 2011. *Huyện Quảng Hòa (tỉnh Cao Bằng); từ khi thành lập đến giữa thế kỷ 19* (『カオバン省クアンホア県；設立から 19 世紀半ばまで』). Hà Nội: Chính trị Quốc gia.
- Đặng Phong và những người khác. 2002. *Lịch sử kinh tế Việt Nam 1945-2000* (『ベトナム経済史 1945-2000 年』). Tập I (1945-1954) Hà Nội: Khoa học xã hội.
- Đào Duy Anh. 1938/2002. *Việt Nam văn hóa sử cương* (『ベトナム文化史綱』). Hà Nội: Văn hóa thông tin.
- Đinh Xuân Lâm(chủ biên). 1999. *Đại cương lịch sử Việt Nam* (『ベトナム史大綱』). Tập II (1858 – 1945). Hà Nội: Giáo dục.
- Đinh Xuân Vịnh. 2002. *Sổ tay địa danh Việt Nam* (『ベトナム地名手帖』). Hà Nội: Quốc gia Hà Nội.
- Đỗ Bang. 1991. Quan hệ và phương thức buôn bán giữa Hội An với trong nước (「国内とホイアン間における商業活動方式と関係」). Ủy ban Quốc gia Hội thảo Quốc tế về Đô thị cổ Hội An. *Đô thị cổ Hội An* (『ホイアン古都市』). Hà Nội: Khoa học Xã hội.
- . 1997. *Kinh tế thương nghiệp Việt Nam dưới triều Nguyễn* (『阮朝におけるベトナムの経済と商業』). Hà Nội: Thuận Hoá.
- . 1998. *Khóa cứu kinh tế và tổ chức bộ máy nhà nước triều Nguyễn: Những vấn đề đặt ra hiện nay* (『阮朝統治機構と経済の研究：現代提起された諸問題』). Huế: Thuận Hóa.
- Đỗ Bang và Nguyễn Minh Tường(biên soạn). 2001. *Chân dung các vua Nguyễn* (『阮朝皇帝の肖像』). Huế: Thuận Hóa.
- Đo Đình Nghiem, Ngo, Vi Lien và Pham, Van Thư. 1927. *Địa dư các tỉnh Bắc Kỳ* (『トンキン各省地理』). Hà Nội: Hội quân khai trí tiên đức.
- Đỗ Quang Chính. 2008. *Lịch sử chữ Quốc ngữ 1620-1659* (『国字の歴史 1620-1659 年』). Hà Nội: Tôn giáo.
- Đỗ Thị Hảo(chủ biên). 2010. *Chợ Hà Nội xưa và nay* (『ハノイの市場今昔』). Hà Nội: Phụ nữ.
- Đỗ Văn Ninh. 2002. *Từ điển chức quan Việt Nam* (『ベトナム官職辞典』). Hà Nội: Thanh Niên.
- Đương Kinh Quốc. 1988/2005. *Chính quyền thuộc địa ở Việt Nam : trước cách mạng tháng tám 1945* (『ベトナムにおける植民地政權：1945 年 8 月革命以前』). (Tái bản lần thứ nhất). Hà Nội: Khoa học xã hội.
- . 1999/2002. *Việt Nam những sự kiện lịch sử 1858-1918*(Tái bản lần thứ hai) (『1858 - 1918

- 年におけるベトナムの歴史事件』 . Hà Nội: Giáo dục.
- Gourou, Pierre. 2003. *Người nông dân châu thổ Bắc Kỳ* (『北部デルタの農民』) . Nguyễn Khắc Đàm, Đào Hùng và Nguyễn Hoàng Oanh dịch. Hà Nội: Trẻ. (原著は [Gourou 1936] 参照)
- Hồ Tuấn Dung. 2003. *Chế độ thuế của thực dân Pháp ở Bắc Kỳ từ 1897 đến 1945* (『仏領期北部ベトナムにおける税制 1897 年-1945 年』) . Hà Nội: Chính trị quốc gia.
- Hữu Ngọc (chủ biên). 1995. *Từ điển văn hóa cổ truyền Việt Nam* (『ベトナム古伝文化事典』) . Hà Nội: Thế giới.
- Huỳnh Công Bá. 2004. *Lịch sử Việt Nam* (『ベトナム史』) . Hồ Chí Minh: Thuận Hóa.
- Huỳnh Thị Bích Nhân. 2007. “Dụng cụ đo lường bằng đồng tại bảo tàng cổ vật cung đình Huế (「フエ宮廷古物博物館における銅製度量衡用具」).” *Bảo tàng cổ vật cung Đình Huế* (『フエ宮廷古物博物館』) VI: 112-117. Trung tâm bảo tồn di tích cổ đô Huế.
- Huỳnh Thị Bích Nhân và Lê Thị Bảo Vân, Về hai dụng cụ đo lường dưới triều Minh Mạng, *Bảo tàng Mỹ thuật cung đình Huế*, III, Trung tâm bảo tồn di tích cổ đô Huế, 2003. 82-82.
- Huỳnh Thị Dung (biên soạn). 2011. *Chợ Việt* (『ベトナムの市場』) . Hà Nội: Từ điển Bách khoa.
- Lâm Hiếu Trung et al (Ban biên tập). 2001. *Địa chí Đồng Nai* (『ドンナイ地誌』) . 5 vols. [Đồng Nai]: Tổng hợp Đồng Nai.
- Lê Minh Quốc. 2012. *Người Quảng Nam* (『クアンナムの人々』) . Thành phố Hồ Chí Minh: Trẻ.
- Lê Nguyễn. 2006. *Thành cổ Sài Gòn mấy vấn đề về triều Nguyễn* (『古都サイゴン阮朝に関する諸問題』) . Hà Nội: Trẻ.
- Lê Quốc Sử. 1998. *Một số vấn đề về lịch sử kinh tế Việt Nam* (『ベトナム経済史の諸問題』) . Hà Nội: Chính trị Quốc gia.
- Lê Thị Mai. 2004. *Chợ quê trong quá trình chuyển đổi* (『変化の過程の中での地方市場』) . Hà Nội: Thế giới.
- Liên hiệp đường sắt Việt Nam. 1994. *Lịch sử đường sắt Việt Nam* (『ベトナム鉄道史』) . Hà Nội: Lao động.
- . 1996. *Nhân chứng & sự kiện kỷ niệm 50 năm truyền thống ngành đường sắt (21-10-1946-21-10-1996)* (『鉄道部門の伝統 50 年記念 エピソードと出来事』) . Hà Nội: Liên hiệp đường sắt Việt Nam.
- . 2001. *120 năm đường sắt Việt Nam* (『ベトナム鉄道 120 年』) . Hà Nội: Giao thông vận tải.
- Lý Tùng Hiếu. 2012. *Ngôn ngữ văn hóa vùng đất Sài Gòn và Nam bộ* (『サイゴンと南部の言語文化』) . Thành phố Hồ Chí Minh: Tổng hợp thành phố Hồ Chí Minh.
- Lưu Quang Tuyền, Thạch Phương et al. 1989. *Địa chí Long An* (『ロンアン地誌』) . Long An: Long An; Khoa học xã hội.
- Nguyễn Bá Chính. 1923. *Hanoi chỉ nam* (『ハノイ指南』) . Hà Nội: Nghiêm hàm Ấn quán.
- Nguyễn Bích Huệ. 1968. *Đồng bạc Việt Nam và các vấn đề liên hệ* (『ベトナム通貨とその関連問

- 題』). Sài Gòn: Phạm Quang Khai.
- Nguyễn Cẩm Thúy (chủ biên). 2000. *Định cư của người Hoa trên đất Nam bộ: từ thế kỷ XVII đến năm 1945*. Hà Nội: Khoa học xã hội.
- Nguyễn Chí Trung. 2005. *Cư dân Faifo – Hội An trong Lịch sử* (『歴史の中でのホイアン住民』). Hội An: Trung tâm Quản lý Bảo tồn Di tích Hội An.
- Nguyễn Đình Bưu và những người khác. 1982. *Địa chí Hà Bắc* (『ハーバック地誌』). Hà Bắc: Thư viện tỉnh Hà Bắc.
- Nguyễn Đình Đầu. 1978a. Góp phần nghiên cứu vấn đề đo, đong, cân, đếm của Việt Nam xưa (『往昔のベトナム度量衡問題への貢献』). *Nghiên cứu kinh tế* (『経済研究』) 5(105) tháng 5: 65-71.
- . 1978b. Góp phần nghiên cứu vấn đề đo, đong, cân, đếm của Việt Nam xưa (『往昔のベトナム度量衡問題への貢献』) - *Nghiên cứu kinh tế* (『経済研究』) 6(106), tháng 6: 40-49.
- . 1992. *Chế độ công điền công thổ trong lịch sử khẩn hoang lập ấp ở Nam Kỳ lục tỉnh*. Hà Nội: Hội sử học Việt Nam.
- . 1994. *Nghiên cứu địa bạ triều Nguyễn: Hà Tiên* (『阮朝地簿研究：ハーティエン』). Thành phố Hồ Chí Minh: Thành phố Hồ Chí Minh.
- . 1996. *Nghiên cứu địa bạ triều Nguyễn: Bình Định* (『阮朝地簿研究：ビンデン』). Tập 1. Thành phố Hồ Chí Minh: Thành phố Hồ Chí Minh.
- . 2007. *Địa lý Gia Định-Sài Gòn Thành Phố Hồ Chí Minh* (『ホーチミン、サイゴン-嘉定地理』). [Ho Chi Minh]: Tổng hợp TP. HCM; Văn hóa Sài Gòn.
- Nguyễn Đồng Chi(chủ biên). 1995. *Địa chí văn hóa dân gian Nghệ Tĩnh* (『ゲティン民間文化地誌』). Vinh: Nghệ An.
- Nguyễn Hữu Danh. 1987. *Địa lý Thành phố Hồ Chí Minh* (『ホーチミン地理』). Hồ Chí Minh: Sở giáo dục Thành phố Hồ Chí Minh.
- Nguyễn Hữu Tiên. 1934. Nên thông nhất phép cân đo lường (『度量衡統一の必要性』). *Nam Phong* (『南風』) 196: 333-336.
- Nguyễn Ngọc Quỳnh. 2011. *Hệ thống giáo dục và khoa cử nho giáo triều Nguyễn* (『阮朝の儒教教育と科举制度』). Hà Nội: Chính trị quốc gia.
- Nguyễn Phan Quang. 2003. *Thị trường lúa gạo Nam Kỳ 1860-1945* (『コーチシナの米市場 1860-1945 年』). Thành phố Hồ Chí Minh: Tổng hợp thành phố Hồ Chí Minh.
- Nguyễn Phan Quang và Đặng Huy Vận. 1965. “Tìm hiểu chế độ lao dịch và binh dịch dưới triều Gia Long 1802-1819 (『1802-1819 年嘉隆帝下の労役と兵役制度の理解』).” *Nghiên cứu lịch sử* (『歴史研究』) 80: 15-25.
- Nguyễn Quang Ân. 2003. *Việt Nam những thay đổi địa danh và địa giới hành chính 1945-2002* (『ベトナム行政区画と地名の変遷 1945-2002 年』). Hà Nội: Thông tấn.
- Nguyễn Quang Ngọc (chủ biên). 2003. *Địa chí Nam Định* (『ナムディン地誌』). Hà Nội: Chính trị Quốc gia.

- Nguyễn Thế Anh. 1970. *Kinh tế và xã hội Việt Nam dưới các vua triều Nguyễn* (『阮朝におけるベトナムの経済と社会』) . in lần thứ nhì, có sửa chữa và tăng bổ. Saigon: Lửa thiêng.
- . 1974. *Việt Nam dưới thời Pháp đô hộ* (『フランス植民地化のベトナム』) . Saigon: Trung tâm sản xuất học liệu.
- Nguyễn Thiện Chính. 1935. *Hưng Yên địa chí Hà Đông địa chí* (『フンイエン、ハドン地誌』) . [s.l.]: [s.n.].
- Nguyễn Tiến Dũng(chủ biên). 2005. *Văn Hóa Việt Nam thường thức* (『ベトナム文化常識』) . Hà Nội: Văn hóa dân tộc.
- Nguyễn Trung Văn. 1998. *Lương thực Việt Nam thời đổi mới hướng xuất khẩu* (『新たな輸出志向期ベトナムの糧食』) . Hà Nội: Chính trị quốc gia.
- Nguyễn Văn Hoàn. 1991. Hội An một trung tâm giao tiếp văn hoá với thế giới của Việt Nam ở thế kỷ XVII (「17 世紀ベトナムにおける世界との文化交流中心地ホイアン」) . Ủy ban Quốc gia Hội thảo Quốc tế về Đô thị cổ Hội An. *Đô thị cổ Hội An* (『ホイアン古都市』) . Hà Nội: Khoa học Xã hội.
- Nguyễn Văn Huyền. 1939. “Vấn đề nông dân Việt Nam ở Bắc Kỳ (「トンキンのベトナム農民の問題」) ” In *Góp phần nghiên cứu văn hóa Việt Nam : những công trình nghiên cứu của giáo sư tiến sĩ Nguyễn Văn Huyền* (『ベトナム文化研究への貢献：グエン・ヴァン・フエン教授・博士の研究業績』) edited by Hà Văn Tấn, 1996. Tập II: 27-44. Hà Nội: Khoa học xã hội.
- . 1940-[1941?]. ”Một cuộc điều tra về tình hình ăn uống của người Việt Nam (「ベトナム人の飲食状況についての調査」) ” In *Góp phần nghiên cứu văn hóa Việt Nam : những công trình nghiên cứu của giáo sư tiến sĩ Nguyễn Văn Huyền* (『ベトナム文化研究への貢献：グエン・ヴァン・フエン教授・博士の研究業績』) edited by Hà Văn Tấn, 1996. Tập II: 489-515. Hà Nội: Khoa học xã hội.
- Nguyễn Văn Khánh. 2004. *Cơ cấu kinh tế xã hội Việt Nam thời thuộc địa 1858-1945* (『植民地期 1858-1945 年のベトナム社会経済構造』) . Hà Nội: Đại học Quốc gia Hà Nội.
- Nguyễn Văn Khoan. 1992. *Giao thông liên lạc nước ta trong lịch sử* (『歴史の中での我々の交通連絡』) . [s.l.]: Thông tin lý luận.
- Nguyễn Văn Kiệm. 2003. *Góp phần tìm hiểu một số vấn đề lịch sử Việt Nam* (『ベトナム史の諸問題理解への貢献』) . Hà Nội: Văn hoá thông tin.
- Nguyễn Văn Uẩn. 2000. *Hà Nội nửa đầu thế kỷ XX* (『20 世紀前半のハノイ』) . Hà Nội: Hà Nội.
- Nguyễn Vinh Phúc. 2004. *Hà Nội con đường dòng sông và lịch sử* (『ハノイ 川に沿った歩みと歴史』) . Hồ Chí Minh: Trẻ.
- Nguyễn Xuân Lân. 1974. *Địa chí tỉnh Vĩnh Phú* (『ヴィンフー省地誌』) . Vĩnh Phú: TY Văn hóa tỉnh Vĩnh Phú.
- . 2000. *Địa chí Vĩnh Phúc sơ thảo* (『ヴィンフック地誌稿』) . Vĩnh Phúc: Sở văn hoá thông tin thể thao.

- Nữ Quỳnh Trân. 1991. Sự hiện diện của người Pháp tại Hội An (「ホイアンにおけるフランス人の存在」). Ủy ban Quốc gia Hội thảo Quốc tế về Đô thị cổ Hội An. *Đô thị cổ Hội An* (『ホイアン古都市』). Hà Nội: Khoa học Xã hội.
- Phạm Quốc Quân(chủ biên). 2005. *Tiền kim loại Việt Nam* (『ベトナム硬貨』). Hà Nội: Bảo tàng lịch sử Việt Nam.
- Phạm Văn Hảo (chủ biên). 2004. *Sổ tay từ ngữ lịch sử : quan chế* (『歴史用語ガイド:官制』). Hà Nội: Khoa học xã hội.
- Phan Đại Doãn. 1991. Hội An và Đàng Trong (「ホイアンとダンジョン」). Ủy ban Quốc gia Hội thảo Quốc tế về Đô thị cổ Hội An. *Đô thị cổ Hội An* (『ホイアン古都市』). Hà Nội: Khoa học Xã hội.
- Phan Huy Lê. 1963. “Tình hình khai mỏ ở thời Nguyễn. (「阮朝における鉱山開発状況」)” *Nghiên cứu lịch sử* (『歴史研究』) 51: 40-48, 52: 47-59, 53: 53-64.
- Phan Kế Bính. 2003. *Việt Nam phong tục* (『ベトナム風俗』). [s.l.]: Văn hóa thông tin.
- Phan Khoang. 1967. *Việt sử xứ Đàng trong 1558-1777* (『1558年から1777年のダンジョン越史』) Saigon: nhà sách Khai trí.
- Phan Thanh Hải. 2003a. “Hệ thống thước đo thời Nguyễn (「阮朝期の尺度制度」).” *Nghiên cứu Huế* (『フエ研究』) 5: 319-327.
- . 2003b. “Lịch sử biến đổi cây thước truyền thống Trung Quốc (『中国伝統尺の変遷史』).” *Nghiên cứu và Phát triển* (『研究と発展』). 4-5(42-43).
- . 2012. *Với Di sản Huế* (『フエ遺産とともに』). Huế: Thuận hóa.
- Phan Thanh Tá. 2011. *Văn hóa cổ truyền trong làng xã Việt Nam hiện nay* (『現代ベトナムの村落における伝統文化』). Hà Nội: Lao động.
- Phan Văn Hùm. 1944. *Tiền bạc : khảo cứu về vấn đề tiền tệ* (『銀貨 : 通貨問題についての考察』). Hà Nội: Tân Việt.
- Phan Văn Liên. 1988. *Giao thông vận tải Việt Nam giai đoạn 1858-1957* (『1858-1957年のベトナム交通運輸』). Hà Nội: Giao thông vận tải.
- Sekimoto Noriko. 2010. “Việc thống nhất cân đo lường và tình trạng cân đo lường ở các tỉnh Bắc Kỳ thời kỳ thuộc địa (「植民地期北部ベトナムの度量衡統一とその実態」)”. In *Việt Nam học: Kỷ yếu hội thảo quốc tế lần thứ ba: Việt Nam hội nhập và phát triển*, Hà Nội 5-7. 12. 2008 (『ベトナム学 : 第3回国際会議紀要』) 1, 554-574. Hà Nội: Đại học Quốc gia Hà Nội.
- . 2013. “Khai thác và sử dụng tài liệu lưu trữ nhân dân trong quá trình nghiên cứu lịch sử cân đo lường ở Việt Nam (「ベトナムの度量衡史研究過程における民間アーカイブズ史料の開拓とその使用」)”. In *Tổ chức và phát huy giá trị tài liệu lưu trữ Nhân dân* (『民間アーカイブズ史料の組織と価値の発揮』). 334-349. Hà Nội: Đại học Quốc gia Hà Nội.
- Shigeru Ikuta. 1991. Vai trò của các cảng thị ở vùng ven biển Đông Nam Á từ đầu thế kỷ II TR.CN

- đến đầu thế kỷ XIX (「紀元前 2 世紀から 19 世紀初頭までの東南アジア海岸地域における港湾都市の役割」). Ủy ban Quốc gia Hội thảo Quốc tế về Đô thị cổ Hội An. *Đô thị cổ Hội An* (『ホイアン古都市』). Hà Nội: Khoa học Xã hội.
- Sở giao thông vận tải Cao Bằng. 1999. *Lịch sử giao thông vận tải Cao Bằng* (『カオバンにおける交通運輸史』). [s.l.]: Giao thông vận tải.
- Son Nam. 1984. Đất Gia Định xưa. T.P. Hồ Chí Minh: T.P. Hồ Chí Minh.
- . 1997. *Lịch sử khẩn hoang miền Nam*. T.P. Hồ Chí Minh: Trẻ.
- Tạ Thị Thúy. 1996. *Đồn điền của người Pháp ở Bắc Kỳ 1884-1918* (『北部におけるフランス人プランテーション』). Hà Nội: Thế giới.
- . 2001. *Việc nhượng đất khẩn hoang ở Bắc kỳ từ 1919 đến 1945* (『1919 から 1945 年における北部の開拓』). Hà Nội: Thế Giới.
- Thạch Phương và Đoàn Tứ (chủ biên). 1991. *Địa chí Bến Tre* (『ベンチェー地誌』). Hà Nội: Khoa học xã hội.
- Toan Ánh. 1968. *Phong tục Việt Nam* (『ベトナム風俗』). [s.l.]: Nhà sách khai trí.
- Trần Thanh Phương. 1989. *Cửu Long địa chí* (『九龍地誌』). [TP. Hồ Chí Minh]: Cửu Long.
- Trần Trọng Kim. 2002. *Việt Nam sử lược* (『ベトナム史略』). [s.l.]: Văn Hóa thông tin.
- Trần Văn An, Nguyễn Chí Trung và Trần Ánh. 2005. *Xã Minh hương với thương cảng Hội An thế kỷ XVII-XIX* (『明郷社とホイアンの商業湾 17-19 世紀』). Quảng Nam: Trung tâm Bảo tồn Di sản- Di tích Quảng Nam.
- Trần Văn Giàu, Đinh Xuân Lâm và Nguyễn Văn Sự. 1957. *Lịch sử Việt Nam từ 1897 đến 1914* (『ベトナム史 1897-1914 年』). Hà Nội: Xây dựng.
- Trần Văn Giàu và Trần Bạch Đằng. 1998. *Địa chí văn hóa Thành phố Hồ Chí Minh* (『ホーチミン市文化地誌』). 5 vols. Hồ Chí Minh: Thành phố Hồ Chí Minh.
- Trần Văn Giàu, Trần Bạch Đằng và Nguyễn Công Bình (chủ biên). 1987. *Địa chí văn hóa Thành phố Hồ Chí Minh* (『ホーチミン市文化地誌』). 3 vols. [Thành phố Hồ Chí Minh]: Thành phố Hồ Chí Minh.
- Trương Hữu Quýnh. 1976. Chế độ sở hữu nhà nước về ruộng đất ở thời Lý-Trần (「李朝陳朝の国家土地所有制度」). *Nghiên cứu lịch sử* (『歴史研究』) 168: 8-22.
- Trương Hữu Quýnh(chủ biên). 1999. *Đại Cương lịch sử Việt Nam* (『ベトナム歴史大綱』). Tập I từ thời nguyên thủy đến năm 1858. Tái bản lần thứ 2 có sửa chữa và bổ sung. Hà Nội: Giáo dục.
- Viện sử học. *Lịch sử Việt Nam* (『ベトナム史』). Tập 5 (thế kỷ 17-18). Hà Nội: Khoa học xã hội.
- Vũ Thị Minh Hương. 2002a. *Nội thương Bắc Kỳ thời kỳ 1919-1939* (『1919-1939 年におけるトンキン国内通商』). Luận án tiến sĩ, Viện Sử học.

- . 2002b. Các đơn vị đo lường ở Bắc Kỳ thời kỳ 1919-1939 (「1919 年から 1939 年における トンキンの度量衡」). *Nghiên cứu Lịch sử* (『歴史研究』) 1: 34-44.
- . 2004. Hội chợ ở các tỉnh Bắc Kỳ trước năm 1945 (「1945 年以前のトンキン各省における市場」). *Nghiên cứu Lịch sử* (『歴史研究』) 12: 29-39.
- Ủy ban khoa học xã hội Việt Nam. 1971. *Lịch sử Việt Nam*. Tập 1. Hà Nội: Khoa học xã hội.
- Ủy ban nhân dân quận 5. 2000. *Địa chí văn hóa quận 5 thành phố Hồ Chí Minh* (『ホーチミン市 5 区の文化地誌』). Thành phố Hồ Chí Minh: Ủy ban nhân dân quận 5.
- Ủy ban nhân dân tỉnh Cao Bằng. 2000. *Địa chí Cao Bằng* (『カオバン地誌』). [s.l.]: Chính trị quốc gia.
- Ủy ban Nhân dân tỉnh Gia Lai. 1999. *Địa chí Gia Lai* (『ザーライ地誌』). Hà Nội: Văn hoá dân tộc.
- Ủy ban nhân dân tỉnh Lạng Sơn. 1999. *Địa chí Lạng Sơn* (『ランソン地誌』). Hà Nội: Chính trị quốc gia.
- Ủy ban nhân dân tỉnh Quảng Ninh. 2002. *Địa Chí Quảng Ninh* (『クアンニン地誌』). Tập 2. Hà Nội: Thế Giới.

(欧米語文献)

- Barow, John. 1806. *A voyage to Cochinchina in the years 1792-1793*. London: T. Cadell and W. Davies. (*Một chuyến du hành đến xứ Nam Hà 1792-1793*. Nguyễn Thừa Hỷ dịch. Thế giới. 2011.)
- Bassino, Jean-Pascal, Jean-Dominique Giacometti, Konosuke Odaka and Suzanne Ruth Clark. 2000. *Quantitative economic history of Vietnam 1900-1990 : an international workshop*. Kunitachi: Institute of Economic Research, Hitotsubashi University.
- Bassino, Jean-Pascal and Jean-Dominique Giacometti. 1998. *Estimating long term economic statistics of Vietnam under French rule (1895-1954) : on sources and methods*. (Discussion paper / 一橋大学経済研究所中核的拠点形成プロジェクト [編], No. D98-6) . [Kunitachi]: Institute of Economic Research, Hitotsubashi University.
- Bouault, J. 1930. *Géographie de l'Indochine-Tonkin-Annam-Cochinchine-Cambodge & Lao*. Haiphong: Imprimerie d'Extrême-Orient.
- Brenier, M. H. 1917. Catalogue des produits de l'Indochine, tome. 1: Produits alimentaires. [s.l.]: Gouvernement Général de l'Indochine
- Brocheux, Piere. 1995. *The Mekong Delta: ecology, economy, and revolution, 1860-1960*. Madison; WI: Center for Southeast Asian Studies, University of Wisconsin-Madison.
- . 2009. *Une histoire économique du Viet Nam 1850-2007*. Paris: Indes savantes.
- Brocheux, Pierre et Daniel Hémery. 2001. *Indochine la colonisation ambiguë 1858-1954*. Paris: La Découverte.
- Bulbeck, David and Li Tana. 1993. Maps of Souther Vietnam c. 1690. Li Tana & Anthony Reid. *Souther Vietnam under the Nguyễn*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

- Chevost, Ch-. 1916. *Catalogue des produits de l'Indochine*. Hanoi: Imprimerie d'Extreme-Orient.
- Choi Byung Wook. 2004. *Southern Vietnam under the reign of Minh Mạng (1820-1841) : central policies and local response*. (Southeast Asia program series, no. 20) New York: Cornell University.
- Commission française du Guide des sources de l'histoire des nations. 1981. *Sources de l'histoire de l'Asie et de l'Océanie dans les archives et bibliothèques françaises*. München; New York; London; Paris: K.G. Saur.
- Comité Agricole et industriel de la Cochinchine. 1878. *La Cochinchine françaises en 1878*. Paris: Challamel Anié.
- Coquerel, Albert. 1911. *Paddys et riz de Cochinchine*. Lyon : Imprimerie A. Rey.
- Dampier, William. 1931. *Voyages and Discoveries*. London: Argonaut Press. (Một chuyến du hành đến Đàng Ngoài năm 1688. Hoàng Anh Tuấn dịch. Hà Nội: Thế giới. 2007.)
- Đặng Nghiêm Vạn, Chu Thái Sơn và Lưu Hùng. 1993. *Ethnic minorities in Vietnam*. Hanoi: The gioi.
- Đặng Phương Nghi. 1969. *Les institutions publiques du Viêt-Nam au XVIIIe siècle*. Paris: École française d'Extrême-Orient.
- Deloustal, Raymond. 1910. La Justice dans l'Annam. *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême Orient*. Tome X 1 – 60, 349 – 392, 461 – 505.
- Des Michels, Abel. 1871. *Dialogues Cochinchinois*. Paris: Maisonneuve et Cie.
- Dorgelès, Roland. 1925/2004. *Sur la route mandarine*. Paris; Pondicherry: Kailash.
- Doumer, Paul. 1902. *Situation de l'Indochine 1897-1901: Rapport*. Hanoi: F.-H. Schneider.
- Dror, Olga et al. 2006. *Views of seventeenth-century Vietnam : Christoforo Borri on Cochinchina & Samuel Baron on Tonkin* (Studies on Southeast Asia, no. 41) . Ithaca, N.Y: Southeast Asia Program Publications, Southeast Asia Program, Cornell University.
- Dureteste, André. 1938. *Cours de droit de l'Indochine*. Paris: Larose. (『佛領印度支那ノ司法組織並ニ東京・安南民法ノ概要(翻譯)』(資料 / 東亞研究所 [編], 丙第 107 號 C) 東亜研究所 訳. 東亞研究所. 1940.)
- Ennis , Thomas E. 1936. *French policy and developments in Indochina*. Chicago: The University of Chicago press. (『印度支那一フランスの政策とその発展』大岩誠訳. 生活社. 1942.)
- Giacometti, Jean-Dominique. 1998. Prices and wages in Viet-nam before 1954. (Discussion paper / 一橋大学経済研究所中核的拠点形成プロジェクト [編], No. D98-14) . [Kunitachi]: Institute of Economic Research, Hitotsubashi University.
- Génibrel, J.F.M. [19??]. *Dictionnaire vietnamien-français*. [s.l.] : [s.n.].
- Génibrel, Père. 1922. *Nouveau dictionnaire Français-Annamite*, Deuxième édition, Saigon: Imprimerie de la Mission.
- Gourou, Pierre. 1936. *Les paysans du delta tonkinois*. Paris: Les editions d'art et d'histoire (Pierre

- Gourou. 2003. *Người nông dân châu thổ Bắc Kỳ*. Nguyễn Khắc Đạm, Đào Hùng và Nguyễn Hoàng Oanh dịch. Hà Nội:Trẻ.)
- . 1940. *L'utilisation du sol en Indochine française*. Paris : P. Hartmann.
- Hardy, Andrew. 2003. *Red hills; Migrants and the state in the highlands of Vietnam*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Henry, Yves. 1932. *Economie agricole de l'Indochine*. Hanoi: Imprimerie d'Extreme-Orient (東亜研究所第4部訳 1941『仏領印度支那の農業経済』上中下巻 丙第182号2C 第8調査委員会資料 6, 東京: 東亜研究所)
- Hickey, Gerald Cannon. 1964. *Village in Vietnam*. New Haven: Yale University Press.
- Huard, Pierre et Maurice Durand. 1954. *Connaissance du Viêt Nam*. Hanoi: École française d'extrême-orient.
- Huỳnh-Tĩnh, Paulus của. 1895. Dictionnaire annamite : 大南國音字彙. Tome 1 et Tome 2.Saigon: Rey Curiol.
- Jean, M.-L. 1939. *Législation coloniale générale et régime législatif, administratif et judiciaire de l'Indochine*. Vinh: Imprimerie du Nord-Annam. (『仏領印度支那の統治機構：中央及地方フランス行政及土民行政の部』中巻, 外務省調査部訳. 外務省調査部. 1942.)
- Kiessling, R. “Stadt-Land-Beziehungen im spätmittelalter: überlegungen zur Problemstellung und Methode anhand neuerer Arbeiten vorwiegend zu süddeutschen Beispielen.” *Zeitschrift für bayerische Landesgeschichte* XL(1997): 829-867. (「中世後期における都市=農村諸関係：特に南ドイツの例による最近の業績を手掛かりとした問題提起と方法についての考察」田北広道訳. 森本芳樹編.『西欧中世における都市と農村』: 165-239. 九州大学出版会. 1987.)
- Langlet, Philippe. 2008. “Lecture de deux rapports dans les archives du règne Tự Đức.” In *Monde du Viêt Nam: Hommage à Nguyễn Thê Anh*, edited by Frédéric Mantiennne et Keith W. Taylor, 197-233. Paris: Indes savantes.
- Lamb, Alastair. 1970. *The mandarin road to old Hué : narratives of Anglo-Vietnamese diplomacy from the 17th century to the eve of the French conquest*. London,Toronto: Chatto & Windus , Clarke, Irwin and Co.,
- Lapicque, P. A. 1932. *Le port du Tonkin: conférence faite à la Société de géographie de Hanoï le 22 février 1932*. Hanoï: I.D.E.O.
- Lefèvre-Pontalis, Pierre. 1896. *Notes sur quelques populations du Nord de l'Indochine*. Paris: Imprimerie Nationale.
- Le Roux, Pierre, Bernard Sellato et Jacques Ivanoff, eds. 2004-08. *Poids et mesures en Asie du Sud-Est: systèmes métrologiques et sociétés*. 2vols. Paris: École française d'Extrême-Orient.
- Lê Thánh Khôi. 1955. *Le Viêt Nam histoire et civilisation*. Paris: Les éditions de Minuit.
- . 1967. *Histoire de l'Asie du Sud-Est* (Collection Que sais-je? No.804). Paris: Presses Universitaires de France. (『東南アジア史』増補新版. 石澤良昭訳. 白水社. 2000.)

- . 1981. *Histoire du Viet Nam*. Paris : Sudestasie.
- Li Tana. 1998. *Nguyễn Cochinchina : Southern Vietnam in the seventeenth and eighteenth centuries*. Ithaca, New York: Cornell Southeast Asia Program Publications. (*Xứ Đàng Trong : Lịch sử kinh tế xã hội Việt Nam thế kỷ 17 và 18*. Nguyễn Nghi bản dịch. Hà Nội: Trẻ. 1999.)
- Li Tana and Anthony Reid. 1993. *Southern Vietnam under the Nguyễn*. Institute of Southeast Asian Studies of Singapore/ECHOSEA, Australian National University.
- Madrolle, Claudius. 1907. *Tonkin du Sud*. Paris: 21, rue Cassette.
- . 1923. *Indochine du Nord : Tonkin, Annam, Laos*. Paris: Hachette.
- . 1926a. *De Saigon à Tourane : La route mandarine du Sud-Annam : Les monuments Cham : Le circuit des monts Pandarang. Dalat et le Lang-Biang*. Paris: Hachette.
- . 1926b. *Indochine du Sud : de Marseille à Saigon : Djibouti, Ethiopie, Ceylon, Malaisie, Cochinchine, Cambodge, Bas-Laos, Sud-Annam, Siam*. Paris: Hachette.
- . 1929. *Vers Angkor, Saigon, Phnom-Penh, Cochinchine-Cambodge*. Paris : Hachette.
- Marr, David G. 1971. *Vietnamese Anticolonialism 1885-1925*. Berkeley, Los Angeles, London : University of California.
- Maurice, Albert Marie. 2008. “Du clin d’œil à la poignée de riz: Sur les poids et mesures chez les Montagnards des hauts plateaux du Centre Vietnam.” In *Poids et mesures en Asie du Sud-Est: systèmes métrologiques et sociétés 2*, edited by Pierre le Roux, Bernard Sellato et Jacques Ivanoff, 463-484. Paris: École française d'Extrême-Orient.
- Maybon, Charles B. 1930. *Lectures sur l'histoire moderne et contemporaine du pays d'Annam de 1428 à 1926*. Hanoi: Imprimerie d'Extrême-Orient.
- Monnier, Marcel. 1899. *Le tour d'Asie*. Vol. 1(Cochinchine, Annam, Tonkin). Paris: E. Plon, Nourrit et Cie.
- Mossy, Léon. [1933]. *Principes d'administration générale de l'Indochine*. 6e éd. rev. et augm. Saigon: [Gouvernement général de l'Indochine].
- Nguyễn Huy et Louis Jacques Dorais. 2008. “Des poids et des mesures dans les campagnes du Vietnam.” In *Poids et mesures en Asie du Sud-Est: systèmes métrologiques et sociétés 2*, edited by Pierre le Roux, Bernard Sellato et Jacques Ivanoff, 459-462. Paris: École française d'Extrême-Orient.
- Nguyễn Khắc Viện. 2004. *Vietnam une longue histoire*. 6^e édition. Hà Nội: Thế giới.
- Nguyen Thanh Nha. 1970. *Tableau économique du Việt Nam aux XVIIe et XVIIIe siècles*. Paris: Éditions Cujas.
- Nguyen The Anh. 1974. “Le rôle des châu bản dans les recherches sur l’histoire moderne du Việt Nam.” *Études Interdisciplinaires sur le Việt Nam* vol.1(1974) : 107-111.
- . 1992. *Monarchie et fait colonial au Việt Nam 1875-1925: le crépuscule d'un ordre traditionnel*. Paris : Éd. l'Harmattan.

- . 1996. “Les sources pour l’histoire économique du Việt Nam au XIXe siècle.” In *Việt Nam Sources et approches : actes du [2e] Colloque international Euroviet, Aix-en-Provence, 3-5 mai 1995*, edited by Philippe Le Failler et Jean-Marie Mancini. 600-621. Aix-en-Provence: Publications de l’Université de Provence.
- . 1999. “Trade relations between Vietnam and the countries of the Southern seas in the first half of the 19th century.” In *Commerce et navigation en Asie du Sud-Est (XIVe-XIXe siècles) : Trade and navigation in Southeast Asia (14th-19th centuries)*, edited by Nguyen The Anh and Yoshiaki Ishizawa. 171-187. Paris: L’Harmattan.
- . 2009. “Remarques sur les mouvements messianiques et millénaristes dans l’histoire du Vietnam.” *Việt Học Niên San – Annalen der Hamburger Vietnamistik* 4&5(2009/10) : 53-65.
- Nguyen Thua Hy. 2002. *Economic History of Hanoi in the 17th, 18th and 19th Centuries*. Hanoi: National Political Publishing House.
- Nguyễn Tùng. 2008. “D’une colonisation à l’autre: deux poids et deux mesures au Vietnam.” In *Poids et mesures en Asie du Sud-Est: systèmes métrologiques et sociétés 2*, edited by Pierre le Roux, Bernard Sellato et Jacques Ivanoff, 441-457. Paris: École française d’Extrême-Orient.
- Nordemann, Edmond. 1914. *Chrestomathie annamite: contenant 180 textes en dialecte tonkinois suivie d’un lexique encyclopédique annamite-français illustré de 62 fac-simile, et d’un index français concernant ce lexique (Deuxième édition)*. (Quảng tập viêm văn : Annam văn tập. Nguyễn Bá Mão dịch. [s.l.]: Hội Nhà Văn. 2006.) Hanoi-Haiphong: D’Extrême-Orient.
- Papin, Philippe. 2001. *Histoire de Hanoi*. [Paris]: Fayard.
- Pasquier, Pierre. 1930. *L’Annam d’autrefois*. Hanoi: Societe d’editions geographiques.
- Pigneau de Béhaine. 1999. *Dictionarium Anamitico Latinum*(1772-1773). Saigon. (Hong Nhuệ và Nguyễn Khắc Xuyên dịch, *Tự vị Annam Latinh*, Hà Nội: Trê) (初版 1772-1773)
- Poisson, Emmanuel. 2004. *Mandarins et subalternes au nord du Việt Nam: une bureaucratie à l’épreuve, 1820-1918*. Paris: Maisonneuve & Larose. (Quan và lại ở miền Bắc Việt Nam: một bộ máy hành chính trước thử thách, 1820-1918, Đào Hùng và Nguyễn Văn Sự dịch. Đà Nẵng: Đà Nẵng. 2006.)
- . 2008. “Les confins septentrionaux du Việt Nam et leur administration.” In *Monde du Việt Nam: Hommage à Nguyễn Thê Anh*, edited by Frédéric Mantienne et Keith W. Taylor, 329-339. Paris: Indes savantes.
- Rambo, Terry. 2005. *Searching for Vietnam : selected writings on Vietnamese culture and society*. Kyoto: Kyoto University Press.
- Rhodes, Alexandre de. 1991. *Dictionarium Annamiticum-Lusitanum-Latinum. : Từ điển Annam-Lusitan-Latinh*. Thanh Lăng, Hoàng Xuân Việt, Đỗ Quang Chính (dịch). TP Hồ Chí Minh : Khoa học xã hội (初版 1651, Rome : Typis, & sumptibus eiusdem Sacr. Congreg.)
- . 1994. *Histoire du ryaume de Tunquin. : Lịch sử vương quốc đàng ngoài*. Bản viết ngữ của

- Hồng Nhuệ. Hồ Chí Minh : Tủ sách đại kết (初版 1651, Lyon : chez Jean Baptiste Debenet en rue Vircière, à la Crois d'Or.)
- Robequain, Charles. 1929. *Le Thanh Hoá: étude géographique d'une province annamite*. Paris ; Bruxelles: G. van Oest.
- . 1939. *L'évolution économique de l'Indochine française*. Paris :Centre d'études de politique étrangère(『仏印経済発展論』仏蘭西政治経済叢書 III, 松岡孝児・岡田徳一共訳. 有斐閣. 1955.)
- Rolland, Louis et Pierre Lampué. 1936. *Précis de législation coloniale*. 2e édition. Paris: Dalloz. (『フランス植民地法提要』東亜経済調査局訳. 東亜経済調査局. 1937.)
- Russier, Henri. 1938. *L'Indochine française : notions élémentaires de géographie*. Hanoi: Imprimerie d'Extrême-Orient. (『仏領印度支那 : 地理学初步概念 : 翻訳』東亜研究所訳編. 東亜研究所. 1940.)
- Saumont, J.B. 1913. *Sur les routes d'Annam: De Hanoi à Hué en automobile*. Hanoi: Imprimerie Tonkinoise Bach Thai Buoi & Cie.
- Schreiner, Alfred. 1901. *Les Institutions annamites en Basse-Cochinchine avant la conquête française*. Saigon: Gregg International.Farnborough.
- Souvignet, E. 1903. *Variété tonkinoises*. Hanoi: Schneider
- Tavernier, Jean-Baptiste. 1682. *Les six voyages de Jean-Baptiste Tavernier, chevalier baron d'Aubonne, qu'il a fait en Turquie, en Perse, et aux Indes : pendant l'espace de quarante ans ... accompagnez d'observations particulieres sur la qualité, la religion, le gouvernement, les coutumes & le commerce de chaque país, avec les figures, le poids, & la valeur des monnoyes qui y ont cours*. Paris: Gervais Clouzier. (*Tập du kỷ mới và kỷ thú về vương quốc Đàng Ngoài*. Lê Tư Lành dịch. Thế giới. 2007. ※上記文献の *Relation nouvelle et singlière du Royaume de Tunquin* 部分の翻訳)
- Touzet, André. 1939. *Le régime monétaire indochinois*. Paris: Sirey. (『印度支那貨幣制度の研究』松岡孝児訳. 有斐閣. 1956.)
- United Nation statistical office. 1966. *World weights and mesures: handbook for staticians*. (Statistical papers, ser. M, no. 21, rev. 1) New York: United Nation.
- Vallot, Pere G. 1897. *Grammaire annamite : à l'usage des française de l'annam et du Tonkin*. [s.l.]: F.-H. Schneider.
- . 1904. *Petit Dictionnaire Annamite-Française (Sixieme volume)* . Hanoi: F.-H. Schneider.
- Vargyas, Gábor. 2008. “Empan, brasse, hotte et unitéde travail: Notes ethnographiques sur quelques unités de mesure chez les Brou du Vietnam.” In *Poids et mesures en Asie du Sud-Est: systèmes métrologiques et sociétés* 2, edited by Pierre le Roux, Bernard Sellato et Jacques Ivanoff, 485-501. Paris: École française d'Extrême-Orient.
- Wickizer, Vernon Dale. And Bennett, Merrill Kelley. 1941. *The rice economy of Monsoon Asia*.

- California: Food research institute. Standford University. (『モンスーン・アジアの米穀経済』
玉井虎雄・弘田嘉男共訳. 日本評論新社. 1958.)
- Woodside, Alexander Barton. 1971. *Vietnam and the Chinese Model*. Cambridge: Harvard university
press.
- Yacono, Xavier. 1969. *Histoire de la colonisation française*. (Collection Que sais-je ? No.452).
Paris : Presses Universitaires de France. (『フランス植民地帝国の歴史』 平野千果子訳. 白
水社. 1998.)

(日本語文献)

- 相沢隆. 1985. 「中世後期マイン・フランケン地方における領邦と都市」『史学雑誌』 94(6):
40- 67.
- 明石陽至編集解説. 2004. 『榊原家所蔵南方軍軍政総監部関係文書』(編集復刻版第 8 巻)
龍溪書舎.
- アジア・アフリカ研究所編. 1970. 『ベトナム解放史』 労働旬報社.
- 阿部猛. 2006. 『度量衡の事典』 同成社.
- 天野元之助. 1940. 『支那農業経済論 上』 改造社.
- 飯尾禎. 1942. 『大東亜共栄圏交通綜観』 東洋堂.
- 生田滋. 1991. 「近世初頭の東南アジアにおける世界秩序」『思想』 801 : 40-61.
- 磯田道史. 2003. 『武士の家計簿「加賀藩御算用者の幕末維新」』 新潮新書.
- 逸見重雄. 1941. 『仏領印度支那研究』 日本評論社.
- 伊藤正子. 2003. 『エスニシティ<創生>と国民国家ベトナムー中越国境地域タイ族・
ムン族の近代』 三元社.
- 今井昭夫. 1988. 「ホアン・ダオにおける反儒教と欧化主義」『地域研究』 五号: 162-190.
- 岩井文夫. 2003. 「フランスの資料に見る 18 世紀ベトナム南部コーチシナの農業」『明海大
学経済学論集』 15(1) : 116-120.
- 太田晃舜. 1965. 「第 2 次世界大戦後における北ベトナムの交通復興とその意義」『新地理』
13 (3) : 80-87.
- . 1970. 「トンキンデルタにおける道路・水路の一特色」『新地理』 17 (4) : 38-49.
- 大塚直樹. 2000. 「植民地期ベトナムの地域分化ーフランス土地政策との関連を中心とし
てー」『史苑』 第 60 巻 2 号 : 93-120.
- 大西和彦. 2011. 『歴史と文化から見たベトナム人 ; 人材育成と活用への心構え - 』 ジェト
ロハノイ.
- . 2012. 「フエ地域の九天玄女信仰について」 西村昌也[ほか]編『フエ地域の歴史と
文化 : 周辺集落と外からの視点 (周縁の文化交渉学シリーズ, 7)』 : 557-577. 関西大学文

化交渉学教育研究拠点 (ICIS)

- 大野美紀子. 2009. 「南部」末成道男編. 『ベトナム文化人類学文献解題』: 86-96. 風響社.
- 岡田友和. 2010. 「フランス植民地帝国における現地人官吏制度: インドシナを事例に」『史学雑誌』119 編第 6 号: 1-34.
- 小樽哲央・中川武・西本真一・中沢信一郎・土屋武・坂本忠規・白井裕泰・高野恵子. 1999. 「阮朝宮殿建設造営に用いられる尺度について: ヴィエトナム/フエ・阮朝王宮の復原的研究(その 25)」『日本建築学会大会学術講演梗概集』F2: 171-172.
- 海上保安庁. 2000. 『南シナ海水路誌』海上保安庁.
- 柿崎一郎. 2000. 『タイ経済と鉄道: 1885~1935 年』日本経済評論社.
- 片倉穰. 1986. 『ベトナム前近代法の基礎的研究 『国朝刑律』とその周辺』風間書房.
- 金子鷹之助 編著. 1941. 『甦生仏領印度支那の全貌』愛国新聞社出版部.
- 加納啓良. 1986. 「インドネシア・ジャワの今昔」小島麗逸・大岩川嫩編. 『「はかり」と「くらし」第三世界の度量衡』(アジアを見る眼 70) 46-55. アジア経済研究所.
- 狩谷掖斎; 富谷至校注 2008. 『本朝度量権衡攷』(ワイド版東洋文庫, 537,546) 平凡社.
- 川嶋彩・中川武・西本真一・中沢信一郎・土屋武・坂本忠規・白井裕泰・高野恵子. 1999. 「大工道具の分類 : ヴィエトナム/フエ・阮朝王宮の復原的研究 (その 27)」『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2: 175-176.
- 菊池一雅. 1975. 『インドシナの社会構造』早稲田大学出版部.
- . 1966. 『ベトナムの農民』古今書院.
- 菊池道樹. 1978. 「植民地ヴェトナムの北部農村における地主制試論」『アジア経済』5: 75.
- . 1988. 「サイゴン開港の歴史的意義」『東南アジア 歴史と文化』17: 3-37.
- グエン・クアン・ゴック/ヴァー・ドゥオン・ルオン. 2010. 「17 世紀のアジア貿易ネットワークへのベトナムの加入」菊池栄一・阿部百合子編『海の道と考古学 インドシナ半島から日本へ』110-126. 高志書院.
- 工富工. 1943. 『佛領印度支那に於ける司法制度』(司法研究報告書, 第 32 輯 2). 司法研究所.
- 岸本美緒. 1997. 『清代中国の物価と経済変動』研文出版.
- 清末隆廣・中川武・白井裕泰・中沢信一郎・坂本忠規・中村泰一. 2003. 「ものさしについて (III): ヴェトナム/フエ・阮朝王宮の復原的研究 (その 70)」『日本建築学会関東支部研究報告集 II』73: 529-535.
- グエン・ヴァン・キム (菊池誠一訳). 2003. 「ダンチョンにかんする研究」『海のシルクロードからみたベトナム中部・南部の考古学的研究; 4 部 論攻篇』111-114.
- 清末隆廣・中川武・中沢信一郎・坂本忠規・林英昭. 2004. 「ものさしについて (IV): ヴェトナム/フエ・阮朝王宮の復原的研究 (その 88)」『日本建築学会関東支部研究報告集 II』74: 585-588.
- 清末隆廣・中川武・中沢信一郎・坂本忠規・林英昭・レ・ヴィン・アン. 2004. 「伝統住宅

- の設計技術 (II) : ヴィエトナム/フエ阮朝王宮の復原的研究 (その 105)」『日本建築学会 関東支部 2004 年度 研究発表会 研究報告集』II: 413-416.
- 栗原英世・井野瀬久美恵編. 1999. 『植民地経験：人類学と歴史学からのアプローチ』人文書院.
- 小泉袈裟勝. 1974. 『歴史の中の単位』総合科学出版.
- 小泉袈裟勝編. 1991. 『図解単位の歴史事典』柏書房.
- 小岩信竹. 2003. 『近代日本の米穀市場—国内自由流通期とその前後—』農林統計協会.
- 後藤均平. 1972. 「ベトナム通史書出版案内」『史苑』33 (1) : 82-91.
- . 1975. 『ベトナム救国抗争史：ベトナム・中国・日本』新人物往来社.
- 権上康男. 1985. 『フランス帝国主義とアジア インドシナ銀行史研究』東京大学出版会.
- 坂本 忠規・中川 武・中沢 信一郎 他. 2009. 「ベトナムの木造建築と大工道具：ハナム省・トゥアティエンフエ省・ニントゥアン省における調査報告」『竹中大工道具館研究紀要』20: 37-76.
- 桜井由躬雄. 1979. 「雒田問題の整理--古代紅河デルタ開拓試論」『東南アジア研究』17(1) : 3-57.
- . 1980a. 「10 世紀紅河デルタ開拓試論」『東南アジア研究』17(4) : 597-632.
- . 1980b. 「李朝期(1010-1225)紅河デルタ開拓試論：デルタ開拓における農学的適応の終末」『東南アジア研究』18(2) : 271-314.
- . 1986. 『ベトナム村落の形成：村落共有田 コンディエン制の史的展開』（東南アジア研究叢書 21）創文社.
- . 1987. 「ベトナム紅河デルタの開拓史」渡部忠世 責任編集『稲のアジア史』第 2 巻 : 235-276. 小学館.
- . 1989. 「陳朝期紅河デルタ開拓試論-1-西沱濫原の開拓」『東南アジア研究』27(3) : 275-300.
- . 1994「東南アジアの生態的枠組み」池端雪浦編『変わる東南アジア史像』: 22-46. 山川出版社.
- . 1997a. 『緑色の野帖：東南アジアの歴史を歩く』めこん.
- . 1997b. 「ベトナム紅河デルタにおける水田開発の史的展開」『国際農林業協力』20(7) : 19-32.
- 桜井由躬雄編. 1995. 『もっと知りたいベトナム』第 2 版. 弘文堂.
- 渋谷節子. 2000. 「メコンデルタ・カントー省の家族と社会：農村の家族生活の概観を中心に」『ベトナムの社会と文化』2 : 26-45.
- 嶋尾稔. 1991. 「明命期 (1820-1840) ベトナムの南圻地方統治に関する一考察」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』23 : 175-191.
- . 1992. 「植民地期北部ベトナム村落における秩序再編について：郷約再編の一事例の検討」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』24: 111-153.

- . 2012. 「ベトナム阮朝期の徴税・徴兵に関する新史料の紹介」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』43: 249-261.
- 徐 浩哲. 2010. 「韓国のメートル法受容過程と植民地経験：植民地朝鮮と帝国日本：民族・都市・文化：権力と都市空間」『アジア遊学』138: 32-46.
- 正地里江. 1999. 「和裁と尺度：尺貫法からメートル法へ」『東京家政学院生活文化博物館年報』7・8: 107-114.
- 末成道男編. 2009. 『ベトナム文化人類学文献解題』風響社.
- 関本紀子. 2006. 「20 世紀初頭の仏領期北部ベトナムにおける交通インフラ建設とその経済的影響－輸送事業の進展と米価変動に関する一考察－」平成 17 年度東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文.
- . 2010. 『はかりとものさしのベトナム史：植民統治と伝統文化の共存』（ブックレット「アジアを学ぼう」20）風響社.
- . 2013. 「植民地期北部ベトナムの度量衡統一議論とその背景」『東南アジア. 歴史と文化』42: 32-58.
- . 2014a. 「植民地期北部ベトナムの米穀計量単位に見える地域的多様性の考察」『ベトナムの社会と文化』9（採録決定済）.
- . 2014b. 「植民地期ベトナム文献資料所蔵機関案内」『ベトナムの社会と文化』9（採録決定済）.
- 芹澤知広. 1996. 「ベトナム華人社会研究の課題と展望：ホーチミン市チョロン地区の共同調査から」『南方文化』23: 67-78.
- . 1999. 「ハノイの華僑に関するノート」『ベトナムの社会と文化』1: 171-178.
- . 2001. 「華人カトリック教会のネットワーク：ベトナム・ホーチミン市の事例を中心に」『アジア遊学』24: 5-17.
- 大東亜罐詰産業協力会. 1943. 『資料 第 6 号仏領印支那の罐詰』大東亜罐詰産業協力会.
- 太平洋協会編. 1942. 『仏領印度支那：政治・経済』河出書房.
- 台湾総督官房調査課編. 1925. 『西貢米の調査』台湾総督官房調査課編.
- 台湾総督府交通局鉄道部運輸課. 1940. 『仏領印度支那の鉄道』南洋鉄道調査資料第 1 号. 台湾総督府交通局鉄道部運輸課.
- 高田誠二. 1999. 「「身長」は単位としての機能をもつか：尋との比較による加法性の検討」『計量史研究』21（22）: 1-10.
- 高田洋子. 1979. 第一次世界大戦前における「コーチシナ」の米の輸出とフランスのインドシナ関税政策」『国際関係学研究 別冊』: 57-68.
- . 1983. 「植民地コーチシナにおける国有地払下げと水田開発：19 世紀末までの土地政策を中心に」『国際関係学研究』: 79-94.
- . 1984. 「20 世紀初頭のメコン・デルタにおける国有地払い下げと水田開発」『東南アジア研究』22 巻 3 号: 241- 259.

- . 1991. 「フランス植民地期ベトナムにおける華僑政策：コーチシナを中心に」『国際教養学論集』1：59-89.
- . 1994. 「メコン・デルタの開発」池端雪浦編『変わる東南アジア史像』：240-260. 山川出版社.
- . 1995. 「歴史的視点より見るメコン・デルタの農業開拓；1995 年夏の現地調査報告」『国際教養学論集』5：133-168.
- . 1996. 「チャヴィン省のクメール・クロム：1995 年夏のメコン・デルタ農村調査報告」『国際教養学論集』6：1-35.
- . 1998. 「フランス植民地期メコン・デルタ西部の開拓：Can Tho 省 Thoi Lai 村の事例研究」『敬愛大学国際研究』1：59-90.
- . 1999. 「メコン・デルタの多民族社会：Tra Vinh 省 Hoa Thuan 村の史的研究」『敬愛大学国際研究』3：113-143.
- . 2001a. 「インドシナ」加納啓良責任編集『岩波講座東南アジア史 6 植民地経済の繁栄と凋落』：195-218. 岩波書店.
- . 2001b. 「海岸複合地形における砂丘上村落の農業開拓」『東南アジア研究』39 卷 1 号：10-40.
- . 2003. 「法と植民地主義：ベトナムにおけるフランス近代法導入をめぐる一考察」『敬愛大学国際研究』12：1-22.
- . 2005. 「フランス領インドシナの植民地都市研究序説」中川文雄・山田睦男編『JCAS 連携研究成果報告 8 植民地都市の研究』439-441. 人間文化研究機構国立民族学博物館地域研究企画交流センター.
- . 2009. 『メコンデルタ 植民地時代の記憶』新宿書房.
- . 2011. 「仏領期メコンデルタにおける大土地所有制の成立：バクリュウ地方の事例研究（1）」『総合地域研究』第 1 号：59-80.
- . 2012. 「仏領期メコンデルタにおける大土地所有制の成立：バクリュウ地方の事例研究（2）」『総合地域研究』第 2 号：52-75.
- 高田洋子・ピエール・ブロシュ. 2001. 「広大低地氾濫原の開拓史：植民地期トランスバサックにおける運河社会の成立」『東南アジア研究』39 卷 1 号：41-69.
- 武内房司. 2010. 「ヴェトナム国民党と雲南：滇越鉄路と越境するナショナリズム」『東洋史研究』69 卷 1 号：92-122.
- 竹田龍児. 1969. 「ヴェトナムに於ける国家権力の構造」山本達郎編『東南アジアにおける権力構造の指摘考察』：117-139.
- 辻清三編. 1936. 『世界の度量衡とメートル法』神戸市産業課.
- 津田英剛. 1970. 「東南アジアにおける三平野（トンキン、メコン、チャオピャ平野）の水路分布に関する若干の考察」『史苑』31(1)：39-67.
- 土屋武・中川武・西本真一・高野恵子・中沢信一郎・田口康子. 1995. 「阮朝王宮の配置寸

- 法計画の分析 (II) : ヴィエトナム/フエ・阮朝王宮の復原的研究 (その 3)」『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2: 531-532.
- 坪井善明. 1991. 『近代ヴェトナム政治社会史 : 阮朝嗣徳帝統治下のヴェトナム 1847-1883』東京大学出版会.
- 鶴見良行. 1993. 『ナマコの眼』筑摩書房.
- 東亜海運株式会社企画課. 1941. 『仏領印度支那の海陸空運概況第二編 陸運』調査資料第 3 巻第 8 号. 東亜海運株式会社企画課.
- 東亜同文会編. 1917a. 『支那省別全誌』(第二巻 広西省) 東亜同文会.
- . 1917b. 『支那省別全誌』(第三巻 雲南省) 東亜同文会.
- ドー・バン (福田康夫・西村昌也訳). 2012. 「17-19 世紀フエの歴史変遷におけるタインハー港町とバオヴィン港町」西村昌也, グエン・クアン・チュン・ティエン, 野間晴雄, 熊野建 編『周縁の文化交渉学シリーズ 7 : フエ地域の歴史と文化 : 周辺集落と外からの視点』関西大学文化交渉学教育研究拠点. 75-84.
- 富樫洋之・中川武・西本真一・中沢信一郎・白井裕泰・高野恵子・土屋武・石原彩子・佐々木太清・柳下敦彦. 1997. 「興廟の構造形式と平面計画における単位長について ヴィエトナム/フエ・阮朝王宮の復原的研究 (その 10)」『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2: 473-474.
- 富田徹男. 2002. 「度量衡の歴史展」『計量史研究』24 (1) : 35-39.
- 中川武・中沢信一郎. 1996. 「フエ阮朝王宮の修復保存」(アジア同時代シリーズ 2 ベトナム建築大博覧)『SD』通号 378 : 134-137.
- 中沢新一郎・中川武・西本真一・高野恵子・土屋武. 1996. 「ものさしの用い方と単位長さについて : ヴェトナム/フエ・阮朝王宮の復元的研究 (その 5)」『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2: 491-492.
- 中沢信一郎・中川武・西本真一・土屋武・坂本忠規・白井裕泰・六反田千恵. 2000. 「ものさしについて II : 崇恩殿の間竿 : ヴェトナム/フエ・阮朝王宮の復原的研究 (その 31)」『日本建築学会大会学術講演梗概集』F2: 277-278.
- 永積昭. 1977. 『東南アジアの歴史 : モンスーンの風土』(新書東洋史 7) 講談社.
- 南草康博. 1943. 『南方圏商品学』地人書館.
- 新倉俊一 [ほか] 編. 1999. 『事典現代のフランス』(増補版再版) 大修館書店.
- 日本計量協会. 1966. 『度量衡の歴史展 : 解説メートル法への発展』日本計量協会.
- 二村隆夫監修. 2002. 『単位の事典』丸善.
- 農業省米穀局. 1938. 『佛領印度支那の米』農林省米穀局.
- 野田良之. 1974. 「フランス法」田中英夫・野田良之編『外国法の調べ方 : 法令集・判例集を中心に』124-168. 東京大学出版会.
- 野村晴雄. 2003. 「P. グルーのみたベトナム農村空間の「米の力」 : 『トンキンデルタの農民』再検」『関西大学文学論集』52 巻 3 号: 145-172.

- 野村耕一・末廣昭. 1986. 「タイ式尺貫法」小島麗逸・大岩川嫩編. 『「はかり」と「くらし」第三世界の度量衡』(アジアを見る眼 70) 61-69. アジア経済研究所.
- 橋本萬平. 1998. 「西洋度量衡の受容(1)」『計量史研究』20(21): 1-8.
- . 1999. 「西洋度量衡の受容(2)」『計量史研究』21(22): 41-48.
- . 2000. 「西洋度量衡の受容(3)」『計量史研究』22(23): 55-75.
- 林英昭・中川武. 2010. 「腋尺を生むべき建築形式: ヴィエトナム/フエ阮朝王宮の復原的研究」その154)『日本建築学会大会学術講演梗概集』F2: 605-606.
- 林英昭・中川武・中沢信一郎・坂本忠規・レ・ヴィン・アン. 2005. 「伝統住宅の設計技術(I): ヴィエトナム/フエ阮朝王宮の復原的研究(その104)」『日本建築学会関東支部 2004年度 研究発表会 研究報告集』II: 409-412.
- 林英昭・中川武・中沢信一郎・坂本忠規・レ・ヴィン・アン. 2006. 「伝統住宅の設計技術(III): ヴィエトナム/フエ阮朝王宮の復原的研究(その115)」『日本建築学会関東支部 2005年度 研究発表会 研究報告集』II: 457-460.
- 林英昭・中川武・中沢信一郎・坂本忠規・レ・ヴィン・アン. 2006. 「伝統住宅の設計技術(IV): ヴィエトナム/フエ阮朝王宮の復原的研究(その116)」『日本建築学会関東支部 2005年度 研究発表会 研究報告集』II: 461-464.
- 林英昭・中川武・中沢信一郎・坂本忠規・レ・ヴィン・アン. 2006. 「伝統住宅の設計技術(V): ヴィエトナム/フエ阮朝王宮の復原的研究(その117)」『日本建築学会関東支部 2005年度 研究発表会 研究報告集』II: 465-468.
- 潘佩珠. 1970. 『ヴェトナム亡国史 他』(東洋文庫 73) 平凡社.
- ファン・タイン・ハイ(西村昌也訳). 2012. 「フエ文化と中部ベトナム文化形成過程における広南阮氏の首府」西村昌也, グエン・クアン・チュン・ティエン, 野間晴雄, 熊野建 編『周縁の文化交渉学シリーズ 7: フエ地域の歴史と文化: 周辺集落と外からの視点』関西大学文化交渉学教育研究拠点. 497-505.
- フェザ・ギュネルギュン(多賀谷宏訳). 1999. 「オスマン・トルコへのメートル法導入史」『計量史研究』21(22): 63-79.
- . 2000. 「オスマン帝国末期からトルコ共和国発足期まで(1881年-1934年)のメートル法導入史」『計量史研究』22(23): 97-112.
- 藤原利一郎. 1986. 『東南アジア史の研究』法蔵館.
- 藤森英男. 1986. 「フィリピン・マニラの市場で」小島麗逸・大岩川嫩編. 『「はかり」と「くらし」第三世界の度量衡』(アジアを見る眼 70) 39-45. アジア経済研究所.
- 古田元夫. 1995. 『ベトナムの世界史』東京大学出版会.
- 堀井健三. 1986. 「マレーシア土着の度量衡単位」小島麗逸・大岩川嫩編. 『「はかり」と「くらし」第三世界の度量衡』(アジアを見る眼 70) 28-33. アジア経済研究所.
- 松並秀子. 1994. 「チャンフー80番家屋の修理工事における大工職人とその道具について」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』1: 53-62.

- 松本信広. 1969. 『ベトナム民族小史』(岩波新書 715) 岩波書店.
- 松尾信之. 2000. 「土地台帳から見た植民地期土地政策」『ベトナムの社会と文化』2:280-290.
- 満鉄東亜経済調査局. 1939. 『仏領印度支那に於ける華僑』(南洋華僑叢書, 第2巻) 南満州鉄道株式会社東亜経済調査局.
- 村山祐司. 1990. 『地域分析: 地域の見方・読み方・調べ方』古今書院.
- . 1991. 『交通流動の空間構造』古今書院.
- メートル法実行期成委員会. 1967. 『日本メートル法沿革史』メートル法実行期成委員会.
- 桃木至郎. 1990. 「10-15 世紀の南洋交易とヴェトナム」柴田三千雄 [ほか] 編『シリーズ世界史への問い 3: 移動と交流』: 225-226. 岩波書店.
- . 1992. 「10～15 世紀ベトナム国家の「南」と「西」」『東洋史研究』51(3): 464-497.
- . 2011. 『中世大越国家の成立と変容』大阪大学出版会.
- 八尾隆生. 2001. 「収縮と拡大の交互する時代: 16-18 世紀のベトナム」石井米雄責任編集『岩波講座東南アジア史 3 東南アジア近世の成立』: 233-259. 岩波書店.
- 山田秀夫. 1977. 「19 世紀後半の東南アジアにおけるモノカルチャ型輸出貿易の発展」『経済研究』28(2): 142-155.
- 山本達郎. 1984. 「国朝刑律にみえる貶爵」滝川博士米寿記念会編『律令制の諸問題: 滝川政次郎博士米寿記念論集』: 773-793. 汲古書院.
- 横浜正金頭取席調査課. 1932. 『仏領印度支那貨幣史 調査報告第 85 号』横浜正金銀行調査課.
- レ・ヴィン・アン・中川武・中沢信一郎・林英昭. 2007a. 「トゥオックサームについて: ヴェトナム/フエ阮朝王宮の復原的研究 (その 129)」『日本建築学会大会学術講演梗概集』F2: 171-172.
- レ・ヴィン・アン・中川武・中沢信一郎・林英昭. 2007b. 「腋尺について (I): ヴェトナム/フエ阮朝王宮の復原的研究 (その 125)」『日本建築学会関東支部研究報告集 II』77: 385-388.
- レ・ヴィン・アン・中川武・中沢信一郎・林英昭. 2008. 「腋尺について (II): ヴェトナム/フエ阮朝王宮の復原的研究 (その 135)」『日本建築学会関東支部研究報告集 II』78: 301-304.
- La Minh Hang 監修. 2007. 『大南国語: 影印・翻字・解説・漢字索引』[文部科学省科学研究費補助金特定領域研究 (平成 17 年度発足) 東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成・寧波を焦点とする学際的創生・現地調査研究部門出版文化班・茶文化班].

付録

官製年報における度量衡制度（全訳）

- 1-1 : 現地度量衡覚え書き (Note sur les Poids et mesures indigènes.) (1887-1891 年)
- 1-2 : アンナン度量衡 (Poids et mesures Annamites) (1890-1897 年)
- 1-3 : 現地度量衡 (Poids et mesures indigène) (1893-1897 年)
- 1-4 : 現地度量衡 (Poids et mesures indigène) (1899-1901 年)
- 1-5 : 度量衡 (Poids et mesures) (現地の人々の取引の中で用いられていた地方制度)
(1905-1907 年)
- 1-6 : アンナン法定度量衡制度 (Système legal des poids et mesures Annamites)
(1910-1912 年)
- 1-7 : 度量衡・アンナンの制度 (Poids et mesures, Systeme Annamites) (1914-1924 年)

付録 1

① 現地度量衡覚え書き

(Note sur les Poids et mesures Indigènes)

- ・単位名はカタカナ表記に直し、その後原文を示した。原文の声調・発音記号はあくまで原文のままとした。
- ・リットル記号は、数字の「1」との混同を避けるため「l」ではなく「lit」表示とした。

(出所)

1887 年第 2 部 : 242-244 ページ

1888 年欠本

1889 年第 1 部 : 399-401 ページ

以下 1890 年からはタイトルが **Poids et mesures Indigènes** に変更、内容は同じ

1890 年第 2 部 : 1235-1236 ページ

1891 年第 2 部 : 207-208 ページ

1892 年第 2 部 : 該当箇所なし

アンナンの度量衡制度は全て嘉隆通宝の直径に基づいて決められている。しかしながら、その原器はまだ登録されておらず、法定の制度が守られていない地方色の強い度量衡制度の使用は、今日フランス式度量衡が付け加えられた正確なアンナンの長さ、重量単位の決定を難しくしている。

こうしたわけで、長さの単位として2種類のトゥオックが存在する。一つはトゥオック・モック (thuoc moc) 小さい尺で、嘉隆通宝 18 個分の直径の長さに値する。もう一つはトゥオック・ヴァイ (thuoc vai) 大きい尺で、トゥオック・マイ(thuoc may)とも呼ばれ、長さは嘉隆通宝 30 個分の直径にあたる。つまり、法定のトゥオック・モックは 0.424 メートルであるが、嘉隆通宝 18 個分の直径を入念に計測すると 0.434 メートルである。一方トゥオック・ヴァイの長さは 0.644 メートルとなる。

コーチシナではトゥオック・モックは特に全ての木造、石造、土造などの建築物と船舶の計測に用いられる。トゥオック・ヴァイは織物の計測に使われる。トンキンでは、資料に基づくトゥオック・モックは区別なく、不明瞭に用いられていた。数多くの現地行政の中で、トゥオック・モックはほとんどフエでしか見られなかった。いわば理論上存在していただけで、トンキンの大多数の人々は名前すら知らなかった。

重量単位に関しては、3 つの種類のピクル (picul) あるいはタ (ta) があり、これらは計るものや重さによって使い分けられる。

1. 42.5 貫銭のピクル (米、未精米の米用)
2. 45 貫銭のピクル (塩用)
3. 50 貫銭のピクル (薪、鉄など用)

資料によれば、未精米用のピクルは、1 貫銭の重さが 1.5kg の貫銭を基準とするため、その重量は 63.750kg になる。

コーチシナにおける貨物用米 (riz cargo) のピクルは 60.7kg

脱穀米 (paddy brut) のピクルは 68kg

(これらはおそらく、精米した際に出るもみがらなどのロスを見積もったもので、精米すれば 60.7kg に帰着するものである)。

一方公式ピクル、あるいはヨーロッパ人によって運営されている企業体では、アンナン人あるいは中国人との取引においてピクルは 60.4kg である。

以下では、長さの単位トゥオック・モック (0.424m) や商業用重量単位ピクル、タ (60.4kg) を基準とした各種度量衡の表を示す。

長さの単位

長さの単位	トゥオック・モック(thuoc moc)・・・0.424m
	トゥオック・ヴァイ(thuoc vai)・・・0.644m

トゥオック・モックの倍量単位

タム(tam)(5 トゥオック・モック) . . . 2.12m
チュウオン(truong)(10 トゥオック・モック) . . . 4.204m(ママ)

トゥオック・モックの分量単位

リー(ly) . . . 0.000424m
ファン(phan)(10 リー) . . . 0.00424m
タック(tac)(10 ファン) . . . 0.0424m

トゥオック・ヴァイの倍量単位

チュウオン(truong)(10 トゥオック・ヴァイ) . . . 6.44m

トゥオック・ヴァイの分量単位

ファン(phan) . . . 0.00644m
タック(tac)(10 ファン) . . . 0.0644m

道程計測の単位はリー(ly)が用いられる。俗称ではザン(dang)(444.44m)である。

土地測量の単位

面積をはかる際は 0.644m のトゥオック・ヴァイが使われる。

マウ(mau) . . . 62.25 アール
サオ(sao)(1/10 マウ) . . . 6.225 アール
トゥオック(thuoc)(1/15 サオ) . . . 0.4115 アール
タック(tac)(1/10 トゥオック) . . . 0.04115 アール
ファン(phan)(1/10 タック) . . . 0.00414 アール

重量単位

ファン(phan) . . . 0.3775g
ドン(dong) . . . 3.775g
ルオン(luong)、オンス(once)、テール(tael)(10 ドン) . . . 37.750g
カン(can)、リーブル(livre)(16 オンス) . . . 0.604kg
タ(ta)、ピクル(picul)(100 リーブル) . . . 60.4kg

容積単位

トゥオック(thuoc) . . . 0.02932 lit

ハップ(hap)(10 トウオック)	・ ・ ・ 0.2932 lit
オアン(oan)、バット(bat)	・ ・ ・ 1.2704 lit
タン(thang)(10 ハップ)	・ ・ ・ 2.932 lit
フォン(phuong)、ヴォン(vuong)、ザー(gia)(13 タン)	・ ・ ・ 38.114 lit
ホック(hoc)(2 ヴォン)	・ ・ ・ 76.226 lit

注：ヴォンは精米済みの米を、ホックは未精米の米を量る単位である。精米済みの米 1 ヴォンと、未精米済みの米 1 ホックは同等の価値と見なす。

② アンナンの度量衡

(Poids et mesures Annamites)

- ・単位名はカタカナ表記に直し、その後原文を示した。原文の声調・発音記号はあくまで原文のままとした。
- ・リットル記号は、数字の「1」との混同を避けるため「l」ではなく「lit」表示とした。
- ・筆者による注釈は（ ）内にイタリック体で示した。

(出所)

- 1890 年第 1 部 : 37-38 ページ
- 1891 年第 1 部 : 38-40 ページ
- 1892 年第 1 部 : 欠本
- 1893 年第 1 部 : 42-43 ページ
- 1894 年第 1 部 : 42 ページ
- 1895 年第 1 部 : 42 ページ
- 1896 年第 1 部 : 42 ページ
- 1897 年第 1 部 : 45 ページ

長さの単位

長さの単位はトゥオック・モック(thước mộc)で、0.424m にあたり、木造、土造、石造の建築物全ての計測に、また船舶の計測にも使われる。トゥオック・モックは全ての他の単位の基本となる。

織物の計測には、アンナン人はトゥオック・ヴァイ(thước vải)を使う。トゥオック・マイ(thước may)とも呼ばれる。その長さは1と518/1000 トゥオック・モックにあたり、約0.644mである。

0.424m のトゥオック・モックの倍量・分量単位

リー(ly)	・ ・ ・ 0.000424m
ファン(phân)(10 リー)	・ ・ ・ 0.00424m
タック(tắc)(10 ファン)	・ ・ ・ 0.0424m
トゥオック(thước)(10 タック)	・ ・ ・ 0.424m
タム(tâm)(5 トゥオック)	・ ・ ・ 2.12m
チュウオン(trượng)(10 トゥオック)	・ ・ ・ 4.24m

0.644m のトゥオック・ヴァイの倍量・分量単位

ファン(phân)	・ ・ ・ 0.00644m
タック(tắc)(10 ファン)	・ ・ ・ 0.0644m
トゥオック(thước)(10 タック)	・ ・ ・ 0.644m
チュウオン(trượng)(10 トゥオック)	・ ・ ・ 6.44m

注：布地一巻きは30 トゥオック

道程単位

リー(ly)あるいは俗称ではザム(dặm)	・ ・ ・ 約 444.44m
-----------------------	-----------------

土地測量の単位

畑の計測にはトゥオック・ズオン(thước ruộng)が使われ、それは1と10分の一（つまり1.1）トゥオック・モックと同じである。

マウ(mẫu)	・ ・ ・ 48.944016 アール
サオ(sào)(1/10 マウ)	・ ・ ・ 4.8944916 アール
トゥオック(thước)(1/15 サオ)	・ ・ ・ 0.3262934 アール
タック(tắc)(1/10 トゥオック)	・ ・ ・ 0.03262934 アール
ファン(phân)(1/10 タック)	・ ・ ・ 0.003262934 アール

容積単位

トゥオック(thước)	・ ・ ・ 0.02932 lit
ハップ(hạp)(10 トゥオック)	・ ・ ・ 0.2932 lit
オアン(oán)、バット(bát)	・ ・ ・ 1.2704 lit
タン(thăng)(10 ハップ)	・ ・ ・ 2.932 lit
フォン(phương)、ヴオン(vuông)、ザー(già)(13 タン)	・ ・ ・ 38.113 lit
ホック(hộc)(2 ヴオン)	・ ・ ・ 76.225 lit

重量単位

ファン(phân)	・ ・ ・ 0.383g
ドン(đồng)(10 ファン)	・ ・ ・ 3.83g
ルオン(lượng)、オンス(once)、テール(tael)(10 ドン)	・ ・ ・ 38.3g
カン(cân)、リーブル(livre)(16 オンス)	・ ・ ・ 0.6128kg
タ(tạ)、ピクル(picul)(100 リーブル)	・ ・ ・ 61.28kg

③ 現地度量衡

(Poids et mesures Indigènes)

- ・単位名はカタカナ表記に直し、その後原文を示した。原文の声調・発音記号はあくまで原文のままとした。
- ・リットル記号は、数字の「1」との混同を避けるため「l」ではなく「lit」表示とした。

(出所)

1893 年第 2 部 : LXXXIV-LXXXV ページ

1894 年第 2 部 : 405-406 ページ

1895 年第 2 部 : 461-462 ページ

1896 年第 2 部 : 498-499 ページ

1897 年第 2 部 : 634-635 ページ

アンナンの度量衡制度は嘉隆皇帝の嘉隆通宝の直径が基本となっている。長さの単位として 2 種類が存在しており、一つはトゥオック・モック (thuoc moc) 小さい尺で、嘉隆通宝 18 個分の直径の長さに値する。もう一つはトゥオック・ヴァイ (thuoc vai) 大きい尺で、トゥオック・マイ (thuoc may) と呼ばれ、長さは嘉隆通宝 30 個分の直径にあたる。

この制度はいくつかの地方ではまだ使われているが、嗣徳 25 年 (1872 年) の皇帝の決定により廃止されている。この決定では、3 つのトゥオックの原器がつくられ、アンナン政府によって保管され、それらの呼称、値、派生する単位も規定されている。

長さの単位

トゥオック・モック (thuoc moc、官木尺、quan moc xich) . . . 0.425m

トゥオック・ドー・ズオン (thuoc do ruong、官田尺、quan dien xich) . . . 0.47m

トゥオック・ヴァイ (thuong vai、官縫尺、quan phong xich) . . . 0.644m

トゥオック・モックの倍量単位

グー(ngu)、タム(tâm)(5 トゥオック・モック) . . . 2.125m

チュウオン(truong)(10 トゥオック・モック) . . . 4.25m

トゥオック・モックの分量単位

リー(ly) . . . 0.000425m

ファン(phân)(10 リー) . . . 0.00425m

タック(tắc)(10 ファン) . . . 0.0425m

トゥオック・ド・ズオンの倍量単位

グー(ngu)、タム(tâm)(5 トゥオック・ド・ズオン) . . . 2.35m

チュウオン(truong)(10 トゥオック・ド・ズオン) . . . 4.7m

トゥオック・ド・ズオンの分量単位

リー(ly) . . . 0.00047m

ファン(phân)(10 リー) . . . 0.0047m

タック(tắc)(10 ファン) . . . 0.047m

トゥオック・ヴァイの倍量単位

ズオン(duong)(10 トゥオック・ヴァイ) . . . 6.440m

トゥオック・ヴァイの分量単位

ファン(phân)(10 リー) . . . 0.00644m

タック(tắc)(10 ファン) . . . 0.0644m

土地測量の単位

面積を測る単位は 0.47m のトゥオック・ド・ズオン、官田尺である。

マウ(mâu)(150 平方トゥオック・ド・ズオン)	・・・49.7025 アール
サオ(sao)(9 グーあるいはタム×10 グー)	・・・4.97025 アール
トゥオック(2 グー×3 グー)	・・・0.33135 アール
タック(tắc)(1/10 トゥオック)	・・・0.03315 アール (ママ)
ファン(phân)(1/10 タック)	・・・0.0033135 アール

重量単位

アンナン政府によって導入されている重量単位は唯一 45 貫銭のピクル(picul)、タ(tạ)である。
42、50 貫銭のピクルは商取引で用いられている。

上記に加えて：

ファン(phân)	・・・0.3775g
ドン(đồng)	・・・3.775g
ルオン(luong)、オンス(once)、テール(tael)(10 ドン)	・・・37.75g
カン(cân)、リーブル(livre)(16 オンス)	・・・0.604kg
イエン(yên)(10 カン)	・・・6.04kg
タ(tạ)、ピクル(picul)(10 イエン、100 リーブル)	・・・60.4kg

容積単位

ダウ(dâu)、オ(ô)、タウ(tau)、アン(an)、ザー(gia)と呼ばれる度量衡制度は、米、もみ、穀物の売買に使われる。商業上の取引においては区別なく使われ、これら制度を規定する規定は無い。

アンナン政府によって採用されている容積単位は以下の通りである。

トゥオック(thuoc)	・・・0.02932 lit
カップ(cap)(10 トゥオック)	・・・0.2932 lit
オアン(oan)、ウィエン(uyên)	・・・1.2704 lit
バット(bat)(2 オアン)	・・・2.5408 lit
タン(thang)(10 カップ)	・・・2.932 lit
フォン(phuong)、ヴォン(vuong)、(13 タン)	・・・38.113 lit
ホック(hoc)(26 タン、2 ヴォン)	・・・76.226 lit

④ 現地度量衡

(Poids et mesures Indigènes)

- ・1900 年と 1901 年はカンボジア、ラオスに関しても度量衡制度の紹介がみられるが、本付録では割愛する。
- ・単位名はカタカナ表記に直し、その後原文を示した。原文の声調・発音記号はあくまで原文のままとした。
- ・リットル記号は、数字の「1」との混同を避けるため「l」ではなく「lit」表示とした。

(出所)

1899 年商業部：516-517 ページ

1900 年商業部：511 ページ

1901 年：658-661 ページ

1897年7月2日の総督の布告によって、商取引、土地の収用、土地取引についてトンキンにおけるアンナン尺の長さを0.4メートル、マウを3600平方メートルと定められた。金属製の0.4メートルの原器は各省の法務局に保持され、動産に関する全ての法規や紛争の論拠となる。

アンナンの度量衡制度は嘉隆皇帝の嘉隆通宝の直径が基本となっている。長さの単位として2種類が存在しており、一つはトゥオック・モック (thuoc moc) 小さい尺で、嘉隆通宝18個分の直径の長さに値する。もう一つはトゥオック・ヴァイ (thuoc vai) 大きい尺で、トゥオック・マイ (thuoc may) とも呼ばれ、長さは嘉隆通宝30個分の直径にあたる。

この制度はいくつかの地方ではまだ使われているが、嗣徳25年(1872年)の皇帝の決定により廃止されている。この決定では、3つのトゥオックの原器がつくられ、アンナン政府によって保管され、それらの呼称、値、派生する単位も規定されている。

長さの単位

トゥオック・モック (thuoc moc、官木尺、quan moc xich) . . . 0.425m

トゥオック・ドー・ズオン (thuoc do ruong、官田尺、quan dien xich) . . . 0.47m

トゥオック・ヴァイ (thuoc vai、官縫尺、quan phong xich) . . . 0.644m

トゥオック・モックの倍量単位

ゲー(ngu)、タム(tâm)(5 トゥオック・モック) . . . 2.125m

チュウオン(truong)(10 トゥオック・モック) . . . 4.259m

トゥオック・モックの分量単位

リー(ly) . . . 0.000425m

ファン(phân)(10 リー) . . . 0.00425m

タット(tât)(10 ファン) . . . 0.0425m

トゥオック・ド・ズオンの倍量単位

ゲー(ngu)、タム(tâm)(5 トゥオック・ド・ズオン) . . . 2.35m

チュウオン(truong)(10 トゥオック・ド・ズオン) . . . 4.7m

トゥオック・ド・ズオンの分量単位

リー(ly) . . . 0.00047m

ファン(phân)(10 リー) . . . 0.0047m

タット(tât)(10 ファン) . . . 0.047m

トゥオック・ヴァイの倍量単位

チャウ(châu)(10 トゥオック・ヴァイ)	・・・3.22m
ドゥオック(duoc)(20 トゥオック・ヴァイ)	・・・6.44m

トゥオック・ヴァイの分量単位

ファン(phân)	・・・0.00644m
タット ^マ (tât)(10 ファン)	・・・0.0644m

土地測量の単位

面積を測る単位は 0.47m のトゥオック・ド・ズオン、官田尺である。

マウ(mâu)(150 トゥオック・ド・ズオン平方)	・・・49.7025 アール
サオ(sao)(9 グーあるいはタム×10 グー)	・・・4.97025 アール
トゥオック(2 グー×3 グー)	・・・0.33135 アール
タック(tât ママ)(1/10 トゥオック)	・・・0.03315 アール
ファン(phân)(1/10 タック)	・・・0.0033135 アール

重量単位

アンナン政府によって導入されている重量単位は唯一 45 貫銭のピクル(picul)、タ(tạ)である。
42、50 貫銭のピクルは商取引で用いられている。

上記に加えて：

ファン(phân)	・・・0.3775g
ドン(đồng)	・・・3.775g
ルオン(luong)、オンス(once)、テール(tael)(10 ドン)	・・・37.75g
カン(cân)、リーブル(livre) ^{ママ} (17オンス)	・・・ ^{ママ} 0.704kg
イエン(yên)(10 カン)	・・・ ^{ママ} 0.04kg(ママ)
タ(tạ)、ピクル(picul)(10 イエン、100 リーブル)	・・・60.4kg

容積単位

ダウ(dau)、オ(ô)、アン(an)、ザー(gia)と呼ばれる度量衡制度は、米、もみ、穀物の売買に使われる。商業上の取引においては区別なく使われ、これら制度を規定する規定は無い。
アンナン政府によって採用されている容積単位は以下の通りである。

トゥオック(thuoc)	・・・0.02932 lit
カップ(cap)(10 トゥオック)	・・・0.2932 lit

オアン(oan)、ウィエン(uyên)	・ ・ ・ 1.2704 lit
バット(bat)(2 オアン)	・ ・ ・ 2.5408 lit
タン(thang)(10 カップ)	・ ・ ・ 2.932 lit
フォン(phuong)、ヴォン(vuong)、(13 タン)	・ ・ ・ 38.113 lit
ホック(hoc)(26 タン、2 ヴォン)	・ ・ ・ 76.226 lit
ヴォンは米を、ホックはもみをはかる。	

⑤ 度量衡制度 (Poids et mesures)

- ・単位名はカタカナ表記に直し、その後原文を示した。原文の声調・発音記号はあくまで原文のままとした。
- ・リットル記号は、数字の「1」との混同を避けるため「l」ではなく「lit」表示とした。
- ・法令部分は付録 2 に掲載しているものと同じであるため割愛する。

(出所)

1905 年 : 434-438 ページ

1907 年第 2 部 : 87-91 ページ

昔は度量衡制度は非常に複雑で、インドシナの各地域、そして省と省の間でも異なっており、これまで公式の正確な度量衡制度を確立しようと何度も行政的な試みが繰り返された。コーチシナに関しては、1863年に穀物用のアンナンの容積単位ヴォン(vuong)が40リットルと定められた。1881年には、フランス式の度量衡制度の使用がサイゴンとチョロン地区で義務化され、またその後新しい法令によって商取引において穀物の計量は10, 20, 40リットルの単位が許された。

しかしながら、旧来のアンナンや中国の度量衡制度は国内でまだ使われていた。ただ公式ピクルだけが60kgと定められていた。

新しい度量衡行政は法令によって1904年1月1日から仏領インドシナ連邦のこの一部(コーチシナ?)で度量衡制度を施行した。

以下は総督の法令の全文である。

(付録2に掲載しているため割愛)

しかしながら、至る所で中国式の度量衡がいまだ使われている。中国人の商人の数は非常に重要であり、現地の人との交易に関して主要な部分でもある。この度量衡制度は以下のようである。

ピクル=60.573kg、1ピクル=100カティ(cattys)=1600テール(taels)=16000マレ(mares)=16000コンドリーヌ(condorines)=160000キャッシュ(chash)1テール、ポワ(poids)=100コンドリーヌ=37.8g。税関での1キャッシュは604g、1コンドリーヌ=3.78dg。

現地の人同士の交易において今日使われている地方の制度は以下のようである。

1. アンナンとトンキンでは、ピクル、あるいはタは45貫銭で(43、50貫銭のピクルも現地の商業の中で用いられている)、その重さは約60kgで、公式の重量相当量は法律で定められている。

上記に加えて：

ファン(phân)	・・・0.3775g
ドン(đông)	・・・3.775g
ルオン(luong)、オンス(once)、テール(tael)(10ドン)	・・・37.75g
カン(cân)、リーブル(livre)(16オンス)	・・・0.704kg
イエン(yên)(10カン)	・・・6.04kg
タ(ta)、ピクル(picul)(10イエン、100リーブル)	・・・60.4kg

2. カンボジア(省略)

3. ラオス（省略）

長さの単位

容量と重量に関する単位は、非常に多くの異なるものがインドシナの各地にある。

1. コーチシナ、アンナン、トンキン

アンナンの度量衡制度は嘉隆皇帝の嘉隆通宝の直径が基本となっている。長さの単位として 2 種類が存在しており、一つはトゥオック・モック (thuoc moc) 小さい尺で、嘉隆通宝 18 個分の直径の長さに値する。もう一つはトゥオック・ヴァイ (thuoc vai) 大きい尺で、トゥオック・マイ (thuoc may) と呼ばれ、長さは嘉隆通宝 30 個分の直径にあたる。

この制度はいくつかの地方ではまだ使われているが、嗣徳 25 年 (1872 年) の皇帝の決定により廃止されている。この決定では、3 つのトゥオックの原器がつくられ、アンナン政府によって保管され、それらの呼称、値、派生する単位も規定されている。

長さの単位

1. トウオック・モック (thước mộc、官木尺、quan mộc xích) ・ ・ ・ 0.425m
2. トウオック・ドー・ズオン (thước đo ruộng、官田尺、quan điền xích) ・ ・ ・ 0.47m
3. トウオック・ヴァイ (thước vai、官縫尺、quan phụng xích) ・ ・ ・ 0.644m

トゥオック・モックの倍量単位

グー(ngũ)、タム(tâm)(5 トウオック・モック) ・ ・ ・ 2.125m
チュウオン(trượng)(10 トウオック・モック) ・ ・ ・ 4.259m

トゥオック・ド・ズオンの倍量単位

グー(ngũ)、タム(tâm)(5 トウオック・ド・ズオン) ・ ・ ・ 2.35m
チュウオン(trượng)(10 トウオック・モック) ・ ・ ・ 4.7m

トゥオック・ヴァイの倍量単位

チャウ(châu)(10 トウオック・ヴァイ) ・ ・ ・ 3.22m
ドゥオック(được)(20 トウオック・ヴァイ) ・ ・ ・ 6.44m

トゥオック・モックの分量単位

リー(ly) ・ ・ ・ 0.000425m
ファン(phân)(10 リー) ・ ・ ・ 0.00425m
タック(tât)(10 ファン) ・ ・ ・ 0.0425m

トゥオック・ド・ズオンの分量単位

リー(ly) ・ ・ ・ 0.00047m
ファン(phân)(10 リー) ・ ・ ・ 0.0047m
タック(tât)(10 ファン) ・ ・ ・ 0.047m

トゥオック・ヴァイの分量単位

ファン(phân)(10 リー) ・ ・ ・ 0.00644m

タック(tát)(10 ファン) ・ ・ ・ 0.0644m

1897 年 7 月 2 日の総督の布告によって、商取引、土地の収用、土地取引についてトンキンにおけるアンナン尺の長さを 0.4 メートル、マウを 3600 平方メートルと定められた。金属製の 0.4 メートルの原器は各省の法務局に保持され、動産に関する全ての法規や紛争の論拠となる。

インドシナにおける 3 地域では、この面積を測る精度が同様に存在している。

面積を測る単位は 0.47m のトゥオック・ド・ズオン、官田尺である。

マウ(mâu)(150 トゥオック・ド・ズオン平方) ・ ・ ・ 49.7025 アール

サオ(sào)(9 グーあるいはタム×10 グー) ・ ・ ・ 4.97025 アール

トゥオック(2 グー×3 グー) ・ ・ ・ 0.33135 アール

タック(tát)(1/10 トゥオック) ・ ・ ・ 0.03315 アール

ファン(phân)(1/10 タック) ・ ・ ・ 0.0033135 アール

2. カンボジア（省略）

3. ラオス（省略）

⑥ アンナン法定度量衡制度

(System Legal des Poids et mesures Annamites)

・単位名はカタカナ表記に直し、その後原文を示した。原文の声調・発音記号はあくまで原文のままとした。

・ベトナム語の単位名の後に、それにあたるフランスの旧尺度制度の単位名が説明としてつけられているが、ここでは混乱を避けるためフランス語の旧尺度制度単位名を日本語には訳さず、カタカナ表記の後原文を付した。

例：×pied→尺、○pied→ピエ (pied)

・リットル記号は、数字の「1」との混同を避けるため「l」ではなく「lit」表示とした。

・筆者による注釈は () 内にイタリック体で示した。

(出所)

1910 年商業・工業部：53-57 ページ

1911 年商業・工業部：29-33 ページ

1912 年商業・工業部：11-15 ページ

長さの単位

基本の単位はトゥオック（中国語では尺、xích）で、ピエ(pied)あるいはクデ(coudée)にあたり、1 クデまたは2 アンパン(enpans, ガン gang)に等しい。その長さは実際には嘉隆帝、明命帝、嗣徳帝政下では約 0.42m で、保護領の決定によって 0.4m に規定された。公式ピエは官尺(quan xích)と呼ぶ。

一般的な長さの単位

	単位名	ベトナム語 表記	フランス語 表記	換算値	
				ベトナム度量衡制度	メートル系 (m)
倍量単位	チュウオン グー	Trượng Ngũ	Perche Toise	10 トゥオック	4
				5 トゥオック	2
基本単位	トゥオック	Thước (xích)	Pied	10 タック	0.4
分量単位	タック	Tắc	Pouce	10 ファン	0.04
	ファン	Phân	Ligne	10 リー	0.004
	リー	Ly	Point	10 ハオ	0.0004
	ハオ	Hào	1/10 de point	10 ティー	0.00004
	ティー	Ti	1/100 de point	10 ホット	0.000004
	ホット	Hốt	1/1000 de point	10 ヴィ (Vi)	0.0000004

この表から、グー以外の全ての単位は 10 進法である。グーは、チュウオンの一つの単位系である。ホット以下の単位として、ヴィー(vi)、ティエム(tiêm)、サー(sa)、チャン(trân)が十進法で展開し、最後に穀物の粉末や微小物（の量）を示す。

道程の単位

リー(Lý)あるいはザム(Rặm)：スタッド(stade)、360 歩(bộ)あるいは 720m
 ボ(bộ)、グー(ngũ)：トワーズ(toise)、5 トゥオックあるいは 2m

地理学・天文学上の単位

ドー(Độ)：デグレ(degré)、250 リーあるいは約 120km(注 1)
 リー(Lý)：スタッド(stade)、360 歩(bộ)あるいは 720m
 ボ(bộ)：トワーズ(toise)またはパ(pas)、5 トゥオックあるいは 2m

（注 1）アンナン人は中国の度量衡単位の専門用語を導入しており、全てトゥオックという単位を基本としている。

1 トゥオックは 0.3m ではなく 0.4m であり、0.3m というのは中国式で架空に計算した結果である。中国のピエ（尺、トゥオック）で計算するとデグレはそこまで長大な距離にならない。

面積単位

面積の単位は2種類あり、ひとつは公式の、もうひとつは民間の単位である。

面積(superficie)という単語の同意語は中国語ではリエン(riên)であり、アンナン語ではマツト(mặt)である。平方を表わす単語は、第一にフオン(phương)であり、第二にヴオン(vuông)である。つまりフオン・リエン(phương riên)あるいはマツト・ヴオン(mặt vuông)は面積の平方を示しており、ゲー・ヴオン(ngũ vuông)、トゥオック・ヴオン(thước vuông)は平方トワーズ(toise carrée)、平方ピエ(pied carré)のことである。

§ 1. 一般の単位

基本単位はタン、あるいは平方ゲーで平方トワーズ(toise carrée)、つまり1平方ゲー(2m×2m)なので4 m²、あるいは0.04 アールである。タン(than)は以下の表から分かるように、全ての他の面積単位と関連づけられている。

	単位名	ベトナム語 表記	フランス語 表記	換算値	
				ベトナム度量衡制度	メートル系
倍量単位	マウ	Mẫu	Arpent	10 サオ	36アール(3600 m ²)
	サオ	Sào	Perche	10 ミエン	3.6アール(360 m ²)
	ミエン	Miếng	Bouchée	9 タン	0.36アール(36 m ²)
基本単位	タン	Than	Toise carrée	25 ゲー	0.04アール(4 m ²)
分量単位	ゲー、オー、カン	Ghế, Ô, Khẩu	Pied carré	1 平方トゥオック あるいは4平方ガン	0.16 m ²
	ガン	Gang	Empan carré	—	0.04 m ²

マウは 30 ゲー×30 ゲー=900 タン、3600 m²

サオは 30 ゲー×3 ゲー(1)=90 タン、360 m²

ミエンは 3 ゲー×3 ゲー=9 タン、36 m²

タンは 1 ゲー×1 ゲー=1 タン、1 m²(ママ)

ゲーは 1 トゥオック×1 トゥオック=1 平方トゥオック、4 平方ガン (0.16 m²)

ガンは 5 タック×5 タック=1 平方ガン

(1) あるいは 10 ゲー×9 ゲー

以上の2表(※)から、サオは長方形でマウの幅が同じで高さが3ゲーの面積となる。他の単位は全て正方形を形作っている。

(※) インドシナ年報のこの記事においては、上記の部分では表はひとつしか存在しないが、『トンキンの多様性(Variété Tonkinoise)』[A+B 1903: 446]では上の表以外に面積単位を図解で示した表があげられている。(筆者注)

面積測定への適用例

タンが基本となる単位であるため、面積測量の際はまずタンへ換算することが必要となる。その後、マウ、サオ、ミエンなどの各単位へ変換する。

1. グー、タン（平方トワーズ）への換算

まずグーで長方形の面積の縦と横をはかり、平方グーあるいは平方タンを出した後次の方法でマウ、サオ、ミエンへと変換する。

2. タンの派生単位マウ、サオ、ミエンとガン、グーへの換算

マウ、サオ、ミエンはそれぞれ 900、90、9 タンであるので、タンを 9 で割ってマウ、サオ、ミエンをだし、余ったタンは残しておく。ガンに関しては、ガンは 4 ガンで 1 グーであるので、4 で割る。

第 1 例：縦 85 グー7 ガン、横 83 グー9 ガンの土地の場合

1. タンとガンで両辺をかける

$$85.7 \times 83.9 = 7190.23 \text{ (7190 タン 23 ガン)}$$

(以下、『トンキンの多様性(Variété Tonkinoise)』[A+B 1903 : 447-448] ではマウ、サオ、ミエンへの換算手順の続きが示されているが、このインドシナ年報の記事においては省略されている。)(筆者注)

§2 公式単位

公式には、中国語による次の表現が好んで使われる。

単位名	ベトナム語 表記	フランス語 表記	換算値	
			ベトナム度量衡制度	メートル系
マウ	Mẫu	Arpent	10サオ	3600 m ²
カオ(サオ)	Cao (Sào)	Perche	15トゥオック	360 m ²
スイック(トゥオック)	Xích (Thước)	Pied agraire	10タック	24 m ²
トン(タック)	Thôn (Tắc)	Pouce agraire	10ファン	2 m ²
ファン	Phân	Ligne agraire	6リー	0.24 m ²
リー	Ly	Point agraire	1 平方ガン	0.04 m ²

体積単位

体積単位は長さの単位、チュウオン、グー、トゥオック、タック、ファンとリーを 3 乗したものである。立方という単語は、中国語ではフォン・ラップ(phương lập)、アンナン語ではヴォン・ドゥン(vuông đứng)である。従って、立方トワーズ、立方ピエを表わすにはグー・フォン・ラップ、トゥオック・フォン・ラップと言う。

体積計算方法

主に木材や石といった固体物の体積は、通常以下の表で示されているホック、レーやライで表わされる。

単位名	ベトナム語 表記	計算式	換算値	
			ベトナム度量衡制度	メートル系
ホック	Hộc	縦10グー、幅1グー、高さ1トゥオック =20m×2m×0.4m	10レー	16立方メートル
レー	Lê	縦、幅1グー、高さ1トゥオック =2m×0.4m	25ライ	1.6立方メートル
ライ	Lai	1トゥオック立方=0.4×0.4×0.4m	1トゥオック平方	0.064立方メートル

単位名	ベトナム語 表記	計算式	換算値	
		ベトナム度量衡制度	メートル系	メートル系
マウ	Mẫu	1トゥオック×30グー×30グー	60m ² ×0.4	1400m ³
サオ	Sào	1トゥオック×10グー×9グー	20×18×0.4	144m ³
ミエン	Miêng	1トゥオック×3グー×3グー	6×6×0.4	14.4m ³
タン	Than	1トゥオック×1グー×1グー	2×2×0.4	1.6m ³
オー	Ô	1トゥオックの3乗	0.4×0.4×0.4	0.064m ³

容積単位

§1 穀物計量用容積単位

一般的に使われる基本の単位はダウ(đau)であり、旧制度の公式単位はタン(thăng)であった。ダウは約1リットルでタンはその2倍であった。

一般的な単位

	単位名	ベトナム語 表記	フランス語 表記	換算値	
				ベトナム度量衡制度	メートル系
倍量単位	フォン、ヴオン(1) トゥン	Phương, Vuông Thùng	Sétier Panier	約30ダウ 約20ダウ	約30リットル 約20リットル
基本単位	ダウ	Đầu	Boisseau	2バットあるいは10レー	約1リットル
分量単位	バット レー	Bát Lê	tasse Décilitre	5レー 1/10ダウ	約1/2リットル 1デシリットル

(1)これら単位の他にガット(gat)も使われる。

公式単位（穀物納税用）

	単位名	ベトナム語 表記	フランス語 表記	換算値	
				ベトナム度量衡制度	メートル系
倍量単位	ホック(2)	Hộc	Sétier	26 タン	約60リットル
基本単位	タン	Thăng	Boisseau	10カップ	約2リットル
分量単位	カップ	Cáp	Poignée	10トゥオック	-
	トゥオック	Thược	Cuillerée	10サオ	-
	サオ	Sao	1/10 de cuill	10トアット	-
	トアット	Toát	Pincée	10クエ	-
	クエ	Quê	6 grains	6トゥック	-
	トゥック	Túc	1 grain	-	-

(2)ホックは立方トゥオックであり、約0.064立方メートルである。

米に関わる単位

単位名	ベトナム語 表記	フランス語 表記	換算値	
			ベトナム度量衡制度	メートル系
フォン	Phuong	Sétier	30ウィエン	約30リットル
ウィエン	Uyên	Ecuelle	1ダウ	約1リットル

この公式単位は主として穀物による税の支払いのため旧体制下に作られたもので、現在は使われていないとしている。

§2 液体の容積単位

これらの単位は法的な原器によっているものではない。それぞれの単位が異なる相当量を示す場合も頻繁である。

ここではより一般的な単位をあげるにとどめる。

カウ(câu): トンレ(tonnelet)約 20 リットル、ダイ(đài): グランド・キュイエル(grande cuillère)約 2 リットル、ガオ(gáo): プティット・キュイエル(petite cuillère)約 1/2 リットル(3)、チュム(chum)、キエウ(kiêu): グランド・ジャー(grandes jarres)、コン(cong)、ヴォー(vò): ジャー・ムワイヤン(jarres moyennes)、ヴァイ(vại): シランドル(cylindre)、チン(chĩnh): テューブ(tube)、ロ(lọ): クリュッシュ(cruche)、ポ(pot)、フー(hũ): カラフ(carafe)、ナム(nằm): グルド(gourde)、ガルグレット(gargoulette)、ナイ(nai): クルショ(cruchon)、ベ(be): カラフォン(carafon)、バット(bát): タス(tasse)など。

(3)これら 3 つの単位は油の軽量に使われる

重量単位

主要な単位はタ(tạ)で、重量のあるものに用いられ、中程度のものにはカン(cân)が、軽量のものにはラン(lạng)が使われる。ラン、あるいはオンス(once)は、仏中協定のあと 37.783125 グラムに相当する基本単位とみなされているが、アンナンでは一般的には約 39 グラムとしている。

	単位名	ベトナム語 表記	フランス語 表記	換算値	
				ベトナム度量衡制度	メートル系
倍量単位	タ	Tạ	Picul(1)	10 イエン	60.45kg
	イエ	Yến	Dix livres	10カン	6.045kg
	カン	Cân	Livre	16ラン	604.5g
基本単位	ラン	Lạng	Once	10ドン	37.783125g
分量単位	ドン、ティエン	Đông, Tiên	Sapèque	10ファン	3.778g
	ファン	Phân	Grain	10リー	0.377g
	リー	Ly	1/10 de grain	10ハオ	0.0377g
	ハオ	Hào	1/100 de grain	10ティ	0.00377g
	ティ	Ti	1/1000 de grain	10ホット	0.000377g
	ホット	Hốt	1/10000 de grain	10ヴィ	0.0000377g
	ヴィ	Vi	1/100000 de grain	10ティエム(Tiêm)	0.00000377g

(1)アンナンの法定タの他に、3種類のタが使われている。それは40貫銭、45貫銭、50貫銭のタであり

1貫銭が約1.5kgであるから、それぞれ60kg、67.5kg、75kgとなる。

法定のタは約76ダウ(dấu)あるいは76リットルの米に相当する。

ヴィ以下には 10 進法によって区分されたティエム(tiêm)、サー(sa)、チャン(trần)、ズィエウ(diểu)、マック(mặc)、アイ(ai)、トゥアン(tuấn)、トゥアン(tuần)、トゥ(tu)があるが、トゥは小数点以下にゼロが 14 続く単位であり、中国の分厚いめがねをとおしてさえ目に見えないだろう。さらに重量単位として次のものがある。

タ(tạ)、ピクル(picul)；ークアン(quân)、13 リーブル(livre)；ービン(bing)、14 リーブル；ーカン(cân)、リーブル；ーラン(lạng)、オンス(once)；ーズオック(dược)、1/2 オンス；ーチ(tri)、シシリーク(sicilique)；ートゥー(thù)、スクリュピュル(scrupule)。

⑦ 度量衡 アンナンの制度

(Poids et mesures, Système Annamites)

・単位名はカタカナ表記に直し、その後原文を示した。原文の声調・発音記号はあくまで原文のままとした。

・ベトナム語の単位名の後に、それにあたるフランスの旧尺度制度の単位名が説明としてつけられているが、ここでは混乱を避けるためフランス語の旧尺度制度単位名を日本語には訳さず、カタカナ表記の後原文を付した。

例：×pied→尺、○pied→ピエ (pied)

・リットル記号は、数字の「1」との混同を避けるため「l」ではなく「lit」表示とした。

・筆者による注釈は () 内にイタリック体で示した。

(出所)

1914 年商業・工業部：9-12 ページ

1915 年商業・工業部欠本

1916 年商業・工業部欠本

1917 年商業・工業部：8-11 ページ

1918 年商業・工業部：8-11 ページ

1919 年商業・工業部：8-11 ページ

1920 年商業・工業部：8-11 ページ

1921 年商業・工業部欠本

1922 年商業・工業部：8-11 ページ

1923 年商業・工業部：8-11 ページ

1924 年商業・工業部：8-11 ページ

1925 年商業・工業部：掲載なし

1926 年商業・工業部欠本

1927 年欠本

1928 年欠本

1929 年—1933 年、分冊無く全て一冊：度量衡制度記事掲載なし

重量単位

	単位名	ベトナム語 表記	フランス語 表記	換算値	
				ベトナム度量衡制度	メートル系
倍量単位	タ	Tạ	Picul(1)	10 イエン	60.45kg
	イエ	Yến	Dix livres	10カン	6.045kg
	カン	Cân	Livre	16ラン	604.5g
基本単位	ラン	Lạng	Once	10ドン	37.783125g
分量単位	ドン、ティエン	Đông, Tiên	Sapèque	10ファン	3.778g
	ファン	Phân	Grain	10リー	0.377g
	リー	Ly	1/10 de grain	10ハオ	0.0377g
	ハオ	Hào	1/100 de grain	10ティ	0.00377g
	ティ	Ti	1/1000 de grain	10ホット	0.000377g
	ホット	Hốt	1/10000 de grain	10ヴィ	0.0000377g
	ヴィ	Vi	1/100000 de grain	10ティエム(Tiêm)	0.00000377g

(1) アンナンの法定タの他に、3種類のタが使われている。それは40貫銭、45貫銭、50貫銭のタであり

1貫銭が約1.5kgであるから、それぞれ60kg、67.5kg、75kgとなる。

法定のタは約76ダウ(dấu)あるいは76リットルの米に相当する。

長さの単位

基本の単位はトゥオック（中国語では尺、xích）で、ピエ(pied)あるいはクデ(coudée)にあたり、1クデまたは2アンパン(enpans, ガン gang)に等しい。その長さは実際には嘉隆帝、明命帝、嗣徳帝政下では約 0.42m で、保護領の決定によって 0.4m に規定された。公式ピエは官尺(quan xích)と呼ぶ。

一般的な長さの単位

	単位名	ベトナム語 表記	フランス語 表記	換算値	
				ベトナム度量衡制度	メートル系(m)
倍量単位	チュウオン グー	Trượng	Perche	10 トウオック	4
		Ngũ	Toise	5 トウオック	2
基本単位	トウオック	Thước (xích)	Pied	10 タック	0.4
分量単位	タック	Tắc	Pouce	10 ファン	0.04
	ファン	Phân	Ligne	10 リー	0.004
	リー	Ly	Point	10 ハオ	0.0004
	ハオ	Hào	1/10 de point	10 ティー	0.00004
	ティー	Ti	1/100 de point	10 ホット	0.000004
	ホット	Hốt	1/1000 de point	10 ヴィ(Vi)	0.0000004

この表から、グー以外の全ての単位は 10 進法である。

グーは、チュウオンの一つの単位系である。

ホット以下の単位として、ヴィー(vi)、ティエム(tiêm)、サー(sa)、チャン(trân)が十進法で展開し、最後に穀物の粉末や微小物（の量）を示す。

道程の単位

リー(Lý)あるいはザム(Răm)：スタッド(stade)、360 歩(bộ)あるいは 720m

ボ(bộ)、ゲー(ngũ)：トワーズ(toise)、5 トゥオックあるいは 2m

地理学・天文学上の単位

ドー(Độ)：デグレ(degré)、250 リーあるいは約 120km(注 1)

リー(Lý)：スタッド(stade)、360 歩(bộ)あるいは 720m

ボ(bộ)：トワーズ(toise)またはパ(pas)、5 トゥオックあるいは 2m

(注 1) アンナン人は中国の度量衡単位の専門用語を導入しており、全てトゥオックという単位を基本としている。

1 トゥオックは 0.3m ではなく 0.4m であり、0.3m というのは中国式で架空に計算した結果である。中国のピエ（尺、トゥオック）で計算するとデグレはそこまで長大な距離にならない。

面積単位

面積の単位は 2 種類あり、ひとつは公式の、もうひとつは民間の単位である。

面積(superficie)という単語の同意語は中国語ではリエン(riên)であり、アンナン語ではマツト(mặt)である。平方を表わす単語は、第一にフオン(phương)であり、第二にヴオン(vuông)である。つまりフオン・リエン(phương riên)あるいはマツト・ヴオン(mặt vuông)は面積の平方を示しており、ゲー・ヴオン(ngũ vuông)、トゥオック・ヴオン(thước vuông)は平方トワーズ(toise carrée)、平方ピエ(pied carré)のことである。

一般の単位

基本単位はタン、あるいは平方ゲーで平方トワーズ(toise carrée)、つまり 1 平方ゲー (2m×2m) なので 4 m²、あるいは 0.04 アールである。タン(than)は以下の表から分かるように、全ての他の面積単位と関連づけられている。

	単位名	ベトナム語 表記	フランス語 表記	換算値	
				ベトナム度量衡制度	メートル系
倍量単位	マウ	Mẫu	Arpent	10 サオ	36アール(3600m ²)
	サオ	Sào	Perche	10 ミエン	3.6アール(360m ²)
	ミエン	Miếng	Bouchée	9 タン	0.36アール(36m ²)
基本単位	タン	Than	Toise carrée	25 ゲー	0.04アール(4m ²)
分量単位	ゲー、オー、カン	Ghế, Ô, Khẩu	Pied carré	1 平方トゥオック あるいは4平方ガン	0.16m ²
	ガン	Gang	Empan carré	—	0.04m ²

単位名	ベトナム語 表記	計算式		換算値
		ベトナム度量衡制度	メートル系	メートル系
マウ	Mẫu	1トゥオック×30ゲー×30ゲー	$60\text{ m}^2 \times 0.4$	1400 m^3
サオ	Sào	1トゥオック×10ゲー×9ゲー	$20 \times 18 \times 0.4$	144 m^3
ミエン	Miêng	1トゥオック×3ゲー×3ゲー	$6 \times 6 \times 0.4$	14.4 m^3
タン	Than	1トゥオック×1ゲー×1ゲー	$2 \times 2 \times 0.4$	1.6 m^3
オー	Ô	1トゥオックの3乗	$0.4 \times 0.4 \times 0.4$	0.064 m^3

マウは 30 ゲー×30 ゲー=900 タン、3600 m²

サオは 30 ゲー×3 ゲー(1)=90 タン、360 m²

ミエンは 3 ゲー×3 ゲー=9 タン、36 m²

タンは 1 ゲー×1 ゲー=1 タン、1 m²(ママ)

ゲーは 1 トゥオック×1 トゥオック=1 平方トゥオック、4 平方ガン (0.16 m²)

ガンは 5 タック×5 タック=1 平方ガン

(2) あるいは 10 ゲー×9 ゲー

以上の 2 表 (※) から、サオは長方形でマウの幅が同じで高さが 3 ゲーの面積となる。他の単位は全て正方形を形作っている。

(※) インドシナ年報のこの記事においては、上記の部分では表はひとつしか存在しないが、『トンキンの多様性(Variété Tonkinoise)』[A+B 1903 : 446] では上の表以外に面積単位を図解で示した表があげられている。(筆者注)

面積測定への適用例

タンが基本となる単位であるため、面積測量の際はまずタンへ換算することが必要となる。その後、マウ、サオ、ミエンなどの各単位へ変換する。

3. ゲー、タン (平方トワーズ) への換算

まずゲーで長方形の面積の縦と横をはかり、平方ゲーあるいは平方タンを出した後次の方法でマウ、サオ、ミエンへと変換する。

4. タンの派生単位マウ、サオ、ミエンとガン、ゲーへの換算

マウ、サオ、ミエンはそれぞれ 900、90、9 タンであるので、タンを 9 で割ってマウ、サオ、ミエンをだし、余ったタンは残しておく。ガンに関しては、ガンは 4 ガンで 1 ゲーであるので、4 で割る。

第 1 例：縦 85 ゲー7 ガン、横 83 ゲー9 ガンの土地の場合

2. タンとガンで両辺をかける

$85.7 \times 83.9 = 7190.23$ (7190 タン 23 ガン)

(以下、『トンキンの多様性(Variété Tonkinoise)』[A+B 1903 : 447-448] ではマウ、サオ、ミエンへの換算手順の続きが示されているが、このインドシナ年報の記事においては省略さ

れている。) (筆者注)

公式単位

公式には、中国語による次の表現が好んで使われる。

単位名	ベトナム語 表記	フランス語 表記	換算値	
			ベトナム度量衡制度	メートル系
マウ	Mẫu	Arpent	10サオ	3600 m ²
カオ(サオ)	Cao (Sào)	Perche	15トゥオック	360 m ²
スイック(トゥオック)	Xích (Thước)	Pied agraire	10タック	24 m ²
トン(タック)	Thôn (Tắc)	Pouce agraire	10ファン	2 m ²
ファン	Phân	Ligne agraire	6リー	0.24 m ²
リー	Ly	Point agraire	1 平方ガン	0.04 m ²

体積単位

体積単位は長さの単位、チュウオン、グー、トゥオック、タック、ファンとリーを 3 乗したものである。立方という単語は、中国語ではフォン・ラップ(*phương lập*)、アンナン語ではヴォン・ドゥン(*vuông đứng*)である。従って、立方トワーズ、立方ピエを表わすにはグー・フォン・ラップ、トゥオック・フォン・ラップと言う。

体積計算方法

主に木材や石といった固体物の体積は、通常以下の表で示されているホック、レーやライで表わされる。

単位名	ベトナム語 表記	計算式	換算値	
			ベトナム度量衡制度	メートル系
ホック	Hộc	縦10グー、幅1グー、高さ1トゥオック = 20m × 2m × 0.4m	10レー	16 立方メートル
レー	Lê	縦、幅1グー、高さ1トゥオック = 2m × 0.4m	25ライ	1.6 立方メートル
ライ	Lai	1トゥオック立方 = 0.4 × 0.4 × 0.4m	1トゥオック平方	0.064 立方メートル

容積単位

穀物計量用容積単位

一般的に使われる基本の単位はダウ(*đầu*)であり、旧制度の公式単位はタン(*thăng*)であった。ダウは約 1 リットルでタンはその 2 倍であった。

一般的な単位

	単位名	ベトナム語 表記	フランス語 表記	換算値	
				ベトナム度量衡制度	メートル系
倍量単位	フォン、ヴォン(1) トゥン	Phuong, Vuông Thùng	Sétier Panier	約30ダウ 約20ダウ	約30リットル 約20リットル
基本単位	ダウ	Đầu	Boisseau	2バットあるいは10レー	約1リットル
分量単位	バット レー	Bát Lê	tasse Décilitre	5レー 1/10ダウ	約1/2リットル 1デシリットル

(1)これら単位の他にガット(gat)も使われる。

公式単位（穀物納税用）

	単位名	ベトナム語 表記	フランス語 表記	換算値	
				ベトナム度量衡制度	メートル系
倍量単位	ホック(2)	Hộc	Sétier	26 タン	約60リットル
基本単位	タン	Thăng	Boisseau	10カップ	約2リットル
分量単位	カップ	Cáp	Poignée	10トゥオック	-
	トゥオック	Thược	Cuillerée	10サオ	-
	サオ	Sao	1/10 de cuill	10トアット	-
	トアット	Toát	Pincée	10クエ	-
	クエ	Quê	6 grains	6トゥック	-
	トゥック	Túc	1 grain	-	-

(2)ホックは立方トゥオックであり、約0.064立方メートルである。

米に関わる単位

単位名	ベトナム語 表記	フランス語 表記	換算値	
			ベトナム度量衡制度	メートル系
フォン	Phuong	Sétier	30ウィエン	約30リットル
ウィエン	Uyên	Ecuelle	1ダウ	約1リットル

この公式単位は主として穀物による税の支払いのため旧体制下に作られたもので、現在は使われていないとしている。

液体の容積単位

これらの単位は法的な原器によっているものではない。それぞれの単位が異なる相当量を示す場合も頻繁である。

ここではより一般的な単位をあげるにとどめる。

カウ(câu): トンレ(tonnelet)約 20 リットル、ダイ(dài): グランド・キュイエール(grande cuillère)約 2 リットル、ガオ(gáo): プティット・キュイエール(petite cuillère)約 1/2 リットル(3)、チュム(chum)、キエウ(kiêu): グランド・ジャー(grandes jarres)、コン(cong)、ヴォー(vò): ジャー・ムワイヤン(jarres moyennes)、ヴァイ(vại): シランドル(cylindre)、チン(chĩnh): テューブ(tube)、ロ(lo): クリュッシュ(cruche)、ポ(pot)、フー(hũ): カラフ(carafe)、ナム(nấm): グルド(gourde)、ガルグレット(gargoulette)、ナイ(nai): クルショ(cruchon)、ベ(be): カラフォン

(carafon)、バット(bát)：タス(tasse)など。

(3)これら 3 つの単位は油の軽量に使われる

主要な単位はタ(ta)で、重量のあるものに用いられ、中程度のものにはカン(cân)が、軽量のものにはラン(lang)が使われる。ラン、あるいはオンス(once)は、仏中協定のあと 37.783125 グラムに相当する基本単位とみなされているが、アンナンでは一般的には約 39 グラムとしている。